

# 天才漫画家の給仕係

斎草

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

杜王町に引っ越してきた女子高生がなんやかんやで岸辺露伴に給仕係として雇われ、なんやかんやで色々やる話。

※Pixivとのマルチ投稿です

※恋愛要素があります

※更新不定期です

# 目次

## 01. ようこそ杜王町へ

来宮美晴は邂逅する

1

”スタンド使い”

9

戦う理由がそこにある

17

廃墟に潜む2つの影

25

虹村兄弟

34

彼らの”目的”

43

”非日常”への入口

52

## ↑To Be Continued (01)

来宮美晴の休日

62

高校生の恋愛事情

70

山岸由花子は恋をする

79

来宮美晴も恋をする？

88

## 02. 忍び寄る”影”、侵食する”非日常”

それは電撃によく似た、

97

復讐と運命

106

”守護者”

116

ジョセフ護衛作戦

124

父と子

133

”守りたい”と思う心

142

岸辺露伴の暴走

151

漫画家のうちへ殴り込もう

160

選択肢の向こう側

170

心の扉を開ける鍵

179

あなたの給仕係	187
↑To Be Continued (02)	
ぶどうヶ丘高校の体育祭	196
新手の”スタンド使い”	205
みんなのおかげ、かげのかけ	216
水族館に行こう！	229
君の笑顔が1番好き	238
03. 陽のあるところに影は立つ	
不思議な小道	249
”杉本鈴美”	260
それぞれの決意	273
残響と沈黙	285
2人の関係	296
奪われる誰かの”日常”	305
陽は沈み、影は溶け込む	318
来宮美晴は諦めない	329
2人を繋ぐ1本の線	340
夜明け前、光る明け星	352
↑To Be Continued (03)	
空条承太郎の訪問	362
知らずに交わる彼らの日常	371
04. 守るべきもの	
サマーシーズン到来！	378
疑惑のチンチロリン	390

## 01. ようこそ杜王町へ 来宮美晴は邂逅する

M県S市のベッドタウン、杜王町。人口は約5万8千人。  
町の花はフクジュソウ。特産品は牛タンの味噌漬。

”奇妙”な出会いはこの町で始まる。

『杜王町、杜王町』

駅のアナウンスがホームにこだまする。開かれた電車の扉からポ  
ンと弾かれるように1人の少女がホームに降り立った。

「やつと着いたー、杜王町」

ガラガラとスーツケースを押しながら改札を抜け、外の空気を吸い  
込んでいる彼女の名前は”来宮 美晴”。両親を交通事故で亡く  
した彼女を引き取ってくれる親戚が住んでいるのが杜王町で、高校も  
この町にあるぶどうヶ丘高校に入学する予定だ。

3月上旬のまだ少し冷えた空気は暖房の効いていた電車内から出  
たばかりの体には少しばかり沁みる。美晴は広げたメモを頼りにバ  
ス停まで移動すると、ちょうどやって来たバスの行き先を確認してか  
らそれに乗り込んだ。

揺られる事数分、目的のバス停の名前がアナウンスされるとすかさ  
ず停車ボタンを押し、バスから降りてまた少しスーツケースを引いて  
歩く。

しかし――

「ま、迷った…?」

さすがはベッドタウンといったところか。住宅街をとぼとぼ歩く  
事30分が経過しようとしているが、目的の親戚の家が見つからな  
い。困ったように唸りながら右往左往してみるが、あるはずの”来宮  
”の表札がなかなか見つからない。

「住所からすれば、ここの隣……の、はずなんだけどな」

他の家とは少し外れた位置にある立派な家。その”岸边”さんの隣が”来宮”のはず（少し離れてるけど）。

「おつかしいな……」

スーツケースに腰掛け、歩き倒しだった足を休まながら改めて辺りを見回してみる。やはり”来宮”の表札は見当たらない。

「……！」

そこで、ふと視線を感じてそちらを振り向いた。視線は岸边家から注がれているようで、するすると美晴は視界を上から下へ移動させる。

そこから見えたものは――、

「ッ!!」

岸边家の玄関の隙間から覗く”目”だった。それは美晴をジッと捉えて動かない。

ゾクゾクッ!と身の危険を感じるや否や、岸边家の玄関がバタン!と音を立てて勢いよく開かれた。そこから現れたのは1人の男――恐らく岸边の姓を持つ者であったが、彼は真っ直ぐに美晴の方へ歩いて来てはすぐに彼女を見下せる位置まで距離を詰めて来た。

「君かあく、さつきからガラガラと音を立てていたのは」

ギザギザのヘアバンドを巻いたその風貌には少し見覚えがあった。だが、そう悠長に構えていらられる雰囲気でもなかった。

「仕事の邪魔だからよそでやってくれないかな?」

「えっ」

岸边は美晴が腰掛けるスーツケースをペンで指し、心底迷惑そうな表情を惜しげもなく披露している。

「だからさあ、それを引く音がうるさいっての。集中出来ないじゃないか」

「す、すみません……」

美晴は何故か謝っていた。こんなどうしようもない事を。じゃあこの男はスーツケースを音を立てずに引く方法を知っているのか。いや、そんな事を言ったらややこしくなりそうだ。だからとりあえず謝っておくしかなかった。

しかしそれだけで終わらせるのはあまりに勿体無い。

「あのッ、この辺に”来宮”って苗字の家、ありませんでしたか？」  
美晴はさつきと家の中に戻ろうとする男を引き止めるようにその背中に声を投げ掛ける。

だって私がスーツケースを引いて何度も何度も往復したのは結局そのせいなのだ。それさえ教えてもらえれば、もう彼に迷惑を掛ける事もないだろう。一方の岸边も彼女が何故ここを往復するようにスーツケースを引いていたのかに合点がいったようで、また彼も彼女と同じ思考に至り考える素振りを見せた。

だが彼は「ん？」と空を見ていた最中に疑問符を浮かべる。

「来宮ならぼくの隣の家だったけど、ついこないだ引越しのトラックが停まってたよ」

ほら、と彼はペンでほんの少し離れたところにある家を指す。やけに静かで、表札のないその家を。

「長い時間作業してたからあれは確実に引越し作業だった。君はそこに何か用事でも？もぬけの殻の家？」

岸边はほんの少しだけ興味が湧いた。彼女がスーツケースを持っているという事は、ただの観光目的や立ち寄っただけなわけじゃあない。これは確実に”宿泊をする”準備だ。でなければこんな物は駅前のコインロッカーに預けてしまえばいい。

案の定凶星らしい美晴の様子に岸边はほくそ笑んだ。

「そんな……もぬけの殻だなんて。私はその家にお世話になるんです。親戚の方が引き取ってくれるって……」

彼女の顔からスーツと血の気が引いていくようだった。

しかしどうもこの——来宮のお嬢さん？から話を聞くには相当な時間が掛かりそうだ。岸边は面倒そうに小さな溜息を吐きながらそう思い、改めて完成したばかりの原稿を1枚持ってきておいて正解だと、それと同時に思った。

「ところで君、これをどう思うかな？今完成したばかりの原稿なんだけどね」

岸边はその様子に構わず、少々強引に話題を変えながら1枚の漫画

原稿を彼女に手渡す。「え？え？」と戸惑いながらもそれを手にする彼女は根がいいヤツなのだろう。それでいい。あとは“波長”さえ合えば。

「……………、これ……………」ピンクダークの少年”、ですよね!?えっ、でもこれって…………えっ、まさか” 岸辺” って!” 岸辺露伴” 先生、ですかッ!?”

美晴の表情は青ざめたものから一転、動揺を露わにして視線を原稿と岸辺——露伴とを交互に見比べる。そうだ、岸辺露伴は週刊少年誌で漫画を連載している漫画家。顔も公表していたし己も読者の1人だ。見覚えがあったのはそのせいだったのだ。

「どうやら波長が合ったみたいだ」

しかし、露伴は美晴の質問に律儀に答える事はしなかった。それよりも重要な条件が揃ったから、そんな事は露伴にとつてどうでも良かった。

「面倒だから” 君” を” 読ませてもらう” よッ!」

ペリッ!と何かが裂ける音が聞こえる。それはどこからなのか。

「ッ!!」

美晴は己の耳の限りなく近い場所から聞こえたその不快な音に恐る恐る頬に手を当てがうと、伝った感触にまた血の気が引く心地になった。

まるで本のページを捲るように、己の皮膚が薄く開いていく。

露伴が放った” 読ませてもらう” という言葉。恐らくそのままの意味なのだろうと美晴は直感的に思った。

絶対に読まれたくない!

だから彼女の” それ” は発動した。

「!!」

露伴は目を疑った。開きかけた彼女の” 扉” がスツ…と何事もなかったかのように閉じたからだ。

「君……………今なにをしたッ!?”

今までこんな事はなかった。漫画原稿を見せ、波長が合った人間の” 記憶” を文字通り本を読むが如く得る事が出来る……………岸辺露伴が



つい先月に矢で射られた時から使えるようになった能力。波長が合えば逃れる事は出来ないはずの能力を今、目の前の少女は弾いた。「なにをした」は……よっぽどこっちのセリフです！もしかして私の事を」読もうとした”んじゃあないですか!?”

「だからなんだと言うんだい!?君から話を聞くのはまどろっこしい！ぼくは今すぐに知りたいたいんだッ！」

勝手に記憶を読まれる寸前だった美晴が声を荒げるのも無理はないが、対する露伴も負けじと声を張り上げる。

「君がその空き家になんの用なのかもッ！なぜぼくの能力が君に弾かれたのかもッ！全部ッ！」

ビシツと露伴が美晴を指差した時、シンとその場が静まり返った。彼の向かいには呆然とするように口を開けている美晴がいる。露伴だけがゼゼエと息を切らしていた。

「……じゃあ一緒に来てくださいよ。あなたのお隣の家に」

美晴はほんの少し考えてから露伴に背を向け、再びスーツケースを引いて歩き出す。

彼の言った通りなら、来宮の表札が掛かっていたはずの家は空き家なのだ。それが何を意味するのか、美晴には予想がついていたが1人で確認するには恐ろしい。ならば事情を知りたいらしい岸边露伴についてきてもらえばいいのだ。彼はあんなにも知りたがっているのだから、必ずついてくるはずだ。

そしてやはり、スーツケースを引く音に混じって己のものではない足音が後ろから聞こえてきた。後ろをチラリと見遣れば、ついてきているのは岸边露伴その人だった。

合鍵をもらっていたので家の中にはすんなりと入る事が出来た。

美晴と露伴は玄関から中の様子を窺ってみるが、やはりシンとしていて人の気配はない。靴もなく、念のため靴箱を確認してみたが空っぽだった。

1階のリビングから台所、風呂やトイレも誰もいない。2階に上がって各部屋を覗いてみても誰もいない。それどころか、どこの部屋

にも家具らしきものが見当たらなかった。

「ほら見ろ。やっぱり空き家じゃあないか」

露伴は口ではそう言うものの、やはり引つ掛かりを覚えていた。だって彼女は合鍵を所持していたのだ。ただ泊まりに来ただけならば、合鍵をおいそれと渡すだろうか。ここに住む予定だというのは本当の事だったのだろうか。

だとしたらこの事態、どう考えても”夜逃げ”だ。

「……私、両親を事故で亡くしたんです」

すると彼女は突然、ぽつりと話し始めた。

「でも私だけは無傷で助かりました。お葬式の時、私の事を誰が引き取るかで結構揉めたんです。私だけが無傷で助かったのが、相当気味が悪かったみたいで」

来宮美晴は高校生になるのだ。という事は、卒業式を終えて春休みを謳歌している彼女の身分はまだ中学生である。一人で暮らしているには補助がなければ難しい。だが、引き取り手が親戚間では上述の理由でなかなか決まらず、渋々了承したのがこの家の主であったようだ。

「それで、君だけが無傷で助かったというのはひょっとして、さつきぼくの能力を弾いたのと関係があるのかな？」

露伴の問い掛けに、美晴は静かに頷く。そうすると彼女のすぐそばに全身を鎧で覆った人間のような風貌のものが突然姿を現し、露伴は息を呑んだ。その反応を見て、美晴は”彼”が見えているのだと確信する。

「私と同じような能力を持つ人は初めて見ました。私のこの能力は……」あらゆる攻撃から対象を守る”もので……でも、”1つのものしか守る事が出来ない”みたいで、だから事故の時に私だけ助かったんです」

彼女の守護霊のようにすぐそばで佇んでいるだけの”それ”。彼女が生まれた時から彼女を守っていたらしい。

「そしてその”攻撃”というのは、”精神攻撃”も含まれるんです。だから、あなたは私を”読む”事が出来なかったんですよ」

なるほど、それなら合点がいく。彼女が”読まれたくない”と強く思ったから、扉は閉じられたのだ。露伴はようやく己が感じていた疑問に全て納得がいった。

「だからでしようかね。私今、あまりショックを感じてないんです」  
もう用はない。そう思つて踵を返そうとした時、彼女の声はまた言葉を紡いだ。それは言葉とは裏腹に、とても寂しそうな響きだった。  
(突如として天涯孤独になった少女、か……)

両親を事故で亡くし、引き取ってくれるはずの親戚に夜逃げをされ1人ぼっち。生まれながらの能力によって、取り残されてしまった少女。

「あのさ、1ついい案件があるんだけど」

露伴は再び体ごと彼女に向けて声を掛ける。これまた強引な切り口に美晴も彼に視線を向けた。

「住み込みで給仕係のバイトしない？場所はここ隣の”漫画家”の家なんだけど。給料は歩合制、ぶどうヶ丘高校の学費は出すよ。仕事内容は学校にいる間以外の家事全般。仕事のアシスタントはしなくていい、必要ないから」

つらつらと並べられる”案件”に美晴は暫し固まった。そんな彼女の様子などお構いなしに露伴は得意げな笑みを見せる。

「どうだい？君は今、住むところのないホームレス同然だ。でもこんないい条件で住むところを手に入れられる。来なよ、ぼくのところに」

岸边露伴は人付き合いが苦手だ。だからアシスタントだって雇わない。なのに何故彼女を自ら迎え入れるような事をするのか？

そんなのは――

(この子、いいネタになるぞ！ここで逃すには実に惜しいツ！ついでに給仕係がいる生活！これもネタになる！)

結局それに尽きる。

(いいぞツ！天涯孤独の少女を拾う体験！滅多にないツ！)

露伴はこの願つてもない事態に興奮と歓喜を感じていた。一粒で二度美味しい……今の来宮美晴は岸边露伴にとってそんな存在であ

る。

「あの……いいんですか？本当に」

「勿論。じゃなきゃあ、こんな事は言わないよ」

美晴もまた、願ってもない事態に喜びを露わにしていた。

これからの生活をどうしたらいいのか、仕送りは誰にしてもらえばいいのか、もしそれが叶わないなら中卒でも雇ってもらえる仕事はあるのか等々、心配事ばかりが頭に過ぎっていた。しかし露伴が提示した条件を飲み込みさえすれば、すべての悩みが即座に解決する。乗らない手はないのだ。

「わかりました。是非そのバイト、やらせてください！」

その日から来宮美晴は岸辺露伴の給仕係だ。

「美晴。今日から学校なんじゃあないの」

いつもの時間にリビングに降りてくると、彼女は制服の上からエプロンを着けてせっせと朝食の準備をしていた。

「もう洗濯は済ませてあるので大丈夫です。あ、掃除は帰ってからしますね。多分明日からもそうなるかと」

「いいよ、別に。汚すほど使ってないから」

露伴はテーブルにつき、朝食を作るその背中を頬杖をついて眺める。ここ最近の日課だし、――

（案外、悪くはないな……この生活）

そう思うのも日課になりつつあった。

”スタンド使い”

来宮美晴は無事にぶどうヶ丘高校へ入学する事が出来た。一時はどうなるかと思っただが、こうして普通に学校生活を送れる事に安堵を覚える。これも一重に岸辺露伴の機転のおかげだ。あそこで彼が美晴を住み込みで給仕係として雇わなければ、今も路頭に迷っていたと思うとゾツとする。

しかし元から杜王町に住んでいる生徒が多く、また給仕係としての仕事もあるわけで、美晴にはなかなか気の合う友達が出来なかった。そつなく授業を受け、放課後はすぐに教室を出る。授業が始まって1週間——そんな時期だった。

「今日の夕飯、何にしよかなあ」

自転車を走らせ、下校途中にスーパーへ寄るのは美晴の日課となっていた。ちなみに自転車は元々岸辺家にあつたもので、露伴はバイクと車があるために譲ってもらつたものである。じゃあなんで自転車を捨てなかつたのかと云えば、これはこれで資料になるらしい。この人は断捨離が出来ないのだろうか。

美晴はそんな事を考えながらスーパーへの道を辿っていたが、コンビニの前に人集りが出来ているのを見て自転車を止めた。もつと近くで見るためにそれを下りて手で押しながら近付き野次馬の話に耳を傾けてみると、どうやら強盗が女性店員を人質に取つて立て籠もっているらしいとの事だった。

「見ろッ！出てきたぞッ！」

その声に反応するようにコンビニの入り口に目を向けてみると、強盗犯が女性店員の首元にナイフを突きつけながら外に出てくるどころだった。警察官達が必死に強盗犯を論していたが、昂っている様子の彼は歪な笑みを浮かべながらそこに停まっっている車を指している。「車に乗んだからよーてめーら下がってろッ！」

状況はかなりまずい。強盗犯は逆上したら確実に店員を殺すだろう。尤も、そんな事はさせない。もし仮に店員を殺そうとしようもの

なら、美晴はあの能力を使って店員を守る事を考えていた。

美晴の能力で守れるものは彼女自身だけではない。”ひとつののしか守れないが、ひとつのものであれば何だって守る事が出来る”のだ。少しばかり離れているので不安だが、視認出来る範囲なのできつとイケる。そうでなくても、この身に代えても――。

「おい！その変な頭してるガキイ！車から離れろって言ってるだろツ！殺すぞボゲツ！」

しかし、その状況は”変な頭してるガキ”と強盗犯に呼ばれた人物によつて一変する事になる。

(えっ……まさか、あの人……ッ！あの方はッ！)

それは美晴も知っている人物だった。改造学ランに特徴的なリ―ゼント頭――強盗犯の挑発に乗って躍り出たその人は、同じクラスの”東方仗助”だった。

「今てめー、なんつったツ！」

仗助は強盗犯の真正面に立ち、怒りを露わにしている。

(そんなツ！なんだって東方くんが！2人同時は守れないよ！)

そう思った直後、美晴はある事を思い出した。

”東方仗助の髪型を貶した者は、誰だろうと返り討ちにされる”。学年内では噂になっている事で、実際に中学でたびたびやらかしていたらしい。

「チクショーツ！頭きたツ！この女にナイフブチ込む事に決めたぜツ！」

警察官の警告も虚しく、強盗犯は言う事を聞かなかった仗助に逆上して店員の首をナイフで斬りつけようとした。

(今一番危険なのは店員さんツ！それならツ！今ならツ！)

美晴は夢中で野次馬の群れを押しつけてその先頭まで躍り出ると能力を発動させようとした。だが――！

「そうかい……」

そう、仗助の声が聞こえたかと思えば、ナイフではない何かが店員ごと強盗犯を貫いた。

「えっ……」

そして仗助のすぐそばには、先程までいなかった人影があった。それは確かに人の形をしているのだが、明らかに人間ではなく。

(私や露伴先生と同じ…ッ!でもなんて事をッ!)

美晴がまさに店員を守るために出した、能力を可視化している鎧の人影と同じようなものが仗助のすぐそばにいた。店員ごと強盗犯を貫いたのは”それ”の腕である。

「頭に来ただど?そいつはおれのセリフだッ!」

ズボツと腕が引き抜かれると2人の体には風穴が空いていた。見るに耐えきれず美晴は咄嗟に目を背けたが、次にそちらに目を向けた時には店員に空いたはずの傷口が塞がって元通りになっていた。そして強盗犯の腹には何故かナイフが埋まっっていて、彼は情けない悲鳴を上げていた。

(ど、どういう事!?)

恐らく仗助にも美晴や露伴のように特殊な能力があるのだろう。だが、その能力がどんなものなのかを理解しきれていない。

「オゲッ!オゲエエツ!!」

「!?」

そう思ったのも束の間、今度は強盗犯の口の中から吐き出されるように何かが出てくる。それはズルリとたちまちに人の形を成し、美晴はまた驚愕する事になった。

「こんなところに!オレの他にスタンド使いがいるとは…!この男にとりついて気分良く強盗をしていたのに…よくも!邪魔してくれだな!」

”それ”は下水道の排水口にヌルツと移動していく。なのに、野次馬の目は誰もそちらに向かず、美晴と仗助だけが”それ”を追って視線を排水口に向けていた。

「”スタンド使い”って…!?じゃあこの人型のものは”スタンド”って云うのかしら…!」

仗助はその事を知っているのだろうか。青色をしたその”スタンド”は仗助だけに敵意を向けている様子で、どうやら美晴にも同じ能力がある事は気付いていないようだった。

そうして敵と思しきスタンドは排水口の中に消えていき、それを追おうとした仗助は先程の向こう見ずな特攻により警察官に一時取り押さえられる事となった。

「あ、あの、東方くん」

無事に強盗犯も逮捕され、仗助の警察官からの拘束も解かれてこの件は落着いた。

美晴は先程の事を確認するために帰ろうとしていた仗助と、一緒にいた友人を呼び止める。2人は彼女に声を掛けられると立ち止まってくれた。

「え？えーと……誰だっけ」

美晴は仗助のように目立つ生徒ではないので覚えられていなくても無理はない。しかし申し訳なさそうに頬を掻いている彼は、見た目の割に素行は悪くないのだ。

「来宮美晴です。同じ1年B組の」

「あーあー！そういういえばいたな、ウン」

本当に認識されていたのだろうか。微妙な触りである。一呼吸置き、気を取り直して美晴は彼と向き合った。

「さっきのあの能力……えっと、”スタンド”って云うんですか？あれで一体何をしたんですか……？」

言葉を濁してもかえって意味が分からなくなる。だから、単刀直入に尋ねる事にした。すると、仗助は驚いたように目を見張る。

「おいおいおい……ちよつと待てよ。なに？美晴ちゃんには”こいつ”が見えてるってのかよ？」

仗助は慌てた様子で己のスタンドを可視化させる。それに頷きながら同じようにスタンドを可視化させるのを見て、彼は動揺を露わにさせた。

「私も同じですから……これ、同じような能力を持つ人にしか見えな  
いみたいですね」

杜王町に引っ越してくる前もそうだった。彼女のスタンドが見える人間は周りには居らず、そのせいで彼女は親戚に夜逃げまでされた



のだ。この町に来てやっと、岸边露伴にだけは話が通じた。そして今、仗助の友人の方はスタンド能力がないようで、2人の会話に付いていけない様子で視線をその間で右往左往とさせている。

「私の能力は、対象ひとつをあらゆる攻撃から守る」ものです。東方くんのは？そしてさつき強盗犯から出てきたスタンドは一体…？」

場合によっては露伴にも知らせなくてはならないかもしれない。青色をしたあのスタンドは明らかに操っている人間が殺意を持っていた。彼に危険な事があつては困る。

「……おれのスタンドは、ケガとか壊された物を治す」能力を持つてよー、だからさつきは店員もろとも犯人に風穴空けて”治した”。犯人の方にはナイフもその時に埋め込んでやったがよオ」

仗助はスカツとしたように笑っていた。

なるほど、それなら納得がいく。どうやら仗助の能力は治す事が主だが、”元通りに治さない”事も出来るようだ。彼が話した通り、修復過程で異物を混ぜる事も可能なわけだ。

「けどよオ、美晴ちゃん。きみがおれと同じでも、あいつとは関わらない方がイイぜ」

しかし一転、彼は険しい表情を浮かべて美晴を見る。”あいつ”というのは、あの青色のスタンドの事だろうか。

「ちよいとした心当たりがあるんでね。おれに任せときなよ」

そうやって彼はまたニツと笑い掛け、「行こうぜ、康一」と友人——康一に呼びかけてさつきと歩いて行ってしまった。

「えつと……よく分からないけどまたね、美晴さん」

康一は去り際にペコリと美晴に頭を下げてから仗助の後を追って行った。

「東方くん……」

まさかこんな身近に、しかも敵意を持つスタンド使いまでいるなんて。

一体この町は何なんだろう。

それから買い物済ませ家に帰ってくると、いつもより少し遅く

なつた事を露伴に咎められた。

(とは言っても、今日のは仕方ないと思うけどね)

あんな出来事があったのだ。美晴はそう自分に言い聞かせながら夕飯の準備をする。今日はハンバーグを作ろうと思っていた。

(それにしても東方くん、心当たりがあるって言ってたけど……どんな心当たりなんだろう)

まさか友人という事はないだろうが、引つ掛かりを覚える。だが、関わるなどとも言われている事もあり、しかもあのスタンドはこちらには気付いていない様子だった。つまり、標的は東方仗助ただ1人。確かに見て見ぬ振りにはなるがここは彼の言葉に従うべきだろう。露伴に言ったところで彼はそこまで興味を示さないかもしれないし、まだ報告には至っていない。寧ろ報告する方が危険な場合もある。

(何にしても、安易に首を突っ込む事じゃあないって事ね)

勿論、仗助の事は心配だし己のスタンドなら仗助を守る事も出来る。しかし己のスタンドで守れるものはひとつだ。もしかしたら己の身を守る事で精一杯で、逆に足を引つ張りかねない。だったら大人しくしているべきだ。

(把握しているだけで、私以外にスタンド使いが3人……この町はスタンド使いの町なのかしら。それともたまたま集まってるだけ……?)

露伴が言うには、彼がスタンド能力を使えるようになったのは今年の2月の事。しかも矢に射られたと言っていた。もしその”矢”に射られた人間が、露伴以外にもいるとしたら?

そう考えると、もつといってもおかしくはない。青色のスタンドのように、悪意を持ってスタンドを動かしている人間もいるかもしれない。

(だとしたら、私が露伴先生を守らないと……)

露伴の能力は”対象の記憶を本のように読む事が出来る”もので、明らかに攻撃向きではない。己の身を疎かにしてもいい、恩人である彼の事だけは守りたい。

「美晴ってば」

そこにヌツと露伴が後ろから覗き込んできた。

「うわあッ！ろ、露伴先生ッ！」

「失礼な反応だな。さつきから呼びかけてるのに応えない君が悪いんじゃないか」

露伴はあからさまに機嫌の悪そうな反応を見せたが、美晴が捏ねている合挽き肉を見て「ン！今日はハンバーグ！」と心なしか嬉しそうに零していた。

「で？ぼくの呼びかけに答えられないほど考え事をしていたようだけど……まさか、入学早々男の1人や2人出来たんじゃあないだろうね？」

「1人ならまだしも、2人は絶対じゃないですよ。それに、そういうんじゃないです」

付け加えるように添えられた言葉。”そういうのじゃない”だなんて、まるで本当にそのまさかのように露伴は「ム……」と何か隠し事をしている様子の美晴を睨む。そして彼女は思い付いたように「あ、」と声を上げた。

「でも、気になる人ならいますよ」

その一言に露伴は電撃が走るような感覚に陥った。それは決してシヨックなどではなく、冷蔵庫に貼ってあるメモ用紙を素早く手に取るにすぐに彼女と向き合う。

「そうか！ならその時の気持ちをここで語ってくれないかッ！赤裸々にッ！ぼくはそういった経験はあいにくしていなくてね……けど！君がすべて語ってくれるならそれは間違いなくノンフィクションッ！リアルな体験談として生きるんだよッ！」

また始まった。美晴は心の底から溜息を吐いた。隣で”さあさあ！”と急かしてくる露伴の姿はそこそこ見慣れたものである。美晴には露伴の能力が通じない。だから、彼は美晴から直接聞くしかないのだ。

（能力自体もデリカシーがないけど、露伴先生自身も大概なんだよね……）

まさに、この人にしてこの能力あり、と言ったところか。この人にとって記憶を読む能力は願ったり叶ったりなものだが、第三者から見

ればプライバシーの侵害だ。相性が良いんだか悪いんだか判断がつかない。

「先生、申し訳ないですけどそういう”気になる”じゃあないんですよ。なのでお話する事はありません」

美晴の言った”気になる人”というのは東方仗助の事であり、彼の事はそういう意味の領域ではない。どちらかといえば心配になる方の”気になる”だ。スタンド使いのクラスメイト、としか認識していない。

「なアんだ……」

露伴は心底つまらなそうにメモを戻して不貞腐れたようにテーブルの椅子に腰掛け、わざとらしく溜息を吐く。勝手に期待しておいてその反応はないだろう。一緒に暮らしていて分かった事だが、露伴は結構自分勝手に我儘だ。人付き合いが苦手らしいが、きつとその性格も関係しているに違いない。

「で、先生。私を呼びつけていたのは一体どんな用事だったんですか？」

そういえば露伴は仕事だったはずだ。先程の様子からして美晴に用事があったてここに来たようだが、話題を変えたせいで用件を聞きそびれてしまっていた。

「ああ、別に。今日の夕飯が何か聞きに来ただけなんだけど、ハンバーグだって分かったからもういいや」

露伴は思い出したように立ち上がるとヒラヒラと手を振って仕事部屋に戻っていった。

「本当に勝手な人だなあ……」

岸辺露伴は来宮美晴の恩人だ。だけど、そうでなかったら一生関わる事はなかっただろう。自信がある。

## 戦う理由がそこにある

あの日から東方仗助は少しの間学校に来なかった。祖父が急死し、忌引きというやつだった。

(今日は東方くん、学校来るかな……なんだか嫌な予感するな)

この日は雨が降っていた。いつもならならんら気にする事はない事のはずなのに、美晴は胸騒ぎがする心地になった。というのもあの青色のスタンドの存在のせいだろう。

もしかしたら、仗助の祖父はあのスタンドに殺されてしまったとか――。

(いやいや、そんな突飛な……)

しかし、可能性はないとも言い切れない。相手は明確な殺意を持っているのだ。見せしめに彼の身内を殺す――十分あり得る話である。

(やっぱり今日、学校終わったら東方くんの家に行ってみよう。心配だし)

美晴は東方仗助の家を知らない。だから、そのために”口実”を作っている。机に広げられた2冊のノートはひとつは美晴のもので、もうひとつは仗助のために作っているもの。

”止むを得ず休んでいる生徒のために書き写しのノートを届けたい”。

それを口実にすれば、職員室にある名簿で仗助の家の住所を教えるもらえるはずだ。

(まあ、口実のためだけじゃあなく、本当に心配だからノート作ってるっていうのも勿論あるけどね)

仗助の成績の良し悪しは分からないが、もう5日以上休んでいる。クラスでも彼の欠席はたびたび話題に挙がるほど皆心配している。

(露伴先生には言っていないけど、友達のお見舞いくらい許してくれるよね……)

さすがに露伴も人の子だと思いたい。いくら友人がいなくなたって心配になる気持ちくらいは汲んでくれる……そう思いたい。

正確には”友達”ではなく”クラスメイト”だが。しかし美晴は彼と友達になりたいと、自然とそう思っていた。

放課後になっても外は相変わらず雨だった。今日の雨は夕方には止むと天気予報では出ていたが、これはもう少し掛かりそうだ。

「わ、結構遠いな……こういう時に限って自転車じゃあないんだよなあ」

この学校の生徒の通学手段はほとんどがバスか自転車である。しかし今日のように雨の日はバス通学に切り替える生徒が大多数で、雨の湿気の中ぎゆうぎゆう詰めの中車内にいなければならぬ事を思うと途端に憂鬱になる。人の家に行くのだから尚更気になる。

「美晴」

そんな事を考えながら校門を出たところで不意に呼びかけられ顔を上げる。

「わッ！露伴先生!？」

「君はぼくを見て失礼な反応しか出来ないのか？」

視界に映ったのは岸边露伴その人で、予想外の人物の登場に驚いた美晴の反応をあからさまにブスツとした顔で見下ろしていた。

「せっかく迎えに来てやったのに……ほら乗って、買い物も行くんだろう?」

露伴はそこに停めてあつた車までスタスタ歩くと後部座席の扉を開けて美晴を振り返る。

珍しい事もあつたものだ。彼は自分の事ばかりだからこういう事はしないタイプだと思っていたのだが、同居人を気遣う心もあつたようだ。

「あ、ありがとうございます、露伴先生」

「ぼくも買いたいものがあつただけど、君にリストを渡すのを忘れていてね。ついでに君の事も拾っておこうかと思っただけだから」

口ではそう言っているが、本心はどうなのだろうか。らしくない行動とそれらしい言葉。どうとでも取れるこの状況だが、単純に混み合ったバスに乗る事を回避出来た幸運の方が美晴にとっては大きかった。

「先生、買い物の後でいいのでこの住所の家にも寄ってもらえませんか？」

美晴は先程担任からもらった東方家の住所が書かれたメモを露伴に手渡す。彼はその紙を受け取ると書かれていた住所をカーナビに打ち込んで道筋を確認していた。

「ふうん、ここから結構遠いね。何の用事なの」

「忌引きで休んでるクラスメイトに書き写しのノートを届けたくて」

至つてありがちな用事に露伴は「ふーん」と興味なさげに息を吐けば、まずはスーパーに向けて車を走らせる事にした。

「もしかしてそれって、こないだ言ってた”気になる人”？」

「そうですけど」

「男？」

「はい」

そう聞くや否や、露伴はニヤリと口角を上げる。

「ほうらやっぱりー！そういうんじゃないとか言っておきながら、男出来たんじゃあないか！詳しく聞かせろよオ！」

「だから！本当に違うんですってばッ！すぐそうやってネタにしようとするの、やめた方がいいと思いますよッ！」

そうやってぎやあぎやあと声を上げる美晴と、それを飄々とかわしつつネタを引きずり出そうとする露伴の声は車内に響き渡っていた。結局彼女は頑なに仗助との関係を否定したわけだが、露伴の中ではそれすらもネタの一部として取り込まれていた。だって、ラブコメ創作物にはありがちな会話を体験する事なんて、露伴にとっては今までなかった事なのだから。

「ノート渡してくるだけなので、先に帰ったりしないでくださいよ」

スーパーで買い物を終えると雨もすっかり上がっていた。露伴にそのまま東方家のある住所の周辺まで車で走ってもらい、そこで待っているように伝えると車を下りる。

家が立ち並ぶ閑静な住宅街。1軒の家を見つけるのも車の中からではなかなか面倒だ。それに、露伴に車の中からジーツと見られるのはまるでネタを提供しているかのようで居心地が悪い。だから、テキ

トーに置いて来たのだ。

「? 変な岩だなあ……」

途中、何か不気味な大きなオブジェのような岩を見つけた。魚のような顔をした岩だ。試しにコツコツと岩を拳で叩いてみると、どこからか「アギ……」と何かの鳴き声が聞こえて更に頭に疑問符を浮かべる。

「まあ……今気にする事でもないか」

後に”アンジェロ岩”と呼ばれるそのオブジェを通過し、美晴はようやく”東方”の表札が掛かった家を見つけ、呼び鈴を鳴らした。

(東方くん、お祖父さんを亡くしたショックで引き籠もってるとか、そういうんじゃないといいんだけど……)

そんな事を考えていると玄関が開き、ハツとして顔を上げた。が。

「……ッ！」

中から顔を出したのは仗助ではなく白い学ランに帽子を被った大柄な男で、その圧倒的な威圧感に美晴はその男を見上げて息を呑んだ。

「……仗助の学校のヤツか。何の用だ」

男は美晴の制服を見て幾らか警戒を解いたようだったが、依然放たれるオーラはプレッシャーを感じる。

「あ、あの……東方くんが欠席してた間の授業のノート、届けに来たんですけど……」

そうやって口を開くのが精一杯だった。鞆を握る手にギュツと力が籠り、手汗が滲み出てくる。気圧されて視線が自然と下にさがる。

「承太郎さん、一体誰が来たんスカあー?」

その時、聞き覚えのある声が奥からこちらに向かって来た。その声の持ち主は美晴を視界に入れるとパツと表情を明るめる。

「美晴ちゃん!なんで俺んちに!?!」

「あつ、東方くん……!」

仗助が真っ直ぐに玄関の方へ向かい、更に相手の名前を呼んだ事で”承太郎さん”と呼ばれた大柄の男は今度こそ美晴に対する警戒を解き、スツと彼女と会うのに邪魔にならないように脇に体を避けた。



「あなたが休んでた分の授業のノート、届けに来たの。住所は担任の先生から聞いたのよ」

「えっ、いいの!?なんか悪りーな……」

「ううん、それより元気そうで安心したよ」

和気藹々とノートのやり取りをする2人を見て、承太郎は珍しくムカムカする事はなかった。

(まあ、やかましい女じゃあないからいいか……)

寧ろそんな事を考えていた。

「そうだ、承太郎さん。この子について言っておきたい事があるんですけど」

会話に区切りがついたところで仗助は不意に承太郎の方に顔を向けた。承太郎が疑問符を浮かべながらもそれに応じると、仗助は再び美晴の方に視線を戻す。

「この子も”スタンド使い”なんですよ」

”スタンド使い”。その単語に承太郎と美晴は同時に衝撃を受けた。

ここで仗助がその単語を出すという事は、目の前にいる”承太郎さん”もまた、スタンド使いであるという事を意味する。だが、2人も仗助の関係者だ。敵ではない事は確かなのだ。

「君、スタンド能力はいつ身に付いたものだ?」

承太郎は先程彼女が明らかに萎縮していたのを受け、努めて威圧しないように問い掛ける。最初こそ彼女はビクリと肩を揺らしたが、彼に敵意がない事を感じると口を開く。

「これは、生まれつきなんです。”いつ”とかじゃあなく、ずっと……」

「ちなみにどんな能力だ?外見は?今出してみてもらえるかな?」

矢継ぎ早に繰り返される承太郎の質問にどこから答えればいいのか一瞬悩んだが、美晴は己の鎧を纏ったスタンドを背後に可視化させた。

「私のスタンドは、”対象ひとつをあらゆる攻撃から守る”能力です。杜王町に引越してくる前、交通事故に遭って……この能力で私だけ

が生き残りました」

「なるほど。守るスタンドか……」ひとつだけ」となると、取捨選択が重要になるわけだな」

その通りだ。仮に自分ではなく他人や物をこのスタンドで守った場合、本体である美晴は完全に無防備になる。その間に本体を叩かれた場合、当然のようにダメージが入る事になる。

コンビニ強盗の時は己の身が狙われる心配がほぼなかったから店員に使用おうと考えられた。だがもしこの先、敵意を持つスタンド使用と対峙する事になり、露伴や仗助を天秤に掛けられたら？

「いいかい。この町に意図的にスタンド使いを増やしている奴がいるかもしれない。だが関わろうとするな」

承太郎はポンと美晴の肩に手を置いた。

「君のスタンドが守るものであって良かった。これなら君が死ぬ心配はない。だが関わっちゃいけない。これは俺達の問題だ」

承太郎の手にグツと力が籠る。思わず美晴が痛みに顔を歪めると、彼はすぐに手を退けた。

確かに関わらない方が無難かもしれない。関わったところで、己の身を守るので精一杯な状況になりかねない。それこそ足手纏いだ。露伴にも話さない方がいいかもしれない。彼を危険な事には巻き込みたくない。

(……ただ仗助のスタンド能力とは、ちつとばかり相性もいいかもしれないがな)

治す者と守る者。美晴が的確にバックアップを取れば、或いはどんな敵にも引けを取らないコンビになり得る。承太郎はそう考えていた。

「確かに、美晴ちゃんに何かあってからじゃ遅せーもんな。ここは俺達に任しときなよ」

仗助も美晴の肩をポンポンと叩いてニツと笑みを浮かべた。その笑みを見て、美晴は確信もないのにホッと安堵する気持ちになった。

「うん……なんかごめんね、任せっぱなしみたいで」

「気にすんな、そんなこたあよ。……あ、こないだの青いスタンドは

さつき倒したから問題ねーぜ」

ホツとしたのも束の間、その話に美晴は「えっ！」と目を見開く。「た、倒しちやっただの!？」

「おう。家の前に変な岩あったろ？それがスタンドの本体だぜ。ちつとばかり形が変わったけどな」

「ええー……っ」

驚いたってレベルじゃあない。あんな危険そうなスタンドを本当に倒してしまうなんて。それにさつき見たオブジェのような岩が本体だなんて。恐らく元は人間だったのだろうが、どんな風にすればあんな形になるのだろう。そしてその答えはたったひとつ、シンプルなものだろう。

(まさかその人、東方くんの髪型を貶したとか、そんなんじゃないだろうな……)

実際その通りなのだが、考えるのはやめておいた。その代わり、絶対に仗助の髪型を貶すのだけはやめておこうと胸に刻んだのだった。「遅かったじゃあないか。えらい話し込んでたんだね」

ノートを届けに行くだけだったはずが、承太郎がいた事で少し話が込み入ってしまった。だがそれを露伴に話す事は叶わない。

「すみません、やっぱり久しぶりに会ったら会話が弾んじやって」

仗助は明日から学校に来ると言っていた。そういえば仗助とは学校では一度も話した事がなく、また美晴も学校でクラスメイトと話す事はあまりない。放課後もすぐに帰るから友達は居らず、中学でも友達はいけどスタンド使いである事を共有出来る人間はいなかった。(私が勝手に思ってるだけだけど、友達になりたいなあ。東方くん)

”友達になりたい”と言ったら仗助はどんな反応をするだろうか。仗助は見た目の割にいいヤツだし、だから自然とそうなりたいと思える。

それに、「承太郎にも」この件には関わるな”と言われたが、やはり心配だ。青色のスタンド使いはたまたま倒せたかもしれないが、もし承太郎の言った通り”誰かが意図的にスタンド使いを増やしている”としたら？そして、今車を運転している岸辺露伴だって、恐らく方

法からして”意図的に増やされたスタンド使い”である事は間違いない。

(増やすからには、目的があるはずなのよ。まるで宝くじのように、”数打ちや当たる”みたいな……)

承太郎が”意図的にスタンド使いを増やしている”としたのは、恐らく青色のスタンド使いもそうだったからだ。美晴が関わり合いにならないように詳しくは教えてくれなかったが、ここにはまさに”意図的に増やされたスタンド使い”がもう1人いる。そう予想を立てるには難しくはない。だが、肝心の”増やす理由”が見当もつかない。だからモヤモヤする。

(ああ、露伴先生と会っていなければ、私は関わろうとなんてしなかったと思うわ……)

美晴は杜王町に引越してから半年も経っていない。だがこの町で何か奇妙な事が起こっているなら、同じ能力を持つ以上避けては通れないのだと、今日承太郎に会った事でそう思うようになった。東方仗助と友達になれば、その真相にもきつと早く辿り着ける。そしてそれはゆくゆくは露伴を守る事にも繋がる。

「美晴？ 顔色が悪いじゃあないか。車酔いでもした？」

そんな露伴の声でハッと意識がこちらに戻ってきた。赤信号で停止したのをいい事に、彼は後部座席に座る美晴を振り返って珍しく心配そうな表情を浮かべている。

「あ……いえ、そんな事はないですよ」

「そう？ 強がってここでゲロ吐いたりするなよ。掃除大変なんだからさ」

どうやら露伴が心配していたのは美晴の体調ではなく嘔吐した時の掃除の方だったらしい。美晴は深く溜息を吐いて後部座席のシートに深く腰を掛けた。

岸边露伴は来宮美晴の恩人だ。だから守りたいと思えるのだ。そうでなければ、守る理由なんてなかったと思う。

## 廃墟に潜む2つの影

その日は食材が冷蔵庫の中にくらかあったので、美晴は学校帰りに買い物に行く必要がなかった。

いつもと違う帰り道。バス停の前で目的のバスを待っていると、ようやくそれは美晴の自転車に追い付いた。

「よっ、美晴ちゃん」

「こんにちは、美晴さん」

「仗助くん！康くん！」

バスから降りてきたのは仗助と、コンビニ強盗の時に居合わせた彼の友人——広瀬康一だった。

アンジェロの件の次の日、仗助は無事に学校に登校してきた。

「美晴ちゃん、ノートマジで助かったぜ。字もキレーで分かりやすくてよー」

仗助にそう言われた時、美晴は素直に嬉しかった（仗助に好意を抱いている女子達からの視線は痛かったが）。

だから美晴は、昼休みに場所を変えて思い切つて言う事にしたのだ。

「東方くん、私と友達になってくれませんか…？」

仗助に好意を寄せる女子達に見つからないよう、校舎裏に仗助を呼び出してそう言うとは彼は面食らったような顔をして美晴を見つめ、そしてやがて柔らかく笑ってくれた。

「ハハハ、こんなところに呼び出すからってつきりコクハクでもされちまうのかと思つてよー。でも俺はとつくに美晴ちゃんの事は友達だと思つてたぜ」

「え……？」

驚いたのは美晴の方だった。あの仗助が己の事を「友達」だと、そう言つてくれたからだ。

「それに友達つてのはよー、許可もらつてなるもんじゃあないだろ？」

友達だと思ったら友達。それでイイじゃあねえか」

ああ、やつぱり。私がこの人と友達になりたいと思ったのは、この人のこういうところなのだ。美晴はその言葉を聞いて心の底から安堵した。

そうして美晴と仗助は友達になったのだ。

「オーソンには限定スイーツも売ってんだぜ。俺は食わねーけど」

「そうなんだ、ちよつと寄ってみてもいい？」

「どーぞどーぞ」

今日は仗助と康一に彼らの家の周辺を案内してもらおう約束だったのだ。美晴はこの町に来て半年も経っておらず、そこそこ忙しい日々を過ごしていたのでまだ町内を完全に周り切っていない。でもこの2人と一緒に周れば、迷子になる事もない。

「あのー……ぼく、お邪魔じゃあないかな……？」

スイーツコーナーを囲んで美晴と仗助が何を買おうとかこれが美味そうだとかを話していると、康一がおずおずと背後から声を掛けて苦笑いを零す。

仗助と美晴は友達であるが、康一と美晴は今朝挨拶を改めて交わした程度の仲だ。加えて彼には2人がまるで”そういう仲”のようにも見え、だから遠慮がちに、声を掛けるのを躊躇うように小声で話したのだ。

しかし彼らは康一がそんな事を考えていたとは露知らず、振り向くと同時に疑問符を浮かべる。

「何言ってるんだよオ、康一。お前も会話に入ればいいんだよ」

「わっ！」

仗助は一方的に康一と肩を組んでグイツと彼を真ん中に押し込んだ。

気を遣ったつもりが、気を遣われてしまった……康一は己の杞憂であった事にどこか恥ずかしさを感じて視線を下にさげる。

「康くんはどれが一番いいと思う？」

「えっ、ぼくですか？」

しかし不意に美晴に声を掛けられ、再び視線を上げた。康一はあまり女子との接点がない。仗助のようにモテたりはしないし、話し掛けるのにそれなりの勇気がいるからだ。「えつと、その……」とあたふたするので精一杯。

「あ……ぼくは、プリンがいい、かな……」

けれども振られたからには会話はしないと。彼の声はそんな思いで言葉を紡ぎ、目の前の棚にあったプリンを指差してぎこちなく笑った。

「おお、プリンか！そりゃあ眼中になかったぜ。これなら形が崩れねーしいイかもな」

「確かに……康一くん、ありがとう！これ買ってくるね！」

だがその言葉は、康一も思いもなかった展開を運んだ。テキトーに、その場しのぎで、苦し紛れで放った言葉によって美晴の顔には笑顔が浮かんだのだ。

「えっ……？」

康一はポカンとした顔でレジに向かっていく美晴を見つめる。その背中を仗助はパシンと叩いた。

「いたっ！」

「グレートだぜ、康一！ケーキはどれも可愛いし美味そーだけだよー、自転車じゃあ形が崩れるって話をしてたんだぜ」

ケーキを買うなら倒れないようにそっと運ばないといけない。その点、康一が選んだプリンは立派な容器に入っていて、余程ガンガンに振つたりしない限り崩れる心配がない。美晴はバスではなく自転車で通学しており、ケーキを運ぶには難易度が高かったのだ。

「そ、そうだったんだ……」

康一はホッとしていた。まさか感謝されるとはつい数秒前までは予想すらしていなかった。でも、それ自体は悪くないし寧ろ良い事をしたとなんだか少し誇らしげに思える。

美晴も無事会計を終え2人の元に帰ってくると、3人は店から出て仗助の家の方へ向かって歩き始めた。

アンジェロ岩に挨拶をし（仗助の日課らしい）、もう少しで仗助の家に着くというところで見るからに古い、外壁もボロボロな家を見つけて美晴は思わず立ち止まった。年季の入った、しかし綺麗な頃は立派なものだったろうその家をまじまじと見つめる。

「美晴さん、そこは3、4年くらいずーつと空き家なんだ」

それに気付いた康一が踵を返して美晴の方に戻ってきた。それに釣られるように、仗助も足を止めて振り返る。その家は仗助の家の真ん前に建っていて、康一の言う通りずっと空き家だ。もう誰が住んでいたのかも覚えていないし、交流もそれほどなかったかもしれない。

「そうなの？肝試しとかピッタリだね」

2人の会話に入ろうと近付いた途端、「肝試し」というワードが躍り出て仗助はピクツと表情を引きつらせた。

「おいおい！肝試しとか勘弁してくれよオ、俺は行かねえぜ」

声を裏返しながらそんな事を絞り出す仗助は、きつと思つた事が口に出てしまうタイプだろう。美晴はそんな彼の一面を垣間見て思わずきよとんとした後に、クスクスと小さく笑い声を零した。

「仗助くん、ひよつとしてオバケ無理派？それに肝試しに行くとは言っていないわよ」

”ピツタリなだけ”とからかってみれば、彼はすぐに「しまった！」と頭を抱えてしまった。

「ハ、ハメたなアアツ!?美晴ちゃん意外と意地が悪いぜエ〜！」

「フフツ！友達にだけだよ、こういうのは」

仗助は人当たりがいい。一方の美晴も決して人見知りするタイプではなく、打ち解けるとこのように明るい面が前に出てくる。こうして2人が会話しているのを聞いていると、まるでもつと前から彼らは友達だったのではないかと錯覚しそうになる。康一はそんな2人を尻目にもう一度空き家に視線を向ける。

「ツ!」

だが、その廃墟のはずの家の窓に人影が見えて康一は思わず息を呑んだ。ろうそくの付いた燭台を手に、暗がりでも顔まではハッキリと見えなくても、こちらをジツと窺うその視線は分かる。



「じ、仗助くん！美晴さん！窓に人影が…ッ！」

康一はすぐに振り返って2人に知らせると、彼らもまた康一の方を振り向く。

「康一イ!!お前までそんな事言うのかよオー!!」

「ええッ!?!」

しかし仗助の反応は彼が思っていたどれとも違っていた。

「ペニーワイズは用水路をすみかにしてるから、もしいたら今も私達の事を見てるかもって話よ」

「なんて話してるの美晴さんーッ!」

どうやらホラーが苦手な様子な仗助を美晴がからかって遊んでいた最中であつたらしい。それだから、仗助は康一までホラーじみた話に入り始めたと思ひ込んでしまったようだ。

地下を示すようにトントんと足でアスファルトを指す美晴に、思わず康一も素っ頓狂な声を上げる。ぼくは真剣に、今己が見たものについて彼らに知らせたというのに。次に視線を窓に戻した時には何事もなかったかのように暗闇だけが広がっていて、思わず”やっちゃった”と溜息を吐いてしまった。

「勘弁してくれよなあゝっ、たく…それによオーこの家はホームレス対策で不動産屋がいつも見回りしてんのよ。そうじゃあなくても俺んちの前なんだからよ、誰か引越してきたら気が付くぜ」

こんな廃墟のような家、住めるかどうか怪しいのだ。仗助はホラー話を振り切るように努めて冷静に諭す。

「じゃあ康一くんが見たのはペニーワイズ?」

「だからもうその話はよしてくれよ!今夜眠れなくなつたらよオ…!長電話で道連れだかなアア…!」

”電話代そっち持ちな!”と彼はまだからかう気にいる美晴を軽く脅していた。

(の、割に…南京錠が壊されている。門自体の鍵も門も全部開いている…どう考えてもおかしいぞ)

康一はそんな2人を再び尻目に、家の前にある門を改めて観察するように見つめる。仗助の言った通り、見回りが今入っているのなら門

が開いているなんて事はないはずだ。

そして美晴が先程から仗助をからかうネタにしている幽霊やホラーの類でもないだろう。それならば、こんな事にはなっていないはずだ。幽霊が鍵を破壊するなんて、そんなまどろっこしい事はしなくても良いはずだからだ。

ペニーワイズは対象が恐怖を感じるものに姿を変える化け物だ。見方を変えれば美晴の言いたい事は想像をかき立てられるもので、例え話としては上出来ではあるが、この状況からして可能性も現実味もあまりない。

しかし人が入っているなら、3人でここに来るより少し前の事になるはず。

康一はそつと開いた門の隙間に首を突っ込んで中を見回す。玄関は開いていない。次にぐるりと垣根の周辺を見てみる。

「あつ…!!」

程なくして康一の声上がる。その視界が捉えたのは垣根の影で様子を窺うように隠れている人物の脚で、全貌を確かめようと視界を上にあげようとした。

「ぐえッ!」

だがそれよりも首と肩に鈍い衝撃が走る方が速かった。

「人の家勝手に覗いてんじゃあねえぞ、ガキヤア!!」

その声は康一の真上で張り上げ、足で門をグイグイと押す。

観音開きの門である事だけが救いで肩の方が負荷は大きく、苦しいもののかろうじて呼吸は出来ている。しかしどうやっても逃れられない状況に、焦りで呼吸は乱れていく。

「こ、康一くんッ!」

「おい、なにしてんだテメー!!」

この一大事に騒ぎ立てていた美晴と仗助が振り向き、門を閉めている男と睨み合う。

「康一くんを離してくださいッ!それに”人の家”って…!ここは空き家なはずじゃあないですかッ!」

美晴の言葉に男はピクリと眉を動かした。

「この家は俺の親父が買ったんだ……もう分かったら、2度と詮索してくんじやあねえぞ」

男は言いながらも、門を閉める足を退けない。寧ろグリグリともつと力を込めているようにも見える。

「おい……だからよオ、康一の事離せつつつてんスよ……」

仗助が一步前に出て睨みを効かせた。しかし男はまるで動じない様子で首を傾げる。

「なんだア？口の利き方がなつてねえよなあ……？人んちの前でぎやあぎやあ騒ぎやがってよオ」

「テメーが口を利かなけりや、もつと静かになるんスけどねえ……」  
このまま怒涛の睨み合いが続くかと思われた。

しかし——、  
「ッ!!」

突如、上からキラリと光る何かスピードを上げて真っ直ぐに飛んできた。それは康一の胸元に当たったかと思えば、そこから血がブシヤツと噴き出す。

「なッ?!?康一ッ!!」

「康一くんッ!!」

ほんの一瞬の出来事だった。男が閉めていた門から解放された康一は人形のように力が抜けた様子で地面に倒れ伏す。

「兄貴ッ……!!」

男が窓を見上げるのに釣られ、仗助と美晴もそこを見上げる。

「何故この矢で射抜いたか？それを聞きたいんだな？そこにいる男が、アンジェロを倒した」東方仗助“だからだ”

2階の窓。ちょうど先程康一が指差していた窓に、確かに人影が見えた。顔は見えないが、ろうそくの灯りに浮かび上がる体格と声で彼もまた男だという事が分かる。

「へえ、こいつが”東方仗助”かよ……」

下にいる男はニタリと怪しい笑みを仗助に向ける。そうしていると倒れていた康一が「がほッ！」と血を吐いた。

「血を吐いたか。そいつにはスタンド能力の才能がなかったというわ

けだな」

”スタンド”。その言葉に2人は息を呑む。この名を出せるのはスタンド使いだだけだ。能力を持たない人間にスタンドが見える事はない。対峙している、恐らく兄弟であるこの2人はスタンド使いで間違いない。

「そつちの女にも矢を浴びせてやる。待っている……必ず射抜いてみせる」

窓の男は今度は美晴を指差した。己が指名され、美晴は無意識に固唾を飲み込む。その様子に仗助は立ち塞がるように美晴より前に出た。

「その前に億泰！仗助を始末し！女を押しえろッ！」

窓の男が下にいる男——億泰に命令すると彼は一直線に仗助に向かって来る。そして、背後にスタンドを可視化させた。

「美晴ちゃん下がってろ！狙われてるぜッ！」

仗助は後ろにいる美晴に言い置いて彼もまたスタンド——クレイジー・ダイヤモンドを可視化させ億泰のスタンドに殴り掛かる。すると意外にも、億泰のスタンドはスピードがないのかその拳を顔にガツン！と受けた。

「そこを退けよッ……！今ならまだ康一の怪我を治せるッ……！退かねえとマジに顔を歪めるぜッ……!!」

仗助は焦っていた。康一が生命活動を止めてしまったら、クレイジー・ダイヤモンドでは治せなくなってしまう。前例があるのだ。前例——守れなかった祖父の事が頭を過り、唇を噛み締める。

その時、何かふわりとしたものが舞い降りるような感覚があった。それは己の体を浸透するかのように一瞬だけあたたかく仗助を包む。

「仗助くん、援護するわ！私のスタンド——」守護者”の名を冠する”ガーディアン”でッ!!」

その声に振り向いてみると、美晴もまた彼女の鎧を纏うスタンド——ガーディアンをすぐそばに可視化させていた。先程の感覚はガーディアンの守護を受けた事によるものらしい。

勿論、仗助に能力を使えば美晴は無防備になる。だが、窓の男は彼

女もスタンド使いである事を知らなかった。これがどんなスタンド能力であるかも知然知らないはず。今の彼らの狙いは東方仗助であり、本体である来宮美晴が無防備である事を知られなければ、億泰に本体を叩かれる心配はほぼないとも言える。

「へえ、女もスタンド使いかよ……おもしろオ」

億泰は殴られた事で切った口の端から滴る血をペロリと舐める。

互いに臨戦態勢だ。康一を早く助けるため、目の前にいる億泰を倒す。ジリジリと焼けるような睨み合いは続いていた。

## 虹村兄弟

東方仗助のクレイジー・ダイヤモンド、来宮美晴のガーディアン、そして虹村億泰のスタンド。3人のスタンド使いが1人の少年——広瀬康一を巡って睨み合っている。

「おい億泰……」

そこに窓の男が静かに声を響かせた。相変わらずあの男だけは顔がよく見えない。

「スタンドと云うのは車やバイクの運転と同じなのだ……能力と根性がねえ奴はどんなモンスターマシンに乗ってもビビってみみっちい運転するよなあ……!?!」

「兄貴……あんまりムカつく事言わんといってくださいよ……ッ」

窓の男——億泰の兄は弟に対して説教まがいな事を言い始める。どうやら億泰が簡単に仗助に殴られたのがイマイチ気に喰わなかったらしい。その後もなにやらあの兄は弟にクドクドと説教を説いている。

「……」

美晴はそんなよくある兄弟の様子をポカンと眺めていたが、仗助が彼女を振り返って”そこで待ってる”と手を前に出して合図を送っている。静かに頷いてみせると、彼はそのまま億泰の横を素通りしていった。そのあまりにも簡単な突破方法に思わず美晴もカクツとズッコケるように首を傾げる。

(え、ええ〜ッ……)

確かに、特撮ヒーロー物の敵のように、立て込んでいる様子の相手を律儀に待っている必要はない。それに今は一刻も争う事態なのだ。尚更待つ義理はない。

しかしこの虹村億泰という男——、

「ああーッ！仗助、きさまッ！俺が話している間にッ！卑怯だぞッ!!」

「お前……頭悪いだろ」

そう、彼はきつと頭が悪い。仗助の方が1枚も2枚も上手のよう

だ。振り返ってスタンドの拳を再び突き出す億泰だったが、仗助は極めて冷静だった。

「退いてろっつってんスよ！」

バキッ！と再び仗助のスタンドの拳が億泰の頬を叩く。その衝撃で彼は美晴の方に吹っ飛び、仗助は康一の元へと無事辿り着いた。

（私の能力、使うまでもなかったかもしれない……）

美晴はそつと仗助に使っていた能力を解く。てつきりもつと苦戦を強いられるかと思っただけに、なんだか拍子抜けだ。まあ、相手がバカで良かった、と思えるだけ平和的かもしれない。

ふわりと能力を解除した感覚が伝ったのか、彼は美晴の方を振り向いてグツと親指を上を立てていた。それに返事をするように美晴もまた親指を上を立てたが、仗助が康一の方へ向き直ったタイミングで足をガシツ！と掴まれて弾かれるように下を向く。

「へへっ……へっ……！女を捕まえたぜツ！！」

億泰だ。億泰が這いつくばりながら美晴の両足をガツシリと掴んで彼女を見上げていた。

「なツ……んッ！」

彼は美晴が声を上げるより速く彼女の体をよじ登るかのようにして立ち上がり、後ろに回り込み体を押さえて口を手で塞ぐ。

「おうい東方仗助エー！その小僧から離れなア！さもななくば、この女に俺の”ザ・ハンド”を叩き込むぜエ……！」

「み、美晴ちゃん!? テメーツ……!!」

億泰は己のスタンド——ザ・ハンドをすぐそばに現し、美晴にその右手を向けていた。

（康一、あともう少しだけ待っててくれ……!）

仗助は唇を噛みしめ、康一から離れるように立ち上がり億泰の方へ一歩ずつ歩み始める。

「そうだ。もっと近くに寄んな……俺の射程距離までよオ」

まずい事になった。相手がバカだからと油断してしまった。

「ガーディアン」の守護を掛けられるのは”対象が受ける攻撃の初期段階”までだ。”殴る”なら”拳が体に触れた瞬間”、”刃物で斬り

付けられる”なら”刃物が体に当たる瞬間”、”暴言”なら”最初の一文字が発声された瞬間”までなのだ。元々は先程の仗助のように、”攻撃される前提で最初から守護を掛ける”事で安全に効果を発揮する能力なのである。

岸辺露伴に記憶を読まれそうになった時、まだ”扉”は完全に開かれていなかった。だからガーディアンをギリギリ発動する事が出来たのだ。もし扉が開き切り、記憶を羅列したページが彼の視界に入っていたら手遅れだっただろう。

しかし今の美晴は完全に油断し、億泰の”美晴を捕まえる”という攻撃を通す事を許してしまった。だから彼に捕まってしまっている。(でももし、この億泰が”これから”何か私に仕掛ける気なら……防げない事もないわ)

それでも美晴はまだ諦めていなかった。”捕まえる攻撃”はまだ続いているため、この攻撃を振り切る事は能力では何ともならないが、”これから来る攻撃”はまだ何とかなるのだ。

今はあくまで康一の怪我の治療が優先事項。己の身は己でまだ守れる。

「……ッ!!……ッ!!」

口を塞がれているため身振り手振りで仗助に合図を送る。”自分は大丈夫、康一のところへ戻って”、と。それがなんとか伝わったのか、仗助は足を止めた。

「……美晴ちゃんに1発でもブチ込んでみるよ。テメーに返ってくるぜ」

彼は決して億泰からも目を離さないよう、康一のいる方に向かって後退りを始める。その様子に億泰は信じられないといった様子で目を見張り、すぐに焦りの色を浮かべた。

「仗助エー!テメー自分の女に手エ出されて涼しい顔してんじゃあねえよ!いいぜツ、ブチ込んでやらアツ!!」

ザ・ハンドの手が億泰の動きを真似るように拳を大きく振りかぶってから美晴の頭上に落ちてくる。その様子に仗助は一瞬だけ血の気が引く心地になったが、美晴は予想していた通りに事が運び口角を密



かに上げた。

「ぬうおッ!!?」

直後、ガツンツ!と金属にぶつかるとような音が響き、ザ・ハンドの仕掛けた攻撃が弾かれるように勢いよく拳が上がる。動揺して美晴の身体を拘束する手の力が緩まったのを感じ、彼女は体勢を崩した億泰の脚を払うように蹴り上げる。

「がッ!?!」

尻餅について転んだ億泰を尻目に、美晴はその腕から脱すると仗助の元へと走った。

「グレート……!まったく冷や汗かいたぜ!」

「心配掛けてごめん!それより早く康一くんを!」

程なく合流し、2人は康一の方へと駆け寄る。だがその背後にはまだ動く影があった。

「行かせるかよオツ、タコがッ!!」

その声に反応する事なく2人は一目散に走る。——はずが。

「ッ!?!」

ガオンツ!と音が響いた、その後が何かおかしかった。

「どりゃッ!」

「きやあッ!」

「うぐっ!?!」

美晴の背中に突き飛ばされるような衝撃が走る。前屈みに倒れた彼女の身体はそのまま前にいた仗助に同じ衝撃を与え、2人して地面に倒れ伏す。

「あれエ?さつきは弾かれたのによオ、今度は違ったなあ……?」

一方の億泰は、したり顔で突っ伏している2人を見下ろしていた。仗助に後ろから被さる形で伏せていた美晴が起き上がるのを見て、その両肩をがっしりと掴む。

「もしかして、攻撃されるか分かんなかったらよオ……攻撃出来ちゃうんじゃないあねえの……?」

ゾクツと背筋に冷や汗が伝う感覚に陥る。美晴の能力は不意打ちの類とは相性が悪い。こんなに早く己の能力の弱点がバレてしまう

とは思わなかった。

「どぶツ!」

しかしそんな億泰の身体が突如後方に吹っ飛んだ。目の前にはクレイジー・ダイヤモンドの腕が見え、仗助が起き上がって美晴をさりげなく己の方へ引き寄せる。

「触ってんじやあねえっスよ……!クソツ、なんなんださっきのはよォー……!なんで億泰がこんな近くに!」

仗助の声で美晴もハツと意識がこちらに戻ってきた。

そうだ、結局のところ謎はそこなのだ。2人は先程まで走っていて、対岸まで距離はそこまでなくとも億泰とは十分な距離が開いていたはず。それが何故か一瞬で、億泰が背後1メートル前後といったところまで迫っていた。

「違う……」億泰が来た”んじやあない。”私達が億泰の方に行った”んだわ……”

美晴は改めて今の距離感を見つめ直す。”億泰が来た”なら、2人の身体は康一の方へ確実に寄っているはずだ。だが”私達が億泰の方に行った”から、康一からは離れている。

「へへっ……そうだけ。俺の”ザ・ハンド”は”右手で触れた物を何でも削り取っちゃう”のさ」

億泰が殴られた頬を押さえながら起き上がり、ザ・ハンドを可視化させる。

「そして削り取った断面は……何事もなかったかのように塞がっちゃう!それは削り取った物が”空間”であつても同じなんだぜエ……!」

億泰はザ・ハンドで空間を削り取り、2人を手繰り寄せたのだ。

美晴の能力では空間を守る事なんて出来ない。このままではどんなに頑張っても康一の元へ辿り着くことは出来ない。

やはりこの虹村億泰を倒さなければ、康一を助ける事は出来ないよ。うだ。

「美晴ちゃん……ちよつとアレ、借りるぜ」

どうやって虹村億泰を再起不能にさせるか。美晴は頭の中でぐるぐる考えていたが、仗助がスクツと立ち上がってそんな事を言うもの

だから彼を見上げて疑問符を浮かべる。そして彼はまた、美晴の返事も聞かないままに億泰を視界に入れてジリジリと後退りを始めた。

「何度やっても同じだぜエ!!」

再びザ・ハンドが右手を仗助の方に振りかぶる。そしてそれはガオンツ!と先程も聞いた音を響かせて空を切った。

これだ。先程私達を手繰り寄せたのは、これだったのだ。美晴の身体は射程外のように、今度こそその瞬間を捉える。カラカラと転がっていた空き缶が吸い寄せられるように億泰の方へ1人で向かい始めていく。そして仗助の学ランの裾は引っ張られるように、風も吹いていないのにはためき始める。

「仗助くん、来るわツ!」

”あれ”が来る。先程2人の身体を手繰り寄せた、あの感覚が来る。美晴は直感的にそう感じた。

「ああ……けど億泰。やっぱお前、バカだな」

「何イツ!」

仗助がそう呟いたのも束の間、彼はスツと横に身を引いた。それと同時に先程まで彼が背後に隠していた物——美晴の自転車がガタガタと音を立てて揺れ、やがてビュンツ!と勢いよく億泰の方へ吸い寄せられるように向かっていった。

「うがアアツ!!」

ガシャンツ!と億泰と自転車が衝突し、彼は自転車の下敷きになってあっけなく昏倒してしまった。

「ふう〜ツ、虹村億泰……やべー能力の持ち主だぜ。こいつがバカでなけりや、もつと苦戦してたかもしれねえな」

攻撃に使った美晴の自転車とそのカゴに入っていた先程買ったプリンにはクレイジー・ダイヤモンドで修復出来た。それにしても東方仗助、この人だけは本当に敵に回したくない人だ。美晴は機転の効いた反撃を仕掛けた仗助を改めてそう評価していた。

億泰の事は彼に任せ、美晴は康一の方に視線を向ける。

「どれ、しばらく意識が戻んねーようにキツく首を絞めてやるか。せーの……!」

「仗助くん、康一くんが！」

しかし門のところにはいたはずの康一の姿が忽然と姿を消していて、思わず声を上げると彼もそちらを向いた。

「なっ……康一!？」

康一がいたはずの場所には血溜まりだけが痛々しく残され、2人は億泰の事を放つてそこまで駆け寄る。するとズルリ：ズルリ：と、何か這いずるような音が耳を掠めて互いに顔を見合わせる。それは目の前に聳え立つこの廃墟の中に入っていくようにも聞こえ、門を越えて敷地に踏み込んだ時、一瞬だけズルリと康一が廃墟に引きずり込まれていく様子が見えた。

「いい加減にしろよなッ……!!」

仗助が怒りを露わにし、更に踏み込んでいくのを美晴も追い掛ける。こんなにあからさまに、見せびらかすように引きずり込むなんて煽っているようにしか見えない。

だが行くしかないのだ。見捨てておけない。

開きつばなしの玄関を潜ると、引きずる音が止まった。そして、暗がりの中に矢が刺さったままの康一と、もうひとつの人影が見える。

「この矢は1本しかない貴重なものでね。回収しなければな」

窓の男と同じ声、同じ背格好。彼は虹村億泰の兄、その人であった。

兄は康一に刺さった矢に手を掛け、引き抜こうとしている。

「おい、矢を抜くんじゃあねーぞ！出血が激しくなる……!」

これ以上出血が続けば、康一の命に関わる。しかし虹村兄にとってはそんな事はどうでも良かった。

「……弟がマヌケだったから、俺が貴様らを殺さなきゃあならなくなつた。となると、この矢をこのまま小僧に刺しておいたら誰かに見つかつちまうかもしれないだろ？」

矢尻を弄びながら、兄はジツとこちらを見つめている。

「見つかつて折られでもしたら大変だ。これは俺の目的のために大切な物なんだからな。先程も言ったが、この矢は1本しかないのだ」

だから康一が死んだとしても構わない。目的のために矢を回収し、違う人間に矢を射る。彼はそう言っているのだ。CDを聴き終えた

らケースにしまつてから次のCDを聴くように、彼にとってはそれが当たり前なのである。

だから彼は容赦なく、当たり前前に、康一の胸に刺さった矢を引き抜いた。康一はまた口から吐血し、意識を失つたまま痙攣し横たわっている。

「仗助くんッ！」

それに激昂した仗助が屋敷の中へと駆け込んだ。それを兄が鋭く睨む。

「ほう……この屋敷の中に入ってくるのか！」

「考えて物を言えよ……入んなきゃあ、テメーをブチのめして康一の怪我を治せねえだろうがッ!!」

何かおかしい。やつと姿を現した億泰の兄が、こんなに簡単に彼の侵入を許すだろうか。

違う。侵入を許すというより、これは「誘い込まれた」という方が正しいような気がする。

「ッ!？」

そこに億泰が身体を引きずって美晴のすぐそばまでやって来た。だが彼は美晴の事など見向きもせず、屋敷の中へ足を踏み入れる。

「兄貴ッ！俺はまだ負けてねえッ!!そいつへの攻撃は待ってくれッ!!」

「ちよ、ちよつと！あなたとの勝負はもうついたじゃない！」

億泰の事などあの2人は見向きもしていない。もう終わった事なのだから。美晴は億泰の腕を掴んで引つ張るが彼の体はそちらに傾く事はなく、寧ろ掴んでいる美晴が若干引つ張られて彼女も屋敷の中に踏み入る。

直後、パタパタパタ……という奇妙な音と共に、視界の端で何か光った。

一瞬の出来事だった。直感的に危険を感じた仗助が咄嗟に立っていた位置から避けると何か無数の物が空を切る音が聞こえ、億泰の頭に蜂の巣のように無数の小さな穴が血を噴き出しながら空く。

「え……っ?」

彼は攻撃の勢いに負けたように背後にいる美晴に向かって仰向けに倒れ、支えきれなかつた美晴は彼と共に尻餅をついた。

「そつ、そんなーどうして…!」

改めて億泰の傷を見るが、やはり無数の小さな穴が空いている。どんな攻撃をしたらこんな傷になるのか、見当もつかない。

だがそれよりも――、

「どうしてこんな事…!あなたこの人のお兄さんでしようツ!? どうしてそんなに冷たいのよツ!」

美晴は兄の攻撃によつて負傷した億泰を抱えながら彼の兄を見る。しかし彼の顔は弟が己の攻撃によつて傷付いたにも関わらず、表情ひとつ変えない。それどころか苛立ちすら浮かんでるように見えて美晴は声を荒げる。そんな彼女を見て、彼はフウツツ…と長い溜息を吐いた。

「それはなお嬢さんよ。弟が本当にバカだからだ。俺のスタンド攻撃の軌道上にノコノコ入ってきた…昔からそうだぜ、こいつはバカでマヌケなんだよ。まるで成長しない」

億泰がバカな事は否定出来ないかもしれない。だがそれとこれは別だ。謝罪くらいしたらどうなんだ。身内が負傷したのだから、心配くらいしろ。美晴はそんな事をぐるぐると頭の中で考えていた。そして兄にそんな風に言われる億泰が哀れに思え、ハンカチで出来る限りの止血を試みる。

この兄は冷酷で容赦がまるでない。加えてスタンドも厄介な代物らしい。

彼をどうやって攻略するか…まずはスタンドの正体を見極めなくては。美晴はガーディアン守護を億泰に掛けながら、周囲を注意深く見回した。

## 彼らの”目的”

「億泰よオ……敵に情け掛けられるたア、お前はやはり無能だよ」

「兄……貴……ッ」

億泰の出血が止まらない。美晴は焦りながらもハンカチを彼の傷に当てていたが、何せ数が多い。それなのに、あの兄はまだ説教を弟である彼に説くつもりでいた。

「無能な奴はそばの者の足を引つ張ると、ガキの頃から繰り返し繰り返し言ったよなア……弟よ、人間は成長してこそ価値があるのだ。成長出来てねえお前がそうなるのは当然だろう？ 違うか？」

兄の目は冷ややかだった。答える気力のない弟にその視線を投げかけ、緩く首を傾げる。その様が許せなくて美晴は歯を食いしばり、そんな彼女を見て彼はまた長い溜息を吐いた。

「お嬢さんよオ……さつきあんた、億泰に何かしたなア？ 見てたぜ。あんたもその東方仗助と同じで、昔からその能力があったのかね？」

「だったら、なんなのかしら？」

美晴は珍しく本気で苛立っていた。彼の態度は氷のように冷たくて、それが肉親である弟に対しても同じだったから。だから捻くれた回答を寄越している。兄はそれを聞いて僅かに口角を上げた。

「なにも。ただあんたを殺す、それだけだ。様子を見るに身を守る類の能力だな？ それは今、自分に使った方がいいんじゃないか？」

やはり先程の億泰との戦いを見ていればそう判断するのは難しくないか。そう思った直後、また視界の端でパタパタ……と何か光る。直後、仗助の背後にあった壺がバキバキッと粉々に砕け散った。——無数の穴を空けながら。

「さつきの攻撃だ！ また来るッ！」

仗助の声と同時にパタパタ……と四方がまた光る。

何かに囲まれている。何か、ヤバイ物に！

そう考える隙すら与えない間に、床に、壁に、鋭い音を響かせなが

ら無数の穴が空き始めた。

「あいつ自分の弟を巻き添えにしてまで攻撃する気だ！こつちに早くッ！」

仗助がいち早く動き、クレイジー・ダイヤモンドで壁を壊し先にも外に出ると億泰を引きずる美晴に手を伸ばし、彼女もそれを掴むために手を伸ばす。

「ううッ!!」

しかし互いに伸ばした手にまで一瞬で無数の穴が空き、血が噴き出る。

「クソくッ!!」

それでも仗助と美晴は手を伸ばした。そしてガツシリと互いの手を掴むと、仗助は抱えられている億泰ごと彼女を外に引きずり出して壁の穴をクレイジー・ダイヤモンドで修復する。間一髪、あの危地から脱した。だがまだ康一を助けられていない。あの兄を倒す方法……それはきつと億泰だけが知っている事だ。

「ありがとう、仗助くん」

虹村兄のスタンドの猛攻で負傷した箇所をクレイジー・ダイヤモンドで治してもらった。今までも何回か見てきた能力だが美晴自身の体でそうされるのは初めての事で、傷が綺麗に塞がる様子に思わず感嘆の声が上がる程だった。

「気にすんな。……っと、今は億泰の方が重要だぜ」

仗助は改めて億泰に向き直る。美晴のスタンドのおかげで彼には最初に受けた傷以外はどこも負傷していなかった。

「おい億泰！テメーの兄貴のスタンドの能力を教えろ。教えてくれりゃあ、その頭の傷は治してやっからよオ」

少々手荒かもしれないが、今はそうも言っていられない。あの冷酷な兄が玄関で待機しているとは予想しにくく、玄関より更に暗い屋敷の中で待ち受けているに違いないからだ。

あの中は彼のテリトリーだ。スタンドの正体が分からないままでは、いくら身を守る術があるからと言っても不利な状況はひとつも変わらない。



「だ……だが、教えるかよオ……ッお前ら、なんか……ッ！」

だが億泰にもプライドはある。いくら粗暴な扱いを受けたとしても、兄を売る行為は彼に出来るはずがなかった。血を流しながらもこちらを睨みつける億泰に、仗助は「そうだよな……」と溜息を吐く。その次の瞬間、彼はクレイジー・ダイヤモンドの腕を横たわる億泰に向かって振り上げた。

「だったら……しよーがねーよなアアーツ!!」

美晴は息を呑んだ。負傷している彼をここに連れてきておいてまた殴りつけるつもりなのかと。仗助までそんな事をするのかと。

だが、やはり彼は東方仗助、その人だったのだ。

「……!!」

顔に当たる、というところで止められた手。優しい光が億泰を包んだかと思えば、次に手を離れた時には彼の傷が完全に治っていた。

「これから俺はまたあの屋敷ん中に入るからよオ……億泰、邪魔すんなよ」

信じられないといった様子で己の顔をパタパタと触る億泰を尻目に、仗助は今度は美晴に顔を向けた。

「美晴ちゃんはここで億泰の事見ててくれ。邪魔するよーならー発ブン殴っちまってイイからよオ」

そう言っ任せるように肩をポンと叩こうとしたが、先程負傷した手の方を挙げてしまい思わず「あつ、と……」と引込める。それをすかさず美晴がその手を握ってまだ血が流れ続けている傷を見つけた。

「仗助くん……これは治さないの？」

ハンカチは先程億泰に使って汚れてしまった。止血する物をもう持っていない美晴の心配そうな表情を見て、仗助は困ったように彼女の肩を負傷していない方の手で撫で叩く。

「クレイジー・ダイヤモンドは自分の傷は治せねえんだ。……世の中、都合のいい事だらけじゃあねえって事だな。君のスタンドと同じだ」

美晴のスタンドも防御面では鉄壁を誇るが、発動条件がシビアだ。ひとつの物しか守れず、咄嗟の判断、特に不意打ちにはめっぽう弱い。

仗助の言葉は理解出来るが、もっと己の能力が万能であれば彼に怪我を負わせる事はなかったのに――。そんな事を考えているのが筒抜けだったものだから、仗助はその肩に手を置き続けていた。

「ほら、手が汚れちゃうぜ。それに昔っから喧嘩吹っかけられるからよー、包帯くらいはいつも持ち歩いてるぜ」

仗助はポケットの中から包帯を取り出すと美晴の手を離させ、負傷した手に巻き付ける。

「康一を早く助けてやらねえと……能力が効かねえのは死んだ人間も同じだからな。見張り頼むぜ、美晴ちゃん」

彼が再び屋敷の方へ向き直るが、美晴の視界の隅で何かが動いた。それは立ち上がって仗助を追い始める。

「おい待てよ仗助……！ テメーなんで俺の傷を治した!? 俺はテメーらの敵だぜエ!? それに兄貴のスタンドの事だつて話しちゃあいねえ！」

億泰だ。彼は今にも背後から仗助に掴みかからんと迫っていたが、美晴に腕を掴まれピタリと動きを止め彼女を振り返る。

「テメーもだよオ、美晴……！ 兄貴の言う通り、俺じゃあなくテメー自身に能力使えよ！ なんなんだよオ、テメーらはツ！ 危ねー目に遭つてまで俺を助けやがって!!」

それは苛立ちからか、屈辱からか。或いは純粋な疑問からなのか、それともそれら全てなのか。億泰は2人に向かって声を荒げていたが、彼らは冷静に、かと言って聞き流すでもなく、億泰を見つめていた。

「なんなんだつてよ……別に深い理由なんてねえよ」

仗助は顔だけ振り返つたその姿勢で、ぽつりと答えるように呟く。  
「何も死ぬこたあねー」。さっきはそう思っただけだ」

彼はそう言い残して屋敷の中へと再び足を踏み入れていった。一方の億泰はと言えば、何か言いかけるも言葉が出ないのか、一度口を開けたかと思えばすぐに黙り込んでしまった。

美晴と億泰は虹村兄から逃走してきたその場から動かずにいた。

「オメーよお……なんであいつに着いていかなかったんだ？」

2人して壁を背に座り込み、仗助が無事に康一を連れて帰ってくるのを、或いは兄が勝利して迎えに来るのを待っているかのようだった。そんな沈黙が耐えきれなかったのか、億泰は美晴に問い掛ける。「私のスタンドはひとつの物しか守れないのよ。仗助くん、きつと私に使うように言うわ……彼に使ったら、私は無防備になるもの」

そして無防備になった己を叩かれたら、どのみち守護は消える。本体の死はスタンドの死なのだから。無防備になる己の事も仗助は守らなくてはならなくなり、結果的に足を引っ張りかねないのだ。先程の億泰戦の時のように対等であるならまだしも、アウエーな状況である今においては得策ではない。

億泰は「そうかい……」と短く返事をし、この話はそこで終わった。彼女は分を弁えているだけ己とは違うのだと、億泰は俯きながら考える。それに彼女は決して考えなしの行動はしないはずだと、彼は劣等感に苛まれる心地になった。

「億泰くんは、どうしてあんなお兄さんのために頑張ろうと思えるの？」

その声にハッと顔をそちらに向けると、膝を抱えてこちらを見ている美晴がいた。彼女には兄が余程冷酷な男に見えたようで、同時に愚直にもそれに従い受け入れる弟が不憫に思えたようだ。だがそれは違う。違うんだ、美晴。億泰は頭を抱えていた。

「……兄貴は、昔はこんなんじゃないやなくてよオ……けどよオ、”目的”を果たせたらよオ!”兄貴だけは元に戻ってくれるかも”って……だから協力してんだよ……」

それから彼は、ぽつぽつと虹村家に起こった出来事を話し始めた。

虹村家は元々、東京に住んでいた。父は会社を経営していて、それなりに裕福な生活をしていたのだ。”虹村形兆”と”虹村億泰”。

彼ら兄弟の仲も良かった。

しかしある時、母が急死した。その後経営していた会社も上手くいかなくなり、膨大な借金を虹村家は抱える事になる。

それから父は兄弟に暴力を振るう事が多くなった。仕事もせずに

昼間から酒をあおり、まともな育児もしてもらえなかった。兄である形兆は小学生で学校に行っていたが、弟である億泰は幼稚園に行かせてもらえず、家で父の虐待を受ける日々を送っていた。

形兆は学校から帰るとすぐに億泰の様子を見に行つて、泣きつく彼を抱き締めてずっと頭を撫でた。休みの日はずっと億泰に付いて、父からの虐待に耐えていた。

それが事件が起こる前、10年前までの虹村家である。

10年前、形兆は8歳、億泰は5歳の時。それは唐突に起こつたのだ。

億泰がリビングの隅で怯えるように蹲っていると、酒を飲んでいた父が急にもがき苦しみ始めたのだ。本当に突然の事なので彼には何が起こっているのか理解出来ず、泣きじゃくり怯えながら形兆の帰りを待つように玄関の外へ出て行つた。形兆は学校から帰ると億泰が泣いていたので、また父に暴力を振るわれたのかと思った。だが弟に引つ張られるようにリビングまで来ると、暴れるように苦しんでいる父がそこについて思わず足がすくんだ。足音に反応したかのように振り向いた彼の顔は、人間のものと思えないほどに醜悪になっていたからだ。

「救急車呼ばないと……！」

「無駄だ！もうだめだ！D I O」が死んだから、”肉の芽”が暴走したんだッ！」

形兆は電話のある場所まで走ろうと踵を返したが、それを追い越すように父は駆け出して自室に籠りきりになってしまった。

それから父は怪物のような見た目になった。1年も経たないうちに、形兆と億泰の事を家族だと認識出来なくらい知能も劣ってしまった。

形兆は10年掛けて色々な事を調べた。父が言った”D I O”という名の男、その男を殺した”空条承太郎”の事。スタンドを発現させる”弓と矢”の事。父は金のためにD I Oに心売り渡し、”肉の芽”という物によって洗脳されていた事。

億泰には難しく分らない事だらけだったが、形兆が彼に教えた事で理解出来た事がある。

「俺達の親父はよオ……もう元には戻らねーって、兄貴はそう言ったんだ。だからあの”矢”で……」親父を殺してくれるスタンド使いを探すって、それからなんだ。兄貴はイライラしてんのか、今みたいになってよオ……」

だから”目的”さえ果たせれば、形兆は元の優しい兄に戻ってくれる……億泰はそう信じているのだ。

想像よりも遥かに重い事情を背負っていた億泰に、美晴は終始開いた口が塞がらなかった。

「その……お父さんは今、どこに……？」

10年前、閉じこもってしまつた彼らの父親。杜王町に来てからはどこにいるのだろうか。美晴がそれを問うと、億泰はスツと立ち上がる。

「会っていくか……？親父に。仗助の邪魔はしねーから問題ねえだろーよ……」

彼の問い掛けに答えるより先に、美晴は立ち上がった。

玄関を潜り、薄暗い屋敷の中へ入ると床に血の跡が伸びていた。康一の物と思しきそれは、2階へ上がる階段にも続いている。恐らく仗助もこれを辿って上の階へ昇つたのだろう。

階段に足を乗せると、ミシ……ミシ……と軋む音が響く。薄暗いのもあってホラー映画にも劣らないロケーションである。

こんな場所に2人で暮らしているのか。美晴にはその私生活を想像する事が出来なかった。

「あ……」

しかし階段を昇り切つた先にいたのは、部屋の様子を窺う仗助だった。彼はその部屋の真ん中にいる康一を見つめていて、どうしたものかと唸っている。

あんなにあからさまに助けたい人物がいるのは、どう考えても罠だ。仗助が部屋に入った瞬間、先程の正体不明のスタンドによる集中砲火が彼に降り注ぐ。勿論、用済みとなった康一を巻き込んで。

「仗助エ……！」

「億泰ッ！テメーッ……！」

美晴が動くより先に、億泰の足がそちらにツカツカと歩み寄る。声と足音に反応した仗助が振り向いた頃には、彼はザ・ハンドを出して何でも削り取ってしまう右手を振りかざしていた。”やめろ！”、仗助の言葉が出るより先に、その手で空を切る。

だがそれは仗助と美晴の想像を裏切るかのように康一と2人の間にある”空間を削り取り”、康一の体は吸い寄せられるようにこちらに瞬時に移動してきた。

「まだそんなところにいたとはよオッ……！だがこれで傷を治してもらった借りは返したッ！俺とお前はもう貸し借り無しだ！これ以上は何もしねーしするつもりねえーッ……！」

億泰はそう一方的に捲し立てる。どうやら彼は義理堅い性格のようだ。変なところで真面目な男なのだ。そもそも考えてみれば、彼は決して外道ではないのである。

「……グレートだぜ、億泰」

何処かで見ているであろう形兆は、この事態に更に弟に苛立ちを募らせているだろう。だが億泰はそうしななければ埒が明かない。仗助はそんな彼の性格を素直にそう評価した。

美晴もホッと安堵したところだったが、ふと億泰のズボンのポケットから白い布が見えているのに気付いてそれをそっと引っ張る。取り出して広げてみると、それは先程美晴が彼の止血のために使った血で汚れたハンカチだった。

「あつ！テメーそれは……ッ！」

だがそれと認識した途端に億泰に引つたくるように取り上げられてしまい、思わず「あつ」と声上がる。

「あ、洗って返すからよオ……！テメーともそれで貸し借り無しだ……！」  
再び折り畳んで元あったポケットに深くしまい込む様子を見て思わずポカンとしてしまったが、その言葉を理解するとふと微笑みが浮かんだ。

「あなた、いい人ね」

「ちげーよタコがツ……さつさと行くぞポケット」

億泰の悪態をつく言葉に思わずクスクスと笑い声を零しながら、美晴は仗助が康一の傷を治している間に虹村兄弟の父親がいるらしい屋根裏部屋への階段を昇り始めた。

## ”非日常”への入口

屋根裏部屋へ続く階段をギシギシと踏み鳴らしていくと、その音に混じるように別の音が聞こえてくるようになった。ゴソゴソ、ジャラジャラ、と鎖の擦れるような音と何かを引っ掻き回すような音が次第にハッキリと聞き取れるようになる。

「なあ……あんまし驚かぬえでやってくれよ」

億泰が屋根裏部屋の扉の前で美晴を待っていた。その言葉にゆつくりと頷くのを見て、彼はそつとその扉を軋ませながら開ける。

「……!!」

頷いたから、声を上げるのを我慢した。だが、口を手で塞いでいなかったら息を呑む声が伝わったかもしれない。しかし驚くなど言う方が難しい事を億泰は理解していたから、美晴の反応を見なかったフリをした。

その部屋の隅にいたのは緑色の肌をした、イボだらけで爛れたような肉体を持つ怪物だった。四肢があり人型であるのは確かだが、それが元は自分達と同じ人間だったとは簡単には信じてもらえないだろう。

「これが、”俺達の親父”だぜ……」

だが億泰の話聞いた今では何とか理解出来る。これは彼らの父親で、人間だったのだと。

「親父はよオ……包丁でぶっ刺しても、高いところから落ちてても、俺達のスタンドで攻撃しても死なねえんだよオ……!!」

屋根裏部屋の壁には康一を貫いた”弓と矢”が掛かっていた。形兆はあの弓と矢で父親を殺せるスタンド使いを探していたのだ。治せないならせめて、普通に死なせてやろうと。

だが岸辺露伴のスタンドは違った。広瀬康一も違った。そして弟である虹村億泰も、果ては当人である虹村形兆でさえも。元からスタンドが発現している空条承太郎、東方仗助、来宮美晴も。

誰も、”目的”のために必要なスタンド能力を発現する事はなかつ



た。

億泰が眉間にシワを寄せながら目を伏せるのを気に留める事なく、父親はそばにあるガラクタ箱をひっくり返すと唸りながらその中をずっと漁っていた。

「父親に会っていくか」……そう訊かれた時から覚悟はしていたけど……予想以上の衝撃だわ。あの2人、10年もの間この父親と向き合っていたというの……!?!」

まだ形兆でさえ小学生だったその時から、彼らの父親はこの姿だった。そして形兆は色々な事を調べ上げ、それと同時に「父親はもう元には戻らない」という「現実」を突き付けられたのだ。

(壮絶すぎて……私なら絶望するわ)

ジワリと背筋に汗が浮かぶようだった。美晴も両親が死に、引き取ってくれる親戚に夜逃げされた時、表にこそ出さなかったがこの世の終わりかというくらい絶望した。だが、すぐに岸辺露伴が助け舟を出してくれた。

でもこの兄弟には、それがなかった。「助けて」と声を上げたところで、誰も助けてはくれなかっただろう。それを10年、真実と向き合いながらもがいていた。

その時、ドンツ！と下の階で激しい破壊音が聞こえ家が揺れた。恐らく仗助と形兆だろう。彼らは今度こそ対面し、互いにスタンドをぶつけ合っていたはずだ。

「そういえば、形兆さんのスタンドって……?」

美晴はまだ彼のスタンドの正体を見抜いておらず、億泰も思い出したように顔を上げる。

「兄貴のスタンドは、バッド・カンパニー」って云ってよオ……おもちゃが動く映画知ってるか?アレに出てくる兵隊みてエなスタンドなんだよ」

形兆のスタンド能力。それはミニチュアの軍隊を指揮出来るもので、兵隊の他に軍用機やヘリまで操る事が出来、ひとつひとつの破壊力は低いが束になれば人間1人を殺す事など容易い。いくら小さいと言えど、それらはひとつひとつがプロの兵士そのものなのだから。

先程の音は家の壁か何かを破壊した音だろう。

東方仗助と虹村形兆、どちらが勝ったのか。だがどちらにせよ彼らはいずれこの部屋を訪れるだろう。

「美晴……親父という秘密をバラさねーって約束しろ。ここに来たのが兄貴でも、そうすりゃあ俺が何とか殺さねーように説得するよ。オメーの能力は別に邪魔でも何でもねえんだからよ」

美晴のスタンドは攻撃の術を持たない。彼女が静かに暮していれば、いつかは終わる事だ。果たして己にあの兄を説得出来るか億泰は不安に思ったが、美晴にはまだ借りがある。死なれては寝覚めが悪い。

そうこうしているうち屋根裏部屋へ続く階段を昇る音が聞こえ、2人は身構えた。足音は2つ。誰と誰なのか。軋む音はついに階段を昇りきり、扉がギツ…と開かれた。その隙間から覗いたのは――、

「美晴ちゃん!と、億泰……!」

「えっ美晴さん!?良かったあ、無事だったんだ!」

「仗助くん!康一くん!」

美晴が待っていた2人だった。仗助は億泰の方へ、康一は美晴の方へ歩んでいく。

「テメー億泰ツ!あいつに何した!」

「なっ、何もしてねえよオッ!さつきも何もするつもりはねえって言ったろーがツ!」

「康一くん!本当に心配したよ……!」

「ご、ごめん……でももう心配いらないよ!仗助くんに治してもらったからね!」

4人は思い思いに声を上げたが、その騒がしさに反応するように部屋の隅にいた父親が狂ったように叫びながら鎖を鳴らし、耳を塞いだ。その様子に4人はピタリと動きを止め、その姿を視界に入れる。「なっ……なんだよオッ!ツこいつは!」

「ヒッ!ば、化け物だよオ、仗助くん……!弓と矢はそこにあるけど、やっぱりここにあいつらの父親なんていなかったよ……!」

康一の怯えた声に、億泰はピクリと反応を示した。それを察した美

晴も、表情を曇らせる。違う、違うのだ、康一くん。父親の事は最初に億泰が”この家は親父が買った”と言っていたので存在は知っていただろうが、目の前にいるこの怪物こそが虹村兄弟の父親なのだ――。しかしやはり、この怪物が元は人間だったなんて分からなくて当然だろう。ましてや兄弟の父親だなんて尚更。

「おい億泰……その怪物の事は分からねーが、弓と矢は破壊させてもらうぜ……これはあっちゃやならないモンだ」

仗助は父親から距離を置くように部屋の隅を歩き、壁に掛かっている弓と矢を取ろうとするが後から部屋に入ってきた存在に先を越されて素早くそれらを取り上げられた。

「億泰ウ……ここには誰も入れるなど言っただろう……!?そんな事も忘れたか、無能めツ……」

「あ、兄貴イ……!!」

形兆だ。血塗れで息も絶え絶えな彼は弓と矢を大事そうに抱えながら、美晴をこの部屋に入れた億泰を鋭く睨みつけていた。

「広瀬康一……お前はさつき”ここに親父はいない”と言っただな……?それは間違いだ……」

しかし見られてしまったものは仕方がないのだろう。彼は緑色の怪物のすぐそばまで歩むと、再びこちらに視線を向ける。

「こいつが”俺達の親父”だよ……」

その目は何処か寂しげにも見えた。

形兆の口から様々な事が語られた。億泰が美晴に話した事とほぼ同じだったが、直接本人から聞くそれはやはり壮絶であり、悲愴的だった。入手経路こそ語らなかつたが、形兆にはこの弓と矢が必要だった。”目的”のために。”父親を普通に死なせてやる”ために。

だが父親は我関せずといった様子でまだガラク夕箱をガリガリと漁っていた。先程から彼はずっとあんな調子だ。美晴と億泰が部屋に入ってきた時から、或いはその前から、箱をひっくり返して漁っている。

「またその箱を漁りやがってツ!!」

そんな父親を形兆は勢いよく蹴り上げた。間髪入れずにもう一度

足蹴にし、更にはその頭を殴りつける。発狂したようなその様を見て、仗助達は息を呑んだ。

「散らかすなっつていつも言ってるだろッ！クソッ、イライラするぜ……こいつがまだ”生きている”事に憎しみが湧くぜ……ッ!!」

そうやってまた蹴りつけようと足を振り上げる。しかしそれはガツツ！と金属のような物が当たる音を響かせて弾かれた。

「や……やめなさいよ。痛がってるじゃない……!」

美晴のガーディアンだ。大仰に振り上げていたので発動する隙を見つけられたのだ。形兆は彼女を振り向き様にギツと鋭く睨みつける。

「能力解除しなアツ……! テメーに俺の何が分かるってんだこのアマアツ!!」

彼は標的を美晴に変えると拳を振りかぶりながら踏み込んできた。

「……!!」

父親に掛けた守護を解いて美晴自身に掛け直すには時間が足りない。守備面で優れている分、ガーディアンは移動速度が遅いのだ。まるでその見た目の通り、厚く重い鎧を嚴重に纏ったアーマーナイトのように。

だが、拳が空を切った音は確かに聞こえたはずなのに、殴られるはずだった美晴の頭部に衝撃は来なかった。

「仗助くん……!」

恐る恐る恐怖で閉じた目を開けてみると、仗助が形兆の拳を手で受け止めているその背中が見えた。

「美晴ちゃんの言う通りだぜ。やめなよ。あんたの父親だろーがよオ……!」

余程頭に来たらしい、呼吸を荒げる形兆は静かに声を響かせる仗助を睨んだ後に拳を下げる。

「ああ……そうだよ。実の父親さ、血の繋がりはな。だがこいつは父親であって父親じゃあないッ! D I Oに魂を売った自業自得の男さッ!!」

表情は顔が俯かかれています見えなかった。だが、床に落ちていく雫は

表情なんかよりもずっと彼の心情を物語っていた。

「その一方で、父親だからこそやりきれない気持ちがあるつーのをお前らに理解出来るか？普通に死なせてやりてえって気持ちだよ……!!」

雫が落ちる量は次第に増えて、彼は学ランの袖で目元を拭う。一転して居た堪れない雰囲気に包まれた屋根裏部屋。虹村家の抱える悲しみと苦しみが緋い交ぜになった事情に、誰しもが口を閉ざしていた。

「こいつを殺した時に！やつと！俺の人生が始まるんだッ！誰も邪魔をしないでくれよッ!!」

形兆は弓と矢を抱えながら声を張り上げる。

それでも、それでも。美晴は父親への守護を解く事はしなかった。形兆が今の父親を受け入れられないのは理解出来る。心身共に疲弊している事も。だが、だからと言って形兆がしている事は全て何かが間違ってしまったているのだ。美晴にはその”何か”が何なのか、全ては分からなかったが、振り向いた先に見える億泰のつらそうな表情を見れば”間違っている”という事だけは分かるのだ。

その時、仗助の視界が何かを捉え、父親の方へ歩み寄る。釣られるようにそちらを向くと、父親があひっくり返した箱の隅でモゾモゾと指をいじっていた。

「まだやってんのかよッ!!もうやめろ！目障りなんだよオツ!!」

形兆がまた父親を足蹴にしようとしたがガーディアンの守護はまだ解かれておらず、再び金属音を響かせて足が弾かれる。

「箱だ……箱に何かあるッ!!」

仗助は何を見たのか。彼は父親が形兆の足が弾かれた様子をぼんやりと見ていた隙に、クレイジー・ダイヤモンドで父親がしきりにいじっていた箱をその拳で破壊した。

「!!」

何をするのかと思えば、今度はひしゃげた箱が元に戻っていく。”

破壊して直す”……そういう事も出来るのかと、美晴は破壊された箱がみるみるうちに修復されていくのを眺める。その箱は完璧に修復

され、更にその中にあった細切れになった紙くずも箱と一緒に元の形へ修復されていく。

「あ……」

「こ、これはよオ……兄貴！これはよオツ……!!」

形兆と億泰が、吸い寄せられるように箱の中にある1枚の写真の方へ足を向ける。

「何か……千切れた紙のようなものを握ってたからよオ……箱を巻き込んで直してみたら……これは……」

そこにあつたのは仲睦まじい4人の家族写真。直感的に分かった。これは、虹村家の家族写真だ。全員が笑顔で写っている。

父親はその写真に手を伸ばし、まじまじとそれを見る。そして「おおおおあああああつ……!!」と、ぼろぼろと涙を流しながら泣き叫んだ。その様子を見た康一はハツと気付いたように声を上げる。

「あの行動は……意味があるものだったんだ！息子達の写真を探していたんだよ！」

父親は決して形兆と億泰の事を忘れたわけではなかったのだ。思い出せなかっただけなのだ。今の兄弟の事は分からないかもしれないが、彼の心の底にはまだ家族との思い出は生きている。

彼はその写真を大切そうに胸に抱き締めていた。やっと、やっと見つけた。大切な家族を。

「殺す” スタンド使いじゃあなくてよ……” 治す” スタンド使いを探すなら……手伝ってもいいぜ」

仗助は虹村兄弟に歩み寄り、静かに問い掛ける。2人は感極まったように息を呑み、また涙をその目に溢れさせた。

「それならば協力出来るよ」

「そうね。お父さんを治して……また家族3人で仲良く出来るといいなって、私も思う」

康一と美晴もそれに続く。もう形兆も父親に暴力を振るったりはしないだろう。美晴はそっと父親への守護を解いた。

しかし、形兆はハツとするとすぐに後退りをして仗助らと距離を置く。

「今更そんな事言われたってなア……もう手遅れなんだよツ……!!俺はもうこの弓と矢でこの町の人間を何人も殺しちまつてるツ……いいか?この矢は必ずスタンド能力を発現させるわけじゃあねえんだ!!」

だからお前達とは平和的に和解は出来ない。形兆はそう言いたいらしい。

「だからよオ、兄貴イツ……!もうこんなのはやめにしようぜ……!親父もよオ、体は戻らなくても心は戻ってくれるかもしれないねえんだしよオ……!!」

億泰はそんな兄を追いかけて彼の持つ弓を握る。

父親は今、家族の写真を見つけて涙を流した。その瞬間、止まっていた時間が動き始めたように億泰には思えた。

これから始まるんだ。きつとこれから。仗助達も協力してくれる。もう2人ぼっちじゃない。

「!!」

刹那、天窓に気配を感じ仗助は上を見上げた。一瞬だが、人影を見たような気がしてその一点を見つめる。

「お前らよオ……この父親の他に、まだ身内がいるのか……?」

美晴も視界の隅で彼が天窓を見ていた事に気付いてそこを見上げた。だが、映るのは快晴の空ばかりで。

「身内?うちは3人家族だぜ、仗助……!」

彼の問い掛けには全員すぐに違和感を持ち、周囲を注意深く見回す。

だがそれは、予想外の場所から侵入してこようとしていた。

バチバチツ!と電気が弾ける音が聞こえたかと思うと、それは兄弟の背後に設置されたコンセントの中からヌルリと姿を現す。黄色く、鳥のような頭部を持つそれ。直感だが分かる。

”あれはスタンドだ!!”

「億泰く、」

「億泰ツ!!ブーツとしてんじやねえッ!!」

黄色いスタンドは素早く億泰に近付き彼の持つ弓に手を伸ばしていた。それを見た美晴が咄嗟に億泰にガーディアン能力を使おう

としたが、それより先に形兆が億泰の体を突き飛ばし弓を引つたくる。

瞬間、黄色いスタンドの腕が形兆の胸部を貫いた。まるでスローモーションのように見えたが、たった一瞬の出来事だった。がふつ、と吐血する彼を黄色いスタンドは抱えるように包む。

「この弓と矢は俺がいただくぜ……虹村形兆！お前にこの矢で貫かれてスタンド使いになったこの俺がなアアッ！！」

言葉を話すスタンドもいるのか、と感心する暇もなかった。

「スタンドは精神力と言ったな……俺は成長したんだ！お前を殺せるほどになッ！それとも、俺のスタンドである”レッド・ホット・チリ・ペッパー”が成長するなんて想像もしてなかったか？」

そのスタンドは不気味に笑っていた。その様子を見てゾツとしていた美晴の肩を億泰は揺らす。

「美晴！！兄貴を守ってくれッ！！出来るだろオッ！！」

彼は目に涙を溜めながら美晴に懇願していた。だけど、ああ、そう出来るならとつくに私はそうしているはずだ。

「だめ……攻撃が深すぎて私にはもう、どうにも出来ないッ……！！」

そうしている間にも形兆はついに自身のスタンドが操れないほどの攻撃を受け、黄色いスタンドと同化するように彼の体は電気に覆われていった。それは弓と矢をも巻き込み、コンセントの中へ引きずり込まれようとしている。

「兄貴イーツ！！」

「触るんじゃないやあねえ！！億泰ッ！！テメーも一緒に呑み込まれる、ぜ……ッ！！」

駆け寄って助けようと手を伸ばす弟の手を、兄が握る事はなかった。兄の言葉に弟は立ちすくむ。

「億泰……！！テメーは最後まで……俺の足手纏いだつたぜ……ッ」

その言葉を最後に、電源の切れたテレビのように形兆はコンセントの中に黄色いスタンドと共に消えてしまった。

仗助達は形兆の行方を追って先程人影が見えた天窓から屋上に登った。それに黄色いスタンドの本体はあの人影で間違いないはず。



まだ遠くまでは行っていないはずだ。なのに屋上には仗助達以外に誰もおらず、道路を見ようと踵を返した、時だった。

「仗助……あ、あれ……はッ……」

億泰の震えたか細い声が耳を掠め、彼のいる方向、更にその彼が指差しているものに他の3人の視線が向く。

「……ッ!!」

そこにあっただのは、変わり果てた姿をした虹村形兆の遺体だった。焦げて真っ黒になった体は感電したどころではなく、電線に引っかかって無惨な姿を晒している。

「兄貴は……兄貴は、あぁなつて当然の奴だった……あぁなる運命だったんだ……」

億泰はぶるぶると傍目から見ても震えながら、視線を形兆の遺体から逸らせないでいた。だって、ついさつきまで、あの兄は俺の隣にいたんだ。俺の隣で生きて、喋っていたんだ。

信じられないんだ。

受け入れられないんだ。

それでも、これだけは真実だ。

「けど……兄貴はッ……!最後の最後によオッ!俺を庇ってくれたよなアア!?見てただろ、お前らアッ……!!」

俺が受けたこの感情だけは真実なはずなのだ。

億泰の後ろにいた3人もまた、形兆の遺体から目を逸さなかった。彼の死を、受け入れなければならなかったから。

「ああ……見てたよ」

仗助が彼の隣に立ち、何をすることもなくそこで佇む。

「お前の兄貴は……お前を庇ったよ」

ただの学校からの帰り道だったはずだ。

だが、彼らの”日常”は少しずつ変わり始めている。

4人は形兆の遺体を見つめながら、それを確かに感じていた。

来宮美晴の休日

形兆が死んだ日、美晴は帰る気になれず近くにある公園のブランコに座り込んでいた。

自分があの時、もつと早く黄色いスタンドの存在に気付いていたなら。そんな事ばかりが頭を過り、己の無力さにジワジワと涙が溢れてきた。

「……！」

ぐすぐすと鼻を鳴らしていると、突然目の前にハンカチが差し出される。その持ち主を確かめるように顔を上げると、そこにいたのは岸边露伴だった。

「帰りが遅いから探したよ。なにベソかいてんだよ」

彼は見上げた顔に溢れている涙を差し出したハンカチで少々乱暴にぐしぐしと拭ってやる。美晴は嗚咽のせいで上手く言葉が出ず、また露伴が自分を探していた事に対してもポカンとしていた。

「こんなの……ぼくが泣かしてるみたいだ。とにかく帰るよ」

気付けば公園の外灯が明かりを灯し始めていた。露伴は傍に停めてあつた自転車のサドルを調整し、美晴を引っ張ってきてから自転車に跨ると後ろに乗るように促す。

「ちやんと掴まってるないと落とすからね」

促されるままに荷台に跨ったが、そう言われて慌てて彼の体に掴まる。露伴はその感触を確認してから普通よりもゆっくりなスピードで自転車を漕いで家路を辿った。

家に帰っても美晴は食欲も湧かず、露伴が作ってくれた食事は半分程が冷蔵庫に収まっていった。

それもそうだ。あんな壮絶な死を見たら、誰だって――。

「美晴、何かあったのかい？学校でいじめられでもした？」

リビングの椅子に座りずっと俯いている美晴の姿に、さすがの岸边

露伴も心配になった。露伴の記憶上、彼女がここまで弱っているのは初めて目にした。親戚に夜逃げされたあの瞬間でさえ、ここまでではなかったはずだ。

とにかく、それ以上の何か彼女を襲ったのだ。それを知りたい時、岸边露伴は手っ取り早く事情を知る事が出来る能力を持っている。しかし。

「君の記憶をぼくは読む事が出来ないんだ。君がいつもの能力でガードしているからね。だから君の口から直接聞くしかない」

美晴のガーディアンは岸边露伴の能力を弾いた事がある。そしてその能力の効果を知った時から、彼女は無意識なのか彼と接する時は大抵能力を使って心を守っているのだ。

「もう一度訊いて話してくれないなら諦めるよ。だから訊くけど、今日何かあったのかい？」

露伴は同じ質問を目の前の美晴に投げ掛ける。彼女は口を少し開きかけたが、少し考えて閉じた。それを見て露伴もフウー…と溜息を吐く。

「……分かったよ、もう訊かない。けどね、美晴。これだけは覚えておけよ」

彼は席を立つと仕事場へ戻ろうとリビングを出ようとするが、最後に顔だけ彼女の方を振り向く。

「ぼくは君にだけは詮索するのをやめている。だから、君が話したくなった時に話せばいい」

そう言い残して、彼はリビングを出ていった。

「……先生」

今までこんな事があっただろうか。どうやら岸边露伴、同居人が辛気臭い顔をしているのはどうも収まりが悪いらしい。

だが、まだ話すわけにはいかない。露伴を巻き込みたくない。あの矢で射抜かれた時点で関係者である事に違いないのだが、彼にはいつもの”日常”を過ごしてほしいからだ。普通にいつも通り、漫画を描いて読者を喜ばせ続けてほしいからだ。

それでも、彼なりの優しさがあたたかくて、また涙が溢れてきた。

それからまだ泣き足りないのかというほどの涙が止めどなく流れる。  
「……まったく、もどかしいな」

その嗚咽を露伴はリビングから出たすぐのところまで聞いていた。  
一体何を隠しているのか見当もつかないが、なんとなく壮絶なものを背負っているという事は分かる。それを共有する権利が己にない事が何故だかとても悔しかった。

翌朝、美晴がいつもの時間に起きると既に露伴が台所に立っていた。洗濯でもしようと脱衣所に行くが、洗濯カゴの中は既に空っぽで、庭を見てみると洗濯物が物干し竿でパタパタと風に揺られている。

「露伴先生、おはようございます。あの……」

仕方なく美晴は台所に戻りその背に挨拶を掛けると、それでようやく彼はその存在に気づき振り向いた。

「ああ、おはよう美晴。今朝は食欲ある？」

「え、お腹は空きましたけど……あの、何を……」

家事は美晴の仕事だ。真正正銘、給仕係としての。それをするように命じたのは露伴なのに、何故か彼自身が自ら家事をしているこの事態に美晴は戸惑いを隠せなかった。案の定な反応を見せる彼女に、露伴は作ったばかりの目玉焼きの皿をリビングのテーブルに運ぶ。

「今日は君の給仕係の仕事は休み。休暇だよ。この土日はぼくが家事をやる」

「えっ、ええ!? そんな、露伴先生、そこまでしなくつても……!」

岸辺露伴の優しさが今も続いている事にも勿論驚いたが、突然休暇を言い渡されると戸惑ってしまう。だって、今まで休みなく家事をしていたしそれが当たり前だからだ。家事というのはそういうものである。

「ぼくは別に家事が出来ないから君を雇ったわけじゃあない。家事をしている時間が惜しいから雇ったんだよ。それにぼくだって仕事が早く終われば休むんだ。君もたまには休めよ」

露伴は言いながらテキパキと炊飯器から白米を盛り、味噌汁の入ったお碗と一緒に並べてテーブルにつく。美晴もソロソロとテーブル

に近付くと椅子に腰掛けた。”いただきます”と手を合わせてから、  
思い思いに食事を口に運んでいく。

「今日と明日は休みにするけど、これから休みたい日があれば1週間前には言いなよ」

昨日言った通り、露伴は昨日の事を一切問う事はなかった。ただ代わりには、彼なりに美晴を気遣っていた。彼は我儘で自分勝手だが、一緒にいる彼女の事だけはそこそこ気に掛けている。自然とそうなるのだから、露伴はやはり人付き合いが苦手だ。自分1人の事だけ考えていたいのには、そう出来ない時があるのがとても苦手だ。

今だって、だいぶ食欲が戻ってるのか至って普通に食事をしている美晴を見てホッと安堵している。ぼくは自然とそうになっている。

(別に、”ぼくの料理の方が美味しいじゃあないか”って思ってるだけだ)

そう思いたい。

土曜日は1日家でゆっくり過ごし、翌日の日曜日、気分転換に美晴は駅前まで自転車で向かう事にした。

日曜日の駅前。通勤客より観光や行楽目的で利用する人間の方が多い。久しぶりに解放された気分になりながら駐輪場に自転車を停め、まずは駅前にある”カフェ・ドウ・マゴ”に立ち寄る事にした。このスイーツとお茶は美味しい。学校帰りに仗助達と1回入ったきりで、こうしてゆっくりしてみるのは初めてだ。天気が良いので外のテーブルに座り、とりあえずアイスティーとチョコレートケーキを1つずつ頼み品物が来るまで駅前広場をボーッと眺めてみる。

皆楽しそうに道を行き来している。これから何処へ行くのだろうか。杜王町は海に面した町で、海の幸だって美味しい。承太郎さんが今滞在しているらしい”杜王グランドホテル”もオシヤレなのだと聞く。夏シーズンになると海沿いの別荘地だって賑やかになる。ここは田舎町ながら観光に適した場所なのだ。

「あ、美晴」

そんな事を考えていたが不意に名前を呼ばれてハッと声のした方

向に顔を向ける。

「お、億泰くん……」

その人物は、言い方は良くないが今一番会うのは避けたかった人だった。彼は美晴のいるテーブルまで来ると向かいの椅子に腰掛ける。

「このカフェってよオ、俺まだ入った事なかったんだよなア……男一人でカフェって変な目で見られそーじゃん？」

「そんな事は……あ、でも億泰くんの見た目だとびつくりされるかも」  
億泰は至って普通に美晴に話しかけてきた。だから彼女も至って普通に会話をしようと試みるが、少しのきごちなさはある。億泰は日曜だというのに学ラン姿で、いかにも葬式の帰り道だったからだ。

そうこうしているうちに美晴が頼んだアイスティーとチョコレートケーキが運ばれ、そのウェイトレスに追加で億泰もアイスマルクティーとミニパフェを注文する。ウェイトレスは億泰と美晴を交互に見遣ってから店内へ引っ込んだ。

「なんか失礼だな！俺達って友達に見えねえのかな」

億泰はそうやってブー垂れていた。確かにあのウェイトレスの表情は「えー、友達ですかあなた達？マジで？」と今にも言いそうな顔だった。だが――、

(私達、いつの間に友達に……)

美晴も「えー、マジですか？」みたいな顔をしていた。それだから、億泰も軽くテーブルをはたく。

「あつ！美晴もかよ！俺達はもう友達になる他ねえぜエ!?あのまま終わりなんて締めり悪いだろ！」

確かに、億泰の言う事は尤もである。あのまま終われる関係ではないのだ、私達は。

東方仗助、広瀬康一、虹村億泰、来宮美晴。4人は虹村形兆の死を目の当たりにした。その衝撃は4人の間だけで共有出来るものだ。

億泰の話によれば、形兆の死因は異常ではあるが”感電死”と断定されたらしい。葬式は億泰の希望で身内のみ、つまり彼のみ参列となった。父親はまだ外に出せる状態ではないらしい。

「そうね……私達、あのままでは終われないわ。あの”レッド・ホット・チリ・ペッパー”の件もあるしね」

形兆を殺した本体不明の黄色いスタンド。奴はあの弓と矢を奪って行った。虹村兄弟との因縁がなくとも、彼を追う理由は十二分にある。

しかし、そのスタンドの名を出した途端、億泰の表情が険しいものになった。

「レッド・ホット・チリ・ペッパー」……ふざけた名前だぜ。俺は必ずあいつを倒してやる……倒して、兄貴の仇を取るんだ……ッ!!」

その目は恐ろしい程にギラついていた。タイミング悪く注文の品を運んできたウェイトレスはついに「ヒッ!」と悲鳴を短く上げ、サツとそれらを置いてすぐに店内に引つ込んでしまった。

「さつきからよ、あの店員失礼じゃあねーか?」

「あなたが怖い顔するからよ……気持ち分かるけど、億泰くんは考えなしに突っ込んでいきそうで怖いわ」

思い出したようにアイスティーにシロップとポーシヨンミルクを入れてカラカラとストローでかき混ぜながら、またもやブルー垂れる億泰の様子に溜息を吐く。

億泰はバカだ。突っ込む時は真っ直ぐ前にしか突っ込めないタイプの。なまじスタンド能力が強力な分、その強さを過信している面もある。凶星なのか、億泰の表情が固まっていた。

「でもよオ……美晴が守ってくれたら無敵だぜ、俺達は」

億泰は気を取り直してアイスミルクティーを一口飲む。

「確かにそうかもしれないけど……守る対象を常にあなた一人に絞る事は難しいわ」

誰かが狙われているならそちらを優先にしなければならぬ。承太郎が言ったように、この能力は強力ではあるが守護対象の取捨選択が重要になる。それに虹村形兆のようなケースもあるのだ。不測の事態には対応出来ないため、鉄壁の守りを誇る代わりに使い勝手の良い能力とは必ずしも云えないのである。

「やっぱよオ……俺とお前らはなんか違うよなア……」

億泰は空を見上げる。あの雲の上に形兆がいるのだろうか。そんな事をぼんやりと、また考えてしまった。

「空間を削り取って瞬間移動させるって技は……兄貴が提案してくれたんだ。俺は何でも兄貴に決めてもらっていた……俺はこれからどうしたらいいんだよ」

グツと伸ばした手を握る。その手を顔の前で広げてみたが、何もなかった。”何も無い”、当然なのだが、それがとても虚しい事に思えた。

美晴はそんな彼の様子をずっと見つめ、やがてカランと氷が崩れた音で静かに意識がこちらに戻ってきた。

「それは……これから見つけければいいのよ。私も協力するし、仗助くん達もきつと同じようにしてくれるわ」

だって、この悲しみと虚しさを共有出来るのは私達4人だけなのだから。美晴がゆるりと頷くと、億泰は目をぱちぱちと瞬かせてから泣きそうな笑顔を見せた。

「……そうだなア。お前らがいてくれるもんな。ありがとよ」

ぐす、と億泰は鼻を鳴らしたが、「あっ！」と思いついたように声を上げるとゴソゴソと鞆の中を漁りひとつの小さな包みを美晴に差し出した。

「アレよオ、どうしても落ちなくてよオ……新しいの買ったんだ」

最初こそピンと来なかったが、受け取ってその感触を探ると同じく美晴も「あっ」と声を上げながら包みを開ける。中に入っていたのはあの時億泰の止血に使ったハンカチとよく似た物だった。

「……本当、あなたっていい人ね」

わざわざ買い直してまで返してくれるとは。兄の教育が良かったのだろうか。

「ち、ちげーよ……当たり前だろ、そんなのよオ……」

きつとそうだ。彼が語った”優しい兄”がいたからこそ、弟である彼も優しいのだ。

照れたように頬を掻きながら目を逸らす億泰の姿はなんだか好感が持てた。先程のウエイトレスがあれから店から出て来ないのが惜



しんくしんく。

## 高校生の恋愛事情

虹村億泰は、あれから仗助や美晴達と同じぶどうヶ丘高校に通う事になった。父親がDIOから受け取っていた金や宝石のおかげでこれから5、6年は生活していけるだけの蓄えがあるらしく、家もあの屋敷にそのまま住む事にしたそうだ。

「はよ、美晴ちゃん」

「はよーっす、美晴」

美晴が学校の駐輪場に自転車を停めると、わざわざ仗助と億泰が駐輪場に立ち寄ってきた。

「おはよう仗助くん、億泰くん」

美晴もいつも通り給仕係の仕事を再開し、今朝も洗濯や朝食作りをこなしたばかりだ。

「仗助くんだ！おはよう！」

「仗助くんおはよう！今日も髪型ステキね！」

「仗助くんおはよー！」

するとすかさず駐輪場にいた女子生徒達数名が仗助に笑顔を向けながらすれ違っていく。その様子を億泰はポカんと、美晴は彼らとソロソロと距離を少し置いて見ていた。

「仗助よオ……こないだからずっと思ってるけどオメー、スゲーモテるんだなア……」

億泰は羨ましそうに彼を見るが当の本人は「そうか？」と特に気に留めている様子ではないようで、美晴は思わず苦笑いを零した。

「仗助くんってすごく人気あるけど、全然女つたらしじゃあないのよ」

美晴は思った。もし自分が男で仗助のようにモテていたら、少しくらいはデレデレしてしまうだろう、と。だが彼は違う。鈍感ともまた違うと思うのだが、何故か彼は言い寄ってくる女子達になびく事がないのだ。というのも本人曰く、”あいつらが好きにやってるだけだから、俺も好きにやってるだけ”、との事だったが一。

(可愛い子も美人な子も結構いるのに、全員タイプじゃあないって事

なのかしら……)

東方仗助はああ見えて優しい。タイプじゃあないのに思わせぶりの態度を見せるのは相手を傷付けるだけだと理解しているのかもしれない。多分、本能的に。

「美晴よオ、仗助の事好きな女子らにいいじめられたりしてねーか？」

仗助のモチ話を本人不参加で続けながら昇降口まで歩き、反対側の下駄箱から上履きを取る億泰が美晴を振り返る。

「それは問題ないわ。仗助くんが言ってくれたから」

あれは仗助と仲良くし始めた頃の事。彼は美晴を見てムツと険しい表情を見せた女子達に”こいつは友達だ”と言ったのだ。彼女らは意外にも聞き分けが良く、”仗助くんがそう言うならそうなんだ”と素直に納得していたのを覚えている。おかげさまで美晴は平和な学校生活を送れているのだ。

そんな話をして美晴も上履きを取ろうと下駄箱を開けると、上履きの上に1枚の封筒が置いてあるのを見つけた。薄紫色のそれを手に取って裏表を確認するが、送り主が書かれていない。

「あつ!!美晴!!それってよオ、もしかして…ツ!!」

億泰が彼女の背後からニュツとその封筒を覗いてくる。次いで仗助もニュツと反対側から顔を覗かせると、目をまんまるく見開いた。

「ええツ!?美晴ちゃん!それってひよつとして…ツ!!」

「あの、2人とも声が大きい……」

2人とも顔が美晴の耳に近かったからか、キーン……と声が鼓膜に直接響いたように感じて眉間にシワを寄せる。

「わ、わり……つい興奮しちゃった」

「仗助くん、自分の事には疎いくせに人人にはすぐ反応するのね……」

仗助も一応恋愛というものがどういうものなのかは理解しているようで美晴は人知れず安堵したが、この3人の中で唯一モテている彼が人の恋路を気にするなんて意外だった。そう、これは、今私の手にあるのは、紛れもなく恋文の類なんじゃあないか。しかもこんなベタな手法で届けられている。

「なあ〜ツ!開けて見せろってエ〜ツ!」

「億泰くんは遠慮というものを知りなさい……！」

虹村億泰、彼は変なところでデリカシーがない。誰かさんそっくりだ（その誰かさんはこの時間にくしゃみをしたらしい。おかげでインクが飛び散ったとか何とか、後で美晴に愚痴を零していたのはまた別の話である）。

しかし、しかしだ。確かにこれの中身を教室で読むには難易度が高い。これはここで開けてしまった方が良さそうだ。ちようど仗助と億泰が背後から覗き込んでいる事もあって、上手く壁の役割をしてくれている。

美晴は高鳴る心臓を心の中で諫めながら封を開け、背後の2人が固唾を飲み込む音を聞きながら丁寧に折りたたんである便箋を開く。

『あなたにお話があります。放課後、教室で待っていてください。』

小さな薔薇をあしらった便箋。その罫線に沿っているのは几帳面だが丸みを帯びた字だった。だが短く綴られた文面に添えられるはずのものがなく、美晴は便箋の四隅までしっかりと目を配る。

（やっぱり送り主が書いてないな……）

こんなに几帳面な字を書く人が自分の名前を書くのを忘れるなんて有り得るのだろうか。

しかしそんな美晴の様子などお構いなしに、背後の2人はバシバシとその小さな背中を叩いていた。

「美晴くっ！オメーもモテそうだと思ってたけど、こいつあ大当たりだぜエ〜ッ!!」

「幸せにならねーと男の方をブツ飛ばすからなアア〜ッ!!」

「痛い痛い痛い……！ちよつと2人とも！私まだ付き合うとも言ってないしそれに……!!」

早々に好き勝手言い始める男2人の手を美晴は払うように振り返って便箋に並べられた文字を掲げる。彼らはぱちくりと目を瞬かせながらそれを見つめていた。

「この字、この丸みのある字！送り主は分からないけど女の子だわ。便箋も女子っぽい色とデザインだし……きつとうちのクラスの誰かと間違えたのよ」

この学校の下駄箱には生徒の氏名が入っていない。代わりに出席番号が並べられていて、生徒達は自分の番号で下駄箱を管理しているのだ。ちなみに生徒用ロッカーにはちゃんと氏名が入っている。

「可能性があるとしたら仗助だけだよオ……オメーら出席番号離れてんじゃない。間違えるとかあり得んのか？」

億泰は違うクラスなので除外するが、仗助と美晴は確かに出席番号も離れていて下駄箱もそこそこの距離が空き、更には段まで違う。間違えたという可能性は低い。

「あ、おはよう仗助くん、美晴さんに億泰くんも」

そうやって3人で唸っているとところに声を掛けてきたのは広瀬康一だった。彼もこないだから自転車通学に切り替えてバス通学組ではなくなり、仗助達とは登校時間にズレがある。

「……違うよな」

「まさかな……」

「ちよつと失礼よ、2人とも……」

が、康一を見て少しの間を開けた後、3人は挨拶もせずにもまたこの恋文の送り主について考えるのを再開する。

「な、なに？なにがあったの？」

さすがに康一も不思議に思ったのか、小さな体で彼らが囲むものを覗こうと試行錯誤していると、美晴は康一なら大丈夫だろうと持っていた手紙を彼に渡した。

「その宛先が誰なのかを話していたのよ。私の下駄箱に入ってたんだけど、便箋と筆跡からして女子なのよね」

至って簡潔に書かれている内容を視界に入れ、次に筆跡を見ると確かに丸みがあつて女子っぽいな、と康一はすぐに思った。

「ふーん……ぼくじゃあない事は分かるけど。でも仗助くんにしては、下駄箱の位置が離れてて間違いようがないよね」

さすが康一。少し卑屈が入ったのは敢えて置いておくが、すぐにそこに気付くのが彼を甘く見られない要因でもある。

「やつぱり……これは美晴ちゃんに宛てられたものなんじゃあねーか？女子が女子を好きになる事だってあるだろーよ」

「ひよつとしたらこれ書くのにも照れちまって代わりに誰かに書かせた、とかもあり得るぜ！」

康一からもこれの宛先は東方仗助ではないと断定されると、仗助と億泰はすぐに最初に手紙を受け取った美晴を囁し立て始めた。それを受けて美晴もほんのりと顔が赤く染まっっていく。

「そ、そうなのかな……こういうの初めてだから……わ、分からないわ……」

自分でも情けない程か細い声で紡がれた言葉。まるで蒸気でも出そうな雰囲気、仗助と億泰はビシツ……と衝撃を受けた。

（てつきりまた言い返してくるのかと思えば……ッ！）

（スゲー女子っぽい反応きちゃったよコレエ……ッ！）

恐らく、声に出したら今度こそ反撃されるだろう。

「美晴さん、どうするの？放課後本当に教室に残るの？」

そんな中で康一だけはまともな事を美晴に問い掛ける。その声にハツと意識が戻ってくると、彼が差し出していた手紙を受け取ってもう一度文面を読む。

「そうね……まだどの可能性も捨てられたものじゃあないし……どれにしても誰かが教室に残ってないと、来てくれるのに可哀想だわ」

間違っているなら間違っていた事を直接伝えればいい。もし万が一間違いでなければ、その時によって行動を変えなければならぬだろうが。しかし美晴は間違いである事を切に願っていた。だって――

（こういった体験にとっても貪欲な人を知っているから……ネタにされるのは向こうに申し訳ないわ。間違いでありますように）  
これに尽きる。

その日の授業は4人の耳には右から左であった。

放課後。

「美晴、何かアブねー感じになったらすぐ呼べよ？すぐ助けてやるからな」

「うん、ありがとう」

億泰が美晴の肩をポンポン叩いてからドンと自分の胸を叩く。結

局仗助は”なんか間違ってたなかつたら俺がショック受けそう”などと言って先に康一と一緒に帰ってしまった。残った億泰は美晴がもし相手に無理矢理に迫られたら困ると思いい、彼女と一緒に学校に残る事にしたのだった。勿論、美晴に告白をする相手がどんな人間なのか、という好奇心もあるが、やはり友達に無理に手を出されるのは我慢ならない。彼はそういう人間なのだ。

「しかし仗助め、意気地のない男だぜエ〜…！惚れてんなら先にコクれよなアア〜……」

億泰は美晴の SOS にすぐに気付けるよう隣の自分のクラスの廊下側の席で待機している。

東方仗助と来宮美晴。彼らはてつきり男女の付き合いをしているのだと、億泰は最初そう思っていた。だからこそ自分が美晴を人質に取った時に、作戦であつても一瞬でも後退りをした仗助に対し軽蔑の念を抱いたのだ。

しかし後から聞いた話で彼らはそういう仲ではない事を知った。今のように連むようになってから、彼らの間にそういった感情がない事を確認した、それがついこないだの事だった。

だが蓋を開けてみれば、仗助は今朝の事でだいぶ動揺しているように見えた。いつものように昼メシを買いに行けば順番が来たのも忘れるほど上の空で、体育のサッカーではパスが来ても空振りだった。授業中窓の外から見てたんだぞ。センコーに頭ぶつ叩かれたけど。

(しかしよォ〜、あの女、なかなか帰らねえな……)

億泰は同じ教室でずっと座って本を読んでいる女子生徒に視線を向ける。

彼女の名は”山岸 由花子”。学年内でもトップクラスの美人だ。勿論男子からの人気も厚い、物静かでお淑やかな、育ちのいい感じの女子だ。

「あら……もう残っているのは虹村億泰くん、あなただけなのかしら」視線を感じたのか、由花子も億泰を振り返って視線を向ける。初めて美人に話し掛けられた……、億泰は緊張したようにピンと背筋を張る。

「お、おう。俺だけだぜエ……」

軽く手を挙げて返事すると、彼女は席を立って机の横に掛かった鞆に本をしまい、早々に教室を出て行ってしまった。

(やっぱ俺なんて眼中にねえよなあ……)

億泰は1人残された教室で項垂れる。だがすぐにはたと我に帰り、思考を巡らせた。

彼女、山岸由花子はまるで誰もいなくなるのを待っていたようだった。そして美晴に送られてきた手紙の内容は放課後に教室に残っていてほしいという内容だった。

「もしかしてよオ……そのまさかなんじゃあねえのか……ツ!？」

なんとなく繋がってきた。あの手紙の送り主は山岸由花子だ。宛先が誰なのかはまだ分からないが、もし下駄箱を間違えていなければ彼女は美晴に何らかの用事があるという事になる。

億泰はガタツと席を立つとコソコソと教室を出て隣の教室をそつと覗き込む。そこにはやはり山岸由花子がいて、美晴と対面で話しているところだった。

「あの、来宮美晴さんよね」

自分の席で読書をしていた美晴に突如声が降りかかる。ようやく待ち人が来たかと顔を上げると、そこには息を呑むような美人な女子生徒がいた。

「え、……はい、そうですけど」

「よかったわ、下駄箱間違えてなかったみたい」

領きながら返事をする、彼女は嬉しそうに微笑みを見せた。笑うとやはり可愛らしい。美晴はそんな事を思っていた。

「ごめんなさい、自己紹介からよね。あたしは山岸由花子。隣のクラスよ」

「あ、はい。私は来宮美晴です。……えっと、山岸さん。私に何の用だったんです……?」

まさか本当に女子同士の恋愛が始まってしまおうのだろうか。美晴は内心ドキドキしながらも震えていた。そんなのは岸边露伴の恰好の餌食だからだ。



しかしその内容は、美晴にとって別の意味で衝撃的だった。

「広瀬康一くんのお友達……でしょう？ねえ、彼って最近……とても凛々しくなって格好良くなったと思わない？」

その口から飛び出したのは、なんと広瀬康一の名前だったからだ。そこから連なる彼を称賛する言葉に美晴は暫し目を瞬かせる。

もしかして私が呼び出されたのは、私に対する告白ではなくて私の友達に関する恋愛相談だったのでは!?!しかも東方仗助でもなく、広瀬康一だった!

「え……っと、うん、でもそれはなんか分かる気がするわ……」

しかし由花子の言葉を否定は出来なかった。

広瀬康一はあの日、虹村形兆が死んだ日、なんとスタンド能力に目覚めていたのだ。どうやら仗助が彼が死ぬ前に傷を治した事で”矢に刺された”という事実だけが残り、スタンドが発現するという異例の事態が巻き起こっていたようだ。

そのスタンドは最初は卵の形をしていたが、最近広瀬家に起こった事件で孵化し、音を人や物体に染み込ませるスタンド——エコーズと なってその事件を解決したという話だ。この事は既に空条承太郎に報告済みである。

それからというもの、確かに康一には自信と力が湧いているようにも見え、由花子のように見る人が見ればとても魅力的な男性に映っていた。

「あたし、その……康一くんの事が好き、なんです。でも、この気持ち をどうしたらいいのか……」

由花子は自分で言いながら恥ずかしそうに赤面していた。

まさか康一がこんな美人の心を射止めてしまうとは。仗助と億泰はすぐに彼に頭を下げるべきだ。勿論、私もだけど。

けれども康一はやる時はやるし、由花子が思っているように本当は とても勇気のある人間だ。決してただの小さい男子生徒ではない。

「なるほど……それで私に相談してきたと、そういう事なんですよね ?」

「ええ……でも打ち明けたら、ちよつとばかり気が楽になったわ。そ

れだけでも美晴さんには感謝しないと」

彼女は穏やかに笑っていた。それに釣られて美晴も自然と笑顔が浮かぶ。

康一が何と答えるかは彼にしか分からないが、悪い子ではなさそうだし、もし付き合う事になるなら応援したい。美晴は素直にそう思っていた。

2人は康一の事を中心にどこで告白するか、どんな言葉を使えばいいか等を真剣に話し合う。最近は男子と連む事が多かったからか、美晴は女の子特有のふわふわとした雰囲気懐かしく感じて自然と身を委ねる。気付けば2人はその後も恋愛相談以外の事も話し始めて終始笑顔であった。

「おいィ……美晴、山岸由花子と何を話してるんだ……なんにも聞こえてこねーぜ……」

一方その頃、億泰はずっと教室の外で張り付いていた。しかし彼女らの会話は誰にも聞かれる事なく進行していて、彼は密かにぐぬぬともどかしそうに唸っていたのだった。

## 山岸由花子は恋をする

”カフェ・ドウ・マゴ”は杜王町という田舎町でありながらオシャレなカフェだ。駅前という事でアクセスも良く、待ち合わせ等にもよく使われる。

美晴はそのテラス席の一角で制服の上からパーカーを羽織ってフードを被り、先程注文したアイステイーを飲みながら読書をしている。伊達眼鏡を掛け、パツと見では来宮美晴と判別出来ない。その席のすぐ隣のテーブルには広瀬康一が誰かを待っているのか、ソワソワと落ち着きなくしている様子が見える。

(由花子ちゃん、上手く出来るかしら……相当緊張していたものね)

由花子はあれから康一に告白すると決断した。しかし1人では緊張するし、かと言って美晴の目の前で告白というのも……と悩んでいた。そうして辿り着いた答えが”これ”である。康一がカフェに来たらすかさず隣かすぐ近くの席を陣取り、彼らの行く末を見守る。康一に正体を見破られないかが唯一の心配事であったが、彼はよほど落ち着かない様子で美晴の事など全く気が付いていなかった。

(なんだか親の気分になった感じだわ……あ、来た)

そうこうしているうちに由花子が来て一瞬だけ目が合うとすぐに互いに視線を逸らした。互いの存在を確認したからもう問題ない。美晴は本と向き合うフリを、由花子は康一に声を掛けてから彼と同じテーブルにつく。

(……って、)

何故か自分までソワソワし始めた美晴だったが、視界の隅にサツと移動する2つの人影が見えてそちらにチラリと視線を移す。しかしそこにいた人物に美晴は息を呑んだ。

(なんで仗助さんと億泰くんがそこにいるのよ……ッ!!)

なんとという事だ。視界に映ったのは木の影に隠れている仗助と億泰であり、思わず二度見したその時に完全に2人に頭ごと視線を向けてしまった。彼らもそんな視線を感じたらしく美晴にチラリと目を

向けると、同じように二度見してこちらを見ている。

(くうっ……! 康一くんにはバレてないけど、あの2人には私だってバレてるわ……ッ!!)

だって、あの2人は同時に私を指差したからだ。いくら変装しているからと言って見る人がジッと見れば分かっってしまうくらい簡素なものだし、あの2人とは毎日顔を合わせているのだからバレて当然である。

「あたし、康一くんの事好きなんです」

そこに突如、由花子の声が響くように聞こえた。その声にハッと意識をこちらに戻すと、気を取り直すようにアイステイーを一口飲む。

そうだ、今の本分はそこではない。私の事などどうでもいいのだ。今は由花子の事を応援しなければ。

「あたし……1日中康一くんの事を考えています」

ついに彼女は康一に告白した。康一は案の定しどろもどろだったが、由花子は一生懸命に自分の気持ちを伝えている。

(ファイトだよ、由花子ちゃん! 名付けて”押せ押せ作戦”! これで落ちない男子なんていないわ!)

美晴はこないだ由花子と一緒に考えた作戦を思い出す。康一のいところやカッコいいところを挙げまくって揺さぶるのだ。由花子はその通りに最近の康一の事を凛々しくて勇気が満ち溢れていて……でも笑うと可愛くて、と、どんどん自分が感じたままの彼のいいところを伝えていく。

由花子が康一の好みのタイプでないなら別だが、聞いている限りでは彼も満更ではなさそうだ。とても失礼な話だが、康一は美晴でさえ関わり始めた頃はどこか緊張している様子だったので、単純に女性慣れしていないのだろう。告白や男女の付き合いなんでもつてのほかである事は一目瞭然であった。それが突然美人に告白されるなんて……悪い気はしないはずだ。

「で、でも、こんなに素敵な康一くんには付き合ってる人がいて当然ですよね……」

「そ、そんな! 付き合ってる人なんていませんよ……!」

押すだけではなく引く事も大事だ。適切なタイミングで引けば、相手もグラツと倒れ込む事がある。この回答ならあともう一押しすれば康一は由花子の付き合いをOKするだろう。先程から木陰にいる億泰が泣いているようにも見えるが無視である。

「あたしの事、好きですか？」

ドンと押し込む。何気に由花子、大胆だ。

「え、えっと、その……あの……」

対する康一はやはりしどろもどろだった。まだ決められていないのだろうか。

「じゃあ嫌いですか？」

「い、いやー！そんな急にそうはならないというか……！」

なんだか雲行きが怪しくなってきたように思える。さつきまでは良かったのに、美晴は少し心配になりながらアイステイーをもう一口飲み込む。

「じゃあ好きなんですかね？」

「えっ？えっ、えーつと……！」

由花子はもう一度先程と同じ問い掛けをするが……

(ゆ、由花子ちゃん……？ちよつと極端すぎやしないか？)

やはりだ。康一は康一でいくら迷っていると言えどはつきり答えてやらないのも問題だが、由花子も由花子で焦り始めている。本当に先程までは雰囲気も良かったのにどうして――、

「ああもうツッ!!どつちなよツ!!好きなの!?!嫌いな!?!愛しているの!?!愛していないの!?!ハッキリしてよツ!!」

突如、バンツ!と勢いよくテーブルを叩く音と共に由花子の感情が弾けた。その声に康一も美晴も、少し遠くで見ている仗助と億泰もビクツと体が震える。

「ああーッ!!コーヒー溢しちゃったわツ!!あんたのせいよツ!!」

由花子はそのような周りの様子も気に留めず、テーブルを叩いた衝撃で倒れたカップを見て発狂したように大声をまた上げる。突然の事にもはや4人はポカンと放心するしかなかった。本当にどうしてこんな事に。美晴はクラクラと目眩がするような心地だった。

「……い、ごめんなさい、あたしついたらつい……そ、そうよね、すぐに決められるわけないわよね……」

しかしハツと我に帰ったのか、今度は由花子がしどろもどろになり始め、ついにはすすり泣く声まで聞こえてきた。

「あたし……本当にもう……!」

その急激な温度差に美晴と康一は固まる他なく、由花子といえば逃げるように帰り支度を始める。

「ところで……また、会ってくれますよね……?」

そんな事を一方的に言い残し、由花子は走り去ってしまった。

「ちよつとちよつとちよつとく、康一くん!」

「うわツ!?み、美晴さんツ!?」

美晴は由花子が見えなくなつた頃合いにグイツと椅子を傾けて康一に近付く。パーカーのフードと伊達眼鏡を外せば康一もすぐに気付いたのか、ビクリと肩を揺らしていた。

「だめじゃない、ちゃんと答えてあげなきゃ!こういう時はビシツと答えるのよ!」

「そ、そんな事言われたつて……!美晴さんも見てたろ!?彼女、なんか怖かつたんだよ!」

美晴の指摘も尤もであるが、康一の言い分もまた尤もなのであった。

確かに先程の由花子の態度は何かおかしかった。まるで癩癩を起こした子供のようで、いくら康一がハッキリしなくてもあそこまで発狂するとは美晴も想定外だった。それもそのはず、こないだ2人で話していた時は全く微塵も感じなかったものなので、美晴自身も放心するほど驚いたのだ。

「まあ、それは分かるけど……うーん、私も予想外だわ……あれは。とにかく由花子ちゃんには、明日それとなく言ってみるわね……」

由花子とはまた明日も会えるだろう。それまでに彼女が反省していれば良いのだが、果たしてどうなるだろうか。もしかしたらシヨツクで学校を休むかもしれない。

「た、頼むよ……ぼくは彼女の事、よく知らなくて……だからいきなり

好きか嫌いかなんて分からないんだよ……」

「！　それだ……」

何故康一は先程それを言わなかったのか。由花子と康一の間にある溝は、康一が彼女の事を知らないのが原因で出来ている。ならばまずは康一に由花子の事を知ってもらえばいいのだ。少しずつ距離を縮めていけば、きつと2人はゴールイン出来る。由花子は決して悪い子じゃあない……はずなのだ。寧ろ康一の事をよく見ていて、美晴でも知らなかった事がたくさんあつたくらいだ。彼女の康一への“愛”は本物のはずなのだ。

(乗り掛かった船だ、最後までちゃんと相談に乗ってあげよう……！)

美晴は1人、気合いを入れ直してから帰路につく。明日こそはちゃんとやってあげよう。

だが、世の中そう上手くはいかない事を思い知るのだった。

翌日。

「美晴ちゃんッ！昨日”カフェ・ドウ・マゴ”にいたって事はよオー、知ってるよなア!？」

「仗助くんに億泰くん……ど、どうしたのよ朝から……」

美晴が登校し、教室にやってくるとすぐに仗助に人気の少ない廊下呼び出された。そこには億泰が既に待機しており、2人して美晴を囲んで壁に手をつき、逃げられないように見下ろされる。3人の関係を知らなければ、まるで恐喝でもされているように見えるだろう。

「どうした」じゃあねーよ！美晴よオ……山岸由花子に相談されてたんだろオ!?!なんでああなるんだ!?!オメーなに言ったんだよ!？」

一応2人には、あの手紙の送り主が由花子で宛先が美晴であり、恋愛相談を受けていた事を報告してある。ただ、由花子が”秘密にしているほしい”と言っていたので、彼女が好きなかは言っていない。だが昨日、2人は告白の現場を偶然見てしまった。更に美晴が告白を見守っていた事も知っている。2人は美晴がああ発狂までを由花子にアドバイスしたのではと、そう思っているらしい。

「昨日の事なら私も予想外よ……私、確かに”康一くんのいいところを挙げまくって押してみたら?”とは言ったけど……彼女があんな感

じになるなんて思わなくて……」

そう、昨日の事は完全に想定外だったのだ。家に帰ってから自分がどのようなアドバイスをしたか思い起こしてみたが、一度だって脅迫まがいな事をしろとは言った覚えがなかった。

「私、相談に乗った手前ちよつと責任感じてるわ……2人ともまだ登校してきてないし、ショックで休んだりしてないといいんだけど……」

シユンとしおれたように項垂れる。冷や汗だつてかいてくる。美晴だつて由花子の恋が成就してほしいと、良かれと思つてアレコレと作戦を考えたのだ。それが結果的に由花子のせいで破綻してしまつたとしても、彼女の性格を考慮していなかつた自分にも少しは責任があると感じていた。康一が言つたように、美晴もまた、”由花子の事をよく知らなかつた”から起こつてしまつた事なのだ。

そんな美晴の様子を見た仗助と億泰は、目を瞬かせた後にポンポンと慰めるように彼女の肩を叩く。

「なんか……悪かつたな。責めるような事しちまつてよ」

「俺らは康一の方やるから、美晴ちゃんは由花子の方頼むわ」

2人は美晴の事をよく知っている。考えてみれば、美晴がそんな事を人にアドバイスするとは思えなかつた。理解し、慰めてくれる2人の言葉に、美晴の中に膨らんでいた不安感が小さくなつて安堵から涙がブワツと溢れてきた。

「うわツ!?なんで泣くんた…!?!」

「わ、悪かつたつて本当によオ……!ハンカチ使うか…!?!」

2人がオロオロと慌てながらハンカチやティッシュを出すのがなんだかおかしく感じて、美晴は泣きながらも「ふふっ」と吹き出してしまった。

「私のアドバイスの仕方が間違つてたかもつてずっと不安だつたものだから……分かつてもらえて安心したのよ」

ぐす、と鼻を鳴らしながらも笑う姿を見て、2人は脅すような真似をした事を心底後悔していた。美晴がちゃんと言つてくれなかつたら、もつと過激に尋問していたかもしれない。それが康一を思つての



事でも、ほんの少しゾツとした。

「美晴ちゃんは嘘つくような子じゃあねーよ……言ってくれてありがとな」

そうならなくて良かった。仗助は持っていたハンカチで美晴の涙をそつと拭つてやった。

しかし昼休み、早々に事件が起こった。

「康くん……その、昨日の事は本当にごめんなさい。あたし、夢中になるとつい、こーなっちゃうというか……家に帰ってからなんてバカな事したんだらうつて、とても反省したの……」

仗助、億泰、美晴は無事に登校してきた由花子の動向をこつそり探っていた。その時康一は実験室の掃除の当番で、3人も実験室の入口からそつとその様子を窺っていた。

「ちゃんと謝ってるな……」

「なんだか杞憂だったみたいね……安心したわ」

「おいイ……ッ、2人とも重いんだよオ……!」

下からしゃがんでいる億泰、その億泰の肩に手を置いて中腰の仗助、その仗助に寄りかかる美晴という順で重なっているためか、億泰が音を上げていたが無視である。

「これからは、普通のお友達でいてくれますか……?」

「そ、そりゃあもう……!こちらこそです、ハイ!」

ようやく落ち着くべきところに落ち着いて美晴もホツと安堵した。やはり由花子は悪い子じゃあなかったのだ。自分で距離を詰め過ぎていた事に気付いて、友達から始めるという選択をしてくれたのだ。これならいずれ2人の仲は深まっていくだろう。

そこで終わっていればメデタシメデタシ、だったのに。

「あたし、もう不安で眠れなかったんだけど……あなたのためにセーターを編んだんです。良かった、ピッタリだわ!身長と胸囲は知っていたんだけど、肩幅が合うかどうか心配だったの」

なんと彼女はバッグを開けたかと思うと、康一に一晚で編んだ手編みのセーターと御守りをプレゼントしていたのだ。直前まで昨日の事を謝っていたのに、その矢先での出来事だった。

”身長と胸囲を知っている”……そんな不穏なフレーズと共にサイズを確かめるため、セーターを青ざめた顔の康一の体に当てる様は全く微笑ましく思えない。

「それからお弁当もこしらえたんです。お昼まだでしょう？一緒に食べようかと思って……」

更に同じバッグからは少し大きめの弁当箱が出てきて3人、いや康一も含めて4人で大口を開けるほどの衝撃を受けてしまった。

「ゆ、由花子ちゃん……」

「こいつはグレートにヘビーだぜ……」

「全ツ然反省してねーぞありゃあ……寧ろ悪化してねーか!？」

一体なにをどうすればこうなるのか。本当に私の手に負える人なのだろうか彼女は。今弁当の中身を食べるため、口を開けるよう促されている康一と同じように、美晴まで顔が青ざめていく心地になる。

(の、乗り掛かった船、乗り掛かった船……!)

言い聞かせるものの、不安しか出てこない。

「私、降りたいわ……」

ぽつりと呟いた、その時、ツカツカと人影が背後から近付いてきた。

「あんた達、何やってんの？授業そろそろ始まっちゃうわよ？」

その声に振り向いてみると、仗助と美晴のクラスの委員長だった。彼女はバカみみたいな体勢の3人に呆れながら、仕方なく反対側の入口の扉を開けて康一を呼び出すと、早いところ実験室のゴミを焼却炉に捨てていくよう促す。そうして康一は委員長に手伝ってもらいながら、無事に本来の”実験室の掃除とゴミ出し”という仕事に戻っていったわけだが、それを見る由花子の顔は険しく、髪の毛が逆立っているように見えた。

「髪の毛が……」

美晴は疑問に思う。”逆立つ”というのは比喩ではない。本当に”逆立つて”見えたのだ。

「ビンゴだ。億泰、美晴ちゃん。由花子追っかけるぞ」

突然、フツと仗助の声が冷静になった。由花子は既に美晴達とは反対の扉から実験室を出て、康一を連れていった委員長を追い始めてい

る。

「もしかして由花子ちゃんって……」

早足で由花子を追いかける3人。あの髪の毛、あの殺気。導き出される可能性はひとつであり、だとしたら今一番危ないのは委員長だ。だが、彼女はもう見えない位置まで移動していて美晴のガーディアン  
の守護を掛ける事が出来ない。

どうか間に合いますように。そしてあわよくば、予想が外れてい  
ますように。そう祈る事しか出来なかった。

来宮美晴も恋をする？

校舎裏にある焼却炉まで来たが、一足遅かった。

由花子と委員長が何か口論している声は聞こえたのだが、その由花子が立ち去った直後に彼女の攻撃が始まったのだ。委員長の頭にどういうわけか焼却炉の火が燃え移り、彼女の髪とは別の黒くて長い髪が後頭部から伸びて助けを呼ぼうとする口を封じる。ついには委員長長の目まで覆い、そこでようやく仗助達が追いついた。

「どりゃッー」

億泰が委員長の髪をガオン！と削り取ったので事なきを得たが、これで山岸由花子が”スタンド使い”である事が確定的となった。

「髪を毛を操るスタンド」か……まさかとは思ったが、ありやあぐレートに厄介だな」

恐らく委員長の頭に由花子のスタンド——つまり、由花子の髪の毛を植え込んで遠隔で操作したのだろう。髪の毛を植え込まれてしまったら、美晴のガードイアンでは守れなくなる。何故なら、”髪の毛は守る対象と一体化してしまう”からだ。そして今回のケースに限り、仗助のクレイジー・ダイヤモンドでもどうにもならない。

「しっかし委員長の髪……ありやあどうすんだよ。オメーの”ザ・ハンド”で削り取ったものは俺には直せないぜ。削り取ったものが何処に行くか分かんねーんだからよオ」

「知るかよ、俺は床屋じゃねえんだ。命が助かっただけありがたいと思えっつてんだ」

後頭部の髪の毛の筆り取られた部分を撫でさすり、悲鳴を上げる委員長。億泰の言う事は尤もだが、髪は女の子の命だ。

(ごめんなさい、委員長……！)

しかしやはり、どうにもならないものはどうにもならない。美晴は心の中で彼女に謝っておいた。

「どうか仗助くん、まるで由花子ちゃんがスタンド使いだつて予想ついていたみたいだったけど……どうして分かったの？」

クラスが別の億泰と別れ、自分達の教室に戻る途中で先程から気になつていた事を美晴は問い掛ける。確かにあの逆立った髪の毛を見た時、美晴にもひよつとして、と勘付く事が出来たが、仗助は最初から目星が付けてあつたかのように、それがいつからなのか気になつていた。

「ああ……いや、あれは完全に俺の勘だっただけだよオ……俺がこの前戦つた”間田”っていただけ？俺そっくりに化けるスタンドの”あー……私が由花子ちゃんに相談を受けた日のやつね。その人がどうかしたの？」

あの日、美晴と億泰は学校に残つていたので関わり合いにはならなかったのだが、あの後仗助と康一は”小林玉美”という男から”間田敏和”というスタンド使いの情報をもらつていた。それを頼りに捜査している途中で間田のスタンド、”サーフィス”が仗助にまんまと化け、承太郎をも巻き込んで一悶着あつた、それがこの前美晴が由花子に相談を受けていた裏で起こつていた事件だつた。

「そいつがよオ……」スタンド使いはスタンド使いに引かれ合う”、”正体を知らなくても、知らず知らずのうちに引き合う”……なんて言つてたからよ。だから、”まさかな”って思つたんだ」

不思議な言葉だつた。けれどもそれは、物凄く射ていると思つた。

来宮美晴は杜王町に引越してきた日に岸边露伴と出会い、一緒に暮らす事になった。そしてどうケ丘高校に入学して早々に東方仗助と出会い、仗助にノートを届けた日に空条承太郎と出会つた。仗助と友達になり、広瀬康一とも親しくし始めた頃、虹村億泰と虹村形兆に出会つた。形兆が死に、康一がスタンド使いになつたら、今度は山岸由花子と出会い、由花子は康一に恋をした。

偶然とは思えない綺麗な連鎖。まるで何かの”引力”が働いているのかと錯覚するほどに、”来宮美晴の周り”で、或いは”東方仗助の周り”で、”スタンド使いの周り”で、”スタンド使い同士が引き合うように出会っているのだ”。

”スタンド使いはスタンド使いに引かれ合う”……」

教室に入り、定刻のチャイムと共に席に座る。5時間目の学活は特にする事がなく、生徒達の厚い希望で早々にクラスの席替えをする事になった。

(まだ4月なのに……? まあ地元民が多いし、グループは固まりたいのかな……)

その気持ちは少し理解出来るのだが、いくらなんでも気が早すぎるだろう……なんて苦笑いを零したが、決まったものは仕方ないし自習なんて大人しくするようなクラスじゃあなかった。担任が即席で作ったくじ引きを全員で引き、黒板に書かれた席図にランダムに振られた数字を頼りにガタガタと自分達の机を移動し始める。この机を移動させるのが面倒で美晴には席替えのメリットが全く浮かばず、中学の時も周りが湧く中彼女にとってはそこまで興味がないイベントだった。の、だが――、

「あつ仗助くん、ぼくの後ろの席なんだね!」

「おー、康一! こりゃあ黒板見やすくてラッキーだぜ」

「どういう意味だよー、それ!」

ようやく机を移動し終えて溜息を吐きながら席につくと、そんな2人の声が聞こえてきて思わず隣を見る。

「あれエ!? 美晴ちゃんが隣!? またまたグレートにツイてるな!」

「美晴さんも席が近くて良かったよー! ぼく友達少ないからささ!」

教室の1番後方。美晴の隣の窓際の席では仗助が、その仗助の席の前には康一がいて2人とも嬉しそうに彼女に微笑みかけている。

「これは……信じるほかないみたいね」

まさかここまで”引かれ合う”だなんて。どうやら間田とやらの言っていた事は真理のようだった。

(まあ、仗助くん達と席が近いのは私も嬉しいかな……)

スタンド使い同士のアレコレが多かったせいとか、美晴の周りにはそれ以外の友達がいらない。加えて仗助は窓際の席で、美晴以外の”隣”がいなかった。それもなんだか嬉しかった。

……嬉し、かった?

(……何かしら、今の)

それはふと思った事なのだが、何故それが”嬉しい”になるのかはよく分からなかった。

放課後。

「あの、美晴さん。本当に昨日はごめんなさい……せつかく見守っていただいていたのに、あたしつたら……」

由花子を待つていようと隣のクラスの教室の前で立っていると、彼女が小走りで駆け寄ってきてすぐにそうやって謝罪してきた。聞けば昼休みに謝ろうと思ったのだが、美晴の姿が見当たらずに放課後になってしまったのだとか。

やはりこうして見ると素直ないい子にしか見えないのだが。

「あー……あれは私もびつくりしたけど。それより康一くんとはどう？ 仲直り出来そう？」

しかし由花子がスタンド使いである事や、そのスタンドで委員長に過激な攻撃を仕掛けていたのを知っている。美晴は下手をしたら自分まで攻撃対象になってしまうのではないかと内心冷や汗をかいていた。

「それなんだけど……あたし、彼のために手編みのセーターをプレゼントしたの。御守りも。お弁当だってこしらえたわ……お詫びの印よ。そうしたら彼、とっても喜んでくれて！ お友達から始めましょうって言うてくれたのよ！」

そんな悩みなど吹っ飛ばすような由花子の幸せな報告は、文字通り冷や汗の一滴も許さないかのように一瞬で美晴の心をいろんな意味でブツ飛ばした。

「(ど、どこが喜んでるように見えたのよ！ ツ、由花子ちゃんツ！) それ、それは良かったわ。私も心配だったから……ハハ」

幸せそうな笑顔を見せてくれる由花子と対面している美晴は引きつった笑みを見せる。それもそうだ。美晴は昼休みに実験室で行われていたやり取りを目撃しているのだ。康一は明らかに喜んでおらず、寧ろ恐怖の色さえ見えた。

それを由花子、どうしたら喜んでいると捉えられたんだ!?

由花子の思想はやはり美晴では読む事が出来ない。全てが範疇を

越えている。

「あたし、これからも頑張るわ。それから美晴さんの事も応援させてほしいの!」

「えっ、私?」

心の中で唸り、”これ以上頑張らなくてもいいんだよ”と、どうやらわり伝えようか悩んでいる最中に突然自身の名が出てきて思わず声が裏返った。

「美晴さんは東方仗助くんが好きでしょう?康一くんの事を見る時に2人の事もちゃーんと見ていたわ。東方くんと話している時、美晴さんって可愛らしく笑うのよ」

目の前の由花子は”ウフフ”と微笑ましくしながらその美晴の顔を思い浮かべる。

その言葉に、美晴は電撃を直接受けたかのような衝撃が走った。

(私……仗助くんの事が”好き”だったの…!?)

それは自分でも気付かなかった感情だった。

いや、だが、よく考えてみてほしい。確かに仗助といえるのは楽しいし友達として好きだ。でもそれは億泰や康一と一緒にいる時もそうだ。だからこれは由花子が康一に抱くような”好き”とは違うのだ。そう、断じて違うのだ。

「虹村くんや康一くんという時の美晴さんもとても楽しそうだけれど……東方くんという時の美晴さんは、なんだか特別可愛らしく見えて……あたしもこうなりたいと思ったの。だから美晴さんに相談したのよ」

なのに由花子はまるで見透かしたかのように優しく美晴の考えを打ち砕いていった。

なんて事だ。私には否定する術がない。だってこんなの今まで無縁だったんだもの。

美晴はまとまらない思考の中で、ただ茹で上がったタコのように赤面する他なかった。その反応を見て、由花子は「やっぱり!」と彼女の両手を握る。

「東方くんはとっても人気な人だけれど……美晴さん以外にお似合い



な子なんていないわ！あたし、なんでも相談に乗るわ！だから美晴さんも遠慮なく頼ってね！」

もう由花子を諭すどころではない。自分が精神的な意味で再起不能になっている。

どうやら山岸由花子、自分の事だけでなく親しい人の恋路でも思い込みが激しくなるタイプらしい。こうなったらきつと誰にも止められないし止まるつもりもないだろう。

やはり私の手に負える人じゃあなかった。美晴は由花子に両手を握られ、微笑みながら見つめてくるその姿に、康一が感じたのと同じような恐怖が背筋に伝う心地になった。

(だ、だれかたすけてー……ッ!!)

美晴のか細い心の叫びは誰の耳にも届く事はなかった。

「はあー……」

夕食を食べていても放課後に言われた”来宮美晴は東方仗助の事が好き”という由花子の言葉が離れず、つい無意識に溜息を何度も零していた。

「美晴さあ……溜息もうやめろよな。どうして君の溜息なんて聞きながら夕飯を食べなくちゃあならないんだ」

それを見兼ねた露伴もついに彼女を指差しながら指摘する。それでも美晴の表情が晴れる事はなく、またこないだのような——形兆が死んだ日のような——出来事でも起きたんじゃあないかと少しの不安が募ってしまった。

「おいおいおい……なんだよオ、本当に”らしくない”なあ。今度はなんだよ、恋煩い？」

”恋煩い”。そのワードにガラン！と派手な音を立てて美晴の手から箸が転げ落ちた。その反応に露伴は一瞬だけ驚いたが、すぐさま”シメた！”といった表情に変わる。

「なんだなんだなんだ!? ひよつとしてビンゴかよオ! 気になる人」と何か、何らかの進展があったんだなッ!? どれ、今度こそ聞かせてもらいたいねッ!」

いつも飄々と躲す美晴がこんなにあからさまに動揺して箸まで落とすなんて。露伴はずっと気になっていた美晴の”気になる人”の正体を前から見破りたいと思っていたのだ。それが今ならちよこつと揺さぶるだけで分かるかもしれない。

「こ、この前”私に詮索するのはやめている”って、言ってますんでしたっけ：!？」

美晴がプルプルと小刻みに震えながら声を絞り出している。顔は俯かかれています。どんな表情をしているのかは読み取れないが、十中八九、赤面しているに違いない。

「それとこれとは別だ。あの日の事はもう何も訊くつもりないさ。けどねエ、美晴。ぼくはずーっと気になっていたんだ。君が言う”気になる人”……」

露伴は頬杖を片手でつきながら、ずずいっと夕食そっちのけで美晴の方に顔を近付ける。

「これってロマンスの王道なんだよ。ぼくはいずれロマンスだって漫画に取り込みたいのさ。そして今も！今この瞬間もツ！その王道の軌道に乗っているんだよツ、君のその反応はねツ！」

ビシッ！と今度は効果音が付きそうな勢いで美晴を指差してみせた。

どうしたって勝ち取りたい。口を割らない、記憶も読めないこいつから言葉を吐かせたい！露伴はいつもに増して強気で、半ば躍起でもあった。

だが。

「ろ、露伴先生はいつもそうですッ！私いつも真剣に悩んでるんですよ！?！なのに先生はすぐにそうやって漫画のネタにしようとするッ！私はあなたのオモチャじゃあないんですよッ!？」

突如、テーブルを叩きながらガタツ！と音を立てて赤面した美晴が立ち上がった。それは羞恥からなのか、怒りからなのか、或いはその両方なのか露伴に考える暇はなく、ただ初めて起こした美晴の癩癩に衝撃を受ける事しか出来なかった。

「露伴先生のバツ……ッたあ……ッ!!」

美晴が勢い任せにテーブルに膝を打ち、勝手に痛みを悶えているその瞬間でさえ彼はあんぐりと口を開けたまま暫し放心していた。

「うあくツ……す、すみませ、すぐに片付けます……ッ！」

膝を打った衝撃で倒れた漆器から味噌汁が溢れて床を濡らしている。ハツとそれに露伴が気付いた頃には、美晴は先程まで怒っていたにも関わらずすぐに正気に戻って布巾で床を掃除していた。

その変わりように露伴はある種の恐怖がゾゾッ！と背筋から這いずり上がる心地になる。

（なんだこいつ……ッ！突然怒ったかと思えば、突然火が消えたように冷静になりやがったッ！）

それはバースデーケーキのろうそくを吹き消すような一瞬の変わり方であり、バースデーケーキなんて可愛らしい比喻を使った自分が暢気に思える程だった。

ドツドツと警鐘を鳴らすかのように響いて聞こえる自身の心臓が促すままに、スツと露伴は席を立つ。

「ああ……ンン、代わりを注いでくるけど、いる……？」

「すみません、お願いします……」

その後も美晴は先程の事など最初からなかったかのように冷静さを取り戻していた。露伴が美晴の分の味噌汁を注ぎ直した頃には掃除も終わっていて、他に溢したものはないか、露伴の方の夕食は大丈夫かどうかを確認していた。

（もうこの件も訊くのはやめにしよう……その代わりとても貴重な体験をしたからな……）

もはやそう言い聞かせるしかなかった。己の性格が人の怒りを買う事は実は初めてじゃあないが、それ故に人と深く関わろうとしなかったツケが今まわってきたのだろう。

美晴の”気になる人”は、いずれきつと正体を現してくる。そう信じる他ない。

翌日、山岸由花子は何故か学校を休んだが、岸边家に掛かってきた「やっぱりあたし、康一くんの事は見ていただけでいいわ！それで幸

せ！とつても幸せなの！」という内容の電話は露伴が受けてしまい、更に女の怖さを思い知ったのだとか何とか。

## 02. 忍び寄る”影”、侵食する”非日常” それは電撃によく似た、

ある土曜日の昼前の事だった。

「はい、岸边です。……ああ、はい」

ちやうど美晴が昼食の準備をしようとしている時、岸边家に1本の電話が入った。それをたまたま下に降りてきた露伴が取り、すぐに受話器から耳を離すと台所まで歩き美晴に受話器を渡す。

「君宛ての電話だ。」ヒガシカタくん”から」

「あ、はい。ありがとうございます」

美晴は手を洗ってから受話器を受け取ると手近な椅子に腰掛けた。

「もしもし、仗助くん。電話代わったわよ」

『美晴ちゃん。初めて電話するからよォー、びっくりしたぜ。マジで”岸边”って苗字の人と暮らしてんのな』

番号間違ったかと思っただぜ、と苦笑いをする様子までが想像出来て、美晴もつい口許が緩んだ。

仗助や由花子達に電話番号を教えた時、家主の苗字が”岸边”であり、男性である事も同時に伝えてあった。というのも美晴も電話を取る時に、まずは「岸边です」と最初に名乗るからだ。ちなみにその”岸边”が”漫画家の岸边露伴”である事は、露伴の身バレを防ぐために誰にも教えていない。

「こないだも由花子ちゃんが私と間違えてずっと喋ってたみたい」

『ハハ、マジかよ。……って、そうじゃなくってよオ。美晴ちゃん、これから用事とかあるか?』

仗助はそのまま話し込みそうになったが、肝心の用件を思い出すとすぐに気を取り直して本題に移る。

「ううん、特にないわね……」

『そっか。じゃあこれから言うところに来てほしいんだ』

美晴は疑問符を浮かべながらも、冷蔵庫のメモを1枚取って住所を

書いていく。そこは港やグランドホテルがある海辺から少しだけ遠くにある何もない更地であり、更に疑問符を浮かべてしまった。

(こんなところに何の用事なのかしら……)

そんな感じで会話を終えて受話器を戻すとエプロンを外して部屋に戻り、身支度を整えてから露伴の仕事部屋に顔を出す。

「先生、醤油切らしてたのでちよっと買ってきますね」

「ん、そう。行ってらっしゃい」

露伴は左手を美晴の方を振り向きもせずヒラヒラと振って扉が閉まる音を聞いた。やがて窓から自転車を出して走り去っていく美晴が見えて、彼はフウ……と溜息を吐く。

「……ヒガシカタ。下は”ジョウスケくん”とか言ってたな、あいつ。さて、”醤油を切らしてる”ってのは本当かな？」

仕事部屋のある2階から再び下に降りて台所に入ると戸棚を開ける。油や麺汁を押しつけて目的のボトルを見つけたが、中身はまだ半分以上も残っていた。

「やっぱりか……」

露伴は再び溜息を吐く。それがどんな感情からくるものなのかは分からなかったが、ひとつハッキリしたのは彼女の”気になる人”の名は恐らく”ヒガシカタ ジョウスケ”である事だった。

そして昼ごはんに作ろうとしていたのはうどんだという事も、台に置いてある麺とネギと油揚げで分かった。

「まったく……先に2人前作って全部食っちゃおうかな」

無性に腹が減った。うどん2人前くらい今のぼくならイケると思う。

一方、美晴は。

(着きはしたけど……どこにいるのかしら)

先程仗助に指定された場所まで来て自転車を押しながら歩く。想像していた通り、町から外れたこの場所には何もなく、ただ草だけが雑に生えているようなところだった。

「あ、いた」

ポツンと1人、人影があるのを見つけてそこまで駆け寄ると、それ

に気付いたその人も軽く手を挙げて挨拶していた。

「仗助くん」

「美晴ちゃん。悪いいな、急に。あと億泰と康一も来るからよオ、待つようぜ」

仗助は美晴を座れそうな岩に誘導すると軽く砂を払ってから座るよう促す。「ありがとう」と礼を言ってから美晴はそこに腰掛け、億泰と康一が来るのを待つ事にした。

ふと隣で立っている仗助を見上げる。彼は身長が高く、加えて自身は座っているためか見上げていると首が疲れるが、片手で頬杖をつきながらずつと見つめてしまっていた。

（私、仗助くんの事が”好き”なのかしら……）

先日由花子の口から飛び出した”来宮美晴は東方仗助が好き”という言葉。美晴はずつとそれを考えていた。あの時は由花子の勢いに圧倒されてそう思い込んでしまったが、冷静になって考えてみると――、

「? どうした、美晴ちゃん」

「!!」

そうしていると視線を感じたらしい仗助が美晴の方を向き、ずいつと彼も草むらに座り込んでその顔を覗き込んできた。

「ううん、なんでもないわ……」

すぐにフィと視線を顔ごと背ける。冷静になれるわけがないのだ。彼が戸惑うのも気に留められないほど、体がそわそわして落ち着かない。い。

おかしいな、電話で話してた時は大丈夫だったのに。ああ、早く億泰さんと康一くんが来てほしい。冷静になりたい。

（俺、美晴ちゃんに何かしたっけか…? こないだからずっとだぜ。電話の時はフツーだったから安心したのによオ……）

一方の仗助も同じような事を考えていた。席替えをした日から美晴の仗助に対する態度が少しだけ変わったのだ。それまでは普通に話せていたのだが、どういわけか今のようには話を避けられる事があるようになった。

だから授業中、ふと隣にいる美晴を見る事が多くなった。板書をノートに写す彼女を見て、自身が忌引きで休んでる間こうしてノートを作ってくれていたのかな、等と色々考えてしまっていた。あの頃、と云つてもついこないだの事だが、ここまで親しくなるとは互いに思わなかっただろう。

「いいや、なんでもなくないな」

「そうだ。美晴ちゃんにとって”なんでもなくても”、俺にとっては”なんでもなくない”んじゃないか。」

「ちやんと言ってくれなきゃ分かんねーぜ。俺、美晴ちゃんに何かしたか？だとしたら、ちやんと俺が謝んなきゃあいけねーだろーが」

どうしても腑に落ちない。美晴に避けられる理由が己にあったのだろうか。身だしなみだつてキチンとしてるし、ここ最近で色々無茶苦茶はやつたが、今更それについて咎められるのか。周りの女子が何かしたのか、或いは仗助が理由で不良に絡まれたか。それにしつって、美晴には鉄壁のスタンドがある。今までだつて当たり前前のようにそうしてきただろう。

「違うの、仗助くんは何もしていないわ。どうかしちやつたのは私の方よ……きつと」

美晴はチラリと視線を仗助に向けて、それから目を伏せた。仗助はぱちくりと目を瞬かせ、彼女の次の言葉を待つように黙っていた。

「……私、由花子ちゃんに”仗助くんの事が好きなんでしょう？”って言われて……恋なんてした事なかったから、びっくりして、戸惑って……だから、仗助くんは悪くないわ……」

もう思い切つて言つてしまおう。そう思つて、か細い声だったが懸命に今の気持ちと仗助は悪くない事を伝える。ところどころ辿々しかったが、言い終えて静かに息を吐いて改めて彼に視線を顔ごと向けてみると、彼は大きく目を見張つて頬を赤く染めていた。

「……美晴ちゃん、俺の事好きなの？」

「だ、だから分からなくて……！分からないけど、でも、意識すると変になるというか……その、……ごめんさい、不安にさせちゃつて」

打ち明けた事で更に微妙な空気になつてしまった。美晴はその事



も含め、ほんの僅かな時間だったが彼を困らせていた事に対して謝罪する。

それからは暫く気まずい沈黙が続いた。2人とも居た堪れないようにそわそわと身動きし、億泰や康一が早く来ないか待つ。鳥のさえずり。風で草同士が擦れて音を立て、少し遠くの方で波の音が聞こえる。

「……付き合うか？俺ら」

その繰り返しを何往復かした、その時不意に仗助の声が鼓膜を震わせた。慌てて美晴が彼に視線を向ければ、そこに映った顔は赤みを帯びながらも真っ直ぐにこちらを見つめていた。

「その……よオ、分かんねーなら試しにそうしてみるのもアリっつーかよオ……俺も別に、美晴ちゃんなら、イイっつーか……寧ろ美晴ちゃんがイイ、っつーか……」

尻すぼみな仗助の声。ドツドツと心臓の鼓動が跳ねるように伝わる。互いに見つめた顔が徐々に赤く染まっていくのが分かる。

どう返事をしたら良いのか。目まぐるしく回る思考の中、美晴は口を開きかけた。

「もういいか。話をするぞ」

「うわあッ！承太郎さんちよつとオ!!」

「おいイツ!?そこで出ていく奴があるかよオ!?!」

そんな時にガサガサと草を足で掻き分けて歩いてくる複数の足音と耳馴染みのある声が聞こえてきて2人して勢いよく立ち上がりそちらを振り返る。

「テメーらを集めたのはこんな話を聞くためじゃあねエし時間も無い。仗助、その話は後でたっぷりやってろ」

ようやく合流してきたのは、いや、多分ずっと前からそこにいたのは承太郎、康一、億泰だった。承太郎以外の2人は気まずそうな顔を見せている。

「ぎ、聞いてたんスカア!?!どっから!?!」

「”ちゃんと言ってくれなきや分かんねーぜ”の辺りから聞いてたぜエ」

「ほぼ最初じゃあねえかよオ!!クソーツ!!」

承太郎の代わりに億泰が仗助の問い掛けに律儀に答えていたが、その回答に彼は頭を抱え、美晴はフリーズしたように固まっていた。

「その……ごめんよ、仗助くんは美晴さん。聞きたくて聞いてたわけじゃあないんだ。たまたまなんだよ……出るに出れなくなつてさあ……」

おろおろとしながら康一は2人を宥めようとしていた。その声で美晴はハッと意識をこちらに戻す。

先程の話はきつとこのまま有耶無耶になつて消えてしまふだろう。康一がフォローしている間も承太郎はイライラするように目つきを鋭くさせていた。きつとこれ以上は今は許してもらえない。けど。

「……!!」

仗助の隣に立つて、ほんの少し指先を絡めるくらいは許されるはずだ。

互いに顔は見れなかった。でも、指先が絡み合った時、それがそういう合図な事は自然と理解出来た。

「本題に入る。お前達を呼んだのは他でもない」

仕切り直し。改めて承太郎は仗助、億泰、康一、美晴を見る。

「護衛を頼みたい人物が正午きつかりに杜王港に到着する。お前達とも因縁のある……」レッド・ホット・チリ・ペッパー”の本体の居場所を割り出せるスタンド使いだ」

「!!」

承太郎が出したスタンドの名前。その名を聞いて美晴がすぐに億泰に視線を向けると、やはりあの日見た険しい表情が再び顔を覗かせていた。その様子を見て承太郎は帽子のツバを摘む。

「そのスタンド使いは年齢にして79、昔はなかなか筋肉質だったが、今は見る影もなく色々衰えている。女を巻き込むのは気が引けるが……美晴のスタンドは護衛向きだ。頼めるか」

「待ってくれ、79だとオ!?本当に大丈夫なんスか、そいつはー!」

そこに割り込むように仗助が声を上げるが、彼は懐から一枚の写真を出して仗助に見せる。

「いいか仗助。この写真を念写したのが今から来るスタンド使いだ。どういう事か……分かるな」

そこに映っていたのはぶどうヶ丘高校の校舎と、それに心靈写真のように薄く映り込む青い人のようなものだった。その青い人のようなものは美晴にも見覚えがあり、ハツと息を呑む。

「これ……仗助さんと康一さんと初めて会った日に見掛けたスタンドだわ……！」

あの日。コンビニ強盗を目撃して己以外のスタンド使いと初めて出会った日。この青いスタンドは強盗に取り憑いて悪事を働いていた。確かスタンド名は“アクア・ネックレス”。本体の名は“片桐安十郎”……今は仗助の家の前で“アンジェロ岩”として親しまれている男だ。

「という事は……仗助くん！これからここに来る79歳のスタンド使いってまさか！」

康一は何かに気付いたようで仗助の腕をバシバシ叩く。一方の仗助はピンと来ていないようで「は？なんだ？」と間拔けな声を上げている。

刹那、どこからかバチバチツ！と電気の弾ける音が聞こえ5人はその出所を探るようになりと周囲を見回す。

「……だぜ……！話は聞かせてもらった……！」

次いで聞き覚えのある声がある場に響き、視界がついにそれを捉えた。億泰が押ししてきたバイクからヌルリと現す、その黄色く鳥のような頭を持つ人型の姿に全員が息を呑む。

「レッド・ホット・チリ・ペッパー……！奴め、億泰のバイクのバッテリーに入り込んで尾行していたのかッ!!」

「い、いつの間……！」

まさか兄の仇を己がここに連れてきてしまうとは、億泰は口をあんぐりと開けながら呆然としていた。

そもそも承太郎がここに4人を集めたのは、電気がそこかしこに通っている町中でチリ・ペッパーにこの話を盗み聞きされないためだった。彼は電線を行き来し仗助の家に侵入したり、承太郎の拠点で

あるグラウンドホテルに電話を掛けてきたりとやりたい放題していた。恐らく彼による被害はそれだけではないだろう。

そして彼の本体があつたの弓と矢を所持している事は由々しき問題であり、彼を殺してでも取り返す必要がある。ここは電線の一本も通つておらず、チリ・ペツパーが介入する術はない。はずだったのだが。「聞かれてしまった……これから来るスタンド使い、つまり」仗助の父親である”ジョセフ・ジョースター”の事をツ!!」

怪しまれないよう、承太郎本人からではなく仗助に各々に連絡を回すよう伝えたのが仇となつてしまつたか。仗助の電話まで盗み聞きし、瞬間的に電線を伝つて億泰のバイクの中に入り込んだのだ。

”ジョセフ・ジョースター”……か! その老いぼれの命、俺が貰つてやるぜツ! あばよツ!!」

チリ・ペツパーは再びバッテリーの中へ戻るとエンジンをふかし、バイクごと走り去つて杜王港へと向かい始める。

「まずいぞツ……このままだと先を越されるツ!!」

バイクを追いかけようとする承太郎だったが、それを追い越す影があつた。

「野郎……!! 行かせやしねえぜツ!!」

億泰だ。彼は血走つた目でザ・ハンドの右手を振りかざし、空間を削り取ろうとしている。

「億泰くん待つてツ!!」

いち早くバイクとの距離を詰めようとしているのだと勘付いた美晴が彼の左手を掴んだ、その瞬間に彼の能力が発動し瞬く間に彼女ごと億泰の体はバイクの荷台へと移つた。

「うわああツ!!」

「つとオツ!!? 美晴ツ!!」

荷台は当然1人分乗れるスペースしかない。億泰は己の左手を掴んで宙吊り状態の美晴を引っ張り上げ、脇に抱え込むように支えてからほんの僅かに空いたスペースに足をつくように促す。

「なツ!!? 虹村億泰に来宮美晴ツ!!」

チリ・ペツパーも突如加わつた2人分の体重に気付き彼らを振り向

いた。己を見るあの血走った目、すぐに兄の仇を取ろうと画策している事に気付き、チリ・ペツパーは内心で動揺している様子だった。

「兄貴の仇…ッ!!テメーの相手はこの虹村億泰だッ!!」

億泰の覇気を間近で感じる美晴もまた息を呑む。

しかしどうにも胸騒ぎがする。ザワザワと風で葉が擦れるような、不穏な何かを感じる。美晴は彼の振りかぶる右手を見ながら、この不安が気のせいである事を心から願った。

## 復讐と運命

バイクに乗るチリ・ペツパー。その荷台に立つ億泰と美晴。その億泰の振りかぶる右手は今にもチリ・ペツパーを削り取らんとしていた。

(言わんこつちやないわ！やっぱり億泰くん、考えなしに突っ込んでる!!)

巻き込まれる形でバイクの荷台に転移した美晴は億泰に脇に抱えられながら、いつか言った”億泰は考えなしに突っ込んでいきそうで怖い”という言葉が現実になったようなシチュエーションに内心でハラハラしていた。

”形兆の弟”よ……バイクに瞬間移動してきた事についてだけは褒めてやるよ”

チリ・ペツパーの不敵な笑みに向け、億泰は何でも削り取る右手をガオンツ！と振り下ろす。だがそれはいとも簡単に避けられ、バイクを操る電撃を纏いながらチリ・ペツパーは空中へと居場所を素早く変える。

「だがなア〜！お前の削り取る動きツ！超スローであくびが出るぜツ!!」

チリ・ペツパーは嘲笑うように億泰を見下ろしていた。

やはり億泰ではこのスタンドには敵わないのだろうか。美晴は己のスタンドが守る事しか出来ない事に悔しさを唇を噛む。せめてもっと使い勝手のいいスタンドであったなら――、

しかし、突如足場がグラリと傾いて意識がこちらに戻り、慌てて億泰にギョツと掴まる。

「よく見るや……削り取ったのはダメージじゃあねえ。バイクの方だぜ」

「な、何イツ!？」

その声に視界を下に向ければ、削り取られたバイクの中心から前輪が外れ暴れながら地面を転げていくのが見え、億泰達の乗る荷台があ

る後輪もバランスを失って左右に激しく揺れながら、それでもまだ走行を続けている。

「!!」

極め付けは進行方向にある背の低い岩にガツツ!とぶつかり、電撃でバイクと繋がっていたチリ・ペツパー諸共億泰達の体も勢いよく前方に飛んだ。その恐怖で美晴は固く目を瞑り全身を強張らせる。

「ふい〜〜……中古だがバイクをお釈迦にしちまったぜ」

そんな美晴の体をしっかりと抱えて億泰はシユタツと着地し、彼女を地面に下ろすと安心させるようにポンと頭に手を置いた。

「悪いな、巻き込まれてよ。アブねーから下がってなア」

次に美晴が目を開けた頃には、ガシヤンツと少し遠くの方に壊れたバイクとチリ・ペツパーが落下し、億泰はそちらに向かって歩を進めていた。

「これでもう逃げられねえな〜……」

バイクにはまだバッテリーが残っている。つまり、チリ・ペツパーは電力を確保するためにそこから離れる事が出来ない。この場所は電線が通っておらず、億泰の言う通り逃げ場はどこにもなくなった。

美晴が後ろを振り返ると承太郎達が少し遠くの方からこちらに向かってくるのが見える。承太郎のスタンド——スター・プラチナはほんの僅かな間だが、時間を止める能力を持っている。加えてパワーも段違いに強い。チリ・ペツパーがどんなに速くても時を止められてしまえば意味がなくなる。今彼が最も恐れる存在であった。

「虹村億泰……この俺を追い詰めたつもりかよ。形兆の敵討ちでもしようってか!？」

チリ・ペツパーはむくりと起き上がり、挑発するような笑みを浮かべている。しかし億泰は目を伏せ、緩く首を横に振った。

「違うな……俺の兄貴は死んで当然の男だった。いつか誰かに殺されると思ってたぜ」

億泰はあの日からずっと考えていた。たとえどんな理由があろうと、形兆のした事は到底許される事ではなかったのだ。あの弓矢でこの町の人間を射止め、スタンド能力の才能がなかった人間達は全員死

んだのだ。兄もそれを”罪”として認めていた。

「罪” ってのはよオ……そうなるような事をしてりやあ、どつかから巡り巡って”罰” がやって来る。それぐらい俺にだって分かるからなあ……」

それを弟である己は勇気がなかった故に、正してやる事が出来なかった。それが一番心残りだった。

「テメー、本体の名前と住所を言え。”命だけは” 助けてやるからよオ……」

「ほお……ッ!? 言えば” 命だけは” 助けてくれるのか! 意外と冷静じゃんかよお……、敵討ちにハラワタ煮え繰り返してんのかと思えばよオ!」

その言葉にチリ・ペツパーは面白そうにニヤニヤした笑みを浮かべた。随分と格好つけたような、悠長な事を言うものだ。俺はテメーの兄を殺したんだぜ!? チリ・ペツパーは挑発しながらも、” その時” を待っていた。

「本心はテメーが答えねー事を願ってたんだよオッ!! テメーを削り取りたくて仕方ねーんだよボケがアアッ!!」

” 来た”。億泰はついに被っていた冷静さを自ら剥ぎ取った。待っていたのはこの瞬間だ。

(億泰くん! それじゃあ相手の思うツボよ!!)

美晴は対峙している2人に近付き、億泰にガーディアン の守護を掛ける。下がっていると言われたが、今この能力を使わずにいつ使うと云うのか。相手はどうやら挑発するのが得意のようだった。冷静さを欠けば欠くほどチリ・ペツパーはその隙をついてくるに違いない。「やはりか! …しかしよオオ……、削り取る” か! テメーのスタンドのスピードはノロくてノロくてよオオ、笑っちゃうぐらいなんだよなあ……ッ!!」

突っ込んでくる億泰が面白くて仕方ないのか、チリ・ペツパーは下卑た笑い声を響かせながらそれを迎え撃つために前に出て行く。

「どんくらいノロいのか、もう一度教えてやるよッ!」

億泰のザ・ハンドが右手を振りかぶる。その大仰な動きは隙が大きい



く、チリ・ペツパーはそこをついて電撃を集めた衝撃波でザ・ハンドの腹部を殴るように攻撃し、自身はスツと身を引くように彼の横へ移動する。

しかしその攻撃はガツツ！と金属音のようなものを響かせて弾かれ彼はその方向を勢いよく振り向き、次いで美晴に視線を向けた。

「ほオ〜…：鉄壁のスタンド使い。その名は伊達じゃねーっか」  
ニタ、と彼の目元が歪み、美晴はほんの少しだけゾクツと身を震わせる。あのスピード、今迫られたら回避出来ない。

だがその美晴の背後から承太郎達が徐々にこちらに近付いてきているのが見え、チリ・ペツパーもまた恐れを抱いた。早く決着をつけねば、承太郎が来て己はやられる。

そんな事を考えた時、不意に今度は己の背後に気配を感じてバツと振り返った。

「瞬間移動」すんのを忘れたかよオ、チリ・ペツパー！美晴の能力に氣イ取られて、空間を削り取った事に氣付かなかったようだなア！！」

億泰だ。チリ・ペツパーの背後から億泰と連動するようにザ・ハンドの渾身の蹴りが炸裂し、吹っ飛んだ黄色いその体はバイクから少し遠ざかる。

「捕らえたぜツ！！」

倒れ伏した体の間髪入れずに蹴りの追撃を掛ければだんだんとそれは地面に埋まっていく。

「ヒーツ！！」

追い討ちにそこに右手を振り下ろしチリ・ペツパーを地面ごと削り取ろうとするが、彼は残った力を振り絞って地面を転がって避けていく。しかしそうすればするほど、バイクのバッテリーからは体が遠ざかっていった。

ゼエゼエと息を切らせながら起き上がるチリ・ペツパーの体はどんどん錆び付いたように輝きを失って、ついにその身は黄色ではなく茶色く変色していく。

「すごいわ億泰くん！チリ・ペツパーはもう反撃出来ないはずよ！」

「おうよ……やってやったぜ、ようやくな」

美晴が億泰に駆け寄り、すぐ間近で弱っているチリ・ペッパーを見下ろす。

「どれ、トドメを刺してやらあッ!!」

しかし彼はまたザ・ハンドで攻撃を仕掛けようとしていたので、慌てて美晴は彼の右腕を掴んだ。

「待って！承太郎さん達が来るのを待ちましょう！どの道もうあいつは攻撃出来ないから焦らないで！」

チリ・ペッパーからはまだ聞く事が山ほどあるはずだ。ここでトドメを刺して殺してしまったら、それを聞く事は叶わなくなる。そしてそれは自分達にとってマイナスになってしまう。トドメは承太郎達が来てからでも遅くはないはずだ。

それを受けて億泰も振り上げていた右腕をゆつくりと下ろす。手にはじつとりと汗をかいていて、それを雑にズボンで拭うと右手をポケットに収める。

「へへ……いいのかよ、トドメを刺さなくてよオ……」

そこに、息を切らしたチリ・ペッパーのか細い声が響いて2人はそちらに視線を向けた。

「もしかしたらよオ……俺は弱っている”フリ”をしているだけかもしれないねーぜ……？弱ったフリをして承太郎を近付け……瞬間、その喉を掻っ切つてやろうと考えているかもしれないねーんだぜ……？」

承太郎の”時を止める”能力。それさえ発動されなければ、チリ・ペッパーの方が速度は上回っている。彼はそれに関しては自信を持っていた。しかし。

「デメー……何言ってるんだ……？」

わざわざ何故そんな事を言うのか。億泰は頭に疑問符を浮かべた。「別にイ……？さあどうする……トドメを刺すか？承太郎を待つか……？」

「だ……だめよ、億泰くん。何か企んでるわ。攻撃しちやあだめよ」

美晴は掴んだままだった億泰の右腕をギュツと力を込めて握り直す。

奴は億泰に揺さぶりを掛けている。わざとトドメを刺させようとしているのだ。その企みが何なのかまでは分からないが、とにかく奴に攻撃を今仕掛けるのはまずい。

「どうするんだよ、億泰……決めるのはテメーだぜ……？ほらよオ……承太郎がもうすぐそこまで来てる。攻撃仕掛けるならチャンスかもなアア……」

「億泰くん、だめ！まだよ、まだあいつには聞く事がたくさんあるのよ！」

チリ・ペツパーの声と美晴の声。その両方に板挟みになっている億泰は思考をぐるぐると振り絞り、どうするのが最善か必死に考える。

チリ・ペツパーが何故そんな事を言うのか分からない。だって、言わなければ俺達を騙せてズル勝ち出来たのだから。それを言うという事はもう本当に力が残っていないという事だ。だが、わざとそう言って二重に騙しているとしたら？トドメを刺さなければ承太郎さんはマジにやられるかもしれない。

「億泰……」

「億泰くん……」

汗がまたジトリと頭を、体を、右手を濡らす。

「ウオオオオオオ!!ウダラアアアアアア!!もうどっちか考えるのは面倒くせーッ!!チクショーツ!!」

しかし煮えたぎった思考に億泰はついに感情を弾けさせ、勢い任せにポケットから右手を抜いて強引に美晴の手を振り払いそれを振りかぶる。

「あつ……だめよ億泰くんッ!!」

「俺を止めるな美晴ッ!!こいつは兄貴を殺したんだッ!!俺がケリをつけてやるッ!!俺の心の中の真実はそれひとつだッ!!」

美晴が手を伸ばしながら彼を止めようとするが、完全にタガの外れた彼の勢いに圧倒されてその場から足がすくんだように動かなくなった。

「くたばりやがれ！ダボがアアーツ!!」

億泰の右手が咆哮のように叫ぶ。チリ・ペツパーの錆びた体は地面

ごと削り取られ、その様子に美晴は顔を背けながら目を瞑る。

次の瞬間にはその場は何もなかったかのようにしんと静まり返り、億泰の荒い息遣いだけが響く中で美晴は目をゆっくりと開け、彼に近付く。

「お、終わったのかしら……」

承太郎達もほんの十数メートルというところまで来ている。弓矢の事を始め、色々な事を聞く事は叶わなくなったが、億泰の中ではきつと決着がついたのだろう。

だが、抉られた地面から見えたものにギョツと目を見張った。

「こ、これは……ッ!!」

”それ”はバチバチッ!と激しい音を立ててプラズマを発し、やがて人の形を成していく。

「この地下に外灯用の”電気ケーブル”が!!あいつ、ここを俺に掘らせるためにわざとツ……ッ!!」

チリ・ペツパーが億泰に攻撃させようとした理由。彼はここに電気ケーブルが通っている事を知っていたのだ。

「おかげで蘇ったぜ……!!」

先程よりも眩い光を纏ったチリ・ペツパーが切断されたケーブルの隙間からヌルリと姿を現す。

「俺は本当の本当に弱っちまったんだよ……!バイクのバッテリーなんてたったの12ボルトしかないんだからな!逃げるならこの地下ケーブルと生きていたが……バイクからちと離れすぎて掘り起こすスタンドパワーはなかったのさ」

だから億泰に掘らせた。カマを掛けまくれば、億泰はバカだからそのうち考えるのをやめて攻撃する選択肢を取る。彼はそんな億泰の性格まで見越してわざと揺さぶっていたのだ。

「野郎……ッ!!」

億泰が力任せにまた右手を振り下ろす。しかしチリ・ペツパーはそれをいとも簡単に、先程よりも速いスピードでその攻撃を躲して億泰よりも後ろにいた美晴の背後へと目にも止まらない速さで移動した。

「来宮美晴……あんたは賢いな。けど、分かっちゃいねーのさ」

そんな声が背後から聞こえ振り向こうとした、それさえも遅かった。

突如、パリッ！と衝撃が走ったかと思えば、美晴の視界がガクツと左に寄りながら落ちる。地面に倒れ伏すと同時に何故か左脚の膝辺りが焼けるように熱く、そこに視線をやる。

「能力は徹頭徹尾、自分のために使った方がイイって事を分かっちゃいねーのさッ!!」

左脚が、スカートから下の左脚が、ない。

「ああああああああーッ!!」

「美晴ーッ!!」

熱の正体が痛みだという事を認識した途端に激痛が脚を襲う。己の叫び声と億泰の悲鳴が混ざり合い、チリ・ペツパーはその中で嘲笑うような笑い声を響かせながら美晴の視界を覆うように手のひらで頭を掴む。

「億泰ッ！オメーのせいで美晴はこうなったッ！おおー可哀想に！好きな男にコクられてシアワセだったのになアアッ!!」

億泰のバイクから、チリ・ペツパーもあの話を聞いていたのだ。美晴は目元を覆う手を剥がそうとするが、スタンドには触れる事が出来ず空を切るのみだった。

「億泰くっ……！億泰くんは、悪くない……!!」

それでも声を絞り出していると、チリ・ペツパーは感心したように頷く。

「おーおー、健気よのオウ。だがよオウ億泰。美晴は優しいからそう言ってくれるがよオ、形兆の言う通りだ。オメーは足手纏いだな!?!精神的に未熟過ぎんだよオウ!あの兄貴を上回ってなきや敵討ちなんざ最初から無理なんだよッ!」

再び咆哮を上げながら右手を振り下ろす億泰を見、チリ・ペツパーは美晴を掴んだまま素早く電気ケーブルのそばまで移動して避ける。その過程で億泰の背後を見遣れば、承太郎を追い越して仗助が向かってきていた。

「美晴ちゃんッ!!」

彼は必死に手を伸ばしながら美晴とチリ・ペツパーまであと数メートルのところまで近づく。しかしそれよりも早く、チリ・ペツパーは美晴の体を形兆の時のように電撃と同化させて電気ケーブルの中へと身を潜ませ始めた。

「させるかよッ!!このままジョセフ・ジョースターも形兆や美晴と同じ目に遭わしてやるッ!!今度こそ本当にさよならだッ!!」

あと一歩、仗助が伸ばした手は美晴の体を掠め、チリ・ペツパーと共に彼女は電気ケーブルの中へ引きずり込まれていってしまった。

「あ……あ……っ、嘘だろ、美晴……!!」

「み、美晴さん……ッそんな……!!」

億泰と康一は美晴が引きずり込まれた電気ケーブルの前でガクリと膝をつく。

「俺が……俺が悪いんだ……俺がヤツの挑発にさえ乗らなけりゃあ、こんな事には……ッ!!」

億泰の目から涙がボロボロと溢れ落ち、地面に拳を打ち付ける。それを見て隣にいる康一は慰めるように彼の肩に手を置くが、彼もまた涙を溢れさせていた。

その少し後ろで仗助は切断された美晴の左脚に触れる。草むらには痛々しい血痕が残されていて、彼はグツと唇を噛み締めていた。

「美晴ちゃんは……こうなる運命だったんだ」

ぽつりと、仗助が零した言葉に億泰と康一はバツと振り返って目を見開く。

「これが美晴ちゃんの運命なんだ」

「じ、仗助エ……!!」

「仗助くん!?なんて事言うんだよッ!!君は美晴さんの事が好きなんだろう!?!なんでそんな事言えるんだよッ!!」

康一が激昂するのを仗助が黙って唇を噛み締めながら受けているのを見て、億泰は目を伏せて視線を逸らした。

こうなったのは自分のせいだ。己に康一のような言葉を吐く事は許されないし、そうするつもりもなかった。

しかし仗助は美晴の左脚を撫でながら、2人を真っ直ぐに見る。

「だから、あいつは死なねー。誰が死なせるかつつーんだ」

その言葉に、億泰と康一は顔を上げながら息を呑む。彼の隣にはクレイジー・ダイヤモンドが姿を現し、美晴の左脚に触れていた。

「俺があいつを助ける」のも含めて、あいつの”運命”にしてやるぜ」

絶対に助ける。仗助の表情は決意に満ちていた。

## ” 守護者 ”

それはつい最近の事だ。

両親を事故で亡くした。葬式の日には雨が降っていて、外の空気を吸いに行った時についた雨粒を軽く払った私は、火葬場へと戻った。

「美晴ちゃん、可哀想にね……」

「まさか両方いっぺんに亡くすなんて」

親戚の人達がヒソヒソと話している。私は敢えて能力で耳を塞ぐ事をしなかった。

私の能力は”ひとつのものをあらゆる攻撃から守る”能力だ。

私は無意識のうちに、”私だけ”を守るように祈ったのだ。今までだってそうしてきた。祈るとあの鎧の人がなんでも守ってくれた。

でも私は初めてその祈りに憎しみを抱いた。

あの時、守る対象を”来宮美晴”ではなく、”乗っている車”にしていけば、こうはならなかったからだ。

「でも気味が悪いわ、あの子だけなんて……」

「しっ、聞こえるぞ」

「私いやだわ、あの子引き取るの……怖いじゃない。だってあの子……」

「だってあの子って、生まれた時から怪我ひとつしないじゃない」

「美晴ちゃん!!」

「美晴!!」

「美晴さん!!」

そんな声が四方から聞こえた。呼び声に目蓋をピクリと動かしながら、朝目覚めるように目を開く。

「……!!」

その視界に映ったのは、喜びを顔に露わにさせた後にヒンツと涙ぐむ3人の男と、僅かに口元に笑みを浮かべながら後方に立つ大柄な男



だった。

「ん……、私……」

美晴が身動きしようとするのとグツと視界が引き寄せられて何かに顔を埋めさせられた。次いで伝わった人肌のぬくもりに、すぐに己の身は誰かに抱き締められているのだと認識する。

「生きてて良かった……」

その言葉に目を僅かに見張った。耳元で囁かれたそれは、美晴がずっと心のどこかで欲していたものだったからだ。

「仗助くん……」

その言葉をくれた、今己の身を抱き締めている彼の名を呼んで、美晴もギョツとその背に腕を回して抱きつく。

(でも私、どうしたんだっけ……)

彼の腕の中にいながらも、僅かに身動きして何故か恐る恐ると美晴は己の足元を見た。

確か、左脚が焼けるように熱く、痛かったはずだ。しかし左脚は特に異常がないようで、手で触れてみても違和感はない。

「仗助くんが美晴さんの脚を”治して”くれたんだよ。仗助くんの能力で、脚の方に美晴さんの体が戻ってきてくれたんだ」

不思議そうにしている美晴に、康一が涙を拭いながら説明してくれた。

という事は、この左脚は一度何者かに切断されてしまったという事になる。それを聞いて美晴はゾツと背筋が凍る感覚に陥った。

怪我なんて億泰を助けた時を除けば、今まで一回もした事がなかった。というのも、美晴のスタンドであるガーディアンが守ってくれたからだ。それが急に左脚を切断なんて、ショックで記憶が多少飛んでもおかしくないはずだ。

「やれやれ……チリ・ペッパーの奴、見せしめ”ついでに”厄介な能力を持つ美晴を先に始末しようとするとは。抜け目ない野郎だ」

そこに承太郎が歩み寄り、美晴を見下ろす。そしていつかの日思い出していた。

康一のスタンドである”エコーズ”が覚醒した数日後。

それを聞いた承太郎は仗助、康一、億泰、美晴をグランドホテルのすぐ近くのプライベートビーチに呼び出していた。康一のスタンドである”エコーズ”の確認をするためだ。

「物体や人に音を染み込ませる……か。変わった能力だな」

小さなトカゲのような見た目のエコーズは、如何にも生まれたと聞いた感じで可愛らしい見た目だった。その容姿に美晴も思わず目を輝かせたのを覚えている。

エコーズは小柄で更に遠距離型のスタンドであり、偵察等に持つてこいの形態であった。

「時に、美晴。君もあの弓と矢の事を知ってしまった以上は、関わらざるを得なくなったようだな」

承太郎は美晴を見て”やれやれ”と帽子のツバを摘んで僅かに下げた。

美晴がスタンド使いである事は彼女が仗助にノートを届けに来た日に知った事だが、”生まれつきのスタンド使い”だったため無関係として扱っていた。だが、彼女は虹村兄弟との件でスタンド使いを増やす弓と矢の事を知ってしまった。このまま無関係で知らないフリをしろというのは難しい話である。

「というわけで、君の能力も改めて試させてもらわなければならない」

承太郎がスタープラチナを出すと、美晴も戸惑いながらガーディアンの姿を現す。

「た、試す、とは……？」

「言葉通りだ。今からこのスタープラチナで君を攻撃する」

承太郎がスツと美晴を指差す。

「その守りの強度がどれほどのものか見たい。言っておくが、女だからと加減はしない。最大強度だ、準備をしろ」

彼の目は本気だった。美晴はゴクリと固唾を飲みながら己にガーディアンとの守護を掛け、準備が整った事を示すためにひとつ頷く。

と、スタープラチナが真っ直ぐに美晴に向かって突進し、その速さに誰もが息を呑んだ。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラアッ!!!」  
「ッ……!!」

力強い怒涛のラッシュが金属音を響かせながら美晴の体を襲う。彼女はその勢いに無意識にガードするように腕を顔の前でクロスさせ僅かに身を屈めていた。

（お、重いッ……!!一撃一撃がすごく重いッ!!ダメージはゼロ……でも、……お、押し負けるッ……!!）

ぶつかると衝撃が僅かにだが体に響く。こんな経験は初めての事で、美晴はまた無意識に歯を食いしばる。

「み、見てッ！美晴さんの体が……！」

「押し負けて、後ろに下がっていくッ……！」

康一と仗助が声を上げる。その通り、ザリ、ザリ、と美晴の踏ん張っていた足は砂を浅く掘りながら後方へ下がっていく。

「オラアアッ!!」

「うあッ……!?!」

承太郎の最後の一撃がゴンツ！と金属音を響かせながら炸裂すると、美晴の体はザーツと勢いよく砂に足をついたまま更に後方へ滑り、勢い余って尻餅をついた。その様子を見て承太郎は長く溜息を吐き、滲んだ汗を指で拭う。

「フウ……鉄壁のスタンド、ガーディアン。強度は本物だな。ただ、強い衝撃を与え続けると押し負ける……か」

呼吸が上がリ、尻餅こそついたものの美晴の体は骨折も痣もなく、吐血もしていない。押し負けるのは恐らくスタンドの落ち度ではなく、本体である美晴の体力の問題だろう。彼女には少し体力づくりをしてもらう必要もあるかもしれない。

（しかしこのスタンド。ただ守るだけじゃあなく、弾いてくる。集中していなければ、あらゆる方向に腕が飛んでいたかもしれない）

恐らく弾き加減は美晴が無意識に弱目にしたのだろうが、それでも手に汗が滲むほど集中していたのを目の当たりにし、承太郎は再び静かに息を吐く。

だが、承太郎の”試験”はそこで終わりではない。

「美晴ちゃん！」

「待て、まだ終わっていない。ここからが本番だ。……まだスタンド能力を解くな」

すぐさま美晴に駆け寄ろうとする仗助を片手で制し、彼女に近付くと手を差し出す。その手を取って立ち上がるのを見るやすぐに手を放し、彼は先程の位置に戻った。そんな彼を見ながら、美晴はスカートのお尻部についた砂を払って守護を掛け直す。

（これ……この承太郎さんの”試験”のようなもの。私自身も知らなかった”ガーディアン”の力”が分かるかもしれない……）

この能力は美晴が生まれ持った才能のようなものだ。

だが杜王町に来るまでの間でこの能力が効果を発揮するタイミングといえ、せいぜい転んだとかそういう日常的な怪我の時だ。赤子の頃は無意識なのか、常にそばにいて守ってくれていた（両親から聞いた話と辻褄が合う）が、物心ついた頃からコントロール出来るようになり、走る時や料理をする時等、怪我の恐れのある行為をする時に守ってもらうようになった。おかげで美晴の体は怪我知らずだ。最近では露伴に記憶を読まれないよう、彼と顔を合わせる時にも能力を使っている。

しかし、この町では奇妙な事件が起こりつつあるのだ。それに己も片足をつまんで以上、改めてガーディアンのスタンド能力について自己分析する必要があるし、ブラッシュアップも然りであろう。

今承太郎が施した”試験”で、ガーディアンにはかなりの守備能力がある事が分かった。押し負けたのは己の体力不足である事も、同時に痛感した。

「やるぞ。準備は出来ているな」

承太郎がまたジツとこちらを見据えてくる。顎に伝った汗を手の甲で拭い、美晴が先程のようにひとつ頷く。――が。

「スタープラチナ・ザ・ワールド!!」

「!？」

そう声が聞こえたかと思えば、突如目の前にいた承太郎の姿が消えた。それに思わずハッと息を呑んで目を見張る。

「オ……オイイツ！な、何が起きたんだよツ!?いつの間にか承太郎さんが……ッ!!」

億泰が驚いたように目を見開いて彼を指差すのと同時に、グツと美晴の背中にスタープラチナの拳が押し付けられる。

「承太郎さんが美晴のすぐ後ろにッ!!」

一瞬の出来事だった。美晴がゆっくりと顔だけを振り返れば、承太郎の大柄な体がすぐ背後に迫っていて静かに息を呑む。

”時間を止めた”……これは防げないようだな」

ポンと、まるで鬼ごっこで鬼がタッチするかのように承太郎は美晴の肩に手を置く。その一転したフランクな態度に拍子抜けたように美晴は目を瞬かせていた。

しかしはたと思い返せば、何か引つ掛かりを覚えて彼から視線を外して記憶を掘り返すように意識を集中させた。その様子に承太郎は疑問符を浮かべる。

「どうした、気になる事でも?」

「いえ……あの、”時間を止めた”っていうのは、そのままの意味で……時間を止めている間に承太郎さんが私の後ろに移動して、だから時間がまた動いた時に、まるで一瞬で移動したかのように見えた……って事なんですよね?」

「そうだが……それがどうかしたのか」

美晴が至極当たり前の事を、まるで億泰にでも説明しているかのよう口に出している事に承太郎は再び疑問符を飛ばす。

「その……違うかもしれないんですけど。承太郎さんは私から見て右、つまり承太郎さんから見て左から回り込んで後ろに行きませんでしたか……?」

しかし美晴の言葉に、浮かべていた疑問符が飛び散った。

「ッ、何……ッ!」

ゾクリと動揺が走る。胸の鼓動が弾けるように一度だけ大きく波打ったのが分かる。

(こいつ、俺の進行方向を記憶している!見たのかツ!?見えていたのかツ!?)

美晴の言葉は本当だ。承太郎は確かに時を止めている間に、左から回り込んで彼女の背後に回ったのだ。

だが何かおかしい。何故今それを思い出したのだ!? その妙な間はなんなのだ!?

「何故そう思った…? 見えたのか?」

口の中がカラカラに渴いていた。空条承太郎ともあろう者が、久しく大きく動揺している。

だが彼女が出した答えは何とも不思議なものだった。

「“おかしい” というのは百も承知なんですけど…;” 見た” とかそういうんじやあないんです。記憶の底に埋まってたかのように、” 承太郎さんが私から見て右から回り込んできた” という記憶だけが、そこにあっただんです。ただその記憶を掘り起こしただけで…;」

承太郎は固唾を飲んだ。今までこんな事が出来るスタンド使いはいなかった。それが出来るのは恐らく、同じ能力を持つDIOだけだったはずだ。彼と決定的に違うのは、彼女には時間を止めている間の意識はなく、また本当に何も” 見ていない” 事だ。

「…やはり、” こいつ” の能力は” ただ攻撃から守るだけじゃあない” らしい…;」

彼女のそばに佇む鎧のスタンドは、その下にある顔や目を決して読み取らせない。しかしオーラで分かる。” あれ” は対象を守る事に關しては一級品、或いはそれ以上だ。

” あらゆる攻撃から守る” …;それは即ち、” 危険を察知し、排除する” という意味合いも含まれるのではないか。

(未恐ろしいスタンドだ…;)

美晴の精神力がスタンドの持つ本来の力に追いついた時を想像すると鳥肌が立つ。承太郎はまだ不思議そうに首を傾げている彼女を見て、立ち尽くす他なかった。

(あれはマジに冷や汗をかいた…;美晴のスタンドは恐らく、どんなスタンドにおいても脅威だろう)

仗助の助けを借りて立ち上がる美晴を見る。左脚をしきりに確認

しているのを見て、仗助は意識的に彼女の左側に回って体を支えていた。

「美晴ちゃん、マジに覚えてねーのか……ありやあグレートにシヨツキングだったぜ……」

「聞いて寒気したわ……あのケーブルに引きずり込まれたなんて」

どうやら彼女はチリ・ペッパーに左脚を飛ばされ電気ケーブルに連れ去られたという記憶をシヨックでなくしてしまっているようだ。無防備になった彼女を叩く事は唯一にして最大の攻撃方法である事が分かる。承太郎はそれを試す事は出来ず、今回のチリ・ペッパー戦は不謹慎だが貴重な参考資料を得られたとも思っていた。

（最初からこちら側にいたから良かったもの……敵として遭遇していたらと思うとゾツとする。誰もこいつの隙をつく事が出来ねえ）

不意打ちには弱いという話だったが、ハナから能力を発動されてしまえば関係のない話である。実際、あの”試験”では能力をあらかじめ使わせていたからああいう結果になっていて、承太郎が不意打ちで時間停止を発動させていたならば、美晴に気取られる事なく背後に回っていたはずだ。

美晴が今回死にかけたのは、彼女に自分以外の”守りたいもの”があったから、という優しくして強い意志が存在したからである。

「……あまりのんびりはしていらねえ。もうじき正午だ。それにチリ・ペッパーもじじいを追い始めている。急ぐぞ」

ジョセフ・ジョースター護衛の要として今回彼女を呼んだわけだが、皮肉にもその優しい祈りが彼女の最大の弱点になるという事を改めて思い、承太郎は踵を返しながら帽子のツバを摘み、その陰で目を伏せた。

## ジヨセフ護衛作戦

「来てる……じじいの船が時間通り、あと20分ほどで港に到着する」  
杜王港に着き、承太郎はスタープラチナを出して海を見たかと思うとそう言い放つ。その横では仗助と億泰がボートのチェックをしていた。

「見えるんですか？」

「ああ、スタープラチナは視力も高い」

「もうなんでもありですね……」

スタープラチナは視力だけではなく、どの性能も抜群に高い数値を誇る。破壊力も動体視力も、精密動作もお手の物。更に時間停止まで使えるのだからもはや”無敵のスタープラチナ”だ。こんな人が味方にくれるのはとても頼もしい。

「承太郎さん、ボートの点検終わったっす。これのバッテリーにはチリ・ペツパーの野郎はいませんよ」

「いつでも出発出来るぜ、承太郎さんよ」

仗助と億泰がボートから報告するのを聞き、承太郎は康一と美晴を連れてそちらまで歩む。

「仗助。このボートに乗るのは俺と億泰と美晴の3人だ。お前は康一くんとのこの港に残れ」

「えっ!!」

4人は耳を疑ったように声を上げる。

このボートなら承太郎も含めて5人、全員乗れる。てつきり5人で船まで向かうと思っただけに仗助も、そして仗助と共に港に残れと指示された康一も、承太郎と一緒にボートに乗る億泰と美晴も動揺を露わにさせていた。

「チリ・ペツパーの本体は間違いなくこの港に潜んでいる。俺達がこの港からボートに乗って出発するのを、今か今かと待っているはずだ。そして俺達が港を離れた時、すかさず奴はじじいの船に向かって何かを”飛ばす”だろう」



「？　”飛ばす”…？」

4人が疑問符を浮かべるのを尻目に、承太郎は改めて港をぐるりとその場から見渡す。スタープラチナでも透視までは出来ず、どこに本体がいるのかまでは分からないが、確実に奴はここにいるはずだ。そして海上は当然、電気を通すものは何もなく、それでもジョセフ・ジョースターをいち早く仕留めるために何らかの手段を使ってスタンドに海を渡らせるはずだ。

”バッテリー”が付いていて、”ボートよりも速い”……承太郎はそれを可能にする物の予想がついていた。

「恐らく奴は、”ラジコンの飛行機”を使って船に向かうはずだ」

その言葉にようやく4人も合点がいったようにハツと顔を上げる。ラジコンの飛行機なら確かにボートよりも速いスピードを出す事も可能だ。加えて操縦はチリ・ペッパーがバッテリーの中に入って操作するのだから、コントローラーの電波など関係ない。バッテリーもここから船までの距離であれば問題なく保つ。

だからここから何かが”飛んだ”のなら、誰かがここで本体を探さなくてはならない。康一のエコーズならば遠距離型なので探すのは得意だが、叩くほどの威力は持ち合わせていない。

「仗助……もし奴に俺達のボートより先に進まれたなら、”自分の父親”はオメーが陸地で守らなくてはならないんだからな。……分かったか」

”本体を倒す”事。それは”スタンドを倒す”事にも繋がる。承太郎は仗助が適任だと考えたのだ。

「ああ……一刻一秒を争う事態だつー事がよく分かったぜ」

仗助はボートから降り、承太郎を見る。承太郎は彼の肩を任せられるようにポンと叩いた後に入れ替わるようにボートへ乗り込んだ。

「美晴。君はこの護衛作戦の要だ。着いたらまず、じじいにスタンド能力を使ってもらおう。君のスタンドは”守る”事に関しては絶対的と言っても過言じゃあねえ程信頼出来る」

承太郎が振り返り、美晴に向かって手を伸ばす。その手を取ろうとすると、不意に肩を掴まれて思わず振り向いた。そこには心配そうな

表情を覗かせながら見つめている仗助がいた。

「……大丈夫よ。それより、仗助くんも気を付けて」

「……ああ。美晴ちゃんもな」

その心配を解くように美晴は微笑んでみせるが、彼はやはり不安そうなままだった。

無理もない。彼女はつい先程まで本当に生死に関わる状況に置かれていたのだから。

仗助は切断された左脚を”治す”事で、美晴の体をこちらに呼び戻した。だが、形兆の時は同じ手口であつという間に感電死させられていたので、必ず助かるという保障は正直なかったのだ。体を呼び戻した時、美晴は短い時間だったが昏倒状態になっており気が気じゃあなかつた。

もしこのまま目覚めなかつたら——、そう思うと寒気が止まらない。形兆や自分の祖父の事を思い出してゾワリと心臓が一度波打つ。それでも体温を分け与えるように、抱き起こした彼女の体を己の方に引き寄せていた。

仗助は先程そうしていたように彼女の体をこちらに引き寄せてしまおうかと一瞬考えたが、今の状況、そうする事は叶わない。彼女が気丈に微笑むのを信じるしかない。

名残惜しげによくやく肩に置いた手を離すと、美晴は承太郎の手を取ってボートへ乗り込んでいった。

「億泰。今度こそオメーは美晴を守らなくてはならない。2度目はマジでねえからな」

美晴が死ねばジョセフに掛けた守護も消える事になる。チリ・ペツパーは美晴がジョセフに能力を使う事など既にお見通しだろう。次もまた無防備な彼女を先に狙ってくる。先程は仗助のクレイジー・ダイヤモンドのおかげで彼女は助かったが、次しくじれば今度こそ彼女の死は本物になる。その事実、億泰はゴクリと固唾を飲んで仗助と康一を見た。

「億泰、信じてるからな」

「億泰くん、気を付けて」

それでも、2人は己を真つ直ぐ見つめて託してくれている。

「ああ……ありがとうよ」

形兆の仇だとか色々考えていたが、今はジョセフを護衛する事が最優先であり、そうする事がチリ・ペツパーに一杯食わせてやる事にも繋がる。

億泰は決意を新たに、承太郎と美晴と共に港を出発していった。

「海が綺麗ね……こんな状況じゃあなかつたら、もつと良かったんだけど」

全速力で走るボートの上。後部座席に座り、美晴はそこから見える青い海と優雅に飛び交う鳥達の群れを見る。

「隣が仗助だったら、もつともつと良かっただろーよ?」

「えっ……!」

億泰が茶化すとすぐさま美晴の頬が紅潮し、その分かりやすさに彼はニヤニヤと目を細めた。

億泰からしたら美晴は姉のようで、同時に妹のようにも感じる不思議な存在だった。そんな彼女と、己の親友である仗助が付き合う運びになるのなら諸手を挙げて応援したいと思っている。

「どうすんだよオ、返事はよオ」

「返事って……!」

「仗助に”付き合うか?”って言われたろく!?その返事だよ、お・へん・じ♡」

うりうりと肘で彼女の肩をつついてやれば更に顔が赤くなって見るからに焦り始め、億泰はそんな彼女の様子が面白くてたまらなくなってしまうた。しかし。

「億泰くんまで私をからかわないでよーッ!!もうーッ!!」

「おぱアーツ!?!」

逆に頬を押しつけるようにぐいぐいと手のひらで強めに押されてしまい、思わず変な声を上げながら頬と首に伝わる痛み顔に顔を歪める。「おっ、おぐうッ……!」と呻き声を上げる億泰。だが解放される兆しは見えない。

「そ、そういうえば承太郎さん。聞きたい事が……！」

「ん……なんだ」

それを黙って聞き流していた承太郎だったが、無理矢理に話題を変えようように美晴が己に声を掛けるのを、そちらを振り向かず前方に集中しながら応答する。

「今から護衛に行くジョセフ・ジョースターさんって人、仗助くんのお父さんなんですよね？でも79歳って……仗助くん私達と同じ年なのに、随分お歳を召されてるんですね」

その言葉に承太郎はピクリと僅かに反応を示し、億泰もジタジタと暴れていた動きをピタリと止めた。それを感じて美晴は彼をようやく解放する。

承太郎は悩むように間を置いた後、僅かに俯かせていた顔を上げ口を開いた。

「……仗助はジョセフのじじいが65の時にあいつの母親と浮気をして出来た子供だ。じじいの遺産を分配する時のために調査をした結果、俺達にもそれが知れてしまった……つまり、あいつはジョセフの隠し子だったわけだ」

やれやれ、と承太郎が溜息を吐く後ろで、美晴と億泰は息を呑んで目を見張りながら、互いの顔を見合わせる。

「仗助は自分の父親であるジョセフに会った事がない。今日、互いに初めて顔を合わせる事になる。……あいつからしたら、複雑だろうぜ。16年も自分と母親をほっぽり出していたんだからな」

止めたんだがな、とまた溜息を吐く承太郎。確かに、今更になつてこんな事情で父親と会う事になるとは仗助も思わなかっただろう。

仗助は一度だってそんな素振りを見せた事がなかった。それはつまり、彼は父と母が本当に愛し合って出来た子供だからと納得しているからであろう。だが本当に”今更”だ。今更知りもしない男と会って”父親”と認識するのは難しい。それも79歳の爺だ。彼の命は守るが、そこに”親子としての情”はないだろう。

「ちなみに俺はジョセフの孫であり……続柄でいえば、奇妙な事だが俺は仗助の甥にあたる」

「お、甥イッ!?」

2人はまた勢いよく承太郎の方を振り向きながら今度こそ口があんぐりと開きっぱなしになった。だって、それは本当に奇妙な事であり、このめちやくちや頼りになる承太郎が続柄的とはいえ下であるだなんて想像もつかない。

「そうこうしているうちに……見ろ、船が見えてきたぜ」

今度は承太郎の方が話題を変えるように前方を指差す。それに釣られて2人もそちらに視線を向ける。

「ほ、本当だ……俺の肉眼でも船が見えるぜ!もうすぐだ!」

「ラジコン飛行機もまだ飛んできてないわ!仗助くん達、上手くやってくれてるみたいね!」

目を凝らさなくてもジョセフの乗るトラフィック号が見える。上空にも怪しい影はなく、ひとまず安心した。

ジョセフが乗っているトラフィック号——、乗組員は全てスピードワゴン財団というジョースター家の援助を行なっている団体で構成されていて、安全な警備体制が整っている。それでも美晴や億泰の力が必要なのは、彼らにスタンド能力がないからである。”スタンドはスタンドでしか倒す事が出来ない”……方が一の時、対抗出来るのは彼らしかない。

ボートを船につけ、そこに乗り込むとジョセフがいる船室に案内された。彼は体は大きいが歳相応にヨボヨボで、杖を手にベッドに座つてうたた寝しているのか、船を漕いでいた。

「俺は康一くんからの報告を待ったため外に出ている。美晴、億泰、じじいを頼むぜ」

「はい」

承太郎が船室を出ていくと、シンと部屋内は静まり返る。窓の外は次第に岬が見えてきていて、あと少しで港に到着するといった距離感だった。

「美晴よオ……怖くねーか?」

「? 何が?」

美晴がジョセフにガーディアン守護を掛けた時、億泰が彼女の隣

に立ちながらふと問い掛けてきた。

「また俺のせいで……死にかけてでもしたらよオ、怖くねーか」

俯き、己のつま先が見える視界の中を彷徨う。億泰は先程の事をまだ引きずっていた。あの時、己が感情に任せて突っ込んだりしなければ、美晴はあんな目に遭わずに済んだかもしれない。もっと冷静に、そう、兄のようにしていれば、あんな事にはならなかったはずなのだ。しかし、美晴はおずおずと不安そうにこちらを見る億泰に微笑みかけ、静かに目を伏せながら首を横に振る。

「全然。億泰くんはバカだけど、同じ事を繰り返すタイプのバカじゃあないわ。少なくとも今は、そうでしょう?」

そう言って億泰の右手をそつと両手で包むように握る。そのあたたかさに、彼はキュツと胸が締め付けられる心地になる。

「この力強い右手が、私とジョースターさんを守ってくれるって心の底から信じてるわ」

億泰は息を呑んだ。美晴は本当に己を信頼してくれているのだ。

それを裏切る事は出来ない。裏切りたくない。

「……美晴。ぜってー守るからな。今日だけじゃねー、明日もその次も、ずっとだ」

決意を込めて、真っ直ぐに彼女を見つめながら己の右手を包むその手に左手を重ね、互いに力強く頷く。

チリ・ペツパーは言っていた。 ” 兄を越えなければ敵討ちなど無理だ ” と。あの戦いで自分はそれを学んだ。 ” 兄を越える ” ……それは ” 今の自分を乗り越える ” という事だ。

「んん……はて、もう杜王町には着いたのかのう」

そこに嘎れた声が空気を震わせ、2人はそちらを振り向く。ようやくジョセフのお目覚めのようで、彼はとろんと微睡んだ瞳を晒しながら辺りを見回し、2人に視線を合わせた。

「おお……君達が護衛の。えーつと……名前は何じやったかのう」

2人を震える指で差し、僅かに首を傾げる。

「億泰つす。隣のは美晴」

「オクヤスにミハル?」

「仗助とは近所で、俺も美晴もスタンド使いつす」  
「え？」

79歳。色々衰えていると承太郎は言っていたが、それは聴力も例外ではないらしく耳に手を当てて聞き返している。

「スタンド使いつ!!」

「え？」

「ス・タ・ン・ド・つ・か・いつ!!」

”行かんぞ歯科医?” わしも入れ歯にしてからトンと行かなくなったのう」

会話が噛み合っていない。これは相当衰えているが、億泰もムキになってきている。美晴はその様子を見て静かに頭を抱えた。

「スタンド使いだよツ!! コラアアツ!!」

「お、億泰くん落ち着いて……」

「おーおー、そうなのか! 君達も”スタンド使い”なのか、大変じゃねえー」

今にも掴みかかりそうな勢いの億泰の服の裾を掴んでやんわりと宥めようとした時、ようやく会話が繋がって2人して顔を見合わせた後にホツとしながらジョセフの言葉に同意するようにコクコク頷いてみせた。

「ふむ、ところでオソマツくんにミナミさん……わしの杖が見当たらんのかな、どこか知らんかね？」

「……………」

マイペースなのもご老人の特徴だ。その強引な切り口に2人はきよとんとしたが、無言で彼の手元に視線をやればジョセフもそれに気付いて己の手を見る。

「ああ……すまんすまん、自分で持っておったわい」

こういった事はたまに自分達の間でもあるが、彼にとつては日常茶飯事なのではないだろうか。よく杜王町まで来ようと思ったものだ。

だが、彼が杜王町に来る目的……それは決して生温いものではないのだ。彼はおもむろに腰を上げると窓の方へよろよろと歩き始める。

「あつ、ジョースターさん危ないですよ。船は揺れますから」

美晴がすぐにその老体を支え、共に窓まで付き添った。

「すまんのう、マナミさん」

「美晴ですよ、ミ・ハ・ル」

ジョセフの事は美晴に任せようと、億泰は先程まで彼が腰掛けていたベッドに座り彼らを見つめる。

「仗助はどこにいるかのう……仗助の顔は見えんかのう……あつ、あれが仗助かのう……」

ジョセフはしきりにキョロキョロと忙しなく視界を動かし、己の息子の姿を探している。その姿は歳を取り、シワだらけだったが、父親の姿そのものだった。

「いえ……あれは作業員さんですね。もうすぐ港に着きますし、出迎えてくれると思いますよ」

美晴の言葉を聞きほんの少しだけ目を伏せる様は、少しだけ寂しうにも見える。

「そうか……ところで、仗助はわしの事……何か言ってたかね？16年もほっといた、わしの事……」

チクリと、美晴の胸に何かが刺さる感じがした。ジョセフにとっても、仗助と会うという事は怖い事なのだろうか。これから港に到着するが、仗助の心境はどうなのだろうか。複雑な親子関係に、美晴や億泰が付け入る隙はないだろう。

「いえ……聞かないですね。億泰くんは聞いた事ある？」

「いんや……そういう話はしねーなあ、あいつ」

美晴と億泰、顔を見合わせると互いに複雑そうな顔をしていた。

「そうか……しないか……」

か細い唸れた声。その主のジョセフの姿は先程よりも小さく見えて、それがなんだかひどく切ないものに見えた。



## 父と子

「失礼します。ジョースターさん、荷物運びに来ました」

港が見え始め、仗助と康一が米粒ほどだが肉眼でも視認出来るようになった頃に船室の扉が開き、乗組員が入ってくるとジョセフの荷物に手を掛ける。

しかしすぐに慌ただしく扉が開くと別の乗組員が船室に入ってきた。

「大変です！敵がこの船に乗っていますよッ！ジョースターさんを守りに来ました!!」

「!!」

その声に3人は振り返り、美晴はジョセフに掛けた守護を更に強固にし、億泰はベッドから立ち上がり2人の前に立ち塞がるように移動する。

「くそッ！外には承太郎さんもいたっつーのに…!!」

周囲を忙しなく、それでいて注意深く見回す億泰。乗組員が言うにはチリ・ペッパーの本体である”音石 明”という男がこの船に紛れ込んでいる可能性が高いという話だった。承太郎が康一のエコーズからそのように連絡を受け、承太郎本人も今、船のあらゆる場所を捜索しているらしい。

「……??なんだこいつ、見た事ない奴だぞ……」

そこまで報告した直後、乗組員は先程荷物を運びに来た乗組員を見てボソリと呟いた。

「? 何か言ったか?」

それは本当に独り言のような呟きであり、しかし荷物を持っている——長髪の乗組員を指しながら言ったようにも聞こえ億泰は聞き返す。

すると、長髪の乗組員はぐるんとそこにいる——短髪の乗組員を振り返りながら指差して口を開いた。

「言ったのは私ですッ!!こいつ我々SPWの人間じゃあないぞッ!!」

「な、何イツ?！」

短髪の乗組員が驚いたように目を見開いて口をあんどりと開けるのを見て、すかさず長髪の乗組員は更に言葉を連ねる。

「こいつ変装してますッ!!こんな男初めて見ますよッ!!船に今まで乗ってませんでしたッ!!こいつが敵ですッ!!」

声を張り上げる長髪の乗組員は短髪の乗組員を指差しながら億泰と美晴を見ていた。それを受けて億泰が短髪の乗組員の方に掴みかかる。

「テメーかッ!!」

「わあー!!待ってください!!私は敵が来る事を教えに来たんですよ!?敵がわざわざそんな事しますか!?あいつこそ敵ですッ!!」

短髪も長髪を指差して声を張り上げる。すると億泰は今度は長髪の方に向かって拳を振り上げた。

「そうか!じゃあーテメーだなアッ!」

「ひいいーッ!!私の方が先に敵だと指摘したんですよッ!!そいつが教えに来たのは油断させるためです!!」

美晴はこの状況を見てサッと青ざめる心地になった。これは非常にまずい。億泰ではどちらが敵かなんて判断がつかないし、それは美晴にとっても同じだった。

しかしどちらかが敵である事だけは分かる。ここにいるのは間違いないくちリ・ペッパーの本体である音石明、本人だ。恐らくちリ・ペッパーも何処かに潜んで機会を窺っている。

(でも結局どちらが本体でもこんな茶番、ちリ・ペッパーで叩くための時間稼ぎに過ぎないわ!億泰くんが悩んでいる間に近付けさえすればいいんだから……!)

美晴には攻撃手段がない。そして真っ先に狙われるのはガーディアン本体であり、守護をジョセフに掛けて無防備状態である来宮美晴、己だ。

「ジョースターさん、出来るだけ安全な場所に移動しましょう……電気がないところに」

ドクドクと心臓の鼓動がうるさく聞こえる。しくじれば今度こそ

己の命はない。それでもジョセフの事を放つて自分だけ逃げるわけにはいかず、美晴はジョセフの身を支えながら周囲を見回す。しかしどこを見回しても電気のない場所などなく、今度こそ顔から血の気が引いていく。

「そんな場所はねーんだよオ、美晴……!!」

そこにパチリと小さなプラズマの音が聞こえ振り向けば、電灯からボロボロになったチリ・ペツパーが顔を出して体がゾクリと震えた。

「まずはテメーからだ、美晴……!!ボロボロだがなア……、無防備なテメーを感電死させるくらいチョロいんだよオ……!!」

チリ・ペツパーは今にも美晴に電撃を浴びせようと腕を伸ばしている。今の美晴はジョセフに付きつきりで思うように移動する事が出来ない。こんなにボロボロになってまで追い詰めてくるなんて、なんて執念深い奴なんだ。

「なっ……レッド・ホット・チリ・ペツパー!!」

億泰もようやくその存在に気付き声を上げる。

「えっ?ポツポ・ポツポ・ハト・ポツポ?」

「ジョースターさん、こっちへ……!!」

わざとなのか何なのか、ふざけた聞き間違いをしているジョセフを支えながら、美晴はとにかく出来るだけチリ・ペツパーから離れようと彼を誘導し始める。それを見て億泰はもう一度乗組員2人と向き合った。

「……ッ!分かったぜエ、どっちが本体かッ!」

その言葉に乗組員2人と美晴は弾かれるように彼に視線を向ける。彼は手汗を雑にズボンで拭い、右の拳を握ると思いい切りそれを振りかぶった。——長髪の方に。

「本体はテメーだアアッ!!」

「うぎゃアアアッ!!」

気持ちのいいほどの右ストレートパンチが長髪の乗組員の顔面に炸裂し、彼の体はジョセフの持っていた杖を巻き込んで勢いよく吹っ飛んでいく。

「2度もおちよくなよッ、この虹村億泰をッ!!」

彼の顔は吹っ切れたように凜々しいものだった。チリ・ペッパーの体からも血飛沫が上がり砂のようにその姿が消えてしまい、今度こそ敵を倒したのだと確信する。

「億泰くん……!」

思わず美晴が感嘆の声を上げる後ろで、本体である音石明が呻き声を上げながらまだ起き上がろうとしていた。

「なっ、なんで……俺の方が本体だと、分かった……!?!」

「知りてーか……?」

億泰は彼に歩み寄り、目線を合わせるように腰を下ろす。音石明の体はヒクヒクと痙攣しながら、不思議そうに彼を見上げている。

「両方ブン殴るつもりだったんだよ。俺、頭悪りーからよオ」

音石の前髪を引つ掴みながら、億泰は悪どく笑っていた。その言葉に美晴は思わず苦笑いを零す。

「億泰くんはやっぱり、億泰くんだったわね……」

彼は短髪の乗組員の方に音石の身柄を預け、美晴とジョセフの前に戻ってきて”ふんす!”と得意げであった。

「でもま、結果オーライよ。すごいわ億泰くん、大手柄じゃあないの!」

「お前の事、守るつつつたる?有言実行ってヤツだぜエ」

2人でグータッチを交わし、互いに勝利の笑みを見せ合う。

それをジョセフは微笑ましそうに静かに見守っていた。

程なくして船は港につき、タラップが棧橋におろされた。

やがて船の中から美晴に支えられているジョセフが姿を見せ、仗助を見るなり彼はハッと息を呑む。その仗助は気まずそうに顔を逸らしていたが、ジョセフは早く彼に会いたいのか自然と足が早まっていた。

「あっ……!」

美晴もそれに付き従っていたが、ジョセフの足がタラップの継ぎ目に躓き、その老体が大きく傾いて彼女では支えきれずバランスを崩す。

「……！」

それをすかさず、仗助が美晴ごとジョセフの体を支えた。労るように彼女の肩をポンポンと叩き、彼女と入れ替わりで今度は彼がジョセフの体を改めて支え始める。

「足もと、気をつけねーと海に落っこちるぜ」

「す、すまんもう……美晴さんも、世話掛けたのう」

「いえ、お気になさらず」

美晴は一言添え、軽く頭を下げてからそつと後ろに下がりその様子を眺める。歳がいくつ離れていようと、彼らは“親子”なのだ。色々な事情で感動の、とまではいえないかもしれないが、親子の対面に水を差すような真似は出来ない。

「杖があればちゃんと降りられるんじゃないが……今さつきへし折られてしまつてのう……」

ジョセフは先程の一悶着で真つ二つに折れた杖を見る。やはり船内で何かあったのかと仗助と康一は確信したが、乗組員も含めてジョセフ達全員が生きているという事は大事には至らなかつたという事だ。

仗助はおずおずとジョセフに向けて手を差し伸べる。その顔は恥ずかしそうに僅かに赤く染まつていた。

「し、しょうがねえなく……俺の手に、ほら……つかまんなよ……」  
だんだんと語尾が小さくなっていくのが自分でも情けない程だった。

ジョセフはといえばそんな息子の言葉に目をまんまるく見開いて、やがて嬉しそうに目を細めればその大きくて優しい手を握って彼に寄り添うようにタラップをおりていく。

「あつ、俺いい事思い付いたぜエ〜！仗助よオ、この杖クレイジー・ダイヤモンドで直せば、ツんぐぐ〜！」

「億泰くんちよつと黙って……！」

「ホントに億泰くんはバカだなア！早くその杖捨てなよツ〜！」

その後方、仗助とジョセフの様子を見ていた億泰は先程ジョセフが捨てていった杖を拾い上げ仗助の背中に声を投げ掛けようとしたが、

彼が気付く前に美晴が億泰の口を手で塞ぎ、康一は杖を捨てさせるようにその手をバシバシと叩く。

「んぐツ……なんでだよオ、ナイスアイディアじゃあねーのかよオ！あとバカって言うなツ！」

息苦しそうにしていたのでさすがに今回はすぐに解放してやったが、億泰だけはこの意味が分かかっていないらしく美晴は頭を抱えて溜息を吐いた。

「いやバカだよ億泰くんは……いいかい？今回だけはね……」直さない”からいいんじゃないか……！”

康一の言う通りだ。そうでなければ、仗助はとっくに杖のひとつやふたつ直してしまっているはずだ。

それが何を意味するかなんて、言葉にするのは野暮である。

未だに意味が分かかっていない様子の億泰を尻目に康一と美晴はその背を見送り、承太郎も僅かに口角を上げてから少し離れた間隔で仗助とジョセフと共に港を去っていった。

「さてと！気を取り直してよオ、護衛作戦お疲れ様会しようぜ！俺、駅向こうにいい店知ってるのよオ、”トラサルデー！”っていうめちゃくちゃうめえ〜イタリア料理店なんだけだよオ！」

「駅向こうまで行くの？ちよつとここからだと遠くない？」

残された億泰と康一と美晴は3人のジョースター一族を見送った後に遅れて港を出た。時刻は正午を少し過ぎた辺り。ちよつど昼時なので億泰は3人で外食を提案してきた。

しかし美晴はふと思いつくと不意に足を止め、ある事を思い出してブワツと冷や汗が噴き出る心地になる。

「あれ？美晴さんどうしたの？」

「おい……なんか顔色悪くねエか？ひよつとして船酔い我慢してたのか？」

康一と億泰が戻ってきて声を掛けてくるのが遠くの方に感じる。

（ろ、露伴先生にテキトーな事言っただけ出してきたの、忘れてた……!!）

俯いた視界がグラグラと揺れている。

そうだ。確か私は露伴先生に「醤油を買ってくる」と嘘をついて家を出てきたのだ。我ながら完璧だと思っていたが、家を出てから実に1時間が経過している。醤油を買いに行くだけでこれはどう考えても不自然だ。

「ご、ごめん、今日お昼ごはん作る日だったの忘れてて……」

それでも露伴の事と給仕係の仕事をしている事をバラすわけにはいかない。美晴はまたその場しのぎの、しかし今度こそそれらしい誤魔化しをしながら顔を上げて乾いた笑いを零す。

「そーなのか？残念だなア……大変だよな、家事つてよオ。んじゃ、トラサルデーはまた今度にするかア」

億泰はあの父親と2人暮らした。家事も全て億泰がこなしているという話で、彼はその大変さを共有出来る唯一の友人であった。

「また学校でね、美晴さん」

「じゃあなー美晴、気イ付けろよオ」

2人は慌ただしく港を後にする美晴の背に手を振り、彼女が見えなくなるまで見送っていた。

「た、ただいま帰りまし……ッ」

自転車を全速力で漕いで数分。美晴が息を切らしながら岸边家の玄関を潜ると、そこには既に露伴が仁王立ちしていて思わず「ヒッ！」と短く悲鳴が上がった。

「おかえり美晴。随分と遠くまで醤油を買いに行っていたんだねエ」

彼の顔は僅かに口角が上がっているものの目が笑っておらず、その目は探るように美晴の手元を訝しげに見つめる。

「いや……醤油はまだ十分にあっだし、そりゃあ買って帰ってくるわけがないかア」

ギクツと肩が揺れる。確かに醤油を買ってくるとは言ったが、肝心のそれはまだ半分以上もボトルに残っているのを美晴も把握している。だから悩んだが、醤油を買ってくるのは諦めたのだ。

露伴がそれを知っているとは思わずにあのテキトーな嘘の材料にしてしまったが、……いや、まさか、己が出て行った後にガサ入れで

もするかのようには戸棚を調べたのだろうか。

「まつ！それより腹が減ったから早くうどん作ってよ、食べずに待っててやったんだからさ。君も腹減ったろ？ひもじい奴をいつまでも立たせとく趣味はないからな」

しかし露伴は訝しげな態度を一転、いつもの我儘な彼に戻って美晴の頭を雑に撫で叩いてやった。それを「わっ」と短く声を上げて受けた美晴を尻目に、リビングへと先に移動し始める。

（どーせ） 気になるヒガシカタくん” に会ってきたに違いないんだ。あまり追求してこないだのような癩癩を起こされても困る。美晴は感情が爆発すると手が出ちまうようなアブなっかしい奴だからなく……ここは黙つとくのが吉だ）

露伴はこないだの身の毛もよだつような出来事を思い出して密かに身震いした。

だが給仕係の仕事をこなし、学校に行き、そうやって普通にしている限りは露伴にとって美晴は娘のような存在なのだ。雑に扱っているように人によつては見えるかもしれないが、それなりに情はあるし可愛がつてもいる。それはつい最近——形兆の件の頃に——自覚し始めた事だ。

ぼくは美晴を同居人としてそれなりに大切に想っている。だから彼女の恋路を応援してやるのが筋ってヤツだ。どーせそのうち家に連れてきたりするんだらうから、その時に好きなだけ観察すりゃいい。露伴はそう思いながらリビングの椅子に腰掛け、昼食の準備を始める美晴の背中を見つめる。

（”ヒガシカタ ジョウスケくん” ねエ……電話の声だけじゃあ判断つかないな。早く家に連れてこい、美晴。いや、連れてくるまでに関係を発展させろ！……だが、ぼくのお眼鏡に適わない男なら……引き剥がしてやるッ！）

ギンツと睨みを効かせると視線を感じたららしい美晴の体がビクツと跳ね、驚いたような表情を晒しながら露伴の方を振り向いた。

「せ、先生……う？どうかしましたか？」

「別に？ほら、お腹空いたから早く」



おろおろと問い掛けてくる美晴を催促するように指でテーブルをトントン鳴らせば、彼女はまたすぐに鍋と向き合っとうどんを茹でていく。

（大切な同居人をみすみす何処の馬の骨とも知らない男なんかにはやるもんか。絶対ぼくを通してからだ。父親気取りかもしれないがぼくは本気だ。ぼくが認める男でなければだめだねッ！）

（露伴先生の視線が痛い……！やっぱり怒ってる！茹で加減を間違えないように集中しなくちゃ……!!）

双方噛み合わない理由で露伴は無意識に睨みを効かせ続け、美晴は怯えるように縮こまってそれを受ける、そんな昼時の一コマであった。

岸辺露伴と東方仗助。彼らもまた引き合うように出会う事になるのは互いに想像出来ないほど近い未来の話である事など、この時誰も知る由もなかった。

”守りたい”と思う心

空条承太郎が杜王町に来てから1ヶ月。5月上旬で爽やかな陽気が降り注いでいる。

色々な事が起こりすぎて、まだどうヶ丘高校に仗助や美晴達が入学してから1ヶ月ほどしか経っていないのかという心地になる。

チリ・ペツパーの本体である音石明は、スタンドによる窃盗罪で警察に逮捕された。被害総額は実に5億円であり、全て押収されていた。警察にはスタンドが見えないので、一体どんな方法でこんなに盗んだのか皆目見当もつかないだろう。

そして同じように盗まれていたスタンド使いを増やす弓と矢も無事にSPW財団に回収された。何やら色々な調査をするらしく、厳重な管理下に置かれている。

そんな5月の夜。

仗助は自宅の自室でベッドに転がりながら1枚の封筒を眺めていた。もう何回も中身を出し入れしているのだが、改めてもう一度そこに入っている紙を取り出す。

「先日は邪魔をしてすまなかったな。これはその詫びだ」

ジョセフ護衛作戦の数日後。

承太郎がわざわざ東方家まで出向いたかと思えば、彼は仗助にその封筒を渡してきた。一言断ってからその中身を確認すると、そこに入っていたのはS市内にある水族館のチケットで、仗助は首を傾げる。

「なんスか、これ。ゴールデンウィーク中に海洋生物のお勉強でもしなさいって事っスか?」

「違う。よく見ろ、2枚あるだろ」

その言葉にチケットを擦ると、ピッタリくっついていたもう1枚のチケットが顔を覗かせた。しかしそれが何を意味するのか、承太郎が

何を言いたいのか理解出来ず、やはり仗助は首を傾げていた。

「えつと……承太郎さんと行くつて事つスカ……？」

ようやく絞り出した回答に、さすがの承太郎も「やれやれ」と帽子のツバを摘んで目を伏せる。

「テメー……これが先日の詫びだと言っているのが分からねーのか。急いでいたとはいえ、”テメーと美晴の邪魔をした”詫びだというのが分からねーと」

彼が溜息混じりに答えあわせをする前で、仗助はぱちぱちと目を瞬かせる。そしてやつと思考が追い付くとカツと顔に熱が集中するのを感じた。

「こつ、ここに美晴ちゃんもツ!?行くつて事つスカツ!?」

「何度も言わせるな……いいか。ここは海洋生物を研究している俺が選んだ、展示内容も充実しているS市内で1番デケエ水族館だ。女ウケもいいと聞く。しくじるんじゃあねえぞ」

承太郎がそう言い残して東方家の軒先から去っていくのを、仗助は呆然としながら見送る他なかつた。

「んなコト言ってもよオ……誘えるかよ……」

今日は透明な赤ちゃんもジョセフの事でくたくたに疲れ切っていた。そんなこんなで連休最終日も終わってしまい、明日から学校、また来宮美晴と顔を合わせる事になる事実には仗助は長い溜息を吐いた。

あれから2人の仲はなんだかあやふやなままだった。付き合っているとも言えるし、そうとも言えないような、とにかくフワフワなままの関係であり、美晴も相変わらずすぐに下校してしまうのでゆつくり話す時間もない。

けれどもこの感情は、この心の奥底からじわじわと滲み出てくる感情は、まさしく”恋”だった。己もまた美晴のように、言葉の影響を受けてハッキリと彼女を意識するようになっていたのだ。

『また連休明けにね、仗助くん』

連休直前、隣の席の美晴がそう微笑みかけながら手を振る姿が脳裏に浮かび、自然と頬が紅潮するのを封筒で隠す。

「明日……明日か……」

頭の中がボーッととして、美晴の姿ばかり思い出してしまう。

仗助くん、とあの声で呼ばれるだけで心臓が跳ねる。

特別可愛い部類に入る容姿というわけでもないのに己の目には一番可愛く見えて、友達想いで、強い意思を持っていて、東方仗助にとつて来宮美晴はグレートな女の子だった。

だがその中で、不意に先日チリ・ペツパーに殺されかけた美晴の姿がフラッシュバックしてザッと頭の中が急に冷えた。

彼女の悲痛な叫び声と、切断されて冷たくなつた左脚の感触を思い出してザワザワと胸騒ぎが止まらなくなる。

明日、明日本当に彼女に会えるのだろうか？

自分の知らないところで、危険なスタンド使いに出くわして何かされていたら？

「い、いや……あいつのスタンドは鉄壁なんだぜ？承太郎さんお墨付きのよオ……そう簡単にくたばりやしねーっつの……」

ハハ、と乾いた笑いが零れる。そう分かっているのに、心臓は静かな部屋に響くようにドクドクと大きく波打っている。

本当に、今の今に、彼女はこの町に存在しているのだろうか？

仗助はムクリと体を起こすと自室を出てリビングにある電話の受話器を取り、岸边家の電話番号をプッシュした。時計を見ると22時を回っており、内心やつちまったと少し後悔したが、呼び出し音が不意に途切れて意識がそちらに向く。

『はい、岸边です』

「も、もしもし、東方です、けど……」

聞こえたのは男の声だった。彼は『ああ、』と仗助の事を覚えていたようでしばらくの間保留音を流す。その間に仗助は水を一杯飲み、ぐったりとソファに身を沈めていた。

『もしもし、東方くん聞こえるかい？』

保留音が止み、再び男の声が受話器から聞こえるとピンと体が強張り姿勢を正す。

「は、はいっす」

『悪いね、美晴はもう寝てしまったみたいだ。明日から学校だし、君も早く寝たら?』

岸辺の言葉にほんの少しだけ落胆する自分と、彼女がそこにいるという安堵を覚える自分が半々くらいで存在していたが、ひとまず自分がある程度冷静になったのを感じて受話器を握り直しながら、別に見えるわけでもないのに仗助は数回頷いた。

「そ……そっすね、すみません」

『シーよろしい』

電話口の向こうの彼も頷いているのだろうか。会話ももう終わるだろう。しかし受話器から耳を離しかけた時、また彼の声が聞こえてきた。

『ねえ、東方くん。君から見ても来宮美晴”ってどんな子?』

「えっ……」

ギツ、と電話口の向こうから椅子の軋む音と共に、岸辺の声はそう言葉を連ねた。思わずギクツと肩が跳ね、心臓が一瞬止まったかのような心地になる。

『君は美晴の事、どう思ってるのかな』

「ちよ、ちよっと待ってくださいいっす……!な、なんスか急に……!」

せっかく冷静になり掛けていたのに、また顔に熱が集中するのを感じて仗助は声を裏返しながら動揺を露わにした。その様子に岸辺はクスクスと小さな笑い声を零す。

『ソッフ。いやね、ちよいと化した質問だったんだが、君は驚く程分かりやすいな』

その声に更に顔が熱くなる。そんなにあからさまだっただろうかと思いつ返すも、自覚する程動揺しているのだからそりゃあそうだと仗助は肩を落とした。

『まっ!別に深い意味なんてないさ。引き止めてしまつて悪かったね。これからもよろしくしてやってよ』

「は、はいっす……」

『じゃ、おやすみ』

そうやって一方的に電話が切れ、ようやく緊張が解けたようにソ

フアにダラつと身を預けた。

結局岸辺に弄ばれて終わってしまった。美晴が時々意地が悪いのは岸辺に似たのだろうか。

「明日どんな顔して会えばいいんだよオ……」

岸辺は明日の朝、この事を美晴に報告するに違いない。

仗助の心配事は減らずに上書きされただけだった。

翌朝。

美晴がいつも通り朝食を作っていると、いつも通りの時間に露伴がリビングにおりてきた。

「おはよう、美晴」

「おはようございます、露伴先生」

いつも通り、何ら変わらない朝。今日から連休が明けて世間は仕事や学校が始まる。勿論露伴のように連休など関係ない職種の人間もいるが、それは今は置いておく事にする。

「ああ、そうそう……昨日夜中に東方くんから電話があつたよ」

リビングのテーブルの椅子に座り、美晴が朝食を盛り付けるその背中を見ながら言うと彼女は僅かに反応を示していた。

「そうなんですか？起こしてくれてよかったのに……」

「いや、向こうも特に急いでる感じじゃあなかったからさ。暇だったし少し彼と話した。今度連れてきてよ、興味湧いたから」

露伴のその言葉に、美晴は盛大な溜息を吐きながら盛り付けたベーコンエッグの皿を2人分テーブルに置いた。

「絶対だめです。先生、そんな事言つて仗助くんに」へブンズ・ドアー”、使うつもりでしょう」

「バレてら」

”バレてら”、じゃあないですよー」

まったくもう、と美晴はむくれていた。露伴の考えている事などお見通しだ。仗助に能力——へブンズ・ドアーを使って記憶を読み、作品のネタにしたり私の事を間接的に調べるつもりなのだ。そんな事は絶対にさせない。彼の事は私が守る！美晴はそう心に誓っていた。

「ふーん、随分と東方くんが大事なんだねエ」

露伴はそんな事を言って美晴と同じようにむくれる。それを尻目に彼女は炊飯器から炊きたての白米を茶碗に盛っていく。

「友達はみんな大事です。仗助くんだけじゃありません」

億泰も康一も由花子も、露伴の好き勝手にはさせない。美晴が自分の住居である岸边邸に友達を連れ込む事はまずないだろう。

「ふーん……」

つまらん、といった様子で露伴は長く息を吐く。そうしているうちに朝食が全てテーブルに並び、挨拶をしてから露伴の向かいに座る美晴はそれらを口に運んでいく。

（美晴の”友達”に”気になる東方くん”……ぼくも気になるなあ……美晴は正義感が強いなあ。いいヤツだ、本当に。しかしぼくはとても心配なんだ）

露伴はここ1ヶ月ほど前からの彼女の事を思い返した。

最近の美晴は何かと厄介事に巻き込まれている匂いがする。いつも通り振る舞っているつもりかもしれないが、たまに疲れているような顔をしている時がある。

こないだだってそうだ。醤油を買いに行くと言って何故1時間以上掛かる？東方に会いに行っていただけだとして、何故そんなにも疲れた顔をしていた？もっと浮かれた顔をして帰ってくるものだとばかり思っていたんだぞ。

そして最大の謎はあのしきりに落ち込んで泣いていた日の事だ。詮索はしないと決めたが、ずっとぼくの胸の中にしこりのように存在し続けている。

（ぼくに隠し事なんて甘いぞ、美晴）

共に暮らし始めて2ヶ月近く。嫌でも毎日顔を合わせているのだから、少しの変化だつてすぐに気が付く。東方仗助を始め、美晴の周りにいる人間の誰か1人の記憶を何とかして読めれば、その理由も分かるはずだ。

（けどま、そう都合良く出向いてくるわけもない。下校時間を狙って出会い頭に能力を使うか……いや、人目もあるしなあ。ああ、めん

どくせーなア。このぼくが何故こんなにもこいつの事で悩まなきやあならないんだ)

箸も持たず、トントンと指でテーブルを鳴らす音がリビングに響く。

「今日は片付け、先生がやってくれるんですか？」

しかし向かいの美晴の声にハツと顔を上げれば、ジツと彼女は心配そうに露伴の顔を覗き込んでいた。

「……そうだな、今日はやってやろう」

「すごい上から目線」

「早く食べな、遅刻するよ」

しっしっ、と手を払って急かすとまたむくれながら美晴は朝食を食べるのを再開する。

こいつが学校に行ってから考えよう。それより腹も減ったし、朝食を食べる方が先だ。

露伴はようやく箸を持つと炊きたての白米を口に運んだ。

美晴が学校に着き駐輪場に向かうと、いつも自転車を停める場所に仗助がいた。

「おはよう、仗助くん」

「ん、はよ、美晴ちゃん」

仗助は美晴が自転車を停めるなり「ちよつと、」と彼女の手を引いて駐輪場を出て、校舎裏まで歩く。

「どうしたのよ仗助くん、こんなところに……」

普段から人気のないこの場所は朝だからかもっと静かに聞こえ、表の喧騒が遠くの方のように感じた。

「その……よオ。俺らは……付き合ってる、って事でイイ、んだよな……?」

ここに連れてきたままの小さくて柔らかな手を握りしめて、仗助は頬をほんのり染めながらも美晴を見つめる。その視線を受け、まるで手のひらから伝染したように彼女も頬を染めておずおずとひとつ頷くのを見て、仗助はひとまずホツと安堵しながら一旦手を解き懐にし



まっていた封筒を取り出す。

「これ……承太郎さんからもらったんだけどよオ。今度……2人で行ってみねーか？」

封筒の中から水族館のチケットを2枚取り出し、美晴にも見えるように1枚差し出せば彼女はそれを僅かに目を見張りながら受け取り券面を眺めていた。

「これって……その、”デート”ってやつになるのかしら……？」  
「……多分」

”デート”。その単語に2人して顔を赤く染める。ドキドキと心音が響き、チケットが僅かに湿るような手汗が出る。それを押しつけるように美晴は視線を上げて破顔した。

「嬉しい……私、あつちの方って行った事ないから……仗助くんに行くの、嬉しいわ！」

その笑顔に、その声に、仗助はギュツと心臓を鷲掴みされる心地になった。まさかこんなに喜んでくれるなんて。先程まで抱えていた不安が嘘のようだった。

「そ、そっか、美晴ちゃんって外から来たんだっけか……」

来宮美晴の出身は確か静岡だったはずだ。前にチラツと聞いた事があったような。それも由花子と彼女が話しているのを耳にしただけの。随分と遠くから越してきたんだな、くらいにしか仗助は思っていなかったが、今となってはちよっぴりチャンスなんじゃあねーかと彼は考えていた。

「お、俺で良ければ、ここ以外も案内してやるぜ」

「本当に？」

「ん……これからもっと、一緒に出掛ける事も多くなるだろーしよ……」

仗助のその言葉に美晴の瞳の輝きが増していく。

もうあの弓と矢の事もないし、これからはいつも通りの安息の日々が始まるはずだ。普通に過ごし、普通に2人で話し、そこらにいるカップルと同じように普通の恋をする事だって出来る。

「素敵だわ……好きな人とそうして過ごせるのは。ありがとう、仗助

くん」

そうやって幸せそうに笑う彼女を、守りたい。これからも何か、この平和を脅かすものが万が一現れたとしたなら、彼女と、その彼女が住むこの町は己が守る。

もうあんな肝が冷えるような思いは御免だ。

東方仗助は幸せを噛み締めながらも、密かにグツと強く拳を握っていた。

こびりついて離れない彼女の叫び声を、戒めにしながら。

## 岸辺露伴の暴走

放課後。

仗助と美晴はカフェ・ドウ・マゴにてお茶をしていた。こうして2人きりでのんびりとした時間を過ごすのは、付き合ってから初めての事だった。

「悪りーな、本屋付き合ってもらってよ」

「ううん、私も買い物付き合ってもらったから」

互いに亀友マーケットにある本屋と食料品売り場での用事を済ませ、その袋がテーブルの空いた椅子に置かれている。

「それにしても仗助くんが”育児書”って……！」

美晴は本屋の袋の中身を思い出してクスクスと笑みを零す。それを見て仗助は「あっ……！」と声を上げて飲んでいたコーラのグラスを置いて彼女を指差す。

「し、仕方ねーだろオ!? 透明な赤んぼの事でジョースターさんに御使い頼まれてんだからよオーツ……！」

「分かってるわよ……！ お昼休みに聞いた！ 大変だね、色々」と

今日の昼休みに億泰と康一と一緒にご飯を食べている時に、昨日拾ったという”透明な赤ちゃん”の事を聞いた。今のところジョセフにしか懐いていない赤ちゃん、ジョセフが近くにいないとスタンド能力で自分の体や周りのものを透明にしてしまうらしい。

そこでジョセフは息子である仗助に御使いを頼んだ……という運びだ。

「でもまさか、”恥ずかしいから代わりに買ってきてくれ”なんて言われるとは思わなかったけど……！」

そう。仗助は美晴を本屋に連れて行き、育児書が置いてあるコーナーをジツと吟味したかと思えば、数冊棚から引き抜いて財布と共に彼女に預けたのだ。上述のセリフを添えて。

まだ美晴が笑っているのを見て、仗助はカアアツと羞恥で顔を赤らめる。彼にとっては難易度の高い御使いだったようだ。

「そつ、それよりよオ……水族館、いつ行くよ……?」

椅子の背もたれに寄りかかり、強引に話題を変えるように仗助はコーラを一口飲んでからそう切り出す。

今朝、やつとの思いで彼女に水族館のチケットの事を話せた。だが日取りをまだ決めておらず、2人して「うーん」と唸り声を上げる。

「中間考査と体育祭の事を考えると、来月になるのかしら……」

「だよなあ……あー、遠いなア……」

2人きりで誰の干渉も受けずにデート。最初こそ恥ずかしさと緊張が占めていたが、そう考えるとアレコレとプランを練り始めるのが止まらなくなっていた。絶対完璧にエスコートしたい……それが”カッコいい男”ってやつだ。おかげで仗助は今日の授業をあまり聞いている。

しかし実際、学生というのは忙しい。美晴が言った通り、今月中間考査があつて来月の頭に体育祭がある。チケットの有効期限は1年ほどあるのでいつ行つても構わないのだが、あまり先延ばしにしても良くない。

「待ち遠しいわね……承太郎さんが選んだんだから、きつとすごいところよね。イルカとか見たいな……」

美晴も今日は水族館デートの事を考えっぱなしだった。水族館なんて今まであまり関心がなく最後に行ったのもいつだったか忘れてしまったが、この一件で途端に興味が湧く施設になっていた。

仗助くんと一緒に行くその場所は、きつと何処よりも大切に素敵な場所なんだ。そう思うとロマンチックな気分になる。

しかし駅前にある時計台の時刻を見てハッと現実に戻ってきてしまった。

「いけない、そろそろ帰らなきゃ」

「うわ、もう17時かよ。今日はサンキューな、美晴ちゃん」

2人して慌ただしく席を立ち、それぞれ椅子に置いていた袋を手にする。仗助が「じゃあな」と手を振ってくれるのを、美晴も目を細めて手を振り返す。

「また明日ね、仗助くん」

”また明日”。そう言えるのがとても幸せな事に思えた。  
だが、今日という日はこれで終わりではなかった。

「先生、ただいま帰りました」

美晴がいつも通りに岸边家に帰ってくると、家の中はシンとしているように感じた。

（お仕事中かな……、あれ？）

次いで靴を脱ぐために玄関先を見てみると、露伴のもの以外の靴が2足ある事に気付いた。どちらの靴も露伴のものと比べると小さめで、学生が履くような靴だ。

（お客さんが来てるの……？で、でも、この靴……この靴はッ！見た事あるわッ！）

お茶を出さないと、と思うより前に嫌な予感が全身を伝っていく。

2足あるうちの片方は美晴もよく知っている、毎日顔を合わせる人物が履いている靴だ。その彼がどうしてここに、と考えるより先に美晴は靴を慌てて脱いでスリッパも履かずに露伴の仕事場のある2階へ駆け上がっていく。

（そんなまさか……！どうしてこの家が分かったの！？この家に来てはだめなのよ、”康一くん”！）

そう、あの靴は己の友人である”広瀬康一”のものだ。大方もう片方の靴の持ち主である誰かに連れられたのだろうが、露伴が返事をしないという事は立て込んでいるという事であり、その立て込む理由が彼らであるならば非常にまずい。

岸边露伴は週刊誌で漫画を連載している人気漫画家だ。その彼が「仕事場を見学していくかい？」と言ってついていけない奴なんていない。彼のファンなら尚更だ。そうやって術中にハマった人間に何をやるかなんて、それはたったひとつしかない。

「康一くんッ!!」

半ば叫ぶように露伴の仕事場の扉を開ける。しかし扉を開けた直後に見えたのは岸边露伴その人だけ——正確には距離が近すぎてそう見えただけ——で、その顔を見上げる前に視界は”岸边露伴の漫画

原稿”で埋まった。

油断した。あまりに慌てていたものだから私は、ガーディアンを守護を”掛け忘れた”。

”へブンズ・ドアー” ツ!!」

その声と共にバラバラと紙が捲られる音が聞こえ、膝から崩れ落ちる。

「美晴さんーッ!!」

康一の悲鳴が聞こえ、そこに彼がいる事を認識した時には美晴の”扉”が全て開き切っていた。

「フフフツ……! 実にいい気分だ。やっと捕えたぞ、美晴!」

岸边露伴はニヤついた顔を隠しもせず崩れ落ちた彼女の体をグイツと引つ張り部屋の中へ招き入れる。スタンド使いでなければ気絶してしまう衝撃で”本”にされた美晴の体は思うように動かず、されるがままに床を引きずられていた。

「ろ、露伴先生ツ……! なんて事をツ!」

それでも美晴は”自分がついに本にされた事”よりも”自分の友人を本にした事”の方で露伴をギリツと睨み付けていた。しかし露伴はその視線を意に介さない様子で美晴の顔部分のページを捲り、しきりに手に持っているページと照らし合わせている。

「ふん……; なんて事を”ぼくを騙しておいてそれはないだろ?” 康一くん”のページに君の事も色々書いてあったんだ」

そしてあるページに辿り着くとその手を止め、その頬を撫でるように指を這わせる。

”虹村形兆の死は私の責任だ。私がつと早くレッド・ホット・チリ・ペッパーの存在に気付いていれば形兆さんは死ななかつたかもしれない。ごめんなさい億泰くん。”……か」

「……ッ!!」

”記憶を読まれる”という感覚。それも最も読まれたくない記憶を読み上げられ、ドクリと心臓が跳ねて頭が真っ白になった。

”例えチリ・ペッパーに左脚を切断されて殺されたとしても、それが両親への罪滅ぼしになるのならそれもいいと思った”……だど?”

「……ッ」

岸辺露伴の”ヘブンズ・ドア”で本になった記憶は嘘を吐かない。100%事実なのだ。

チリ・ペツパーに電気ケーブルに飲み込まれた際のショックで失った記憶は、日が経つにつれて少しずつ蘇りつつあったのだ。だが今読み上げられた事で完全に蘇った。

美晴はその時、本当に本気でそう思っていた。

億泰が”罪”は何らかの形で自分に返ってくると言っていたように、自分が両親を救えなかった”罪”がこういった形で返ってきたのだと、そう思っていた。

「なんだよこれは…ッ！君はこんな事を隠してッ！ぼくを騙し続けたんだなッ!?死にかけてだどッ!?ふざけるなッ!!」

グツと彼女の顎を掴んで引き寄せれば露伴は激昂した感情を力任せにぶつける。

「先生違うんです…！私は先生を巻き込みたくなかったです!!」

「だまれよッ!!まだ隠してる事があるよなアッ!?東方仗助の事も読んでやるッ!!」

「や……やめてください…!!」

露伴が次のページを捲ろうとする手を必死で掴んで抵抗する。互いの力が拮抗しブルブルと痙攣するように震え、それでも露伴の方が力が強くて手は徐々に彼女のページへと近付いていく。

「もうやめろッ!!岸辺露伴ッ!!」

その時、部屋に2人以外の声が聞こえ露伴も美晴も弾かれるようにそちらに顔を向けた。

「やめろよッ!!お前と美晴さんがどんな関係か知らないけど！それ以上美晴さんに何かしてみろ！ぼくはお前を許さないぞッ!!」

康一だ。彼は既にヘブンズ・ドアによって扉を開かれていたが、それでも勇ましく立ち上がり、露伴を力強く指差していた。それを見た彼はニヤリと口角を上げて康一の方へ移動を始める。

「康一くん。やっぱり君には主人公の素質ありだ。いいね今のッ！最高だッ！カッコいいじゃあないかッ！」

素晴らしい！と両手を広げながら歩く露伴にとっては今の状況、何もかもが鮮度最高のネタの宝庫に見えているのだろう。康一が美晴のために声を上げるその姿だって、物語の主人公がヒロインに手を出した悪党に向かつて叫ぶ様子そのままであり、まるで”100%なりアリテイ”でそこに存在しているようで胸が躍るだろう。

これは思った以上に最悪のケースになってしまったと、美晴は冷や汗をかいた。

露伴の能力で扉を開かれてしまったら、美晴のガーディアンの守護はいくら掛けても無効化されてしまう。何故なら”露伴の攻撃は続行中だから”だ。己には今、康一やそのすぐそばにいる康一の友人、そして自分自身を守る力すらない。

「気に入ったよ、本当にね！なあ、明日も来てくれよ。もうそのように”書き込んでおいた”からさア。とりあえず怪しまれちゃあ仕方ないから今日は帰ってくれたまえ」

「な、なんだとオ…ッ！」

しかし今の状況で聞き慣れない単語が出てきて思わず目を見張る。”書き込む”。それは美晴も初めて聞く攻撃方法だった。

(まさかこのヘブンズ・ドア、”読むだけ”じゃあないのか！)

美晴は顔以外の、本にされた腕や胸のページをパラパラと捲る。そこには己が今まで体験した事柄が細かく、更に己の感じた事までが記されておりゾツとする感覚に陥る。

そしてついにその”余白”に露伴の筆跡で何か書いてあるのを目撃した。

「美晴。君にももう”書き込み済み”だ。君の”スタンド”……”ガーディアン”だったかな？そいつで守ろうと思っててももう手遅れだよ」

露伴は康一とその友人を追い返し、仕事場の扉を閉めると美晴の開かれていた扉を何かされる前にパタリと閉じた。

「な……何をしたんですか。”書き込む”って……！それにさつきから手に持っているそれは……！」

未だ座り込んだままの美晴を覗き込むように、露伴は口元に笑みを



浮かべながらしゃがんで頼杖をつく。

「何って、もう勘付いているくせに。それを訊くという事は己の仮説に真実味を持たせたいんだな？」

真面目だなア、と露伴は感心している風だった。美晴がギリツとまた睨むと「怖い怖い」とおどけたように肩を竦める。

「ぼくの能力は”読むだけ”じゃあない。”ページの余白に書き込んでコントロール下に置く事も出来る”んだ。……ぼくの能力が”読むだけ”だと思つて油断したなア、いつも防御してたのが仇になつちまつたなア！」

そして先程から手にしている顔の形をした紙を彼女の眼前にチラつかせ、クツクツと喉奥から笑い声を零す。

「それでもつてこれは”ご存知” 広瀬康一くん”の”記憶そのもの”だ。こうしてページを破り取つて奪つちまう事だつて出来る！すごいだろう？ ぼくの”ヘブンズ・ドア”はッ！」

潜めた笑い声をついに高笑いに変えて露伴は心底愉快そうだった。その姿を見て美晴はサツと青ざめて本気で震え上がる心地になり、この場から逃げ出そうと背後にあるドアノブに手を掛けるが、すかさず彼は扉を押さえた。

「おっと。見ただろう？ 君は逃げられない。そう書き込んだ。今後一切、君をこの家の敷地から外へは出さないよ」

”わたしは岸边邸の敷地から外へ出る事が出来ない”。

先程目にした腕部分のページに書き加えられた一文を思い出し、ヒュツと息を呑みながら頬をパタパタと触る。

「フム……そつちに書いたのは確か、”わたしは電話を使う事が出来ない”、だったかな？」

この部分は自分で見る事が出来ない箇所なので、もしその内容が本当ならば助けを呼ぶ事も不可能という事になる。

なんとという事だ。こんな恐ろしい事が出来るなんて、彼は一度も話した事がなかったしそんな素振りを見せた事もなかった。そして身をもって体験する事も、己の能力を使つてきたせいで今の今までなかった。

美晴は震える手で今度は胸の辺りを触る。露伴は口元に手を当て、思わずニヤけるのを隠しているようだった。

「そこは心臓……つまり」心だ。そこに書いたのは最も残酷な事だろうね」

ブワツと汗が噴き出て、俯いた視線がぐらぐらと目眩のように揺れる。

「でもそれは教えなくてもいいだろう？もう関係のない事だ。さて、明日は仕事が終わったら君の退学届を書いてやらなきゃな」

ポンと美晴の頭を撫で、露伴は飲み物を取りに仕事場を一旦出て行った。

心臓が警鐘のように大きく波打つ。きつと”ここ”に書かれているのは想像したくない程に絶望的な事柄だ。直感で分かる。

「……露伴先生、どうして……ッ」

先月、空条承太郎から聞いた”スタンド使いを意図的に増やしている者がいるかもしれない”という話。それを聞いた時から、美晴は己を救ってくれた露伴を守りたいと思っていた。今まで危険な事に巻き込まれていた事も、露伴に心配させないために黙っていた。美晴の記憶を読んだならそれくらい書かれていたはずなのに、何故か理解してもらえなかった。

それがとても悲しい事のように感じて、床に涙がぽつぽつと落ちていくのも気に留められないほどだった。

「わたしはわたしが友達だと思っている人達をそうと認識する事が出来なくなる”……我ながら私怨だと思っし、ちよいとやり過ぎかなとは思ったが……元を断てば厄介事に巻き込まれずに済むだろう。ま、外に出すつもりはないが念のためだ」

露伴は台所でボトルの紅茶をグラスに注ぎながら、閉じる直前に美晴の胸部のページに書き込んだ内容を思い返す。

広瀬康一の記憶にも東方仗助の事が書かれていた。そして彼もまた、東方仗助に会った4月からの記憶は今までの平凡さを覆す程に波乱万丈なものであり、美晴もたびたびそこに居合わせては厄介事に巻き込まれていた。

特にシヨツキングだったのは彼女が”死にかけていた”事だ。それはつい最近の事で、美晴が醤油を買いに行くと言って1時間以上帰ってこなかった日の事だった。

(もうあんな怖い目には遭わせないよ……ぼくが守ってやるんだからな。ここにいれば君は安全なんだ)

もうこんな肝が冷える思いは御免だ。

これは自身のためであり、彼女のためなのだ。己の知らないところで死なれるくらいなら、ここに閉じ込めて四六時中そばに置いておくのが1番いい。

(康一くんには明日も来るように書き込んだが、明日には君は彼を友達と認識出来ないはずだ。もう関わらせないぞ)

広瀬康一の事は露伴も気に入っではいるが、それとこれは別だ。彼には悪いが美晴には近付かないでいただきたい。

来宮美晴が彼の事を守りたいと思う事。それと同じように、岸辺露伴は岸辺露伴なりに、やっとな出来た大切な人を守ろうと必死だった。

## 漫画家のうちへ殴り込もう

翌朝。

美晴はあまり寝付けなかったせいで体調が悪くなかった。だが、露伴は仕事の合間に甲斐甲斐しく彼女の世話を焼き、今日は学校を休む連絡まで入れてくれたのだ。

(今朝の露伴先生、バカに優しくかったな……お粥まで作ってくれたし) つい先程の事を思い出し、ベッドの中で寝返りを打つ。食欲はあるし、熱や頭痛もないのだが、体が重くてだるい。昨日は色々あったし、ストレスのせいなのだろうか。

露伴は来週分の仕事を終わらせると言って仕事場に籠りきりだ。その彼の邪魔をしているのではないかと罪悪感が湧いてしまう。

(やっぱり少し、起きていようかしら。お昼ご飯は私が作ろうかな……)

重い体を起こし、洗面所までゆつくりおりていくと髪を梳かして結び、そのまま歯磨きや洗顔を済ませる。そうした直後に家のチャイムが鳴り響き、美晴は部屋着のままだったが迎えなければと玄関に赴いた。

(……知ってる。この人達、私のクラスの人とそのお友達だわ)

覗き窓から訪問者の姿を見ると、そこにいるのは時代遅れなりーゼントに改造学ランを纏う長身の男子生徒と、顔に傷の入ったいかにも不良顔の男子生徒、計2名だった。

「はい、何か御用でしょうか」

露伴には「怪しいヤツだったら居留守を使え」と日頃から言われているが、それでも「一応出てやらないか」と思ってしまう玄関を開ける。するとその姿を見た2人は目をまんまるく見開いて彼女に掴みかかる勢いで身を乗り出した。

「み、美晴ちゃんッ!? どうして美晴ちゃんがこの家から出てくるんだよッ!」

「おい美晴ッ! 今康一がこの家に入ってくの見たんだよッ! 何か知ら

ねーかッ!？」

リーゼントの彼が美晴の両肩を掴んだ。美晴はそれをハツと息を呑みながら受け、しかし次にはそれを払うように手で押し退けようとする。

「……思い出したわ。あなた”東方くん”ね、同じクラスなの。康一つて……広瀬康一くんの事かしら……私は知らないわ、ごめんね」

”東方くん”。そう呼ばれた彼——仗助はゾクリと心臓が震える気分になった。まるで初対面のような、よそよそしい態度。いや、本当に初対面だった先月の頃でもここまでではなかったはずだ。美晴の肩を掴んだ手がだんだん冷えていくのが分かる。それを隠すように彼は引きつったような乾いた笑いを零した。

「は……おい、美晴ちゃん。違うよな? 仗助くん”っていつもみたいに呼んでくれよ。なあ、……違うよな」

「……ごめんなさい、”友達”でもないのにいきなり下の名前って……あんまりしたくないわ」

今度こそザツと顔から血の気が引いていく。それを見た不良顔の——億泰は俯いて視線を背けている彼女の空いている手首を引っ掴んでこちらにグイツと引き寄せた。

「おいイツ美晴ツ!! 朝から悪い冗談はよせよッ!! 早く着替えてよオ、学校行こうぜ!？」

勢いが凄まじく慌ててそちらに視線を向けるが、その鬼気迫る表情に今度は美晴の方が血の気が引くように「ヒツ」と短い悲鳴を上げて彼らから離れようとだるい体でもがく。

「や、やめて……! 離して!」

「離さねーぜエ!?! そのタチの悪い冗談を今すぐやめろッ! 終いにやあ怒るぜツ!?!」

「や、やめろよ億泰……! 怖がらせてどーすんだよッ!」

仗助は億泰と美晴を無理矢理剥がすように力任せに押し除けた。眉間にシワを寄せる億泰と、目に涙を浮かべながら小刻みに震える美晴。

まるで他人のように振る舞う彼女を見て、仗助はすぐに”敵のスタ

ンド使いのせいだ”と悟った。記憶を消されたか操作されたか、とにかくこの家の中にいるのは今まで以上に危険なスタンド使いだ。このまま無理に突撃するのは全滅しかねない。

「……美晴ちや、……いや、来宮。何の事か分かんねーかもしれないけど……俺達が必要助けるから。康一と一緒に、ちと待っててくれよ」  
穏やかな声音と共に、ポンと仗助の大きくて優しい手のひらが美晴の頭に置かれた。そのままサワサワと髪を撫でてやれば、彼女の目にまたじんわりと涙が滲み、頬が赤く染まる。

「……待ってる」

ぽつ、と。涙と共にそんな言葉が零れ落ち、仗助は息を呑んで僅かに目を見張った。しかしそれ以上の言葉が紡がれる事はなく、玄関の扉が彼女の手によって静かに閉じられた。

「さて……億泰。こいつはグレートに厄介なスタンド使いとの戦いになるぜ」

「なっ、何イツ…!? 仗助、美晴がああなったのはスタンド能力のせいかな…!?」

億泰は勢いよく仗助を振り返る。彼は家の前にある表札をなぞり、改めてその立派な佇まいの家を見上げる。

「見る。ここは”岸辺”の姓を持つ人間の家……つまり、美晴ちゃんが今住んでる家って事だぜ」

美晴は仗助や億泰に電話番号を教える時、まず必ず彼女も”岸辺”という家主の姓で最初に応答する事も同時に教えていた。そしてその家主は男性である事を教わっており、実際仗助が電話を掛けた2回とも男性が出た。それも恐らく同じ人物だ。

つまり、その男性こそが美晴の記憶を改ざんしたスタンド使いで間違いない。

「何のつもりか知んねーけどよオ、一緒に住んでるヤツにまで手エ出すようなグレートにアブねー野郎が相手だ。慎重にいかねーとミイラ取りがミイラ状態になるぜ」

仗助が一旦敷地から出るのを億泰もついていき、彼が見上げる2階の部屋を見上げる。

「あそこだけ電気ついてら……」

「つつー事はあそこが今岸辺がいる部屋だな。多分康一と美晴ちゃんもいる。億泰はその木から窓に移って入れ。俺は玄関から2階に行く。……挟み撃ちだ」

2人で顔を見合わせて頷き、億泰は露伴の仕事場に1番近い木によじ登り、丈助は再び玄関に向かいドアノブに手を掛ける。

（美晴ちゃん……鍵掛けていかなかったよな、さつき。それに”待つてる”って……ちこつとだけ”記憶がある”んだな？）

ゴクリと固唾を飲み、ゆつくりドアノブを回す。それは突っ掛かる事なく回って彼を岸辺邸に招き入れ、そつと足音を立てないように靴を脱ぎ、2階にある仕事場の位置を思い出しながら慎重に階段を上がっていった。

（くそッ……一昨日電話で話した時は、美晴ちゃんの事を大切にしているヤツなんだなって思ったのによ……ッ！）

その夜、岸辺との電話を終えた丈助は彼にからかわれていた事に少しの間クシャクシャに落ち込んでいたが、”よろしくしてやってよ”と言う彼の声は少し優しげにも思えたのだ。

岸辺は美晴の事を大切に想っている。だからしきりに美晴の事をどう思っているのか聞いてきたのだろう。そこには確かにからかいも含まれていたが、僅かな心配や期待も込められていたように感じていた。

だが岸辺は今、美晴に精神的な危害を加えている。己が彼女の恋人だからというのもあるが、彼がこんな暴挙に出ているという事実が1番許せない。

丈助はやけに長く感じた階段を昇り切り、慎重に歩を進めていった。

その数分前。

美晴は玄関の扉を閉めると鍵を開けたまま階段を昇って2階の仕事場へと顔を出した。

「失礼します、露伴先生」

ノックをしてから扉を開けると、そこには露伴以外に背の低い男子

生徒——康一がいて目を僅かに見張る。

「美晴さん！ 仗助くん達は!？」

「え? えつと……あなた」 広瀬くん、よね。同じクラスの。東方くん達なら帰っていったわ」

すぐに康一は美晴に駆け寄ったが、彼女のよそよそしい呼び方に思わず足を止めて1歩ずつ後ずさっていく。

「そ、そんな……ろ、露伴先生ッ! 美晴さんに何したんだッ!」

そして先程から熱心に机に向かっている露伴をぐるんと勢いよく振り向くとエコーズを出して彼を睨み付ける。しかし彼はピタリとペンの動きを止めると自身の座る回転椅子ごと康一を振り返り、口元をニヤリと歪めた。

「なに、ちよいと君達の事を友達だと認識出来なくしただけさ。それより美晴、具合はどう? 起きていて大丈夫なのかい?」

「少しだるいですけど……今はなんとか大丈夫です。それよりどうして広瀬くんがここに?」

康一がサツと青ざめるのも構わず、美晴は露伴の方へ歩を進める。それを康一は引き止めるように彼女の体を押さえようと駆け出した。

「美晴さんッ! 君はあいつとどういう関係なの!?! どうして今まで黙っていたのッ!?!」

ガシツとしがみつくように押さえられ美晴は彼に困惑するような視線を向け、次いで露伴にも同じような目を向ける。露伴はといえば、その視線を受けて回転椅子をくるっと1回転させ、やがて戻ってくる脚を組んで再び2人を見据えた。

「いいだろう。まずは康一くんの質問に答えてやる。来宮美晴はぼくが雇った”給仕係”だ。君達が彼女と出会うより前、3月の下旬頃に出会ってその場で住み込みで雇った。口止めしていたのは、この住所を割らせないためさ……イジワルなんかじゃあないよ。電話番号は許可してやったしね」

何かと困るだろ? と肩を竦め、一通り答えられたかと思いい次は美晴に視線を向ける。

「次は美晴の質問。ぼくは広瀬康一くんが気に入ったから今朝もここ



に来させたんだ。彼の体験は素晴らしいもので是非ネタとして次のページも提供してもらいたくてね……ぼくの仕事が捗るなら構わないよな？」

そう言っただけで露伴が仕事机から昨日康一の顔部分から剥ぎ取ったページを掲げてみせると、2人してヒュツと息を呑んだ。

「先生ッ……！」

美晴が無意識にガーディアンを出し、康一を守るように腕を彼の前に伸ばすと康一がまんまるく目を見開く。

「み、美晴さん……!?!」

一方で露伴もまた、彼女の様子の変わりように驚いたように椅子から身を乗り出した。

「美晴……まさか、君……ッ!!」

ガーディアン守護を康一に掛けながら、美晴はジツと露伴を見据える。

「……私は本当に広瀬くんとは初対面だわ。さっき下にいた東方くん達だっけそうよ……」

康一が己を押さえる手をそつと解き、彼女は露伴の方へ歩く。その意志の籠もった瞳に気圧されたのか、彼は乗り出した身をスツと引っ返して冷や汗をじんわりと浮かべながら目を見開く。

「でも……私はどういうわけか、”彼らを守りたい”のよッ！例えばあなたに何を奪われようと！この”彼らを守りたい”と思う気持ちは、きつとあなたにはどうしたって奪う事は出来ないわッ！」

岸辺露伴の真正面で止まり、胸に手を当てながら来宮美晴はその瞳を覗き込むように見つめる。

露伴は暫く目を見開き口を開けたマヌケ顔を晒していたが、やがてふとニヤつくように目を細めて彼も彼女の瞳を覗き込む。

「ほーう……それで？それで君はぼくに何を言いたいんだね？」

一瞬、”ヘブンズ・ドア”が何かの隙に無効化されていたのか”と勘繰ってしまった。しかし美晴の言葉にその可能性はないと見出し、彼女の背後にいる康一に一度視線を向け、また視線が美晴に戻る。

その一部始終を見てから、美晴は露伴の横にある仕事机から漫画原

稿を一枚取るとそれを彼に渡した。

「広瀬くんにはガーディアン守護があるので、ページは破れません。……私の記憶をどうぞ、好きなだけ使ってください。あなたは私の事をずっと知っていたはずですよ」

なるほど。美晴のガーディアンは続行中の攻撃はどうしようも出来ないが、これから加えられる攻撃——つまり”康一の記憶のページを破るという攻撃”は無効化出来る可能性がある。康一の記憶にも書いてあった事だ。

そして今の美晴は能力を康一に使っているため、完全なる無防備である。

「フフツ……君のその正義感は素晴らしいね。友達想いで優しく勇ましい、君はヒロインにピッタリじゃあないか」

美晴の頬に片手を伸ばして包み、露伴は恍惚とした笑みを浮かべながら彼女の手から漫画原稿を受け取る。

「では遠慮なく、君の記憶をもう一度……じっくり読んで糧にさせてもらおうかな」

「そんなッ！美晴さん、だめだッ!!」

康一が一步踏み出すのが、露伴が原稿を美晴の眼前に持っていくのが、まるでスローモーションのように感じた。

刹那。

「その必要はねえぜツ、美晴ッ!!」

バリーインツ！と派手な破壊音と共に窓から何者かが露伴の仕事場に突入してきた。それは床を転がり、露伴の背後へとまわる。

「お、億泰くんッ!!」

「なっ……あなた、さっきの!」

康一と美晴が同時に彼——億泰に視線を向けるとすかさず露伴も振り向こうと椅子を動かす。

「おおーっと！動くくんじゃあねえ！妙な動き見せつとよオ、スタンドたたっこむぞダボがッ!!」

しかし億泰のその声に彼はピタリと動きを止め、ほんの少し考える素振りを見せてから美晴を見上げる。

「……フム。美晴……さっきの呼び鈴に応えたのか。普段から居留守を使えと言っているのに」

ジツと鋭い目で目の前の彼女を見つめると僅かに萎縮しているようにも見えたが、それでも目つきを緩める事はなかった。

（どんな対応をしたかは知らないが、美晴がこの家から出てきたらそりゃあ怪しむな。しかし何故ここに？康一くんの後をつけてきたのか？）

だとしたら勘の鋭い奴だ。

しかしこの虹村億泰はただのバカである。康一の記憶にも書いてあった。とすれば、ここにはもう1人……東方仗助も来ているはずだ。

露伴は僅かに口角を上げながら、ゆっくりと椅子を動かして億泰を振り返る。

「なっ……おい動くんじゃあねえツつってんだよオツ！」

まるで余裕を醸し出すような、勝利を確信したような動作に億泰は思わず動揺を露わにした。 ”ここにいるのはグレートに厄介なスタンド使い”……仗助の言葉を思い出し、汗が噴き出て右手の拳をグツと握り締める。

”虹村億泰”くん。スタンド名は”ザ・ハンド”。君は兄である”

虹村形兆”にコンプレックスを抱いており、決断する事が苦手で……そう、今の状況のような時……”

動揺している様子の彼を上から下までジーっとじっくりその佇まいを観察し、露伴は上がった口角を隠すように口元に手を当て、

”こんな時、兄貴がいればなあ”……と、思っている”

それでも目は笑っていた。凶星をつかれたように肩が跳ね、息を詰まらせる億泰の表情は彼の目には愉快に映っているようだった。

「な、……なんなんだコイツはよオツ!!なんで俺の事ツ！」

「フフフツッ……さあて、どうしてだろうね？君に分かるかな？」

クツクツと喉奥で笑う露伴と戸惑う億泰を交互に見遣り、美晴はどこか既視感を覚えて記憶を掘り起こすように頭の中を回転させる。

（この状況、つい最近もあった！でも何かが思い出すのを邪魔してい

る！私とこの虹村億泰くん……やっぱりどこかで会った事がッ！

「だ……だ……黙れよツダボがアアアアツ!!」

考えているうちに億泰の右手がザ・ハンドの右手と共に露伴に向かって振りかぶられ、美晴は反射的にその右手を掴もうと己の手を伸ばした。

「だめよ、虹村くんッ！同じ事を繰り返——ツ!!」

しかし露伴の動きの方が速く、美晴の手が捕らえられたかと思うと素早くその身が彼の腕の中に収まり、反対の漫画原稿を持った手が億泰との間に挟まるように姿を現す。

原稿がザ・ハンドの拳を受け止めグシャグシャに潰れ——る事はなく、ザ・ハンドの右腕は原稿に触れた途端に巻物が解かれるようになって分解し、力なくポトリと床に落ちた。

「な、ツ何イイイツ!？」

「億泰くん——ツ!!」

康一の悲鳴と共に億泰の右腕も同じような状態で分解し、瞬く間に伝染するように胴体にまで及び彼の体が崩れ落ちる。

「そ、そんなッ……!」

「まったく……危ないじゃあないか、美晴。削り取られるぞ」

美晴がまだ億泰に手を伸ばそうとするので露伴はその手を今一度握り締めて更にその身を引き寄せ、億泰を見下ろす。

「虹村億泰くん……君には別に興味なんてなかったが、この屋敷に入ってきてしまったからには仕方がない。まっ、作品に使えない事はないだろうし、資料にさせてもらうよ」

巻物のようになった彼の記憶を拾い上げてスルスルと手繰り寄せ、しかし1、2行ほど目を通したところで不意に視線を仕事場のいつの間にか開いていた扉に注いだ。

「東方仗助……そこにいるんだろ？早く出て来いよ。君の友達、全員ここに捕らえたぞ」

その声に反応した康一、億泰、美晴も一斉に扉に視線を注ぐ。

「仗助くん……そこにいるの!?!」

「じ、仗助エ……!」

「……………」

東方丈助は億泰が突撃した一部始終を扉の陰から見て、口元に手を当てながら息を潜めていた。

出ていかなければ3人とも何をされるか分からない。しかし無闇に突っ込む事も許されない。残されたのは己だけなのだから。

「さあ、どうする？ 東方丈助くん。友達見捨てて逃げるかい？」

岸辺露伴は喉奥から漏れる笑い声を響かせ、丈助に究極の選択を迫っていた。

## 選択肢の向こう側

「さて……康一くん。君に質問があるんだが……どうして東方仗助くんは、あのドア陰から出てこないと思うね？」

膝に乗せた美晴の身を今一度抱き寄せ、露伴は考える素振りを見せながら康一を見る。

「ん？…どう思う？…何故出てこないと思うね？」

康一はゴクリと固唾を飲みながら、恐る恐ると口を開いた。

「仗助くんは……あなたのその”原稿”を見ないために隠れている……」

「そう、正解だ。なかなか賢いな」

2、3度拍手を彼に送り、露伴はもう一度ドア陰の向こうを見るようにそちらに視線を向ける。

「その虹村億泰くんは、ぼくの”ヘブンズ・ドア”の能力を知らなかったから術中に落とせたが……今披露してしまったせいで東方仗助くんには正体がバレてしまった」

” 岸辺露伴の漫画原稿を視界に入れる事でヘブンズ・ドアが発動し、本にされてしまう”。先程の一部始終は一字一句変わらず露伴の能力の正体を明かしてしまっている。それについては彼も”非常にマズい”と思っていた。

己も向こうの能力を知っているのと同じように、相手もまたこちらの手の内を知っている。つまり優位には立てなくなつたという事であり、単純にパワー面では露伴の方が劣っているのだから。

「だが彼がドア陰から出てこないのはもうひとつ、理由がある……それは何だと思うね？」

ドア陰から視線を外し、再び露伴は康一を視界に入れる。だが彼は答えを探るように視線を逸らしたのでこれ以上の回答は見込めないと判断し、今度は大人しく己の腕の中に収まっている美晴に視線を向ける。

「フム、美晴は分かるかい？」

ジツとその瞳を覗く。先程の威勢が嘘のように、バカに大人しい。もう少しもがくかと思つたが、逃れられないと諦めたのだろうか。

「……どうやってあなたを攻略しようか、考えているのでは？」

それとも、またあの”どうしてか分からないが”、というやつか。彼らを”友達と認識出来ない”ようにはしたが、奥底から湧き出る何か、彼女に掛けたヘブンス・ドアの攻撃を跳ね除けようとしているのか。だとしたらものすごい精神力だが、果たしてどうだろうか。「なるほど。それも正解のうちのひとつだろうな。だが”正確には違う”」

変わらず意志の籠もったその瞳は綺麗だと思つた。しかし露伴は彼女の出した答えを否定した。

「正確には……東方仗助は”このまま自分だけこの屋敷から逃げ出すのはどうか”……と、考えている！」

ビシツとドア陰を指差してみれば、そこに隠れている僅かに見える影がピクリと動いたように見え、露伴は密かに口角を上げる。

「”逃げ出す”って！仗助くんはそんな事絶対にしないツ!!」

「そうだな、康一くん。君のファイルには東方仗助は決して君達を見捨てたりしないと書かれている。だがね……漫画家という職業柄、あらゆる状況の可能性を考える癖がついているんだ。”こんな時、主人公はどんな行動が可能だろうか”といった風にね」

堪らず康一が声を上げているが、彼はきつと今の今までそう考えていたに違いない。根拠だつてしつかりある。

「”逃げる”……そうか、そりゃあいいかもしんねーなア！承太郎さんを呼べるしよオ、由花子が康一がアブねー事を知ったら怒りまくるぜツ！」

億泰が閃いたようにしたり顔で露伴を見る。億泰がそれに気付くとは予想外だったが、それこそが露伴が考えていた可能性……つまり”正解”であつた。

「おい仗助エー聞いただろ!?早く知らせろオ!!」

「うわっ、やっぱりお前はバカだな!?そうさせないために説明してるんじゃないか億泰くんツ!もうお前の体に”書き込み済”なんだ

よッ!!」

しかしせつかく見直してやったのにやはり虹村億泰はただのバカだった。

露伴は呆れたように眉を潜めながら彼の巻物状の腕を引つ掴んで手繰り寄せ、美晴に書き込んだ文章を見せる。

「この書き込んだところを3人に読んで説明してやれ、美晴」

それを受け取り、美晴は整然と並べられた億泰の記憶や体験の書かれた紙面から露伴の筆跡で書かれた文章を見つけ出し、読み上げようと口を開く。が、そのあまりの内容に一瞬動きが止まった。

「……」東方丈助が岸边露伴を困らせた時、わたしは焼身自殺します”……ッ!?”

「ッ!?”

美晴が読み上げた文章に各々が息を詰まらせる中、露伴だけはニヤリと口元を歪めていた。

「こっ、これはつまり、丈助くんが私達を助けようとしただけでも、虹村くんは……!!」

バツと美晴が億泰を振り向くと彼は既にライターを手にして点火しているところだった。

「なッ、なんだこりやーッ!!か、勝手にライターをッ!!」

「フフッ!もうぼくはとても”困っている”からな!お前が自殺するのも時間の問題さッ!!」

もう攻撃は始まってしまっている。絶体絶命のこの状況に冷や汗を浮かべる美晴だったが、不意に顎を掴まれグイッと強制的に視界が露伴の方へ向く。

「ところで美晴……今、丈助くん”とか言ったか?”

「ッ!!」

思わずハッと息を呑んで口を手で塞ぐ。その様子に露伴は途端に表情を陰しくさせた。

「おかしいなア……さっきまで確かに”苗字呼び”だったのに。やはり君、何か隠しているなッ!?”

やはりだ。どういうわけか美晴に書き込んだ命令が弾かれている。



一体何故だ！

そう露伴が彼女に迫ろうとした時、ダンツ！と派手な足音が仕事場に響き4人はその方向を向いた。

そこには目を瞑りながら仁王立ちしている東方仗助がおり、彼もまた冷や汗を浮かべていた。

「ようやく出て来たか……いや、」引きずり出された”の方が正しいかな？」

目を瞑っているその顔を見て露伴はやれやれと息を吐くが、実際彼の取っている行動は”まあよく考えたものだ”と感心していた。

ヘブンズ・ドアーは岸边露伴の漫画原稿を視界に入れる事で発動する。ならば単純に”見なければいい”と彼は考えたのだ。目を瞑り、真っ直ぐにこちらに突っ込んで1発喰らわしてやれば、パワー面で劣るこちらは再起不能となり3人に掛けている能力も解ける。

「だが、こちらには”最強の鎧”がある事を忘れてないかい？」

露伴は喉奥で笑い声を零しながら美晴を見る。

「美晴。”ぼくにガーディアン能力を使え”」

「なっ……！」

露伴の指示に美晴は目を見張りながら息を詰まらせた。

美晴のガーディアンは鉄壁だ。あの承太郎のラッシュでさえ傷ひとつつける事を許さない程の防御力を誇っている。それを今の露伴に使えば、仗助の勝利は間違いなく無いものとなってしまおう。

「どうした。早く使えよ。書き込んで強制的に使わせようか？」

”こんな時、主人公はどんな行動が可能だろうか”。露伴はその思考を自分にも適応させている。そして、その中でも最上の選択をしようとしているのだ。

「……分かりました」

強制的に使わされるのは単純に気分が悪い。美晴はこうなったら逆らえないと思い、康一に掛けていたガーディアンの守護を解除して露伴に掛け直す。その感覚をしつかりと確認した露伴は美晴を解放し、億泰や康一のいる方へ向かうよう背中を押した。

「よろしい。危ないから君は下がりな」

それを受けて美晴も2人の方へ移動し、座り込んで仗助を見つめる。視界に映る彼は眉を潜め、歯を食いしばって何かを考えているようだった。

「仗助くん……私を信じて……ッ！」

その様子に居た堪れなく、美晴は彼に向かって絞り出すように言葉を掛ける。それに露伴がチラリと美晴に視線を向けると同時に、仗助は彼に向かって突進するように床を蹴った。

「この状況で向かってきたかッ！だがその目を開かせれば……ぼくの勝利は確実となる！」

鉄壁の守りがあるだけでは仗助を負かした事にはならない。今そこにいる3人と同じように支配下に置く事で初めて”勝利”となるのだ。

露伴は漫画を描く時に使う替えのペン先を数個手にすると仗助の顔に向かって投げる。

「ッ!!……うおおおッ!!」

しかしそれが確かにサクサクツと仗助の顔に刺さったにも関わらず、彼は数回首を横に振って堪え、尚且つ目を瞑ったまままだ露伴に向かって走り続けていた。

「なっ……堪えやがった！普通は刺されるといふ恐怖で立ち止まるか、何が飛んで来てるのか見てしまうものだが……なんてタフな奴だッ！」

出血しながらもこちらに走ってくる仗助に露伴は一抹の恐怖と称賛を感じたが、康一のファイルを手にとると素早くそれに目を通す。(確かここに”気になる事”が書いてあったはずだ……！それならば目を開けさせるフアクターになるかもしれないッ！)

そしてついにその項目を見つけると、露伴は顔を上げフツと勝利を確信した笑みを浮かべ口を開いた。

「君のそのヘアスタイル、笑っちゃうぞ仗助エ!!2、30年前の古臭いセンスなんじゃあないのオ……ッ!?カッコいいと思ってるのかよオ……ッ!!……かな？」

露伴の声に、言葉に、世界が静止したかのようにピタリと空気が固

まった。

その言葉が何を意味するか、この後何が起こるのか、露伴以外の3人は想像しながら目を見開いて驚愕の表情を浮かべる。

「こう言われると”キレる”んだよな？信じられない性格だが、ここに書かれている事柄は嘘を吐かない……”100%の真実”だ」

キレて、状況の区別の付かなくなった人間がどんな行動を起こすのかなんて簡単に予想がつく。少なくともまずは露伴が”達成したかった事柄”が果たされる事になるだろう。

「今なんつった…ッ!!もういつペン言ってみろコラアッ!!」

ギリリと仗助の目が開かれ、露伴を鋭く睨み付ける。それを見た康一と億泰は絶望したような表情を浮かべた。

「仗助くん…ッ!!何もこんな時にまでッ!!」

「うわ…ッ!!焼けるッ!!あぢ…ッ!!」

億泰のファイルがライターの火によって焼け始めている。しかし仗助には気に留めるような余裕はなく、ただひたすらに髪型を貶した岸辺露伴の事を見下ろしていた。

「もういつペン言ってみろ”だど?いいだろう、耳元で何度でも言ってみようよ”」

露伴は椅子から腰を上げ、更に彼の視界を狭めるためにその長身の前に立ち塞がる。

「お前のその髪型な……自分ではカッコいいと思っているようだけど……ゼエー…んぜん似合っていないよ、ダサいねッ!!今どきいるのかこんな奴!って感じだよ」

もはや煽りでしかない貶しように美晴も思わずあぐりと口が開く。仗助の身は怒りでブルブルと小刻みに震え、それを見て露伴は更に言葉を連ねた。

「小汚い野鳥になら、住処として気に入ってもらえるかもなア?!ひよっとしてだけど……!」

ツンツと仗助のリーゼントを指で弾く。誰もがヒエツと息を呑むような極め付けに遂に仗助は拳を握り、クレイジー・ダイヤモンドを出して素早く重量のあるラッシュを繰り出した。

「ドラララララララアアアーツ!!」

しかし露伴の手の動きの方が信じられない事だが遙かに速く、机にあった漫画原稿を手にとると彼の眼前に押し出すように見せつける。

「(勝った!) ヘブンズ・ドアーツ!!」

確実に彼の目に、クレイジー・ダイヤモンドの目に、漫画原稿を見せつけた。

美晴のガーディアン守護だつて掛かっている。

今に東方仗助の体が崩れ落ちるぞ。

岸边露伴は勝利を確信しきつていた。

筈なのに。

「ボギヤツ!」

メシヤツ!と紙がグシャグシャに潰れる音と共に顔面に衝撃と激痛が走った。歯が数本抜け落ち、原稿用紙に己の血が付着している。

「はぎッ!?!」

岸边露伴は信じられないと言った様子で目をまんまるく見開いたが、間髪入れずに次のラツシユが襲い掛かる。

「ドラララララララアアアーツ!!」

目にも止まらない拳の連撃は露伴の顔や体を潰すように炸裂し、フィニツシユをもろに喰らったその身は勢いよく吹っ飛んで棚にぶつかり、衝撃に耐えられなかった棚が崩れ落ちて露伴の体に覆いかぶさる。

「なっ……ど、どうしてッ……! 確実に原稿を見せたのにッ……美晴のガーディアンだつて……ッ」

木材の隙間から顔を出すボロボロの露伴の顔は原型を留めておらず、しかし無数の疑問符が頭を埋め尽くしているようでフガフガとうわ言のように呟いていた。

「どうやら煽るのに夢中で気付けなかった……みたいですね」

そんな露伴を見下ろすように、美晴はそのすぐそばまで移動してくるとしやがみ込んでその顔を覗き込む。

「私は仗助くんのこと……友達”じゃあなくて”恋人”だと思ってます。だからきつと”命令の範囲外”だったんですよ。苗字呼びして

いたのは演技です」

玄関で応対した時、仗助に肩を掴まれた時から美晴は彼の事をしつかりと”恋人”と認識し、彼との記憶だけは掘り返さなくても思い出す事が出来たのだ。その過程で仗助が己を救ってくれていた事も思い出して彼に”待つてる”と伝えられたし、信じる事が出来た。そして彼もまた、”恋人”である美晴の言葉を信じて露伴に立ち向かい、拳をぶち込んでくれた。

「それに、別に認識出来ていなくてもあなたへの守護は解いていたと思います。例えば他人だろうと、こうして弄んだ事は許される事ではありません」

来宮美晴の優しく勇ましい正義感の本物だ。だから彼女には”守護者”を意味し、鉄壁の守りを誇る”ガーディアン”というスタンドが、生まれた時から発現している。

「反省してください、岸辺露伴先生」

立ち上がり、露伴を冷たく見下ろす美晴の隣には仗助が立ち、クレイジー・ダイヤモンドが目の前に現れると再び露伴の体はその拳によって吹っ飛ばされ、今度は本棚に突っ込んでまたその下敷きにされてしまった。

「……でもどうしてヘブンズ・ドアが効かなかったのかしら……私、露伴先生の守護は確かに解いたけど、仗助くんには掛けてないのよね……」

うーん、と美晴は不思議そうに唸る。ガーディアンの守りならヘブンズ・ドアも無効化出来るし、実際日常的に美晴もそうしていたが、今に限っては彼女は能力を解除しただけで新しく誰かに掛ける事はしていなかった。

「どこ行きやがった漫画家アツ!!隠れてないで出てきやがれッコラアアツ!!」

「いや、そこにいるけど……」

しかし仗助は本にされず、このようにピンピンしながら露伴を探して机や椅子を破壊してまわっている。ひとつ奇妙なのは、露伴はその机のすぐそばにある本棚の下敷きになっていて顔も出しているのに、

彼にはまるで見えていないらしい事だった。

「いや……マジに見えてねーよ、ありやあ……」

億泰が暴れ回る仗助を見て独り言のように呟く。それに反応した康一が彼と仗助とをブンブンと首を動かして見比べる。

「み、見えてないって……！あまりに逆上し過ぎたんで、原稿どころか周りも見えないほどに興奮しちやってるって事!？」

「あ、有り得くはないわね、すごい煽りようだったし……それもかつてないほどの」

あらゆる言葉を使う漫画家だからこそその物量の多い煽りは、仗助の1年分くらいの怒りを買ってしまったのかもしれない。

「そ、そんな……康一くんも知らなかった仗助の性格……だとオ……!？」

露伴はそこに落ちている康一のファイルをチカチカする視界の中に入れる。ファイルに書かれているのは100%の真実。しかし本人が知らない事は当然、書かれているはずがないのだ。

未だに露伴を探して見境なく周りのものを破壊してまわっている仗助を皆呆然としたように見ていたが、露伴が事実上再起不能になった事で康一の剥ぎ取られたページが顔にスツと戻っていき、億泰の体も巻物から人体へと戻る。美晴に書き込まれていたさまざま命令も無効化され、次に康一と億泰を視界に入れた時にはしつかりと彼らを友達と認識でき、今までの記憶も元通りになったのを感じてホツと胸を撫で下ろした。

「ま、これで一件落着……」

「そこにいたのか漫画家アツ!!まだ殴り足らねーぞドラアアツ!!」

「ヒーーツ!!」

……安堵したのも束の間、まだまだ岸边邸の朝は破壊音と家主の悲鳴で賑やかになりそうな予感がした。

## 心の扉を開ける鍵

仗助の怒りがようやく収まった後、露伴は救急車で病院に搬送されていった。担当編集者に連絡を済ませ、美晴は救急箱を手にリビングにいる仗助のところへ向かう。

「なんか……悪りーな、本当に。家具とか後で直すからよオ……」

リビングの椅子に座りながら、仗助はバツが悪そうに頭を搔く。億泰と康一は先に学校に行くと言ってこの岸辺邸を出て行ったばかりで、ここには仗助と美晴の2人だけだった。

「直してくれるのはありがたいけど……露伴先生の事なら気にしないでいいわ。ああなつて当然の事をしたんだからね」

死に至らなかつたものの、露伴はしばらく漫画の執筆は出来ないだろう。けれども彼が友人達にした仕打ちは本当はそれだけでは収まらないほど美晴は怒っていた。

救急箱を開け、脱脂綿をピンセットで摘むと消毒液に浸し、椅子に座っている仗助の顔に付けられた傷に処置を施していく。その過程で彼の頬に手を添えながら整った顔立ちを見つめるとドキドキと心臓が高鳴るのを感じて、思わず頬を染める。それを見た仗助も消毒液の染みるような痛みを感じながらも、照れくさそうに視線を逸らして頬を赤くしていた。

「というか私の方こそごめんね……うちの人がこんな事しちゃつて」

「いや……美晴ちゃんが謝る事じゃあねえだろ……」

顔ごと視線を背けるように救急箱の中を漁り、絆創膏を出すと封を開けてフィルムを剥がし、傷に貼っていく。

「ん……そうね。でも私が言いたいののは”ごめん”だけじゃあないわ」

全ての傷に貼り終え、彼の頬を包むように両手を添えて、美晴は彼を見つめてからそつと顔を近付ける。

「……ありがとう、信じてくれて」

仗助の頬に、柔らかなものが触れた。美晴との距離がくつつくよう

に近く、何が触れているのかやつと認識するとボツと顔に火がつくように耳にまで熱が籠った。

「なっ、ん…!?み、美晴ちや…ッ!?」

「えっ、だ、だめだった…!?」

顔を離し真っ赤になった仗助の顔を見て思わず美晴まで顔が赤く染まったが、直後に今度はグイツと彼女の方が彼に引き寄せられ、再び互いの距離が狭まる。

「だっ…だめじゃあねーよ…だめなわけあるかよ…ッ」

恥ずかしさもあるが、”先を越されてしまった”事の方が大きかった。

仗助は美晴の横髪をサラリと耳に掛けてやり、熱くなった手のひらでその頬を、彼女が先程そうしたように包む。

「俺の方こそ…信じてくれて、ありがとな」

あの時、美晴が信じてくれたから、託してくれたから、彼女を、皆を助ける事が出来た。

そして同時に、来宮美晴は己にとってとても大切な存在である事を実感し、確信した。

「…好きだ、美晴ちゃん」

その言葉は自然と溢れ落ちた。漠然とした恋心が、真実味を帯びながら大きなものになっていくのが分かる。

美晴は彼の優しい微笑みに、己もまた顔が綻んでいくのが手に取るように分かって頬に添えられた手に己の手を重ねた。

「私も…好きよ、仗助くん」

愛おしそうな微笑みを見せ合い、互いに目を細めていく。そのままどちらからともなく、唇同士が重なった。

触れるだけのそれはすぐに離れ、仗助は美晴の体をそつと己の膝に乗せながら優しく抱き寄せる。

「俺も学校休もつかない…」

「それはだめよ。既に遅刻だけど無断欠席はもつと良くないわ」

美晴もグイツと彼の背に腕を回し、2人して互いの肩に顔を埋めながらクスクス笑っていた。



「冗談だって。……ノート、今度は俺が届ける番な」

あの日からきつと、始まつていたんだ。次の日に校舎裏に彼女に呼び出された時に、告白されるのかと勘違いするほど、彼女の事がきつと気に掛かっていたんだ。

仗助は抱き寄せた彼女のぬくもりを体全体で享受しながら、目を伏せてその時の事を思う。

「……ありがとう、仗助くん」

背中に回された腕に、きゅつとまた力が籠るのを感じながら。

それから数日が経った。

中間調査も終わり、昼休みには返ってきた答案用紙の点数を見比べ一喜一憂する生徒達が教室や廊下に溢れていた。

食堂にいる仗助達も例に漏れずそうであり、中でも億泰はワナワナと答案用紙を持つ手が小刻みに震えている。

「み、美晴ッ……英語のテストよオ……!!」

「あー……それ、菊池先生だから追試か補講のどっちかになると思うわよ……」

「んなーッ……!!」

サンジェルマンの焼きそばパンを片手に轟沈している億泰を、隣に座っている美晴がその背中を撫で叩いてあやすように慰めている。

「美晴さんはテストどうだったの？ やっぱり結構上位の方？」

斜め向かいに座る康一がおずおずと彼女に尋ねてきた。その康一も実際そこまでのいい点数ではなかったらしい。

「やっぱり」と付けてもらったところ申し訳ないけど、私もそこまじやあないわ。総合で中間くらいだし、数学苦手だからそっちはちよつとね……」

溜息混じりな美晴は苦手を他で補うタイプの子だ。数学の点数は平均ギリギリだったが、代わりに国語や英語で稼いでいる。そのため総合的に見れば良くも悪くもない、といったところだった。

「仗助くんはどうだった？」

美晴が向かいに座る仗助を見れば、彼は「ん、」と幕の内弁当を咀嚼しながら総合成績の書かれた紙を4人の座るテーブルの中央に置く。

「国語87点、数学85点、理科79点」

「社会85点、英語83点……だとオ……!?!」

「す、すごいッ!ほとんど高得点じゃあないか、仗助くん!」

康一がユサユサと彼の肩を揺すりながら自分の事のように目を輝かせているのを、仗助はフーンと得意げに両腕を組んでふんぞり返りながら受けている。

「今回はグレートにツイてたってヤツよオ」

「って事は、もしかしてヤマカンね……」

そういえばやけに隣から何かを転がす音がテスト中に聞こえてきたような気がして、美晴は今朝作ってきた弁当を食べながら思わず苦笑いを浮かべた。それを見て仗助は「あッ!」と声を上げる。

「そうは言うけどよオ、美晴ちゃん。俺んこのお袋って教師やってんのよ。昔っから成績だけはうるさかったんだぜ?」

そういえば仗助の家庭事情はジョセフの事もあつてなんとなく訊きづらかったが、その新しい情報に3人で「へえ」と頷き、次いで億泰は何かピンと閃いたように仗助を見る。

「仗助エ!今度英語教えてくれよオ!あと数学と理科とそれと……!」

その声に便乗するように康一と美晴もパツと表情を明るくさせる。

「ぼくも社会教えてよ、仗助くん!」

「私も今度数学教えてほしいわ、ヤマカンとはいえちやんと計算は出来るんでしよう?」

ワツと集まる視線を一身に受け、「まあまあ、」と仗助は満更でもなさそうに照れ笑いを浮かべている。

「んじやーよオ、勉強会でもするか?全員の”タメ”になるしよオ、得意分野があつたら教え合うのもいいじゃあねーか」

総合成績の書かれた紙を懐にしまい、仗助もまたピンと閃いたように3人を指差してみれば、彼らは一層表情を明るくさせた。

「いいね!ぼくそういうの憧れてたんだア!友達の家とか放課後の

教室でさ！それって高校生っぽいよ〜！」

「よオーし！早速今日やろうぜエ！場所どうするよ？」

ワイワイと盛り上がりつついたが、しかしそのノリに乗った勢いを遮るように美晴が「あつ」と声を上げた。

「ごめん、今日は露伴先生のお見舞いとか、着替えを届けなきゃならぬいから……」

そうやって申し訳なさそうに手を合わせる美晴を見て、3人は「えっ！」と一斉に彼女を振り向く。

「露伴先生って……！そんなヤツほつとこうぜく!?というかもう一緒に住むのやめた方がイイんじゃないか？」

隣の億泰がグツと彼女と肩を組んで引き寄せ、「縁を切れ！」とチョップを振り下ろすような仕草を見せる。

「それは同感だな。ありや」やり過ぎだ。やめないにしても、ちよつと距離を置いた方がイイぜ」

「そうだよ！世話なんか焼く必要ないって！」

仗助と康一も眉を潜めて心配そうに彼女を見つめていた。それを受けて彼女も考え直すように「うーん」と唸ったが、やがて顔を上げると3人を見る。

「それはそうだけど……今までお世話になったのは事実だし……今日会ってきて、それからどうするか決めるわ」

ありがとね、と申し訳なさそうに笑う彼女だったが、それを見た仗助は心配で胸が詰まりそうで、箸がそれ以降進まなくなってしまうた。

放課後、美晴は一旦岸边邸に戻り荷物を用意してからバスで露伴が入院している病院へ向かった。

先日ようやく面会許可があり、それでも”関係者以外面会謝絶”という岸边露伴の病室へ案内してもらい、ノックをしてから扉を開ける。

「失礼します、露伴先生」

病室に入り直つ先に目に飛び込んできたのは、ベッドの上がった上半身部分に背を預けて読書をしていたらしい露伴の姿だった。彼は

美晴を視界に入れるなり、驚いたように目を見張ってそちらを見つめていた。

「美晴……来てくれたの」

読んでいた本を閉じ、彼はこちらに歩んでくる美晴から目を離せず  
にいた。

「そりゃあ来ますよ、あなたの給仕係ですから。 考査期間だったので遅くなりましたけど……これ、着替えと……途中でお花屋さんに寄ってきたので、お見舞いです。 置いときますね」

美晴は床頭台にフラワーアレンジメントを置き、着替えの入った鞆をその棚にしまう。 そうしてからベッドの近くに立てかけてあったパイプ椅子を組み立てるとそこに腰掛けた。

「お加減はどうですか？ 顔の方はだいぶ元通りですね」

美晴が顔を覗き込んでくるのを、直視出来ない。 露伴は俯くように彼女から視線を逸らすと、何かを言いたげに口を開いたり閉じたりを繰り返していた。

「どうして……」

「ん……？」

ようやく絞り出された声。 それは情けないほどに小さく掠れていて、彼が聞き返すように声を上げた彼女をパツと顔を上げて再び視界に入れると、何かに遮られたかのようにその姿が歪んで見えた。

「……ぼくは君にひどい事をしてしまったという自覚がある。 もう君には会えないと覚悟も決めていた。 なのに、何故ぼくの見舞いになんか……」

言葉が嗚咽で詰まるようだった。 雫が頬を伝って、膝にかけていた布団を濡らしている。 その様子を見て美晴はハツと息を呑んだが、やがてふと目を細めて彼の手を優しく握り締めた。

「聞こえなかつたですか？ あなたの給仕係、だからですよ。 あなたは私の、大切な人だから……ですよ」

その言葉に、今度こそ露伴はヒュツと嗚咽を漏らして息を詰まらせた。

「露伴先生は、私を最初に救ってくれた人です。 ……あの時私は、本当

はとても怖かったんです。道も、何も、見えなくて……でも、露伴先生が私を導いてくれたんです」

優しい表情で紡がれる言葉を、露伴は齒を食いしばり否定するように何度も首を横に振る。

「そ、そんな事ッ……！そんな事を言うなッ……ぼくは君が”いいネタになりそうだから”迎え入れたんだ。給仕係だって、家事をする時間が惜しかったから雑用が欲しかっただけだ！それを”救われた”だとか”導いた”だとか、過大評価するんじゃないッ！」

ぬくもりの伝わる手を力任せに振り払い、彼は寝返りを打つように美晴に背を向けた。

「せ、先生……」

「今日はもう、帰ってくれ……」

押し殺したような嗚咽が病室に響く。向けられたその背中がひどく寂しいものに見える。窓からは夕陽が差し込んで、もう少しで面会時間が終わってしまう事を思い出した。

「先生……また、来ますね」

美晴はパイプ椅子から腰を上げるとそれを折り畳み、面会時間が終わる事を伝えに来た看護婦とすれ違うように病室を出て行った。

「あ……」

病室を出た直後、すぐ近くの壁に仗助がもたれ掛かっているのに気付くと、彼は体を壁から離し美晴の隣まで来た。そのまま流れるように露伴の病室に背を向けて廊下を歩く。

「悪りーな……つけるような真似してよオ」

「ううん……心配してくれたのよね。……そう思っておくわ」

露伴の病室が、一歩踏み出すごとに遠くなっていく。

仗助はチラリと横目で美晴を見ると「ん、」とポケットからハンカチを出して彼女に渡した。それを見た彼女は目を僅かに見張つてから彼を見上げる。

「泣いてんの……隠しきれてねーっつの……」

彼の言葉にハッと息を呑む。それに気付くと同時に途端にポロポロと涙が溢れ落ち、己の嗚咽が廊下に響いた。

露伴に拒絶されてしまった。それが想像以上に深い傷となって、そこから血が溢れるように、代わりに涙が止め処なく溢れてくる。

ハンカチも受け取る余裕がない美晴を仗助は体を引き寄せながら近くにあつた椅子に座らせ、己も隣に腰掛けるとその手にハンカチを握らせながら背中をさする。公衆の面前というのもあつて、抱き締めてやれないのが少し齒痒かった。

どう言葉を掛けてやればいいのか分からない。盗み聞きたいわけではなかったが、よほど響いていたのか露伴の激昂したような声は病室の外にも聞こえてきていた。幸いその時は誰も廊下を通つておらず、大きな騒ぎにはならなかったが。

(ああいう言葉が出てくるって事はよー……露伴は本当に美晴ちゃんを大切にしていたって事だぜ)

あの電話を通じて己が感じた感情。先程の声は言葉は全く別のものだったが、滲み出てくる感情は同じだった。そこに込められた心配や期待までが、全く同じなように感じた。

けれどもそれを仗助が美晴に伝える事はなかった。今の2人の間に介入する隙間が、彼には1ミリも存在しない事を理解しているというのも勿論あつたが。

(そんな事は美晴ちゃんもとつくに気付いてて……だから今泣いてんだぜ)

1番はそれだった。己が今一度それを説くのは余計なお節介だ。

今はただ、その雨が止むまで隣にいてやる事だけが、彼が唯一出来る事だった。

## あなたの給仕係

「また、来ますね」

来宮美晴は先日そう言った。しかし、その“また”は明日も、明後日も来なかった。

岸辺露伴は誰も見舞いに来ない病室で、ただただ日々を浪費していった。

味気ない病院食もなんだか食べ慣れてきた。けれどもどこか口寂しく、看護婦に売店で買ってきてもらったぶどう味の飴玉をころころ口の中で転がしている。

漫画は描けないし、待ち人も来ない。スケッチしようにも窓の外は変わり映えしない。

大切なものを2つ同時に失ったようで、露伴の心の中はどこか空虚だった。

美晴はオーソンに立ち寄ると雑誌コーナーに向かい、今日発売日の週刊漫画誌を手にとった。これは己も読者で、毎週楽しみにしている雑誌だ。少年漫画誌を好む女子高生ってどうなのかなど、常々思っているが、誌面に躍る多彩なキャラクター達による冒険活劇は胸がワクワクして止まらない。

中でも最近一番好きなのは――、

「……………」

巻末の目次をなぞり、目的のタイトルを探す。しかしそれは見つかる事なく末尾となり、滑らせた指が誌面を外れる。

「……………」

少し悩んで、雑誌を棚に戻した。毎週楽しみだったはずなのに、火が消えたようにワクワクがなくなってしまった。

「買わねーの？それエ」

「えっ……………お、億泰くん？」

雑誌コーナーから離れようとした時、不意に声を掛けられ肩を揺ら

しながらその主を見上げると、虹村億泰が「よっ！」と手を軽く挙げて挨拶していた。

「へえー、美晴って漫画とか読んだなあ。しかも少年漫画……」

億泰は先程美晴が手に取っていた雑誌を持ち、パラパラとページを捲る。

「ん……変かしら、やっぱり」

「？ そんな事ねーと思うけど？」

チラチラと見えては隠れていく漫画がやはり気になり、彼の持つ雑誌の中身をそろりと覗き込む。それを見て億泰は彼女にも見えるようにほんの少し腕を下げてページを捲っていく。

「なー、これ全部描いてる奴ちげーよなあ？ 話繋がってんの？」

「（あ、そこからか……）これは全部違う作品よ。毎週1話ずつそれぞれの作品が更新されていくの」

「へえー……」

億泰は曖昧に相槌を打つと雑誌を閉じ、美晴に渡した。

「すげー読みたそうじゃん。なんで戻しちやつたんだ？」

差し出される雑誌を暫く見つめて、やがて美晴はそれを押し戻すように彼の手を遠ざける。

「1番読みたかった作品が……載ってなかったからよ」

”ピンクダークの少年”。先程巻末の目次を辿った時、まるでそんな作品は最初から存在していなかったかのように、何処にも1文字もそのタイトルは載っていなかった。それがたまたまなく寂しい事のように思えて、その雑誌を棚に戻したのだ。

「えっ、そんな事あんの？」

「描いてる人の都合でお休みした時は当然、載ってないわよ」

雑誌の表紙を撫でるように手を置き、しかしすぐに離すと美晴は億泰に背を向けてオーソンを出て行った。

「美晴……」

彼女の気持ちがあんまりとなく分かる。今までそこにあつたものが、ふとした拍子に忽然と姿を消してしまうその空虚さは、己もつい最近に体験していた事だったから。



「露伴先生、ただいま帰りました」

玄関から声を張り上げたが、当然返事はない。もしかして思つて靴を脱ぎ、スリッパを履いて2階の仕事場へと向かったが、その机に向かつているはずの人物がいなくて虚しさが大きくなった。

『君はそこに何か用事でも？もぬけの殻の家？』

『そんな……もぬけの殻だなんて。私はその家にお世話になるんです』

ふといつかの会話を思い出した。

いつそこにも本当にもぬけの殻だったら良かったのに。

ここには” 岸边露伴がいた ” という全てがそのまま残っていて、声や匂いまでが鮮明に思い出されるのが一層胸を苦しくさせるのだ。

そしてそれはいずれ彼がここに帰ってくる事を示している。その時己はどうなるのか。” 給仕係 ” という住み込み職を失つて本当に路頭に迷う事になるのだろうか。

しかし何より、” 岸边露伴との生活が終わってしまう ” 事の方が絶望が大きいような気がした。

このままでは” 岸边露伴と顔を合わせられなくなる ” 。

もし出会つたとしても、他人のように振る舞わなければならなくなるのだ。

「それは……絶対に嫌よ、露伴先生……！」

美晴は鞆を床に放ると机の前まで小走りで駆け寄り、あの日のまま置いてあつた漫画原稿を手取る。仗助がクレイジー・ダイヤモンドで家具や壁を直した時に、原稿も一緒に直つていたのだ。それを露伴がいつも原稿を入れるような茶封筒にしまい、鞆を拾い上げるとそこに押し込んで岸边邸を出て行く。

バスを待つている余裕なんてない。そろそろ陽が傾き始める時間だ。

美晴は自転車に乗り、全速力で漕いで病院へ向かい始める。途中「あれエー！美晴！」と億泰の声が聞こえたが、構っている時間はなかった。

病院に着いた頃には当然息が上がっていたが、構わずに中へ駆け込むと面会時間が終わっていない事を確認して面会手続きをする。

「あの、もうすぐ面会時間終わりますけどそれでも…?」

「いいです、すぐ終わります…!」

手続きを済ませ案内される。病院内という事もあつて走るのはやめておいたが、競歩のように足が早まるのが己でもすぐに分かった。

「露伴先生!」

グツと扉を開いてその病室にいる患者の名を呼ぶと、ベッドに身を横たえてブーツとしていた彼はゆっくりとそちらを向き、そして、目を丸く見開いた。

「美晴……!」

まだ少し痛む体を起こし、呼吸を上げながら駆け寄ってくる彼女を信じられないといった様子で露伴は視界に入れている。美晴は彼の元へ辿り着くなり鞆の中から少しシワのついた茶封筒を取り出して押し付け、その姿を真っ直ぐに見つめた。

「先生……私、先生に会つてる時に能力使うの、やめます」

「え……?」

息を切らす中、彼女の口から静かに飛び出た言葉に”もしや”と思つて茶封筒の中身を見ると、封筒同様ほんの少しシワのついた次回分の漫画原稿が1枚入っていて、ベッド脇にいる美晴に視線を転じる。

「私に”ヘブンズ・ドア”を使つてください……100%真実なんでしょう……? 私が今どう思つてるのか、ちゃんと読んでください……!」

あの騒動が起きた2日間、露伴はヘブンズ・ドアを美晴に使っていた。しかし彼は彼女をそこまで深く読んではおらず、あくまで康一とのファイルに差異がないかを確認しただけだった。だから今まで色々な事件に巻き込まれていた事を秘密にしていた意味を理解してもらえなかったのだと、美晴は思い至つたのだ。

それにヘブンズ・ドアで本になった記憶や事柄は嘘を吐かない。心をそっくりそのまま曝け出すのと同じだ。こないだ露伴は己の言

葉で癩癩を起こしたが、もしかしたらここに書いてある事柄次第ではあの言葉が嘘ではない事を証明してくれるかもしれない。しかし、何が書かれているのか、今の己には分からない。リスキーではあるがしっかり読んでもらえば、その能力に自信を持っている露伴は今度こそ”ここ”に書いてある事柄に納得してくれるはずなのだ。

だが露伴はもう一度原稿に視線を落とすと、目を伏せて首を横に振りながら茶封筒の中にそれを押し込んだ。

「使わないよ。君にはもう、ヘブンズ・ドアーは使わない」

茶封筒を床頭台に置かれたテレビの脇に立て掛け、今度は美晴の方が目を見開くのを視界に捉える。その瞳が僅かに揺れているようにも見えて、今まで頑なに心の扉を開かれるのを拒んでいた彼女にとってそれが一世一代の覚悟だったのだと悟った。ただ己にあの言葉が嘘ではない事を証明したい一心で、心を曝け出させ、100%の真実を叩き付けるこの能力を使わせる覚悟を決めたのだろう。

露伴はベッドから脚を出して座り、体ごと彼女と向き合うと、そつと小さくてあたたかな手を握る。

「ぼくは君にひどい事をしてしまった。今もそうだね。君の覚悟や優しき、気遣いを全てぼくは無駄にしてしまっている」

その言葉に、手から伝わるぬくもりに、美晴はハッと息を呑んだ。露伴の瞳が真っ直ぐに己を捉えて離さない。いつの間にか、己もその瞳を見つめていた。

「それでもぼくは訊かすにはいられない。……君が、息を切らしながらもぼくに会いに来たのは、一体なぜなんだ？」

そう問い掛けてきた露伴の姿が急にぼやけて見えなくなった。

本当にこの人はずるくて勝手な人だ。

そう思うと同時に体が動き、目の前にいるその人をギュツと両腕で包み込んだ。

「あなたの給仕係」だからです……っ！あなたは私を一番最初に救ってくれた人だから……！私のもとても大切な人だからです！」

ぐずぐずに嗚咽を漏らし、露伴の肩に顔を埋めっていると背中にあたたかな感触が伝ってきてギュツと己の身も包み込まれる。

「すまない……また言わせてしまったな、それ……でもどうしても、もう一度聞きたかったんだ。ヘブンズ・ドアで読むんじやあなく、君の言葉で、声で、聞きたかったんだ……」

美晴の耳元で聞こえた囁くような掠れ声もまた、震えているように感じた。それを聞くと、美晴は堰を切ったように唸りながらまた涙を溢れさせる。

「露伴先生ばかり我儘です……！早く退院してきてください……！あの家広すぎて独りじゃあ寂しいんです……！ピンクダークの少年だって、早く読みたいんです……！！反省してるならさっさと治してくださいっ！！」

初めて聞いた美晴の我儘。独りよがりでも無茶苦茶で、初めてにしては上出来だなんて暢気な事を思いながら、露伴はゆつくりと優しく彼女の頭を子供をあやすように撫でていた。

「ソー、そうだな……薄味の病院食も飽きたし、君のあのしつこい味の肉じゃがとか、火加減間違えて焦がしたベーコンエッグとか……早く食べたいなア」

「それいつの話ですか……！今は全部あなたの好みに作れています……！！」

真つ赤に泣き腫らした顔を上げて睨んでくる彼女に、思わず涙が溜まる瞳でもフツと笑いが込み上げる。

「そう。ああ、そうだな……じゃあ、注文を変えないといけないか」

クスクス笑いながらまた頭を撫でると途端にむくれる。

「ぼくはそういう君が大好きで大切だ。」

「フム……じゃあ、ぼくの退院祝いのケーキでも焼いてくれ」

「それは……いつの話ですか……？」

美晴が雑に手の甲で涙を拭っているのを、露伴はその手を退けて柔らかなティッシュで代わりに拭いてやる。

「体育祭までには必ず退院してくるよ。来週だろ？すぐだ」

目を細め、最後に溢れた涙を指で拭うとその手は彼女の両手に捕らえられ、祈るように額に当てがわれた。

「早く帰ってきて……」

力が抜けるような眩きに、そのままその手で頬を包んで撫でる。

「言っただろ、すぐだよ……それと、原稿は今度から大切に扱ってくれ。この”岸辺露伴”という”天才漫画家の給仕係”のくせに、原稿の扱いもなっていないとか……恥ずかしいだろ」

苦笑いしながら視線を床頭台のテレビの脇に立て掛けた茶封筒に向ければ、美晴は慌ててそれを手に取って確認し、急いでいたとはいえ無理に鞆に押し込んだ事で封筒のみならず原稿にまでシワが付いてしまっていた事にようやく気付いて、しょんもりと項垂れていた。

「す、すみません……今度から気を付けます」

「ンー、よろしい。それは描き直すからいいよ。君がそのまま持つててくれる？」

その言葉にパツと顔を上げる美晴の期待の籠もった瞳にまた思わず笑みが溢れる。ファンにとつてこの生原稿は、未完成でも垂涎ものだろう。

「というか、君に持つててほしい……かな」

彼女は己の漫画を早く読みたいと言ってくれた。彼女なら己が大切にしている漫画も、同じように大切にしてくれる。

そして己はそうしてくれる大切な彼女を、今度こそ大切にしなければならぬ。もう、こんな悲しいすれ違いが起こらないように。

「はいっ……大切にしますー！」

そうやって嬉しそうに封筒ごと原稿を胸に抱き締める彼女の微笑みを見れる事が、今とても幸せだった。

面会時間が終わり、美晴は今度こそ丁寧に茶封筒を鞆にしまうと病院を後にして行った。

（早く家に帰って、ケーキ焼く練習しとこつと……）

来週には露伴が帰ってきてくれる。リクエストである退院祝いのケーキをどんなものにするか自転車を漕ぎながら考えていたが、帰宅時間ラッシュで駅前には人の往来が激しく、自転車をおりてスーツに身を包んだサラリーマンやOL達と一緒に歩道を歩いていた。

（まずは少し亀友寄ってケーキの本買おうかな……ケーキつて一口に

言ってもたくさんあるからなあ……露伴先生どれが好きかな)

そういえば食事は今まで毎日作ってきたがケーキのような洋菓子を振る舞った事は1度もなく、それを考えると余計に緊張してしま

う。  
(仗助くん達に味見してもらおうかな……いやでも、露伴先生のため  
のケーキって知ったら怒るかなあ……うーん、由花子ちゃんに訊こう  
かなあ……)

ぐるぐると頭の中がシェイクされる気分になる。今まで故意に手を抜いた事は一度だつてないが、退院祝いケーキをミスるなんて事は許されないし個人的に失敗だけは避けたい。

「わっ」

「おっと……」

しかし考えるのに夢中になりすぎて前方から人が歩いてきているのに気付かずぶつかってしまい、その拍子に自転車から手を離してしまいガシャン！と派手な音を立ててそれが道に倒れた。

「すつ、すみません……」

「いや、私も余所見をしてしまったから……こちらこそすまない」

美晴が自転車を起こそうと手を伸ばすより先に、ぶつかってしまった男性の手が自転車を起こしてくれした。薄紫の高そうなスーツに身を包んだ、真面目そうでいかにもエリート社員といった感じの出で立ちの男性は、倒れた時にカゴから飛び出してしまった鞆をわざわざ人の往来の中に取りに行ってくれた。

「鞆も」

「あ、ありがとうございます……」

露伴とは違って我儘なんて絶対に言わなそうな人だなと思った。露伴は露伴で確かにエリートなのだが、纏うオーラが違う、ような。美晴はそんな曖昧な事を考えながら手を伸ばす。

その受け取る時に少しだけ手と手が触れ合った。それだけなら些細な事だったが、美晴が鞆を完全に受け取り終わると男性はその手に手をまた重ねてきた。

「えっ……」

そのままスルリと手の甲全体を撫でられ、ゾクツと心臓と体が震える。次に指の一本一本を丁寧になぞられ、思わず鞆を取り落としてしまうほどのほどにゾツと鳥肌が立った。

「あ、あの、本当にありがとうございます。でも急いでるので、すみません…っ!!」

直感的に危険を感じ、美晴は2、3度ペコペコと頭を下げてから鞆をカゴに入れる動作でその手から逃れ、ササツと逃げるようにその場から立ち去った。

「ん……」

その場にぽつんと残された男は道に落ちていたハンカチを拾い上げると、その持ち主であろう少女の走り去った方向を見る。しかしかなり急いでいた様子だったためか既に少女の姿は見当たらず、途方に暮れたように今一度そのハンカチをジツと眺めていた。

「……そのうちきつと……また会えるかもしれない」

男はハンカチを丁寧に折り畳んでポケットにしまうと、あの少女の手の感触を思い出しながら密かに目を細めていた。

ぶどうヶ丘高校の体育祭

来る体育祭当日。

美晴は早朝から弁当作りに励んでいた。そんな最中、露伴が欠伸を漏らしながら台所に入ってきて「おはよう」と挨拶してくる。

「おはようございます、露伴先生。今朝は早いですね」

「ん……」

露伴は冷蔵庫からミネラルウォーターを出すとコップに移し、ゴクツと目覚ましに一気飲みしていた。

露伴は先日無事退院し、その夜はいつもの夕飯を食べて約束通り退院祝いのケーキを焼いた。悩んだ末に普通のショートケーキにしたが、これが意外と好評で思わず顔が緩んだのを鮮明に覚えている。

「なんだ、その……暢気してるな。」体育祭実行委員」とやらなんじゃあなかったの」

リビングのテーブルにつき、重箱のような弁当箱におかずを詰めているその背中を眺める。ようやくいつもの日常に戻った感じがした。

「だからこうして早起きしてるんじゃないですか。これ、露伴先生持って来てくれますか？」

「ええー……大体なぜそんなに大きいんだ。その弁当箱、というより重箱……」

おかずを詰め終え重箱を組み立てるとその高さ2段。箱はだんだん風呂敷に包まれていく。

「仗助くん達の分もあるからですよ。露伴先生の分もあるし……ああでも、仗助くん達のお母さんと持ち寄るんでまだおかず増えますよ」

「食べ盛りですから、と振り返る美晴の表情はどことなく母親のようにも見え、”あいつらに頼られてるんだな”と露伴は溜息を吐いた。この歳でおかん気質か。しかもバカ共の。」

「分かったよ、そんなの持って学校行かせるわけにいかないしな。」



……というか今、” 仗助達の分もある” と言ったか？

渋々了承したが、ふとさりげなく示された不穏なワードを思い出して眉を潜める。その疑問に「そうですね？」とさも当たり前のように不思議そうな顔をする美晴を見て、露伴は「うえッ」とあからさまに苦い顔をする。

「仗助達と昼ごはんを食べるのか!? このぼくがか!? おいおいおいおい……！ 待って待って待って……！ なぜ？ もう決まっている事か!？」

「当たり前じゃあないですか！ 仗助くん達にこないだの事、ちやーんと謝ってください！ これはそのための機会でもあるんですからね！」

風呂敷に包まれた重箱が喚いている露伴の前に置かれ、美晴は彼をビシツと指差す。それと彼女とを唸りながら見比べ、露伴はますますゲソツとした表情を浮かべていた。

「謝らないなら先生だけお弁当抜きですから」

「うえー……クツソ、なんという事だ……なぜあんなセンスのないバカ共と美晴は仲が良いんだ……康くんは別だが……！」

しかもそのうちの東方仗助は美晴の彼氏という。奴と美晴がキスの1回や2回既に行っているのかと思うと気が狂いそうになる。

露伴は頭を抱えながら重箱をジツと見つめた。あんな奴らに頭を下げるくらいなら、弁当を食べられない方がマシだ。しかもこのテーブルから落つこととしてしまえば、仗助達だって美晴の弁当が食べられなくなる。いい気味だ。己はコンビニでテキトーに昼飯を見繕えばいいのだ。

「朝ごはん、時間ないのでおにぎりとお弁当の余ったおかずを出しますね」

すす、と重箱を動かそうとした時、すみません、と一言添えてその脇におにぎり3個と玉子焼きやウインナー、からあげに小さなハンバーグが並ぶ。

「先生にだけ、ちよつとだけ先出しです」

ふふ、と笑い声を零す美晴はエプロンを外し、いつも自身が座る席に置いていた鞆を手に露伴に背を向けた。

「じゃあ実行委員の仕事があるので早めに出ますね、お弁当よろしく

お願いします。行ってきまーす」

顔だけ振り向いて手を振った彼女は早々にリビングを後にし、頭を抱えた露伴だけがぼつんとそこに残されて静まり返る。

「……くそーッ！こんな持って行かざるを得ないじゃあないかつ！」

先出しされた数種のおかず達。どれも定番だがこうなると他のおかずも見たくなるし食べたくなる。それにこれは美晴が実行委員でありながら手間を掛けて朝早くから作ったものなのだ。これを落とすただとか忘れただとかで腐らすのは彼女を悲しませてしまう。

露伴はあれから彼女を傷付けるような事はしないと心に誓った。スタンドを悪用しない事もだ。それを早々にこんな事で破るのは露伴自身が許さない。

「上等じゃあないか……！この岸辺露伴、乗り越えてみせるぞ……ッ!!」

もう腹を括るしかない。露伴は朝食をかきこむように平らげると席を立ち、昨夜からしていた持参するもののチェックを改めて行う事にした。

そうしてなんとか美晴が出場する”障害物競走”の時間までにぶどうヶ丘高校に着くと、既に生徒の応援に駆け付けた保護者達が、生徒達のいる応援席の真後ろに位置する観客席に詰めかけていて”のんびりし過ぎたな”と露伴は溜息を吐いた。

「美晴はどこかな……」

ぶどうヶ丘の体育祭は学年対抗となっており、1年生の応援席の真後ろまで移動してくるが、それらしい影は見つからない。代わりに仗助と億泰と康一の後ろ姿が見え、3人仲良く話しているところだった。

「美晴ちゃーん！」

もうトラックの方かとそちらに視線を向けようとした時、不意に仗助の声が響いてすかさず彼の視線を辿る。

「あっ」

その先にやっと美晴の姿が見えた時、パン！とピストルの音が響いてトラックを数人の生徒が走り始める。美晴はちょうど次の走者で、

スタート地点で屈伸をした後に仗助の方に向かって手を振っていた。  
「何アピールだよ……！次だろ、集中しろ！」

露伴はそんな事を言いながらもカメラを構え、スタート地点に立つ美晴をファインダーに収める。するとそこに映った美晴はこちらに向かつてまた手を振った。

「……！」

いつも括って前に流している髪を、汗で肌にくっつかないようにポニーテールにしている。よく見たら今日の彼女はそういう髪型になっていた。今朝はいつもの髪型だったので、登校した後に変えたのだろうか。それに加えて体操服にブルマという普段見る事のない出で立ちに思わず固唾を飲んだ、その時またパン！とピストルの音が響いて我に帰る。

「げっ、露伴先生じゃん……！」

「うわっ、本当だ！」

美晴が誰に手を振ったのか疑問に思ったらしい仗助達がこちらを振り向いて気まずそうな顔を見せていて、思わず露伴も眉間にシワを寄せた。

「なんだよ悪いか。ぼくは美晴の保護者だぞ」

フン、と鼻を鳴らしてトラックを走る美晴に視線を転じる。彼女は先頭から2番目を走り、まずは綱を潜る。それを抜けると次は平均台に乗り、慎重に歩を進めていた。

「落ち着いてーッ！美晴さん！」

「特訓の成果見せるーッ！」

果たしてその声は届いているのか。美晴は平均台が苦手なようで、グラグラと体を揺らしている。その間に他の生徒に抜かれ、彼女は3位に順位を落としてしまった。

「あ、あのっ、仗助くんっ！」

そんな彼女の応援をしている最中、仗助を呼ぶ声が聞こえてそちらに思わず視線が行く。

「っ、これ……！一緒に走って……！」

見ると仗助の前に今しがた1位で通過していた女子生徒が”好き

な人とゴール”と書かれた紙を掲げていて、彼は「おう……」となんともしつかりしない返事をしながら彼女とゴールに向かつていった。なるほど、ここは障害物競走の中に借り物競走も含まれているのか。「仗助の奴、美晴と付き合い始めても女子に人気だなー」

「女子って結構ギラギラなんだね……」

億泰と康一が苦笑いしながら1位でゴールする女子生徒と仗助を見ている。あのセンスのないクソツタレがモテてるなんて、この女子生徒もセンスがないのだろうか。露伴が面白くなさそうに息を吐いた時、ようやく美晴も拝借する物が書かれた紙を拾い、キョロキョロと辺りを見回したかと思えば、パチツと露伴と目が合った。

「露伴先生ー!」

他の走者が観客席や応援席へ目的の物を借りるために声を掛けてまわっている中、美晴は真っ直ぐに露伴の方へ息を切らして走ってきた。

「ン、なに……?」

いつもと違う出で立ちの彼女を間近で捉え、柄にもなく心臓が高鳴る。もしや先程の仗助のように、条件に合う人物とゴールする指示がその紙に書かれていたのだろうか。だとしたらどんな人物か。”保護者”というのが妥当だろうか、もし別の、”好きな人”だとか”大切な人”だとかだったら?しかも仗助ではなく真っ先に己を頼ってくるなんて。

露伴は色々な可能性を考えて勝手に悶々としていたが、美晴がスツと紙を差し出してきてそちらに視線が行き、そこに並んだ文字を見る。

”カメラ”を貸してくれませんか!」

「えっ」

そこには確かに油性マジックで”カメラ”と書かれています。ピシツと表情が固まる。

「早くしてください、順位これ以上落とせません……!」

美晴は平均台で順位を落としてしまった分を取り返したいらしい。現に今ゴールしているのは先程の1位の女子生徒のみで、まだ2位に

返り咲ける立ち位置にいるのだ。彼女は足踏みをして露伴がカメラを貸してくれるのを待っている。

「ン、そうだね……うん、よく考えればそうだ。さっきのが特殊なパターンの方なんだよ。そう、そう……」

露伴は1人ボツボツと呟く。

大体借り物競走で挙げられる物なんてたかだか知れている。誰でも今持っていてそうな物が書かれているのが普通で、先程の”当てはまる人物”を連れてくるという条件はレアケースだ。トラブルを避けるために最高でも1レースにつき1枠しか存在しないそれは既にゴールしているのだから、残されている他は普遍的な物ではない。

この岸辺露伴がよもや、そんな初歩的な思考ミスを犯すなんて。

「露伴先生ッ!!」

「ン、ああ、そうだったね。はい」

露伴は首に掛けていたカメラのストラップを外して美晴に渡す。かつてこんな虚しくなるようなミスがあっただろうか。しかし彼女はカメラを受け取るとパツと表情を明るくさせる。

「ありがとうございます！終わったらすぐ返しに来ますから！」

ストラップを首に掛け、落とさないようにしっかりと彼女はトラックに戻って行き、見事そのまま2位に返り咲きゴールを果たした。

「やったーッ！美晴の奴、強運の持ち主だぜエ！」

「身内に持つてる人がいると借りやすいんだよね〜！そこだけは露伴先生に感謝だね！」

「そこだけかよッ！もつと褒めてよ康一くんッ！」

億泰と康一の声に思わず声を張り上げてしまったが、それを聞いた2人はくるつと露伴の方を向くとジトーツとした目を向けた。

「だってよオ〜、あんな高そうなカメラで撮るのが美晴だけとかよオ、身内じゃなけりやあやべー奴だぜエ」

「誰が美晴だけって言ったんだよ……ッ！いや生徒は美晴しか撮らないが……！」

”保護者だからな!”と付け足すが億泰はまだ怪しげな目を向けて

いる。というかこの場合、美晴以外の生徒をバシバシ撮影する方が怪しいだろうが。

このバカ——虹村億泰、確かこないだ読んだファイルの美晴に関する文章では、自分を美晴の兄貴分だと思っているらしい。なんておこがましい奴だ。そう思いながら露伴も負けじと睨み返していた。

「生徒は、という事は……他に何か撮影する予定があるんですか？」

そこで康一が意図してかそうでないか、露伴にとっていい質問を投げかけてきた。露伴はそれを受けて、ンン！と咳払いを漏らして気を取り直す。

「体育祭が終わったら、校内を見学させてもらおうかと思ってね。今日のような父兄も立ち入りを許可されている日なら問題ないだろう？ 外観だけじゃあなく、中も撮影出来る機会は貴重だ」

学校内の写真資料は己が学生だった頃のものも勿論あるが、校舎が違えば当然仕様も細やかだが違う。それにここにしかない特殊な教室だって勿論あるだろう。体育館やプールも是非見学させてもらいたい。それに、己が現役だった頃とは違い客観的にその風景を見れるという機会でもあるのだ。

その漫画家としての至極真つ当な理由に億泰と康一は「ほー」「へー」と声を漏らしていた。そう、岸辺露伴がぶどうヶ丘高校の体育祭に行きたいと思ったのは、何も来宮美晴の応援がしたいだけではないのだ。

（ま、あいつが戻ってくるまでカメラは使えないけどな……いや、使う必要がないな）

露伴がゴールした生徒達の待機場所に視線を向けると、待機位置が近いからか美晴は仗助と仲良く話に花を咲かせている様子だった。あんなのは撮る必要がない。

「おい康一……露伴先生の顔、スゲー怖くなったぞ……」

「多分、美晴さんと仗助くんの交際を認めてないんじゃないかな……ほら、仗助くん原稿ごと露伴先生を殴っちゃったから……」

億泰と康一がコソコソと話す視線の先には、ギリギリと歯を食いしばりながら威嚇するように仗助に視線を送る露伴の姿があった。

そうこうするうちに障害物競走が終わり、美晴は露伴から借りたカメラを返しに小走りで観客席の方へ向かった。

「露伴先生！カメラありがとうございました！」

「ン、どういたしまして。2位おめでとう」

カメラの貸し借りが終わり、露伴が彼女の頭を髪型が崩れない程度に撫でてやるとはにかんだ笑顔を見せる。その姿がなんだか娘のように愛おしく感じた。

「あ、あの、先生……」

そんな最中、おずおずと美晴が露伴の顔を見上げてきた。彼が疑問符を浮かべているとカメラを指差され、それに視線を向ける。

「さつき仗助さんと一緒にこのカメラで写真を撮ったんです。記念につて。現像したら私にくれませんか？」

しかし、その言葉にピシッとまた露伴の表情が固まった。

（このカメラで仗助と写真を撮っただと？全く気が付かなかった……！）

というのもその時、露伴はちょうど億泰や康一と話をしていたところだったのだ。カメラが手元になかったのもあつて暇だったし、美晴の出番はもう終わったからと油断していた。

まさか1番憎い相手と1番大切な相手がツーショットを、しかも己のカメラのフィルムに収めていたなんて。しかしその写真を現像しないと処分するとかは出来そうにない。もしそうしたなら、美晴からの信用を大きく損なう事になってしまう。

こんな時、どんな選択が可能だろうか。露伴はぐるぐると短い時間の中で思索し、そしてひとつの答えにピンと辿り着いた。

「そうだな……せっかくだから美晴が現像してみたら？うちには暗室もあるし、やり方が分からないなら教えてやるよ」

「本当ですか!？」

露伴の提案に、美晴の表情がパーツと明るくなる。これならば露伴が直接現像する必要はないし、美晴も確実に受け取れる。彼女の期待に満ちた目に、露伴は密かにホッと胸を撫で下ろすとひとつ頷いてみせた。

「ああ、お安い御用さ」

「ありがとうございます、露伴先生！楽しみです」

今日の美晴は表情も声のトーンもいつもより明るい。体育祭という普段の机に向かって勉強するだけの日ではない今日この日が、楽しくて仕方がないのだろう。おまけにここには（バカばかりで不本意だが）話の合う友達が何人もいる。今年は一層楽しいだろう。

「ああ、美晴」

露伴は応援席の方へ戻ろうとする美晴の背中に声を掛ける。

「今日の髪型、似合ってるよ」

振り向き様にふわりと揺れたポニーテール。彼女のはにかみ顔が見えるまであと何秒だっただろうか。



## 新手の”スタンド使い”

昼休み。

大判のレジヤースhirtの上はほんの一部だけ空気が重かった。

「露伴先生……みんないるんですからそんな顔しないでください」

その要因こそが、来宮美晴の隣に座る岸辺露伴その人であり、彼は”絶対誰とも話さないぞ”という気合いに満ちていた。

「そ、そっすよ、露伴先生。もつと気楽に、ねっ」

美晴の左隣に座る仗助が露伴に声を掛けるが、逆効果のようではラツと彼は仗助を無言で睨みつけ、己が持ってきた重箱の中身に箸を伸ばす。

「あつ、だめですよ！仗助くん達にこないだの事謝ってからです！」

「いてっ」

今朝提示された重箱——もとい、美晴の弁当を食べる条件。本当だった事とその約束が生きている事にも驚いたが、己の箸を持つ手が美晴にパシッと叩かれた事も衝撃的だった。

「えっ露伴先生、美晴ちゃんのお弁当食べられないんすか？じゃあ俺が代わりに食べますよっつと」

叩かれた手の甲をシヨックに満ちた顔で撫でている露伴を一瞥し、仗助は煽るように目を細めると美晴の弁当に箸を伸ばし、玉子焼きをヒョイツと口に入れる。

「ああーッ！東方仗助ッ、きさまー！」

「ん〜ッ！美晴ちゃんの玉子焼き、グレート美味いッ！」

もちもちと玉子焼きを頬張り、仗助は再び露伴に煽りの視線を向けた。それを見た露伴はぐぬぬと唸り、しかし開き直ったようにフン！と鼻を鳴らす。

「ま、まあ美晴はこのぼくの給仕係だからな。料理も上手くないと困るんだ。これをぼくは毎日朝夕、休日は昼も食べてるんだぜ、仗助エ？」

だから悔しくなんかないぞ、と言いたげに仗助を見ている。今度は

仗助が唸り声を上げる番だった。

「んなつ！そんなところでマウント取るとかヒキヨーっスよ！」

「ハハハッ！なんとでも言え、事実なんだからなア！」

片や唸り声、そして隣から高笑い。その間に挟まる美晴は仗助の母親が先程大急ぎで届けにきてくれたサンドイッチを咀嚼しながら溜息を吐いた。仗助の母親の東方朋子は教師をしている。今日も業務に追われているらしく、せめて昼ごはんだけでもとわざわざ車を飛ばしてくれたのだ。

「美晴大丈夫か…？俺の隣来る？」

まだ言い争っている2人の間にいる美晴が不憫に見えたのか、億泰が隣の空いたスペースをトントントン叩きながら誘っている。康一も家族に囲まれながら心配そうな視線を彼女に向けていた。

「仗助くん、露伴先生も…美晴さん食べづらそうだよ」

康一のその声によくハッと2人は我に帰り、間にいる美晴に視線を落とした。

「わ、悪りー美晴ちゃん！別に喧嘩したくてしてたわけじゃあ…！」

「なんだよ、先に煽ってきたのはお前の方だぞ仗助。自分の事を棚に上げるつもりか？」

露伴の言葉に仗助は「うっ」と言葉を詰まらせた。確かに、先に煽ってしまったのは己だ。軽はずみとはいえ、少し幼稚だったかもしれない。

それにこの岸边露伴という男、前から思っていたがとても自己中心的で我儘だ。恐らく自分も悪いなんて1ミリも思っていない。こういう奴に対しては、ここは己が一步引くべきなのだ。

「す、すみませんっス……」

てつきりまた言い返してくるかと思っただけ、露伴は素直に頭を下げた仗助を驚いたように目を見張って見つめていた。そんな仗助を見て、美晴はジトツとした目を露伴に向けながら彼を肘でぐりぐりと二の腕辺りをつつく。

「う……っ、ぼ、ぼくの方こそ、悪かったよ……それに、こないだの事も……す、すまなかった……」

促されるまま、露伴はそうやって謝罪を口にする。チラと美晴を見遣ると、億泰と康一の方にも視線を向けていた。

「康一くんは億泰くんも……す、すまない、な……」

その言葉を受け、仗助と康一と億泰は目をまんまろく見開いていた。3人の視線を一身に受け、露伴は居心地が悪そうにまた美晴に視線をやると彼女は納得したようにうんうん頷いている。どうやら目的は達成されたらしい。

「ま、まあ、分かればいいんすよ、分かれば……なあ、億泰、康一」

「お、おう、そうだな……そうだよなア……」

「ちよつと意外だけど……もうあんな事しないなら、ぼくも」

3人ともなんとなく戸惑ったような表情をしていたが、露伴の謝罪はしつかり届いたようだ。何故か露伴はホッと胸を撫で下ろしながら改めて重箱の中身に箸を伸ばすともう阻止される事はなく、今朝は出されなかったエビフライを摘んで口に運ぶ。

「ン、美味しい……」

もぐもぐ咀嚼していると、他の3人の箸もワツと重箱に集まる。

「俺も今度はからあげいただきま〜す！」

「あつ！ 仗助ばつかずりーぞ！ 俺も俺も！」

「ぼくも食べてもいいかな?！」

「ふふ、いいわよ。頑張つて作ったからたくさん食べてね」

美晴の顔にまた笑顔が戻った。少しだけプライドが削がれたが、こうして彼女の笑顔が見れるのだから、結果的には露伴にとっても良かったという事になった。

「あ、私実行委員の仕事で午後は応援席にはいませんので」

しかしその言葉にまたピシッと固まる。

「ち、ちよつと待て、聞いてない……どこにいるって言うんだよ！」

「得点係なので、あのボードがある3階ですね。競技の時には降りてくるので心配いりませんよ」

露伴が美晴の指差す先を見ると、得点ボードが視界に入る。それによると今リードしているのは2年生で、僅差でそれを1年生と3年生が追いかけるという状況になっていた。しかしそんな事は今はどう

でも良く、3階にあるというだけあって観客席からでは美晴の姿は米粒ほどこしか見えないだろう。

「じゃあ、少し早めに集まる事になってるし……私行くね」

「ええっ！」

そう言つて席を立つ美晴を露伴は残念そうに眉を下げて見つめる。

「大丈夫ですよ、競技見たいので外は見てますから。ボードまで来たら真っ先に顔出しますね」

靴を履きながら振り向き、美晴は苦笑いを零しながらしゃがんで彼の顔を覗き込んでいた。

「なんかよオ、露伴先生の方が子供みてエだな」

「心を許した人には結構甘えるタイプの人なのかもね……」

億泰と康一がコソコソ話す中、仗助は美晴を呼び止めてその姿を視界に入れる、

「美晴ちゃん、実行委員の仕事頑張つてな」

「仗助くんこそ、この後の騎馬戦頑張つてね。上で応援してるから」

コソ、と2人でグータッチを交わし、美晴は実行委員の仕事のために校舎の方へ向かった。

校舎に入りますまずは自分の教室に入ると、昼食を教室で摂っている生徒や父兄が何組かいた。今日は天気が良いが少し日焼けが気になる陽気で、体育祭的には良いのだが女子にとっては天敵でもある天候だった。かく言う美晴も日焼け止めを水筒と一緒に外に持って行っていた。

美晴は机に水筒を置き、鞆から櫛を出すと女子トイレに向かい、鏡を見ながら髪型を整える。今日は運動がしやすいよう、また汗で肌に髪がくっつかないようにポニーテールでまとめていた。

普段あまり人を褒めない露伴が褒めてくれた事を思い出すと自然と顔が綻ぶ。鏡の中の己も幸せそうな顔をしていた。

「こんな感じかな……」

髪をまとめ終え、頭を振って左右を確認する。そうして満足したように笑うと、女子トイレから出た。

「……………」

しかしどこからか視線を感じ、辺りをキョロキョロと見回す。鋭く刺さるようなその視線は血のようにジワジワと不安を滲ませていく。「気のせいかな……」

そんな感覚を残しながらも教室に戻ると先程ここにいた生徒や父兄達は既に外へ移動したらしく、ここには誰もいなかった。櫛を戻し、水筒を持って教室から出て3階へ向かう。

「……ッ!!」

だが階段を上り切ったその時また鋭く視線を感じ、振り向こうとすると同時に何かが背中にガツ!と当たった。

暗転。

「なんツ……なにツ!?」

視界が暗転し、依然暗闇に覆われている。体は縮こまるように脚を折り畳んで丸まり、横たわっているようだった。試しに脚を伸ばそうとすると、爪先が壁のようなものに当たり、腕を伸ばそうとすればまた壁のようなものに、頭を上げようとしても同じだった。

「何か……狭いものに閉じ込められているわ……!」

ガタガタと手足を動かしてみるがゴソゴソと音がするだけでビクともしない。

「あまり暴れない方がいいぞ。階段から落ちる」

そこに外から男の声が聞こえ、動きを止める。

「だ、誰?!あなたがこんな事をしたの!?!」

「お前はもう動けない。攻撃も出来ない。そこから出られない。……なのに俺の事を知る必要があるか?」

男の声が冷たく響き、ザリザリと音を立てながら閉じ込めている物ごとく移動させられる。

「蹴られないよう端に避けといてやるよ。じゃあな」

「ち、ちよつと!!私が何したって言うのよツ!出さないよツ!!」

中から声を張り上げるが、男のものと思われる足音は遠ざかっていきやがて聞こえなくなってしまった。

「美晴さん遅いね……得点ボードに来たら真っ先に顔を出すって言うてたのに」

康一が応援席から得点ボードのある3階の窓を見るが、他の実行委員が顔を出しているにも関わらず肝心の美晴の姿が一向に見える気がなくて眉を下げていた。

「トイレにでも行ってるんじゃないやあねーの？」

「それにしたって……もうここを離れてから15分は経ってるよ？」

億泰の声に康一はもう一度校舎を見上げて時計を見る。もうすぐ昼休みも終わる時間で、校舎や体育館で昼食を摂っていた生徒も続々と応援席に戻り始めていた。

「まさか何かまずい事に巻き込まれたんじゃないやあ……！」

「仗助がガタツと席を立った刹那、彼らが出場する」騎馬戦”出場選手の入場口への召集の放送が掛かり途端に眉間にシワを寄せる。

「じ、仗助くん、どうしよう!?!ぼくら騎馬の上に乗るんだよ!?!出ないわけにはいかないよ!」

康一が継るように、或いは駆け出そうとしていた仗助を引き止めるように彼の腕にしがみつく。騎馬役であるならまだ替えが利くが、彼ら3人も騎馬戦の花形である騎手役で出場予定であり、補欠になりそうな人物はいない。ギリギリと歯を食いしばり、仗助は得点ボードを見上げて悩むように唸っていた。

「だったらぼくが見てくるよ」

そこに足音と声が聞こえ、3人でそちらを勢いよく振り向く。そこには重箱やウォータージャグを車に戻しに行っていた岸边露伴がいて、得点ボードのある教室を見上げていた。

「露伴先生!」

「お前達は競技に集中しろ。必ず美晴をあの得点ボードのある教室まで連れてくる」

そう言い残し、露伴はすぐに踵を返して校舎の方へ向かい始める。その足は次第に早まり、小走りで他の保護者の群れを押し除け始めた。

(何もなきやあいいが、そういうわけにはいかんだろうな……!)

昇降口の扉を静かに開けて中に素早く忍び込む。昼休みも終わり、恐らく今この校舎内にいるのは教師か体育祭実行委員だけだ。”美

晴に何かした”犯人は相当限定される。まずは階段を登り、得点ボードのある3階へ向かおうと歩を進めた。

一方、美晴は遠くの方で聞こえる騎馬戦出場選手の入場口召集の放送を耳にしながら状況を把握しようとして頭を回転させていた。

(……)、これは……こんな芸当が出来るのはスタンド……!あいつスタンド使いだわ!”何か”背中に当たって……一瞬でこの中に閉じ込められた。ここはその当たった”何か”の中なんだわ!”

感覚的に長い時間閉じ込められているように感じるが、昼休み終了を知らせる放送が聞こえる事を考えると恐らく経過時間は10分ほど。狭いために体が痛み始め、首も曲がっていて息苦しさもある。まるで母親のお腹の中にいる胎児のような体勢でまだ経過時間は10分……昼休みも終わり本格的にこの校舎に出入りする者はいなくなる時間帯、仗助達もこの後の騎馬戦に出場予定であり、助けが来ない状況に絶望する他なかった。

「……………」

と、そこに何者かが階段を登ってくる足音が耳に入り、ハツと息を呑む。時間的に教師か、トイレに行っていた実行委員だろうか。

しかし「助けて!」と叫んだところでどう対処してもらえば良いのだろうか。もしスタンド攻撃だとしたら、一般人にはどうしようもない。余計な心配を煽るだけなら声を上げない方が良いのだろうか。

「美晴、どこにいるんだ?」

考え込んでぐらぐらと視界が揺れる中、足音と共に耳馴染みのある声が聞こえて再び息を呑んだ。

「露伴先生ツ!!」

その名を声を張り上げて呼ぶと足音が止まる。

「美晴?どこだ!?!」

「ここです!!何か」に閉じ込められてるんですツ!!」

その場を回るような足音が聞こえ、やがてその足音はこちらに向かってきて閉じ込めている”何か”を軽く叩かれる。

「まさかとは思いますが……この中かツ!?!この、どう見ても”ただのダンボール箱”に閉じ込められていると言うのかツ!?!」

「えっ……!?!」

耳を疑った。今私を閉じ込めているのは、”ただのダンボール箱”  
だって? 露伴先生は確かに今、そう言った。

理解が追いつかない中、ダンボール箱を擦る音と露伴の溜息が聞こえてきて、次にはカラカラと何かを探る音が聞こえる。

「おいおい……どんなドジだよ。今カッター出してやるからそれで解決だな」

恐らくカラカラとした音はスケッチ用の筆記具の中からカッターを探っている音だったのだろう。すぐにその音が止むと今度はカッターの刃がキリキリとせり上がる音が聞こえ、プツツと箱の端に穴が空いて線状に光が漏れ出す。

「き、気を付けてください……!」

「分かってるよ、怪我しないようにガーディアンで守ってるよ」

「そうじゃあないですッ!」

否定しつつも方が一の事を考えてガーディアンの守護を己に掛ける。一方の露伴は疑問符を浮かべながらもカッターを滑らせる手を止めなかった。

「この箱、私を一瞬で中に閉じ込めてしまったんです! 背中に当たった瞬間にです! こんな事が出来るのは”スタンド使い”だけですよッ! そしてこれが”スタンド攻撃”という事は……ッ!!」

ピタリとカッターの刃が止まる。

「まさか……!」

露伴が呟いた、次の瞬間。

「な、なにーッ!?!」

ズズズッ!と音を立ててカッターで切ったダンボールが継ぎ目も残さずに修復されていく。まるでジツパーを上げるかのような速さで傷が塞がっていく、終いには今カッターが差し込まれている位置まで修復されてそれがバキッ!と音を立てて真っ二つにされた。

「や、やっぱり……これは”スタンド攻撃”です!! 真っ二つになったカッターの片割れが、こっちに落ちてきました!!」

再び暗闇に覆われた視界の中、確かに刃が出しっぱなしになった



カッターの片割れが顔に当たった。幸い美晴にはガーディアン  
の守護があつたので怪我はなかつたが、もし自分がそういうスタン  
ド使用でなければと思うとゾツとする。

しかしそれだけでは終わらなかつた。

「なツ…!!」

「んツ…う!!」

箱がギユツと握られるように更に狭くなり、圧迫感が増す。

「今この箱、”小さくなつたぞ!!美晴!大丈夫か!?”

”小さく”…!?す、すみませ…ツ圧迫感がひどくて、喋るのも…ツツ」

更に体を丸めて凌ぐが、狭さによる息苦しきで呼吸が浅くなる。

露伴は真つ二つになつたカッターの柄の部分を握り締め、今確かに小さくなつたダンボールを観察する。先程カッターで付けた傷はあの一瞬のうちに何事もなかつたかのように塞がっていた。

「無理に開こうとすると修復し、中に閉じ込めた者を圧迫するために縮むのか…!どうやら本体を叩くしかないようだな…!」

立ち上がり、長く続く廊下の先を見る。

「多分、本体はこの階に…ツ階段を降りた音は聞こえなかつたんです…!可能性は…!」

「体育祭実行委員の得点係、だな。得点ボードのある教室まで行けばいいんだらう?」

今いる場所の位置関係は手前の教室に入つて窓の外を見れば分かる。得点ボードの位置は覚えているので、景観で何処の教室にそれがあるのか割り出せば良いのだ。

「ぼくに任せろ、必ず助けてやる!」

露伴は誰かがここに来てしまう前に片を付けようと教室へと駆け出した。

「この位置は…入場口側だな」

すぐ近くの教室に入り窓の外を見る。校庭には騎馬戦の選手達が騎馬を組んで睨み合っているところだった。その中に仗助と億泰と康一の姿を捉え、しかし彼らは美晴が出てくるはずの得点ボードの方

をチラチラと気にしているようだった。

「あいつら、集中しろと言ったのに……！だがこれで考える手間が省けたぞ！」

彼らの視線はここより3、4個ほど離れた教室に注がれている。露伴は内心で彼らに一応感謝をしながら教室を出て廊下を走り始めた。

その彼の足音を聞きながら、美晴は自分の力でもなんとか出来ないかと思考を巡らせていた。露伴が助けに来てくれた事で安心したのか、思案する余裕が出てきたように感じる。

（露伴先生、この箱は「ただのダンボール箱」と言っていたわ……そして箱を開けようとすると傷が修復して圧迫してくる……それなら試したい事があるわ！）

美晴は持つていた水筒を開け、中蓋を取ると目の前の壁に水を掛けて濡らす。そして今一度確かめるように自分にガーディアンを守護を掛け直し、思い切りその湿らせた箇所を拳で殴った。

「やった……！」

殴った箇所が穴が空き、光が差し込む。しかし喜んだのも束の間、すぐにその穴を塞ごうとダンボールが修復していき箱も更に縮み始める。

「湿らせたダンボールはふやけて壊れやすくなるわ！そして私のガーディアンは、守っているものを絶対に壊させないッ！」

縮んでいく箱の中、美晴は水筒の中身の水を自分にもぶちまけるように撒き散らして内部からダンボールを湿らせ破壊していく。そうして箱はふやけたまま縮み続け、ガーディアンを守護のある美晴は修復攻撃を受けても体を傷付ける事なく、ついには彼女がまるでそこから生まれたかのように姿を現し、箱は破れふやけた小さなダンボール紙だけが床に落ちた。

「は……露伴先生がお弁当と一緒にウォータージャグも持つてきてくれてたから、水筒の中身も満タンだったのよね。おかげで助かったわ……！」

昼休みが始まって露伴と合流した時、すぐに彼の持つそれを使って水を補給しておいたのだ。顎を伝う雫を手の甲で拭い、水の滴る己の

体を見る。

「これじゃあ競技に出られないじゃあないの……犯人を捕まえないと気が済まないわ！」

中身が水だったからまだ良かったものの、着替えは下の階に行かないと用意がない。髪を乾かす時間もある。だが暢気に着替え等をしている暇があるなら、今犯人のスタンド使いを露伴と一緒に捕まえておかないと怒りが収まらない。大体そうでなくても、仗助達が出る騎馬戦を見逃す事になったのだ。許しておける事ではない。

美晴は立ち上がると水の滴る体のまま、得点ボードのある教室へと急いだ。

みんなのおかげ、かげのかげ

露伴は目的の教室に辿り着くと飛び込むようにその中へ入り込んだ。  
だ。

「えっ！あれって……岸辺露伴じゃね!？」

「うわ、本当だ！来てるって噂マジだったんだ！」

そこには同じく得点係らしい生徒4人と監督教師が1人の計5人。

(こ、こんなに!?!スタンド使いはどれだツ!?!男か!?!女か!?!)

露伴はこちらに好奇の目を向ける生徒達に変わる変わる視線を向ける。のんびり悩んでいる時間なんてない。

「ええいッ、まどろっこしい!」へブンス・ドアー! ツ!!」

ペンを出し、空中に絵を描くように動かすとまるでそこにガラスや透明のアクリル板でもあるかのように線が描かれ始める。そうして一瞬で絵が完成すると、そこにいる全員の”心の扉”が一斉に開き始めて当人達は昏倒した。

「ぼくも成長したようで、こんな事も出来るようになった……さて、手短に調べさせてもらおうか」

以前は原稿がなければへブンス・ドアーを使えなかったが、今はこうして空中に描くだけで発動出来る。しかし波長が合わなければ使えないのは相変わらずで、今回は全員が波長の合う人間だった事にホッとしていた。

しかし5人の事をサッと調べてみたが、彼らがスタンド使いである記述は誰のものにもなくスツと青ざめる。

「まさか……予想が外れた!?!犯人は応援席の方かツ!?!」

露伴が慌てて窓際に駆け寄ると、騎馬戦の盛り上がりも佳境のようで歓声が至る所で湧き上がっていた。

「ここだよ……」

そこで背後から男の声が聞こえ、ハツと息を呑んでそちらを振り向く。

「くそッ……来宮美晴に俺の”捕縛者”……”キャプター”が破られ

るなんて思ってもなかった……」

そこには眼鏡を掛けた短髪の細身の男子生徒が腹部や脚、腕に傷を付けながら扉にもたれ掛かるように立っていて咄嗟に身構える。

「お前が美晴を……」

「そうだ。まさかと思つてここに戻ってきたが……本当にまさかのまさか。岸边露伴、お前がいるなんて。ちょうどいいから今度はお前を……ッ」

そんなによろよな体でこれ以上何が出来るというのか。しかしその”何かしてやる”という精神力には気迫があり、油断すれば己もやられると確信を持つて言える状況だった。

だが――、

「うらあッ!!」

「んごほッ!!」

突如彼の体が前のめりに倒れ、その背後から来宮美晴が姿を現したかと思えば彼に馬乗りになって両腕を固定する。

「あああッ!!痛い痛い痛いッ!!」

「……………」

美晴がアレを本当に突破してしまった事にも驚いていたが、それよりもそのギャグのような状況に露伴は思わず口をあんどりと開けてしまっていた。

「露伴先生ッ！早くこいつにへブンズ・ドアをッ！」

「あつ、ああ……！そうだね！」

促されるまま露伴は彼にへブンズ・ドアを使うと、まずは余白に”岸边露伴と来宮美晴を攻撃する事は出来ない”と命令を書き込んでからファイルを読み始める。

「名前は村雨<sup>むらづめ</sup> 焰<sup>ほむら</sup>、年齢は17、ぶどうヶ丘高校2年生。スタンド名は”捕縛者”を意味する”キャプター”……空洞のある物に人や物を閉じ込められるスタンド……か」

つらつらとファイルに記述されたプロフィールを読むと美晴は目を丸く見開いた。

「えつ、村雨先輩だったんですか!？」

「知り合い？」

「同じ体育祭実行委員の人です。午後はここで私と得点係をやる事になってた人なんですけど……なんかやたら絡んでくる人で……」

すぐ下でピクピク動いている男子生徒——村雨 焰は顔を上げて割れた眼鏡越しに2人を睨み付ける。

「に、憎いんだよオ……！」

「えっ?」

その彼から漏れ出た言葉に露伴と美晴は顔を見合わせる。

「お前らみたいな”勝ち組”が憎いんだよオツ！岸辺露伴ツ！お前は超人気漫画家でツ！来宮美晴ツ！お前は彼氏とキヤツキヤウフフか!!岸辺露伴とも仲良いみたいだしよオーツ！クソムカつくんだよオオーツ!!」

村雨は鬱憤を晴らすかのように大声で喚いていた。それを聞いた2人はぱちくりと目を瞬かせ、次の瞬間にクワツと表情が強張る。

「それってただの僻みじゃあないですかツ！」

「そうだぞ！ぼくは努力をしてここまで上り詰めたんだツ！」

しかし村雨の視線も負けじと2人を、特に今その体の上に乗っている美晴を睨み付けていた。

「なら岸辺露伴はまだいいッ！だが来宮美晴ツ！お前は許せんぞツ、彼氏持ちのくせに男を何人も連れやがってツ！なのに俺には見向きもしねーとかツ！ふざけてんのかクソアマアツ!!」

そんな理不尽にも程がある事を喚く己の先輩の頭を美晴は容赦なく床に押さえつける。ふごふごと村雨が苦しそうに声を漏らす中、美晴は露伴にチラリと視線を向けた。

「先生、思い切りお願いします」

「ン?あ、ああ……」

美晴の冷たい目には逆らえないのか、露伴は彼のファイルに”わたしはどういうわけか2時間ほど昏倒してしまう”と書き込んで強制的に再起不能にさせた。

「美晴。どうやらこの村雨とかいう男、君ならお近付きになれるかと思っていたらしい。得点係になったのも君と何かきっかけがあれば

と思つたらしいがな、どうやらこいつ相当に面倒な男だぞ……」

読めば読むほどこの村雨 焔、束縛の強い男のようである事が浮き彫りになっていく。恋人がいた事は何回かあるものの、その束縛癖でことごとく向こうからフラれていったという経歴持ちだ。

「なるほど、だから”捕縛者”なんですね……」

彼のスタンドである”キャプター”はまさに”この人にしてこの能力あり”を地で行つたようなスタンドであつた。

「まつ、”心配性”と言えば多少聞こえはイイがな……こういう束縛の強い男は女の方から離れていくもんさ」

自分の事を棚に上げて何を言つてるんだこの人は。美晴は真つ先にそう思ったが、当人である露伴はそんな事は露知らずに日焼け防止のために羽織つてきた上着を脱いで美晴に羽織らせる。

「あと、どうしてそんなに濡れたかは知らないけど……透けてるからな。君自身が軽く見られた原因はそういうところもだぞ」

そんな事を唐突に言われ疑問符を浮かべたが彼の視線を辿つて己の体を見ると、先程脱出するために箱の中で水筒の水を被つたせいで濡れた体操服から下着が透けて見えていて、途端に羽織らせられた上着の前を手繰り寄せながらカアアツと顔に熱を集中させた。その様子に露伴が呆れたように溜息を吐くと同時に仗助達がこの教室にバタバタと慌ただしく入ってくる。

「美晴ちゃん！大丈夫か!」

仗助は真つ先に美晴に駆け寄るが、彼女はサツと露伴の後ろに隠れて顔だけを覗かせた。

「じ、仗助くん……今は見ないで……!」

「ええっ!?!……って、びしょ濡れじゃあねーか!何されたんだ!」

濡れた髪や脚を見て彼は心配そうに眉を下げながら近付こうとするが、頑なに美晴は首を横に振つて徐々に露伴の背後へ隠れていく。「はいはい。仗助、お前も少しは察しろよ。ぼくは美晴を着替えさせに行つてくるから、お前達はそこの村雨 焔を医務室に運んでやってくれ」

露伴が美晴の体を支えて立ち上がり、そこに倒れている村雨を顎で

指す。改めて教室を見回すとこの場にいる全員がヘブンス・ドアによって扉を開かれた状態で昏倒しているという状況に、仗助達は息を呑んだ。今この教室に得点ボードを動している者がいないという事は、いずれここに教師達がやって来る事を示している。

「他の奴らはぼくが教室から出たら目覚める手筈になっている。だがその村雨 焔はスタンド使いだ。2時間昏倒するようにヘブンス・ドアで書き込んでやったから心配いらないな」

だから早く連れて行け、と露伴が促すと億泰が慌てて村雨を担ぎ上げ、康一もそれに着いていくようにこの教室を後にして行った。

「箱に閉じ込められてた!」

女子更衣室の前で仗助は露伴から話を聞いて素っ頓狂な声を上げた。それを露伴は「シッ!」と指を唇の前に持っていき睨み付け、仗助も慌てて口を塞ぐ。

「恐らく村雨は美晴の背中にダンボールを投げつけてその中に捕えたんだ。ぼくが来るまであの子は”何かに”閉じ込められている事は気付いていたが、それが”何なのか”は分かっていたから。ぼくがダンボールだと教えたから、水筒の水を使って脱出出来たんだろうね」

両腕を組み、彼女が濡れていた理由と水筒の中身がカラだった理由を推理する。仗助はそんな露伴の推理を聞き、居心地が悪そうに視線を逸らした。

「その……美晴ちゃんを助けてくれて、ありがとうございます。俺、何も出来なくてよオ……」

「別に。結局あいつはほとんど自分で解決しちゃったしな。ぼくがしたのはほんの少しだけで、ぼくが助けたかと言えば厳密には違うのかもしれない」

美晴はあの状況でも決して諦める事をしなかった。村雨 焔の確保だって、美晴1人でも出来た事かもしれない。

いつだってそうだ。来宮美晴はいつだって”諦める”という選択をしない。己が美晴を家に閉じ込めた時もそうだったように。

そこで更衣室の扉が開き、新しい体操服を着た美晴が姿を現した。



「水筒貸して、中身入れてきてやるよ」

「あ、ありがとうございます……あと、これも」

美晴は空っぽになってしまった水筒と借りた上着を露伴に渡し、彼が校舎を後にするのを仗助と一緒に見送った。

「あの、仗助くん……騎馬戦、応援出来なくてごめんね」

仗助と一緒に壁に寄り掛かり、しゅんと俯きながら美晴はぽつりと呟く。

「いいって、そんなことあよ。それより美晴ちゃんが無事で良かったぜ」

ふと優しく微笑みながら、仗助はそんな彼女の肩を抱いて引き寄せた。互いの体温が伝わり、自然と安堵したように顔が綻んでいくのが分かる。

「あ、でもこの仗助くんよオー、グレートに大活躍だったんだぜ？3年生のセンパイ相手にバツバツとキメまくってよオー」

「本当に？まさかスタンドとか使ってないでしょうね……」

仗助がドヤ顔を決めている姿をすぐさまジトツとした目を向けた美晴が訝しみ、彼はギクツと肩を揺らしてすぐにわたわたと表情を崩す。

「んなことだしねーよ！いや、クレイジー・ダイヤモンドは実を言うところと使ったけど……落馬した相手の怪我をちーつとばかし治したぐれーで……試合には使ってねーよ！断言するッ！」

だがすぐにまた持ち堪え、腰に手を当てて彼は胸を張って言い切った。それを見た美晴はクスクスと笑い声を漏らす。

「冗談で言っただつもりだったんだけど……でも、そういう使い方は仗助くんらしいわ。私、仗助くんのそういうところが好きなのよ」

笑いながら彼に寄り掛かるように体を預ける。仗助はその言葉に目を丸くさせたが、それは一瞬の事で彼女と同じように目を細めると更に密着するようにその身を引き寄せた。

「悪いいな、すぐ助けに行つてやれなくてよ……」

「ううん。大活躍って聞いて安心してたわ……それに露伴先生もいてくれたもの。ちつとも心細くなかったわ」

美晴は目を伏せて、その時の事を思う。

「私、みんながいてくれるから諦めずにいられるのよ。露伴先生に捕まった時も、仗助くん達がいてくれたから立ち向かえたわ。今回だって1人じゃあきつと私、今も閉じ込められたままだった……みんなのおかげよ」

来宮美晴の強さは、仲間がいてくれるからこそ発揮されるものなのだ。それを彼女は実感していた。

私達はみんなで、この短い期間の間にたくさんの事を解決してきたのだ。その強固な絆は他人に測れるものではない。だから村雨に、自分がるで彼らを待らせているかのように言われた事にムカつ腹が立って仕方がなかったのだ。

「ありがとうね、本当に」

仗助だけじゃない。後でちゃんとみんなにもお礼を言わなくては。

来宮美晴は、そんな心強い仲間に出会えた杜王町を、大好きになっていた。

体育祭も1年生の逆転優勝という結果で無事に閉会し、美晴は実行委員の仕事で後片付けや反省会議などをこなしてから女子更衣室で制服に着替えて帰宅しようとしていた。

「美晴」

昇降口で不意に呼び止められて振り向くと、そこには岸边露伴がいてこちらに歩いてくる。

「露伴先生。もう校舎は見て回れました？」

「おかげさまでね。いい資料をたくさん撮らせてもらったよ。今帰りなら一緒に帰ろうか」

どうせ帰る家は同じだ。自転車はここに置いて、次の登校日の朝は露伴が車に乗せていけばいい。こうして一緒に学校から帰るのは、仗助にノートを届けに行った日以来だ。

「亀友寄るだろ？今日の夕飯は何にするんだ？」

美晴を後部座席に乗せ、露伴も運転席に乗り込むとシートベルトを締めながら問い掛ける。

「そうですね……中華はどうでしょうか。麻婆豆腐に餃子でも作りましょうか？」

「いいね。芙蓉蟹もあるともっといい」

「じゃあそれにしましょう」

美晴もシートベルトを締めたのを確認し、ゆつくりと車を出す。その心地よい振動に彼女はうとうとと船を漕いでいた。

「麻婆豆腐に餃子に芙蓉蟹。今日はぼくが作るよ」

公道に入り、亀友までの短い距離の中で露伴が言うのと美晴は微睡そうな意識をパツと呼び戻して目を見開く。

「えっ、いいんですか？」

「今日の美晴はよくやってくれたよ。今も寝そうだったろ？無理もないさ。洗濯もしてくれたし、弁当作りに実行委員の仕事、箱の中に閉じ込められたりで大忙しだったんだからな」

バックミラーに見えた彼女の寝ぼけ眼。村雨の事がなくても、露伴は最初からそうしてやるつもりだった。そのために掃除を済ませてから体育祭に赴いたのだ。

「でも……」

「でも」とか”だって”は受け付けないよ。たまには甘えろ」

今日はもうゆつくり休んで、明日また給仕係の仕事をこなしてくればばい。美晴は甘え下手だから、こうしてやらないと自分に鞭打ち兼ねない。

バックミラーに映る美晴は戸惑ったような顔を依然晒していたが、亀友の駐車場に車を停めてここで待っているよう指示すると首を横に振った。

「だめです！お買い物くらい行きます。それに、寄りたいところもあるんです」

美晴も慌ててシートベルトを取ると車を降りて縋るように露伴の服の袖を掴む。

「じゃあ一緒に行こう。その寄りたいところも寄ってやるよ」

車の中で仮眠でもしてもらおうと思ったのだがどうやら彼女、ワーカホリック気味のようだ。そう仕立て上げてしまったのは己だが、露

伴は溜息を吐きながら袖から離される手を掴んで店内へと歩を進めた。

漫画家の岸辺露伴が杜王町に住んでいるという話は4ヶ月も経とうとしている今では町内じやあ有名な話だ。加えて露伴は顔を隠したりしないし、美晴とも出掛けたりしないわけではない。地元民が多く利用するこの亀友マーケットで、2人が一緒にいても特別騒がれたりしないのはそういう理由がある。ただ、どういう関係かは知られていない場合が多く、“アシスタント”とか“従兄妹”とか“露伴先生のお気に入り”とか捉えられ方は様々であり、しっかりと把握しているのは直接うちに突っ込んできた仗助達くらいなものである。

「餃子の皮は確かうちにはなかったよね」

「はい、あまり作りませんからね。卵はまだあるので大丈夫です」

「ん、そう」

露伴が押すカートに乗ったカゴに今日の献立の材料が着々と入れられていく。他にも牛乳や調味料など、切らしそうなものも入っていた。

「あの、カートくらい押しますよ」

「だめ。手持ち無沙汰ならこれでも持つとけば」

露伴はゴソゴソとカゴを漁ると醤油のボトルを美晴に持たせた。彼女は「ムウ…」とむくれながらボトルを軽く振り、彼の後ろを着いて歩く。

「先生。大切にしてくるのは嬉しいんですけど、少し過保護になったんじゃないですか？」

そんな事を不機嫌そうな声で言われ、露伴は一旦足を止めて彼女を振り向く。

「そう？」

「そうですよ！退院してからあからさまに待遇変わりました！なんかすごい……優しくなったというか、丸くなったというか……！」

足を止めた露伴に追い付くように隣に並び捲し立てる美晴を見て彼は首を傾げたが、「そうか？」というより「それが何か？」とでも言いたげな目を彼女に向けていた。

というのもこの岸边露伴、ここ最近体育祭実行委員の仕事で帰りが遅かった美晴の家での仕事を少しでも軽くしようと、彼女が帰宅する前に掃除を済ませたりしていたのだ。その割に、ついこないだ渡された給金の入った封筒に一枚多くお札が入っていたりもしていた。

「だめですよ、本当に……甘えっぱなしになってしまいます……」

美晴は申し訳なきように視線を下げる。今までは少し雑に扱われつつもそれなりに大切にされていると感じてはいたが、ここ最近の彼はベタベタに甘い。本人に自覚はないのかもしれないが、明らかに態度が変わっている。来宮美晴はまだそれに慣れきっていないかった。

しかしそんな抗議を受けても、露伴はそうしたいからそうしているだけで別段特別な事をしていているとは思っていないかった。

「別に……ぼくは好きな人に甘えてもらえるなら、全然」

ぽそつと呟いて露伴は再びカートを押して歩き始める。

「ち、違うからな!好き」っていうのは……別にそういう”好き”じゃあないからなッ!勘違いするなよッ!

そうやってスタスタ歩く露伴の後ろ姿は耳まで真っ赤に染まっただけで、美晴はポカンとしながらもそれを微笑みに変えて後を追いつつ始める。

「分かってますよ、それくらい!どうしちゃったんですか、急に」

「何も無いッ……こっち見るな!」

「ええ〜?」

クスクス笑う美晴と真っ赤な顔をフィツと逸らす露伴。少し前はこんなやり取りをするなんて2人とも想像もつかなかったが、笑顔が増える事自体はそんなに悪い事じゃあなかった。

「それで、寄りたいところって何処?」

会計を済ませ、レジ袋を持つ露伴は先程美晴が言っていた”寄りたところ”へ向かうその後ろ姿を追う。

美晴の事だから本屋だろうか。彼女は漫画も小説も嗜む。先程まで船を漕ぐほど眠かった彼女でも、新刊の発売日ともなれば睡魔そっちのけで買い物に付き合うだろう。ただ、今日発売の新刊とは何なのか、露伴には予想がつかなかった。

「すみません」

だが彼女が足を止めたのは本屋ではなく亀友の総合カウンターだった。まず目的の場所から予想が外れてしまった事に露伴は自身に溜息を吐き、彼女の隣に並ぶ。

「こないだ多分ここでハンカチを落としてしまったんですけど……届いてませんか？」

「落とし物ですね。少々お待ち下さい」

カウンターにいた店員が拾得物を記録するファイルを棚から出し、ハンカチの落とし物の記録を探す。美晴はジッと待つようにそれに視線を落としていた。

「いくつか届いておりますが……柄や色など一致するものはございませんか？」

店員が美晴に拾得物リストの一部を指差して見せる。そこには1ページにつき10個もの行に落とし物の品名や特徴などがリスト化されていて、露伴にとっては見ているだけでも興味深い代物として映っていた。

「ない、ですね……」

一応次のページも捲って確認したが、美晴が探しているハンカチは見つからなかったようで、首を横に振っていた。

「ハンカチなんてまた買えばいいじゃないか。何なら今買っていくか？」

札を言ってカウンターから離れ、駐車場への道を辿り始める最中に露伴が提案してみるが、それについても彼女は首を横に振る。

「あれは大事なものなんです。億泰くんからもらったハンカチなんですよ……代わりなんてありません」

そういえばヘブンズ・ドアーで美晴のファイルを流し見した時、そんな事も書かれてあったような気がする。

美晴は虹村形兆が死んだ日、持っていたハンカチで億泰の傷の止血処置をした。その汚れたハンカチの代わりに億泰は後日彼女に買って渡していた。それは美晴にとって億泰との友情の印のようなもので、とても大切にしているものだったのだ。

「交番にも行ったんですけど、届いてなくて……ここのカウンターにももう今で3回目になります。でも全然見つからないなんて、変じゃあないですか？」

その交番にも既に2回届けている。落としたと思われる日に使った道も全て確認した。家の中も勿論だ。なのに出てこない。

可能性で考えられるのは拾い主が捨ててしまったか、今もそのまま持っているかの2択である。だが、いくらハンカチでも他人のものを何の躊躇いもなく捨てたり出来るだろうか。持っているにしても、何故持ったままなのか。

「……美晴。君、また今日の村雨みたいに誰かに狙われているんじゃないか？」

導き出される可能性。それもほんの僅かなものだが、拾い主がそのまま持っている理由として”また出会った時に直接渡せる”というのが挙げられる。そうなる相手は”このハンカチは来宮美晴のものである”という事を知っている事になる。

静まり返る駐車場で、露伴は足を止めて美晴を振り返り見つめる。彼女は目を丸く見開いて足を止め、次に考える素振りを見せた。

「思い出せ。何かなかったか？何でもいい、言ってみろ」

彼女の両肩を掴み、今も誰かが見ているのではと露伴は警戒し始める。そんな中、美晴はハッと小さく息を呑んだ。

「手を……」

「ん？」

”手”を……触られました。男の人です。それもただの触り方じゃあなくて……まるで感触を確かめるような、舐め回すような手つきで……」

思い出した。露伴の見舞いに行った帰り、男とぶつかってしまい自転車や鞆を彼に拾ってもらったのだ。その男が、そういう事をしてきた。あのゾワツとした感覚が急に背中を這い上がってきて思わず己の両肩を抱く。その様子に露伴はチツと舌打ちを漏らした。

「変質者か……美晴、暫くの間なるべく1人で行動するなよ。康一くんでも仗助でも誰でもいい、誰かと一緒にいるんだ。そうすれば相手

は警戒して近付かないだろうからな」

改めて今日、一緒に帰っていて良かったと思う。暫く送り迎えも己がしてやった方がいいだろうか。

しかし何故美晴ばかりが狙われるのだろうか。

露伴は小刻みに震える彼女を己の車に誘導させ、感じる視線を振り切るようにいち早く家に帰ろうとそれを発車させた。



## 水族館に行こう！

体育祭の振替休日である月曜日。

美晴は姿見の前でしきりに服装をチェックしていた。横や後ろもくまなくチェックし、新しく買った花柄のスカートがそのたびに揺れる。

「美晴、何やってるんだよ……」

「うわっ、露伴先生！ノックくらいしてください！」

そこに少しだけ開けた部屋の扉の隙間から露伴が覗き込んできて思わず声上がる。お決まりの反応に彼は溜息を吐き、扉を完全に開け放った。

「もう時間だろ。今日は“不本意”で“誠に遺憾”だが、君と仗助のデートの日だ。駅まで送ってやるんだからさっさと降りてこい」

”不本意”、“誠に遺憾”。そんなワードをわざと強調する露伴に美晴も溜息を吐く。しかし釣られて時計を見れば約束の9時まであと20分ちよつとのところで、慌てて鞆を持って露伴に着いていくように一階の玄関まで降りた。

「携帯電話、持った？」

玄関前で露伴が振り向いて確認すると、美晴は鞆から新しく彼に買ってもらった携帯電話を見せる。美晴を狙う変質者の事もあり、昨日露伴と一緒に契約したばかりものだ。まだ互いの電話番号しか登録されていないが、仗助達の番号も登録しておけば安心だろう。……露伴的には”不本意”ではあるが。

「デート中に掛けてこないでくださいね？」

「いくらぼくでもそんな無粋な真似はしないよ」

美晴が念を押すように携帯電話をしまいながら言うのを、「はいはい」と二つ返事で受け流す。

岸辺露伴は東方仗助の事が嫌いだ。己の漫画のセンスが分からないうバカでダサイ奴だし、来宮美晴をいつの間にか己の隣から攫っていった男だから。しかし、仗助という時の美晴はとても幸せそうに笑

うのだ。最初こそ引き剥がしてやろうかと思っただが、そうしたならきつと美晴は露伴の事を一生恨むだろう。

だから、来宮美晴が東方仗助と一緒にいて幸せに笑っている間は目を瞑ってやる事にした。

(しかし仗助。一度でも美晴を泣かせてみる。ぼくはいつだって美晴を貴様の隣から攫い返してやる気でいるぞ)

岸辺露伴が来宮美晴に抱く感情は、恋に限りなく近く、それでいて限りなく遠い”愛情”だ。露伴は彼女の事に関しては、自己を優先させずに彼女にとつて一番良いと思える行動を取ると決めている。これもその一環だ。

「今日の帰りはどうするの？」

美晴を車で駅まで送り、仗助との待ち合わせ場所に向かおうとする彼女を窓を開けて呼び止めながら問い掛ける。

「仗助くん到家まで送ってもらいます」

「分かった。じゃあ今日は楽しんでおいで」

少し前に美晴本人からも指摘されたが、露伴にも少々彼女に対して過保護なのでは、という自覚はある。しかし体育祭での村雨 焰の件や、彼女のハンカチを所持していると思われる変質者の事を考えると、そうならざるを得ない。

その点においては美晴にスタンド使いの友人がたくさんいて良かったと思える。特に恋人である仗助はスタンド能力も強力だ。……誠に遺憾ではあるが。

「……何もないといいが。」スタンド使いはスタンド使いと引かれ合う”、か……」

美晴の後ろ姿を見送りながら、露伴はぼつりと呟く。今回は杜王町を出てS市内へ行くわけだが、美晴や承太郎がそうだったように杜王町の外にもスタンド使いはいるはずだ。

妙な胸騒ぎを抱えながらも、露伴は駅前に来たついでに画材屋を覗いてこようと車を再び走らせた。

「仗助くん！」

美晴が待ち合わせ場所に向かうと、既にそこには仗助がいた。その呼び掛けに気付いた彼は手を振りながら駆け寄ってくる彼女を視界に入れてハッと息を呑む。

「美晴ちゃんーうわ、グレートに可愛いな……」

私服の美晴を見るのは彼にとつて初めての事だ。普段見慣れた制服姿とは違う新鮮さがあつてドキドキと胸が高鳴る。

「そ、そう……？仗助くんもそのジャケット、とても似合ってるしカッコいいわ……」

一方で美晴も、そんな彼の私服に胸を高鳴らせていた。

いつもの改造学ランと違い、引き締まって見える黒のジャケット。暫く互いの私服姿にソワソワと体を揺らしていたが、仗助は美晴の前に流してある髪に手を伸ばす。

「今日は髪留めも違うんだな……本当にスゲー可愛い」

花柄のスカートに合わせた、同じく花をあしらった髪留め。スルリと梳くようにその髪に触れると、美晴の頬が赤く染まった。

「ん……仗助くんに、”可愛い” って言ってもらいたくて……」

「！　そ、そっか……」

恥じらいながら紡がれる言葉に、思わず仗助まで頬が染まる。そのために頑張ったというなら、それはもう大成功だ。だって会った時から”可愛い” と思っているし、それ以上の言葉が出てこないのだから。

「ん、えっと……じゃあ、行こうぜ」

せつかく早めに来てどうエスコートするかを考えていたのに、ほぼぶっ飛んでしまった。もつとカツコよくキメようと思っていたのに、そんな言葉しか出ない。それでも美晴は己の隣に並んで頷いてくれるのだ。その姿が愛らしく見えて、”本当にこの子は俺の恋人なんだ” と思わせてくれる。

券売機で切符を買って電車に乗り込み、空いている席に2人で隣同士で座る。平日で通勤ラッシュも通り過ぎ車内の人影は疎らだったが、人前で密着するような距離感になるのは初めての事で、それから心臓がうるさく鼓動を鳴らしていて早く目的の駅に着かないかと

またソワソワし始めていた。

(今日の仗助くんも、私のために頑張ってくれたのかな……そう思うのは自惚れなのかな。ああ、なんだか緊張するわ。とっっても楽しみなのに、逃げ出してしまいたい……)

(今日の美晴ちゃん、マジでグレートに可愛くてどーしよって気分だぜ……俺、ちゃんとエスコート出来んのかな……くそッ、どうしたら美晴ちゃんに”カッコいい!”って思ってもらえんのかなア……)

高まる緊張の中、2人して視線を膝に落としながら思考を巡らせる。

「あの、」

それでも何か言葉を紡ごうと意を決すると互いの声が重なって気まずそうにすぐに顔を逸らしてしまった。「あ、あ……」などと声を漏らし、チラチラと互いに様子を窺い、また落ち着かない様子で視線が泳ぐ。

「今日、よオ……俺も、杜王町から出るの久々なんだ。楽しみだな」

最初に口を開いたのは仗助だった。彼は膝に視線を落としつつも呼び掛けるように彼女にチラリと視線を一瞬向ける。その言葉を受け、美晴もこくこくと頬を赤く染めながら何度も頷いた。

「私も……仗助くんと一緒にだから、すごく楽しみだわ」

彼女が嬉しそうにそう言うのだから、また仗助は視線が膝に戻ってしまい顔に熱が集中するのを感じて思考がフリーズ寸前になってしまっていた。チラリとまた視線を隣にそのまま向けると己の膝よりも小さな膝が見えて目を伏せる。

「あつ、仗助くん。降りるのここよね？」

その声にハッと意識を現実に戻して窓を見ると水族館の最寄り駅の名前が見えて慌てて立ち上がる。

「おっ！おおッ、そうだ！降りようぜ！」

「あ……！」

美晴の手を掴んで、扉が閉まる前に彼女を連れて電車から降りるとすぐにそれは発車していつてしまった。ギリギリセーフだった事に安堵の溜息を吐くが、ふと手の中に柔らかな感触があつてそこに視線

を落とす。

「! は、離さないで……!」

無意識に掴んでいた彼女の手を恥ずかしさで解こうとするが、あの柔らかな感触がすぐに追いかけてきて再び手と手が繋がった。

「離しちゃだよ……」

周囲には人も疎らで、静かな駅のホームにか細い彼女の声が響くように感じた。顔は俯かかれています表情は分からなかったが、その声は寂しそうな響きを纏っていてキュツと胸が締め付けられる心地になる。

「……悪い、ちつと動揺しちゃってよ。……もう離さねーから、心配いらねーぜ……」

そんな彼女を、手を繋いでいない方の手で抱き寄せた。髪型が崩れないようにそつと頭を撫でると、胸板に彼女の額がコツリと当てられる。

美晴を狙う変質者の話。つい昨日カフェに呼び出されたかと思えば、それは億泰や康一、露伴も交えて彼女の口から直接語られた。露伴にもその場で”なるべく美晴と一緒にいてやってくれ”と念を押されたのを覚えている。

まさかこんなところでまで付けてくるとは思えなかったが、ここ最近立て続けにスタンド絡みのトラブルに遭っているのも事実だ。変質者でもスタンド使いでも、何かあれば今日彼女を守ってやれるのは東方仗助、己しかない。

「ご、ごめんなさい、なんか我儘みたい……」

そうやってパツと離れようとする美晴の体をもう一度引き寄せて抱き締める。彼女が目を丸くしながら仗助を見上げると、彼は優しく目を細めて見つめていた。

「いいって。美晴ちゃん全然甘えてくれねーんだもんよオー、たまには甘えてくれよ。な?」

普段からあの露伴の給仕係をしているからか、美晴は”自分がしつかりしなければ”と気を張っている事も多い。今だって電車を乗り過ぎしかけて、そう思わせてしまったかもしれない。もう付き合い始めて1ヶ月になるが、キスをしたのだからあれつきりだし頼りなく思

われていても仕方ない。

しかし、男である以上はやはり好きな女の子には頼られたいし甘えられたい。このデートで全て挽回してみせる。仗助はそう意気込んでいた（初っ端からミスの連発だったが）。

「さ、行くこうぜ。まだ水族館に着いてもいねーんだからよ」

きゅっと指を絡めるように手を繋ぎ直し、彼女が歩き出すのを待つように一歩前に出て振り返る。そうして歩き始めると、改札を出て少し先の方に見える目的地を目指した。

「デツツケエー……い！」

S市内で一番大きい水族館。承太郎もそう言っていたが、目の前まで来るとさすがに迫力が違う。少しの間その外観を見て2人して立ち尽くしていたが、ハツと我に帰ると入場口まで歩く。

「仗助くん、仗助くん」

承太郎がくれたチケットを係員に見せてもぎってもらい、入場口にあったパンフレットを広げていると美晴が彼の袖口を引っ張り一枚の紙を見せてきた。

「このペンギン……喋るんだって！」

その新聞風のチラシには“不思議!?喋るペンギン達!”とデカデカと見出しが載っており、ペンギンの写真と共に活字が並べられている。

なんでもこの水族館のペンギン達は文字通り”喋る”らしい。それも1羽ではなく全員が、”ペンギンふれあいショー”というプログラムの中でだけ。

(どーせアテレコか何かだぜ……上手い商売だな)

仗助は真っ先にそう思ったが、キラキラと好奇心に満ちた目を見せる美晴の前でそんな事は言えるはずがなかった。

「これ……後で見に行ってみるか?」

「! ……うん!」

彼がそう問い掛けてみると更に瞳の輝きが増して笑顔で頷く。その反応が可愛らしくて、もしかしたらこれが彼女なりの”甘える”と

いうやつなのかと直感した。心なしかいつもより子供っぽくも見えるが、新しい一面を垣間見たようで仗助にとつては嬉しい事だった。なんとなく、億泰が「あいつは俺の妹分だぜエ、仗助エ!」と言っていたのが分かる気がする。

「うし、じゃあ順番に見ていくか。ペンギンはそこに着いた時間で、何時の回を見るか決めようぜ」

ここはしつかり己がリードしなければ。頑張れ仗助くん!この日のためにこの水族館が載ってる旅行雑誌を買い漁ったんだぜツ!仗助はそう自分を激励して展示物のあるフロアに彼女を連れて足を踏み入れた。

さすがに平日というだけあって館内は人も少なく、ゆっくり見て回れる余裕があった。改めて体育祭の振替休日をデート日にして良かったと心の底から思える。

「見て、仗助くん。この水槽、いろんな色の魚がいるわ」

「ほんとだ、スゲーな……あ、そのサングの陰にもいるぜ」

ちようど2人くらいの人数で覗けそうな小さな水槽を指差す美晴の隣に並んで仗助もフヨフヨと水の中を漂う小さな魚達を眺め、サング礁の模型の穴の中も覗き見ながら「ほんとー!」と小声だが嬉しそうに微笑む彼女を水槽の反射で眺める。

そう、水槽の中を見るのはほんの少しの間だけで、仗助は水槽の反射を使って彼女の嬉しそうな顔をずっと見ていた。今までの水槽でもそうだった。

誰も知らない、同居人の露伴ですら知らない来宮美晴を、今は己だけが独り占め出来るのだ。まだ彼女を抱き寄せてみる事は人前なのもあって出来ていないが、すぐ隣を見ればそこに彼女がいる。それだけで今は十分すぎる程だった。

「……仗助くん、もしかして……」

「えっ!な、なんだ……?」

そこで不意に美晴が仗助を振り向きながら呟き、ギクツと肩が跳ねる。まさか、水槽の反射で彼女ばかり見ている魚を見ていない事がバレてしまったのだろうか。心臓がドクドクと波打つ中、暫し2人で見

つめ合うと彼女の手が仗助のジャケットの袖を掴む。

「もしかして、私達って周りにカップルに見られてなかったりしないかしら……」

予想していたのとは違う言葉に仗助はホッと安堵したが、しかしその内容も確かに気になりはする。水槽から視線を外して辺りを見回すと、人は疎らだが水槽の前で写真を撮っている人やスケッチをする人、その中に紛れて何組かカップルらしき男女もいた。

慣れた手付きで男が女の腰に手を回し、甘えるような女の猫撫で声が微かに聞こえるような、そんな雰囲気のカップルも中にはいる。そうでなくても、大人だからなのかどことなく艶っぽい雰囲気はある。そんな中、己達だけ高校1年生の出来立てカップルだった。

「……別に周りがどう思おうがよォー……俺らがカップルだって思ったりやあ、カップルなんじゃあねーの……」

しかしその中の誰もが、2人の事を気に留める様子はなかった。仗助は少し不安げな様子の彼女を見つめ、手をキュッと握り直す。

結局のところ、周りがどう思ってるかなんて分からないし、意識したってどうしようもない。それどころか、ここにいる人々はそれぞれ時間を過ごしている。こちらに気を向ける素振りも見せないのに、こちらだけがソワソワと気にするのはおかしな話だ。現に仗助だって今の今まで魚の事すら気にせずに美晴を見つめていたのだ。その美晴だって、十中八九ふと今しがた周りを改めて見てそう思っただけなのだろう。

「俺らがお互いにそう思ったりやあよォー、関係ねーよ。俺らはちゃんと付き合ってるし、だからこうしてデートしてるだろ？ここにいる奴らが何と思おうが、俺らだけがそれを分かっただけりゃあいいの。周りなんて気にすんなよ」

彼女の不安を拭うように柔らかい声音で紡ぎ、ポンポンと優しく頭を撫でた。

「不安なら周りじゃあなくてよー、俺の事見てなよ。美晴ちゃん」  
「仗助くん……」

美晴はその優しい微笑みを直視出来なかった。だって、この薄暗い



館内の中でもはっきり分かるほどに綺麗だったから。

心臓がドキドキと煩く響いて、体が熱くなつていく。彼が掛けてくれた言葉のひとつひとつが沁み渡るように響く。

「……ありがとう、仗助くん」

きつと恐らく、こんなに素敵な彼は自分には勿体ない。でも、その彼が”自分達はカップルだ”と言ってくれる。そうである限りは、彼の隣にいたい。こんなにも好きで、幸せな気持ちになるのだから。

彼も同じ気持ちなのだろうか？

「行こうか」と私の手を引いてくれる彼も、私と同じ気持ちだろうか？

(私……あなたの事、もっと好きになっちゃうわ……)

言われなくなつて、彼の事をずっと見つめていたい。

己の歩幅に合わせてくれる彼の足並みも、全てが愛おしく感じていた。

## 君の笑顔が1番好き

昼食は水族館にあるレストランでシーフードカレーを食べた。6月にしてはよく晴れていて、仗助と美晴はテラス席で足を休めながらのんびりとした時間を過ごしていた。

「今日は空いてるし、ゆっくり見て回れて楽しいわ」

美晴が館内マップを広げながら満足している様子で今まで辿ってきた道を指でなぞっていく。まだ見ていないコーナーもあるが、半分ほどは周れただろうか。さすがの広さである。

「んじゃあよー、次はペンギン見に行くか。そろそろショーも始まる時間だぜ」

仗助が別紙のイベントプログラムを見ながら腕時計を確認すると、時刻は13時の10分ほど前だった。ペンギンは屋外展示となっており、ペンギンふれあいショーもそこで行われる。2人は席を立つとここからさほど遠くないその場所まで歩を進めていった。

「はーいー！みなさーん！こんにちはー！」

ペンギンの展示コーナーの中で女性飼育員がピンマイクで拡声された声を響かせる。平日なのもあって人は疎らだが、1番前を取れて興奮を隠し切れていない美晴も「こんにちはー！」と声を響かせていた。飼育員の周りにはペンギンが10羽ほどよちよち歩いていて、更に目を輝かせている。その様子を仗助はペンギンそっちのけで見ていた。

『おいッ、そこのにいちちゃんッ！カノジヨよりも俺を見ろよオツ！』  
「ッ!？」

そこに突如、飼育員のものではない声が響いて仗助はギクツと肩を揺らした。恐らく条件に当て嵌まるのは己だけで、辺りをキョロキョロと見回す。

『ここだよ、ここオー！』

『これこれミントよ、つがいに夢中になるのはおのこのサガよ』

若い男の声にジョセフのような老いぼれた声。まさかと思いペン

ギン達に目を向けてみると、その中の2羽のペンギンがこちらをジッと見つめていた。

「おやおやくらゝ1番前のお兄さんがカノジョさんに夢中で、ペンギンさん達も嫉妬しちやつたみたいですね〜!」

飼育員が補足すると周りからクスクスとした笑い声が聞こえてきて、カアツと顔に熱を集中させて俯く。まさかこんな事で美晴をずつと見つめていた事がバレてしまうなんて。チラリと隣にいる彼女を見れば、彼女もまた顔を赤らめながら口元を両手で恥ずかしそうに隠し、仗助を見ていた。

そんな2人の前では飼育員が「若くて緑色のリングがミントくん、青いリングのおじいちゃんやんがブルーじいじ」と2羽の脚に付いたリングの色も交えて紹介している。

「さて、この喋るペンギンさん。ちよつとどうして喋れるのかは私達にも分かりませんが…!みなさーん!これはアテレコなんかじゃありませんからね〜!みんなそれぞれ自分の意思でおしゃべりしてるんですよ〜!」

プールから上がってきたペンギン達が『エサ!エサくれ!』と飼育員に群がっていく。

(確かにこりやあ……予想以上だぜ。若い方は分かるがよー、ジジイまでいるとは。しかしこれは……)

仗助は気を取り直し、喋るペンギン達をジッと見つめる。その視線を感じたのか、先程のおじいちゃんペンギン——ブルーも視線をこちらに向けた。

『はて、お主……』

ブルーはエサやりをする飼育員そっちのけでプールに飛び込むと仗助の前まで泳ぎ、水面にプカリと顔を出す。

『お主、少し”承太郎”と雰囲気似ておるのう』  
「なにッ……!?!」

まさかペンギンの口から承太郎の名が出てくるとは思わず、辺りを忙しなく見回す。隣にいる美晴にもその声が聞こえたようで同じように視線を動かしていたが、彼ら以外の視線はエサに群がるペンギン

達の方に注がれていて更に焦りが募る。しかしそんな2人の様子を見てブルーはケラケラと笑っていた。

『今ワシの声は、お前さん達にしか聞こえておらんじゃ。そうなるように”範囲を絞っておる”』

「し、絞る…?」

2人して疑問符を浮かべていると、水面をスイーツと何かが滑るように流れてきてそちらに視線を向ける。

『アレじゃよ。他にもあるんじゃ。ワシのはそういう”スタンド”だと、承太郎が言っておった』

流れてきたのは薄型のスピーカーのようなもので、よく見ると同じようなものがペンギンの展示スペースの至る箇所に貼り付けられていた。

「ス、”スタンド”だとオ…!?!」

「じ、じゃあ、このブルーじいじは”スタンド使い”…!?!」

また周囲を窺うとどうやらその薄型スピーカーはこの場にいる2人にしか見えていないようで、ブルーがスタンド使いである事は確定的となった。

ブルーのスタンド。”翻訳者”の名を冠する”トランスレータ”は自分や周りの言語を、伝えたい相手の操る言語に翻訳するだけのスタンドである。だからブルーの周りにはいるペンギン達の言葉が人間の言葉に瞬間的に翻訳され、声を伝える事が可能となったのだ。ちなみにスタンド名は以前ここに訪れた承太郎が付けてくれたものらしい。

「いや、まあ、ネズミのスタンド使いもいたぐれーだしよオー、分かんなくはねーけど。こういうスタンドもあるんだな……」

仗助はついこないだ承太郎と共に狩ったネズミのスタンド使いを思い返す。あのネズミは凶暴だったが、同じように動物のスタンド使いである彼は凶暴どころかショーに一役買っている。それは恐らく、水族館に飼われているペンギンだからこそその思考なのだろう。

今まで戦闘向きだったり脅威になり得るスタンド使いとばかり遭遇していたが、そういえばイタリア料理店のトニオ・トラサルディー

という料理人も、”料理を食べた人間を健康にする”という無害なスタンド使いだった事を思い出して、スタンドとは多種多様なのだなと改めて感心してしまった。

『ワシはのー、ここでのんびり過ごしているのが好きなんじゃよ。ほんで、人間も好きじゃ。エサはくれるし、ワシらが喋るとみーんな笑顔になるんじゃ。楽しいのう〜』

ブルーはまるで笑うように目を細めていた。なるほど、確かにこのペンギンにしてその能力なのだ。やはりスタンド能力というのは、本体の才能や性格に依存するものなのだろう。

そうしているとスイーツと先程ブルーと一緒に紹介されていた若い方のペンギン——ミントがこちらに泳いでくる。

『おい、じいさんよ！早くしねーとエサなくなるぜ！……あつ、オメーさっきのにいちゃん！近くで見るとジョータローにちよつと似てんな！』

その声を聞くや、ペンギン達が『ジョウタロ!? ジョウタロ!』と言いながらプールに飛び込んで仗助達の方へ群がってくる。

「あれー！みんなお兄さんの方に行っちゃいましたね！エサはもういいのかな？」

飼育員も驚いてそちらを見ているので、ブルーがまた翻訳範囲を2人に絞っているらしい。その声に思わず苦笑いしながらペンギン達を見ていたが、『ジョウタロじゃない!』『違った!』と口々に言いながらスイスイと水面を泳いで解散し始める。まったく気ままな連中である。

「承太郎さん、このペンギン達にずいぶん好かれてるみたいね」

『承太郎がたまーにここに来て構ってくれるんじや。ワシらペンギンの事について詳しいからのー、みんな大好きじゃよ』

そういえば空条承太郎は海洋冒険家だ。ここを勧めてくれたのも承太郎だし、よほど彼もこのペンギン達や水族館自体が気に入っているのだろう。

『さて、エサを食いっぱぐれるのはイヤでの。みんな食べたならワシもゆつくり食べに行こうかの』

ブルーはスイーツと水面を泳ぐと飼育員にエサをねだりに行ってしまうた。

「ふふ、なんだか愛着が湧いちやうよね、こうしてお喋りが出来る」と美晴の方にスイスイと群がってきたペンギン達が『ジヨウタロの知り合い？知り合い？』と彼女に質問している。「そうよ」と笑い声を零しながら応える姿が可愛らしくて、また仗助は美晴の事をつい目を細めながら見つめてしまっていた。

『時に仗助だったかなあー？』

そこにまたブルーの声が響く。美晴が反応を示していないのを横目にし、彼が翻訳範囲を仗助一人に絞った事に気付いてチラリとそちらに目を向ける。

『こういう場所ではのー、おなごばかりデレデレ見るでないぞ！あとで話が噛み合わなくて苦労するからのー！』

その言葉にギクツと肩が跳ねる。しかしよくよく考えてみれば彼の言う事は尤もであり、仮に美晴が後で「あの魚が可愛かった」などと話しても「俺、美晴ちゃんしか見てなかったから分かんねーや」なんて言ってしまったらきつと彼女は残念に思うだろう。今するべき事は、彼女だけを見つめる事ではなく、彼女と一緒に水族館を楽しんで共有出来る思いを増やす事ではないか。——それをペンギンに教わるとは思ってもみななかったが。

『それとワシらペンギンはのう、一度つがいになったら一生添い遂げるほど一途なんじゃよ。お揃いの土産を買うならワシらペンギンの物がオススメじゃよー！』

ブルーがパタパタと翼を上下に振っている。それを見た美晴はその視線を辿って仗助を見上げた。

「ブルーじいじ、もしかして仗助くんにだけ何か言ってるの？」

「えっ!?お、俺も何も聞こえねーけど、こっちにいるペンギンにでも話してんじやあねえの？」

さつきからこのペンギン達のおかげで動揺しっぱなしだ。仗助は声を裏返しながらも手を顔の前でプルプルと横に振るが、相変わらず美晴に疑問を含んだ目で見つめられて背中に冷や汗が伝う心地にな

る。

(くっそ、ブルーのヤツ！ちやつかり俺にだけ売り込みやがって！  
ぜってー買わねえくっツ…!!)

と、思ったのだが。

おみやげコーナーまで来ると美晴がイルカのぬいぐるみを手  
持って眺める横で、仗助はペンギンのキーホルダーを見ていた。あ  
の後ペンギンの展示コーナーの説明文を読んだのだが、ブルーの言  
った通りそこにも”カップルのおみやげにおすすめです！”と書かれて  
いて、信じるわけではないがあやかってみるのも悪くないかもしれな  
い……と思ってしまった。

(ペンギン、まあ可愛いしな……美晴ちゃんも喜んでくれるかもな)

あそこにいたペンギン達は意思疎通が図れるというのもあるが、皆  
一様に愛嬌のあるペンギンだった。また来る機会があったら話をし  
たいと思ったほどだ。承太郎が2人にここを勧めた理由の中に、き  
つと彼らの事も入っているに違いない。

見ていたキーホルダーの隣の棚にはご丁寧にペア物まで売って  
いて、それを手に取ると美晴を見る。彼女だったらこのペアのペンギ  
ンキーホルダー、どこに付けてくれるだろうか。

「仗助くん、決まった？」

その視線を感じたららしい彼女がこちらに小走りで近付いてきて慌  
ててキーホルダーを隠そうとしたがそれより先に手の中を覗き込ま  
れてしまい、しかし彼女はそれを見てパッと表情を明るくさせた。

「可愛い、それ！2つ合わさるとハートみたいになるのね」

くちばしと翼、向かい合った2羽のペンギンがくっつくときれいで  
ハートが出来上がるデザインになっている。そんなデザインのもの  
を仗助が持っていたものだから、美晴は頬をほんのりと染めながら彼  
を期待を込めた眼差しで見つめる。

「これ、もしかして……一緒に付けてくれるの……？」

正直、これを己が買うのは小っ恥ずかしいなんて直前まで思ってい  
た。だが、目の前にいる彼女の恥じらいと期待の目を見て”買わない  
”なんて選択肢を選べるだろうか？

「ん……まだどこに付けるか決めてねーけどよ……美晴ちゃんが付けるところ決めていいぜ。俺も、そこに付けるからよオ」

少なくとも俺はその選択肢、美晴ちゃんがこつちに来てくれた時からとつくに潰している。仗助がひとつ頷いてみせると、彼女の表情が一層明るくなつて笑顔が溢れた。それは、仗助が1番好きな美晴の表情だった。

「うん、決めとくーありがとうっ」

この笑顔をいつまでも見ていたいから、だから彼女を守りたい。共にいられる限り、ずっと隣にいたい。

後にも先にも、そう思える相手はきつと彼女だけなのだ。仗助はそんな根拠のない、けれども自信のある思いを抱いていた。

帰りの電車の中、今朝のように隣同士に座席に座り、仗助は陽の傾く窓の外をぼんやりと見つめていた。美晴は仗助の体に寄り掛かり、目を細めながらずっと手の中にある小袋を見つめている。中には先程駅のホームで分けたペアのペンギンキーホルダーの片割れが入っていて、他にも膝の上に抱えている袋には露伴へのお土産のクツキーやブルーじいじにそっくりなペンギンのぬいぐるみが入っていた。

今日のデートはまだ終わりではない。夕飯はトラサルディーで予約を取つてある。それと美晴を家まで送つていく事、そこまで終えて今日のデートは終わる。しかし水族館でのデートの余韻に浸つていくたくて、2人は電車の中、特に言葉を交わす事をしなかった。それでも彼らの熱が冷めないのは、互いに寄り添つた体温が優しいものだったからだ。

『杜王町、杜王町』

駅のアナウンスが2人を現実に戻し、彼らは手を繋いで電車を降りる。

3ヶ月前、初めてこの駅に降り立った時は、こんな未来があるなんて思つてもいなかった。美晴はこの杜王町に来てから、いろんな意味で人生が変わつたように感じていた。恋愛なんて興味がなくて、それどころか周りにだつてあまり関心がなく、体育祭のような学校の行事もあんなに楽しいものだなんて思つてもなかった。露伴や仗助を始



め、こんなに心を通わす事の出来る人達と出会えるなんて想像もつかなかった。

”来宮美晴”を分かってくれるのは、己の両親だけだと思っていたから。

「お待ちしておりました、仗助さん。……と、お連れさまですね」

「イタリア料理店”トラサルデー”に着くと店主で料理人の”トニオ・トラサルデー”が出迎えてくれた。案内された席に座ると、彼は厨房へと引っ込んでいく。

「前にチラツと億泰くんから聞いたけど、雰囲気の良いお店ね」

美晴が席につきながらぐるりと店内を見回し、そうしてからどんな料理が出てくるのかとソワソワしている。その様子が自然と顔が綻んで、今日はずっとそんな調子だなと仗助は改めて彼女に惚れ込んでいる事を自覚していた。

「いつか絶対連れてこようと思ってたんだ。ちっと寂しい立地だがよー、トニオさんの腕は確かだぜ」

初めて億泰とここに来た時は結局己はなぜか厨房の掃除をしただけで料理を食べておらず、後日もう一度来店した時にやっと口にする事が叶ったのだが、億泰が絶賛する理由がその時によく分かった。トニオならもつといいところで店が出せると思うのだが、敢えてここにした理由は未だ聞いていないしさほど興味の無い事である。

「お待たせしました。まずはアンティパストから……」

少ししてからテーブルに前菜のブルスケッタが並び、その鮮やかな色合いに思わず2人して「おお、」と声が漏れる。

「それにしても、仗助さんが恋人をお連れになるとは想像もつきませんでした。それもこんなに素敵なおシニョリーナを」

ふふ、とトニオも微笑みを見せる。今日初めて2人が”恋人同士”だと他人から言われた事に恥ずかしそうに顔を俯かせるその様子はトニオにとっても微笑ましく、なるべく2人の邪魔をしないよう、料理を出す事に専念しようと1つ目のメイン料理の用意をするために早々に厨房へ引っ込んだ。

「な、なんだか……さつきあんなに人の目を気にしたのに、いざ言われ

るとやっぱり照れるわね……」

「そ、そうだな……けど、悪い気はしねー……よな?」

ブルスケツタを食べながら、こくこくと頷く。貸切予約をしたわけでもないのに店内はトニオを除いて2人だけで、その偶然的な特別感到に幸せな気持ちが集み重なる。本当に今日はいいい日だ——、仗助は心の底からそう思っていた。

「お次はプリモ・ピアット。メイン料理になります」

ブルスケツタを食べ終えたタイミングで、今度はカルボナーラの皿がテーブルに並ぶ。鼻腔を擽るチーズの香りに、前菜を食べた事もあつてか食欲が増していく。

「……さっきのブルスケツタも美味しかったけど……このカルボナーラもとても美味しいわ!すごい……隠れた名店ね」

「お褒めに預かり光栄です、シニョリーナ」

トニオが嬉しそうに微笑みながら深々と頭を下げる。美晴にとつてこうして外食をするのは久しい事で、それもあつてか余計に美味しく感じた。

「ん……でもなんだか、右足がムズムズするわ……」

しかしトニオが引つ込んだ後、美晴が不意にそんな事を零して仗助はハツと顔を上げた。彼女が靴を脱いで靴下を下げ始める様子に、唾を飲み込む。

そして——、

「ん……ッ!?!」

靴下を下げた事で顔を覗かせる、踵に貼り付けられた絆創膏が突如勢いよくベリッ!と剥がれてその皮膚を持っていった。そこから血が勢いよく噴き出し、2人して目を丸めてその様子を呆然と見る。

「み、美晴ちゃんッ!」

「なッ、えっ!?!ど、どうなってるのこれ!?!」

我に帰って慌ててガタツと席を立て血の噴き出る踵を見るが、それは急速に塞がって元通りの綺麗な踵になってしまい、美晴は啞然と目を丸めたままそこを不思議そうにペタペタと指先で触れていた。

「彼女、靴擦れを起こしていましたよ。少し右足を引きずっているようだったので、すぐに分かりました」

厨房からヒョコツと顔を覗かせたトニオが2人に声を掛けてきて弾かれたようにそちらに顔を向けたが、仗助はすぐに美晴に視線を転じる。

「そうだったのか!？」

「新しい靴だったから……」

「言ってくれば俺が治したのに……!」

仗助の言葉に美晴はシユンと俯く。

「だって、カッコ悪いじゃない……背伸びして履いて、靴擦れ起こしたなんて……」

トニオはそんな2人の様子に内心ヒヤヒヤしていた。良かれと思つて己のスタンド、”パール・ジャム”で彼女の靴擦れの治癒力を急速に速めたのだが、それが原因で2人の仲に亀裂が入ってしまったら……どう責任を取るべきか。

しかし仗助がポンと彼女の頭に手を置いて、それも杞憂に終わると悟った。

「カッコ悪くねーし……痛いのに無理してる方が俺は嫌だぜ。……その靴、履き慣れるぐれーいろんなところ連れてってやるから、今度はちゃんと見えよな。俺が何度だって治してやるからよー」

「仗助くん……」

優しくて大きな手。その手で頭を撫でられると、不思議ととても落ち着く。それはクレイジー・ダイヤモンドではなく、彼自身の能力か何かなのだろうか。美晴は目を細めながら自然と頷いていた。

(とても幸せそうなシニョリーナ……仗助さん、本当に彼女を大切に想っているんですね)

トニオは自分まで顔が綻ぶのを感じながら、いつまでも見ていたい目の前のカップルから名残惜しそうに離れると2つ目のメイン料理の皿を彼らに持っていった。

「お待たせしました。セコンド・ピアットでございます」

仔羊肉のソテーの皿がテーブルに並ぶと2人の笑顔がまた一層に

咲き誇る。

トニオが求めるのはお客様のその表情である。

どうか2人の未来が、笑顔溢れるものでありますように。彼は自然とそう願って止まなかった。

### 03. 陽のあるところに影は立つ 不思議な小道

ある日の昼下がりの事だった。

「うん。お茶を淹れるのが上手くなったじゃあないか、美晴」

「ありがとうございます、露伴先生」

水族館で買ったお土産のクッキーをお茶請けに、よく晴れた庭のテーブルで露伴は美晴が淹れてくれた紅茶を啜っていた。

ここ数日は徹底した防犯対策のおかげで変質者騒ぎもなく、新手のスタンド使いとの攻防もない平穏な日常を過ごしている。

「君もそこに座ってお茶にしなよ。僕らそんなに堅っ苦しい関係じゃあないだろ？」

露伴が自身の向かいの席を指すと美晴も「じゃあ……」と少し遠慮がちにしながらも椅子に座った。次いで自分の分の紅茶を淹れようとティーポットに手を伸ばすが、先に露伴にそれを取られ彼女のカップをソーサーごと引っ張ってきて紅茶を注ぐ。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

差し出されたティーカップ。露伴に視線を転じると片手で頬杖をつきながらジツとこちらを優しい目で見つめていて、若干緊張しながらも紅茶を一口飲む。

「美味しい……」

カップを置き、クッキーの乗った皿に手を伸ばしてイルカのプリントの施されたそれを摘んで口に運ぶ。濃厚な甘さが口の中に広がり、頬が緩むのを感じて目を細めた。

「……って、露伴先生。なにしてるんですか……」

クッキーと紅茶をのんびり味わっていると鉛筆が紙の上を滑る音が聞こえて向かいに視線を向ける。

「ん？君をスケッチしているんだよ。君にはヒロインの素質がある。」

康一くんを主人公に据えて、君をヒロインにすれば……完璧だな。いい作品が描けそうだ」

スラスラと完成したラフスケッチには紅茶を飲む己の姿があり（しかもやはりというかめちやくちや上手い）、思わず気恥ずかしさで頬が染まる。

「そ、それはいいんですけど、”ピンクダークの少年”はいつ再開するんですか？」

カップをソーサーに置き、改めて彼と向き直る。一応彼の作品のファンである美晴からすれば、続きを早く読みたいものである。退院からまだ数日しか経っていない彼に復帰の催促をするのは酷だとは思うが、再開時期くらいは聞いておきたい。すると彼は「うーん」と唸って眉間にシワを寄せていた。

「少し手の調子が良くなってね。今はあちこちスケッチして周りながら調整しているとところなんだ。前みたいなペースで原稿を上げるのはまだ少し難しいかな」

悪いね、と露伴は手をぶらぶら揺らしながら苦笑いを零す。目の前に己の作品を心待ちにしている人間がいるのは露伴とて分かっている事だが、無理をして手が使えなくなるのはもっと困る。もっと万全にコンディションを整えてからの方がいい物が描けるし、これをインプット期間に充てるのも悪くない。

「そうだ。ティータイムが終わったら散歩に付き合ってくれよ。僕は昔、杜王町に住んでいた事があってさ……その辺りを少し見ときたいんだ」

露伴は紅茶を啜りつつ提案する。

そう、この杜王町は岸辺露伴の出身地でもある。彼はここで生まれ、4歳の頃まではここに住んでいたのだ。杜王町に戻ってきてからは仕事や取材で忙しくそこに出向く事は叶わなかったが、今ならちやうど余裕がある。それにこんなに良い天気だ。美晴とのんびり2人で町を巡るのはいい気分転換になりそうだし、彼女だってこの町の事は通学路くらいしかよく知らないだろう。彼女にとってもいい機会だ。

「ええ、いいですよ。久しぶりにゆっくりしまししょうか」

前ならこんな風に2人でいる事が安らぐものだなんて思わなかっただろう。あの騒動があつてからというもの、2人の間にあつた壁は完全に取り払われたように感じていた。

ティーセットを片付け、露伴と美晴は家の外へと繰り出す。もうそろそろ陽も傾く頃合いなので、ついでに買い物もしてしまおうという話になり駅前まで歩く事に決めた。帰りはバスを使えばちょうどいい。

「ふーん、喋るペンギンか……今度そいつらに会って取材してみようかな。」ペンギンから見た人間」という視点は実に興味深い」

「是非行ってみてくださいー！ペンギン以外にも可愛いイルカとか亀とかたくさんいましたし……！」

美晴が水族館で見た生き物達の事を興奮気味に話しながらこくこく頷くその姿を見て、思わずプツと吹き出す。

「亀、そんなに好きなのかい？そのラインナップに亀が並ぶのはちょっと不思議だな」

亀といえば、美晴の部屋に最初に飾られたぬいぐるみもそうだった。ホームセンターへ彼女の部屋に置く家具を買いに行った時についので買った安っぽいデザインの物だが、大層気に入っているらしく枕元に飾つてあるのを今も見ると。——岸辺露伴の名誉のために言っておくが、掃除の過程で立ち入るのみで女の子の部屋を物色する趣味は彼にはない。

そんな話をしながらオーソンのある歩道とは車道を挟んで対岸に位置する歩道の地図看板の前まで来ると立ち止まり、それを何となしに眺める。

「どうですか？先生が前に住んでいた時の地形とやっぱり変わってます？」

この辺りは前に仗助達に案内してもらった事がある。オーソンの限定スイーツは季節で変わったりもするので、美晴もいつの間にか常連の仲間入りを果たしていた。

「フム……いやね、僕が住んでいたのは4歳の頃までだと言つたら？」

覚えているわけがないんだが……しかしだ。この地図は何か”奇妙”じゃないか?”

”奇妙”どの辺が?”

一緒になって地図看板を覗き込むが、特に不可解な部分は一見してないようにも思える。しかし露伴は看板から視線を外すと対岸の歩道に見える店をひとつずつ指差していった。

「よく見てみる。右からそば屋”、有す川”、薬屋”、ドラッグのキサラ”、そして……」

スイ、と露伴が差す指の先には小道があった。まさかと思いつながら地図を見るとそこに該当する小道はなくて、薬屋とオーソンはピツタリと隣接する図になっている。

「な?」

「……いや、でももしかしたらこの看板が古いのかもしれない。露伴先生、確か町内マップ持ってましたよね?貸してください」

露伴は言われるまま美晴に町内マップを渡し、彼女がそれを広げるのを背後から覗き込む。しかしその地図は最新版であるにも関わらず、目の前にある小道は載っていないかった。

「ていうか……そもそも私、オーソンにはよく立ち寄りますけど……こんな小道、あったかしら……」

そう、最大の謎はそこである。普段何気なく通っているから気にも留めなかった、それだけの事なのだろうか。その小道はあまりにも唐突に現れたように思えて、更に疑問が募る。

「あ、美晴さん!……と、露伴先生ツ!」

そんな2人に声を掛けてくる人物がいて2人でそちらを振り向くと広瀬康一の姿があった。が、彼は2人を——正確には岸辺露伴を視界に入れて気まずそうに視線を逸らす。

「やあ、康一くんじゃあないか。そんな気まずそうにしてなんだよ……よそよそしいな」

露伴は心なしか彼を視界に入れるや、パツと表情を明るめて近寄る。それを見て思わず康一は一歩後ずさった。

体育祭の時に彼の謝罪を一応受けはしたが、正直なところ広瀬康一



は岸边露伴に対して苦手意識を持っていた。彼は我儘だし他人の事を振り回しがちで、それは彼が”一方的に”友人だと思っている康一ですら同じだからである。恐らく彼はそう思っていないのかもしれないが、時たまに来宮美晴に対しても過保護で振り回し気味である。「いやあ……偶然とは素晴らしい。まさか僕のお気に入りの君達が一堂に会するなんて。ああ素晴らしい。スケッチさせてほしい」

このように。露伴は感極まるように康一、美晴と強引に肩を組んでこの上なく幸せそうに目を伏せる。構想中の作品の主人公とヒロインのモデルがそこにいるのだ。彼にとってはそうだろう。しかし当人達は溜まったもんじゃあない。

「ろ、露伴先生！離してくださいよッ、ぼくはこれから塾に行かなきゃあならないですよッ!」

「そうじゃなくても人の往来があるんですからやめてくださいッ!」

パタパタと暴れる2人の様子を見て露伴は渋々と名残惜しそうに2人を解放したが、彼らが息を切らしている間に手早くパパッと持っていたスケッチブックに鉛筆を走らす。

「康一くん。ちよつとだけ訊きたい事があるんだけど、いいかしら?」

一旦落ち着いてからそう切り出し、美晴が先程露伴が指摘していた地図の誤表記を康一に説明すると彼も「あれ!」と不思議そうに声を上げた。

「確かにこれはなんだか変だよ……!というかぼくだってオーソンで立ち読みとかするのに、こんな道があるなんて気付かなかった……!」

「やっぱり康一くんもそうなんだ……」

先程美晴が感じた気味の悪さは彼にも伝染するように伝わっている。見れば見るほどこの小道、とても不気味だ。

「ところで美晴さん。地図のミスを報告すると図書券が貰えるって知ってた?」

「えっ、そうなの?いくら分貰えるのかしら」

「おいおい。そんなの都市伝説みたいなもんなんだから鵜呑みにするなよ。それともなにか?君は僕からの給金じゃあ満足出来ないってのかい?」

閑話休題。

車が来てないのを確認し、3人で車道を渡ると小道の前で止まる。まるでこちらを誘うような、手招きでもしているかのような雰囲気。思わず康一は固唾を呑んだが、露伴が一步踏み出すのを見てそちらに弾かれるように視線を向けた。

「好奇心は猫をも殺す」とはよく言うが……なあ、この小道、ちよいと行ってみないか？」

露伴は美晴と康一を見て首を傾けながら先を指差す。しかし康一は腕時計を確認すると申し訳なさそうに苦笑いを零した。

「すみませんが、塾に行く時間なんで……」

ソロソロと2人から遠ざかろうとすると、すかさず美晴がニツと目を細めた。

「ひよつとして康一くん、怖いのかしら？ そういえば億泰くんの家の時も怖がってたわね？」

仗助と康一と美晴の3人でこの辺りを散策して見つけた虹村家。その家の前でペニーワイズに関する話を仗助に振った時の事を思い返し、美晴はニヤける口元を隠すようにそこを手で押さえる。

「ち、違うよッ！ 怖がってたのは仗助くんだけだろ!？」

「へえ、どんな話してやったんだよ美晴？ 実に興味深いぞ」

わたわたと強がりながら否定する康一の事を、露伴まで一緒になつてニマニマ2人で笑っている。

(どうしてこんな時ばかりあの2人、気が合うんだ!？ 仗助くんも零していたけど、美晴さんが時々意地が悪いのは絶対に露伴先生の影響を受けている！)

康一は改めてこの手の話にこの2人組は危険だと悟ったが、しかしここまでバカにされて逃げ出すなんて康一とて出来るわけがない。

「わ、分かったよッ！ でも塾があるっていうのは本当だから……!ご、5分だけですよ……!」

だから、つい言ってしまった。言った後でやっぱり「しまった……!」と後悔した。

そんなぐつたりとした康一を尻目に、露伴と美晴はピシツガシツ

グググツと謎に息の合ったタッチを交わしている。もう好きにしてくれ……康一はそう溜息を吐く他なかった。

小道を入っていくとまず見えたのはポストだった。ポストのそばには誰かが踏んだ犬の糞が落ちていて、康一は「うえ〜」と顔を顰める。

そのポストの左右にも道は広がり、普通の住宅街と同じく家が4、5軒ほど立ち並んでいた。しかし――、

「おかしいですね……この地図、この辺の家も載ってませんよ。図書券何枚分になるんですかね」

「また図書券の話かよ。しかし確かに……こりやあミスってレベルじゃあないぜ」

”米森”、”小野寺”、”本間”、”沼倉”。ザツと見た表札のどれもが地形すら地図に載っていない。美晴と露伴が地図とこの場所を照らし合わせて唸っている横で、康一は一軒の家の敷地を覗き込む。

「というより……この辺り一帯、誰も住んでいる風じゃあないや。ほら、犬小屋だって何も入ってない」

彼の指差す家の軒先にある犬小屋を見ると、首輪だけがそこに繋がれていて肝心の犬はいないようだった。

辺りはシンとしていて、先程から3人で話している声が響くように感じる。風も吹いておらず、いつの間にかこの場だけ時が止まったかのように錯覚する程静まり返っていた。

「自動販売機の電気も切れている……なんだここは。管理はどうなっている？」

歩き回って見つけた自販機。試しに硬貨を入れてみるとカラんと虚しい音を立てて返却口に戻ってきてしまった。その自販機を通り過ぎた曲がり角も地図には載っておらず、随分といい加減な地図だと思いながらそこを曲がる。

――刹那、その曲がり角を曲がった3人の前に広がる光景に、心臓が一樣にドクリと跳ね上がった。

「……このポスト！ さつき見たポストだ！ この踏まれた犬の糞、

はつきり覚えてるッ！」

康一が指差す先にあつたのは、この小道に入つてすぐの角を曲がった、最初に見たポスト。犬の糞、それを踏んだ足跡までが正しい先程見た物と同じだ。

「ど……どうなっているんだ？ 僕らはまた……」 さつき来た場所に戻ってきている”ッ!?”

「お、おかしいよ、そんなの……私達、さつきここを通り越したばかりじゃあないの。” 真逆の方向に向かつて” どうしてここに” 戻ってくる”の……?!”

動揺を露にする露伴の横で平静を装いながら美晴は役に立たない町内マップに視線を落とす。しかし何回見たつてこの道、この場所はどこにも載つておらず、マップが手汗で湿り気を帯びるばかりだった。

何かおかしい。

それはこの小道を見つけた時からそうだ。

「……そうだ。落ち着け。次はちゃんと曲がつた方向を確認してから曲がろう。僕ら3人もいるんだ、間違いようがない」

露伴は美晴からマップを取り上げてポケットにしまい、改めてポストから向こうの道を指差す。そうしてまた歩き始めた。

「米森さんに小野寺さんに本間さん……沼倉さん」

3人で指を差しながら右に曲がる。

「犬小屋の家……」

次にここを左に曲がる。

「切れた自販機……」

そして最後に右。そう、先程辿つた道筋はこうだ。

……右。

「う……ッ！」

曲がり角から恐る恐る顔を出すとはやはりと言うべきか、そこにあつたのは犬の糞のポスト。

どう考えてもおかしい。右、左、右と曲がったのなら絶対にここへは戻つてこないはずなのに、また”ここに戻ってきてしまった”。

不可解な出来事に圧倒されて無言のまま立ち尽くしていると康一が一步ずつ後退りし始める。

「あ、あの、美晴さん、露伴先生……なんだかぼく、気味が悪くて……も、もう時間も無いし、これで引き返させてもらいますね……」

そう言い残して彼は踵を返すと勢いよく走り去ってしまった。

「露伴先生……これ、どう考えてもまずいですよ……いいですか、こういった”オカルト話”には定説というものがあってですね……」

美晴が康一が走っていったってしまった曲がり角を振り返るのに釣られて露伴もそこを振り返る。彼の足音が響くように聴覚に伝わり、それは遠くまで行つて聞こえなくなるかと思いきや、錯覚なのかまた近付いてくるようにも思えた。

「絶対にまた戻ってくるんですよ、ここに」

冷や汗が背を伝う。

「あ、……あつ、あ……っ！」

その背に掛けられた震えた声は聞き覚えがあり、振り返るとそこにいたのは――、

「あつ、ああつ、あつ……！」

「こ、康一くん……ッ！」

恐れ慄くように目を見開いた広瀬康一。

「……ど、どうして美晴さんと露伴先生がそこにいるんだよーッ!!」  
「そ、それはよっぽどこちらのセリフだッ!なぜ康一くんが僕らの背後から現れるんだよッ!」

彼は引き返したのだからさつきとは逆の方向に角を曲がったはずだ。だったらやはり”ここには戻つてこない”はずなのだ。

なのに背後から現れたという事は彼もまた犬の糞のポストに戻ってきて、こちらを覗いた事になる。

「あ、あの……ひとつの可能性なんですけど、これ……」スタンド攻撃”という可能性はありませんか? そうなら全部納得出来るはずですよ!」

こんな芸当が出来るのは”スタンド使い”しかいない。空間を丸ごと作っているのだから物凄く強い精神力の持ち主と窺えるが、可能

性としてはあり得る。美晴が2人に問い掛けると彼らもハツと息を呑んだ。

「そうだな……スタンド使いの仕業ならば納得がいく。このままじゃあ気持ち悪い。今はそう仮定して考えるぞ」

半ば強引に結びつけ、露伴は何処かにいると思われるスタンドの本体を周囲を見回して探す。もしかしたら家の敷地の中かも……そんな事を思いながら手近にあった門に手を掛けるが、門がしっかり掛かっていて開きそうにない。

しかしハツと思い至ると彼はまだ腰を抜かしている康一に視線を転じた。

「そうだ！康一くんのエコーズなら、空から道を辿れるじゃあないか！この場所がどうなっているのか見てきてくれよ！」

その声に康一も「あつ！」と声を上げて腰を上げる。

「その手がありませんでしたね！よしッ、”エコーズ ACT—1”！」

己のスタンドなら突破口が見えるかもしれない。康一はその一心でエコーズを出し、上空へヒュンツと飛ばす。

しかし——、

「うわあああッ!?!」

突如康一が叫び声を上げ、エコーズもビクツと驚いたように体を跳ねさせて彼の方へ帰ってきてしまった。

「ど、どうしたの!?!」

「い、今……!?!」

その異常な反応に美晴も思わず肩を跳ねさせてから彼に問い掛ける。

「今……何かに触られた！空中で何かに触られたんだッ!?!」

「触られただつて!?!」

3人でキョロキョロと辺りを見回す。だが当然のように誰も、何もいない。先程だつてエコーズが飛んでいくのに釣られるように空を見上げていたが、何かいるような気配なんてなかった。

「……康一くん。もう一度エコーズを飛ばしてみてくれないか」

「も、もう一度!?!もう嫌ですよ露伴先生ッ!?!」

露伴はエコーズに触れた者の正体を探ろうと指示を出す。康一は余程怖かったのか首を横に振って拒否する。

「美晴のガーディアンに守ってもらえば何も起こらないかもしれないらしい」

次いで彼は美晴にも視線を向けるが、彼女もまた首を横に振っていた。

「いえ……」触られた”だけであれば、攻撃とは判定されない可能性があります。仮に触ってきたのが”見えない壁”か何かだとしても……私のは”身を守る”だけで壁を貫通出来るものじゃあないですよ」

殴られたのならともかく、康一の表現からして彼のエコーズに触れたのは攻撃の類とは考えにくい。

道を確認出来るかもしれない方法をあっけなく潰されてしまい、また3人は不気味な雰囲気に取り囲まれながらも突破口を探り唸る状況に戻ってしまった。

「ねえ、あなた達」

そこに、3人のどれとも違う少女の声が静まり返った空間に響き、彼らはそちらに弾かれたように顔ごと視線を向ける。

「道に迷ったの？」

そこにいたのは前髪をカチューシャでオールバックにしたボブヘアにワンピース姿の淡い雰囲気を持つ少女。彼女は真っ直ぐに彼らを見つめ、優しい声で話しかけていたが、唐突に現れたその姿に3人は身を寄せ合って彼女の方に視線を釘付けにしていた。

## ” 杉本鈴美 ”

目の前には淡い雰囲気の少女。

「道案内……してあげようか？」

今まで何度も私達は道を辿ってきたというのに、この女の子に道案内なんて頼んで大丈夫なのだろうか。それにもしかしたら――、

（この子が……私達をここに閉じ込めた” スタンド使い!?”）

ないと思いたいが、その可能性も拭いきれない。美晴がゴクリと唾を呑み込んだ時、隣にいた露伴の手がグワツと動いた。

”へブンズ・ドア” ツ!!」

露伴の手が、指先が、ピンクダークの少年の主人公を描いてその像が宙に浮かぶ。それを見た少女の”心の扉”がバラツ!と開き、彼女が昏倒するのを露伴が受け止めた。

「有無を言わせず先手必勝さ!」

「言わせなさすぎです!!無害だったかもしれないのにツ!」

ニヤツと不敵に笑いながらカリカリとペンで彼女の余白に” 岸辺露伴、来宮美晴、広瀬康一を攻撃する事は出来ない”と書き込んでいる露伴に向かって美晴は声を張り上げる。

「うるせーなあ、ヤベー奴が常にヤベー顔してると思うなよな」

しかし一転、真面目なトーンで紡がれたその言葉に美晴と康一は「うっ」と押し黙った。それは正論であったし、現に目の前にその”いい例”がいるのだから余計に真実味が増す。2人がそう思っている事など露知らず、露伴は昏倒した少女の心の扉を捲り始める。が、「ム!」と声を上げたかと思えば、すぐに眉間にシワを寄せていた。

「こいつ……スタンド使いじゃあないぞ。”書いてない”……ただの女の子だ」

ページをいくら捲つてもスタンドの”ス”の字も出てこない。

露伴のへブンズ・ドアで開かれた扉に書かれている事柄は、心をそっくりそのまま曝け出すのと同じく嘘を吐けないし隠し事も出来ない。100%の真実だけがそこにあるのだ。それは美晴も康一も



よく知っている。

「名前は杉本鈴美、16歳。住所は杜王町勾当台3の12……すぐそこだ」

露伴が呟いた住所を、美晴は先程彼が尻ポケットにしまった地図を遠慮なしに引つ張り出して調べる。確かに、この小道が存在しているならばすぐ近く、目の前にある家のようだった。

「なになに……彼氏はいない。スリーサイズは82・57・84」

その辺りまで歩こうと一歩踏み出し掛けた時、露伴のそんな声が聞こえてきてピタリと足を止める。

「左乳首にホクロがある。初潮があつたのは11歳の9月の時で……初めて男の子とキスをした時に舌を入れられ、」

「ちよつと待つて岸边露伴ンーンツ!!」

淡々と告げられていく少女——杉本鈴美のピンポイントな個人情報に堪らず美晴と康一は声を荒げて彼との距離を詰め始めた。

「彼女がスタンド使いじゃあないならそれ以上読むのはぼくが許しませんよツ!!」

「ホンツツト露伴先生つてデリカシーがない人ですね!?そういうところはホンツツトに直した方がイイと前から思ってるんですけどツ!!」

「わかつた……! わかつたよ! そう怒るなよ、もう……」

ぎやあぎやあと捲し立てられる露伴を非難する声に彼は耳を塞ぎながらもニヤつきながら2人を見ていたが、そんな最中美晴に視線を向けてビシツと指差す。

「けどよオ、美晴だつてさつき僕の尻触つたろ!? こんな時に! それともなにかね、嫉妬か? 安心しろよ、君のスリーサイズだつて知ってるさ。確か……」

フウー、と肩を竦めながら彼女のスリーサイズを思い出そうとする露伴。その悪びれもない声に、言葉に、美晴はついに顔を真っ赤にしながらか折り畳んだ地図でペシツ! と彼の頬を叩いた。

「イテッ!」

「触つてないもんツ! 地図を取っただけツ! 露伴先生のスケベツ!!」

顔を赤く染めたままムスツとむくれて美晴は露伴から体ごと視線

を背けてほんの少し距離を置き、それを見た康一は更に声を荒げる。「痛がつてる場合じゃあないでしょ！今すぐ美晴さんに謝ってくださいよッ！」

美晴に頬を叩かれたショックでそこを押さえながらズーンと項垂れていた露伴だったが、その声にハッと顔を上げると鈴美と美晴を見比べ、ポソツと康一にだけ聞こえる声で「杉本鈴美の方が少し大きい……」と呟いてから美晴を見る。

「悪かったよ、美晴。調子に乗りすぎた。今から杉本鈴美を起こすから……君もこっちに來い。道案内してもらおうじゃあないか」

美晴がチラツとこちらを窺うのを見計らってちよいちよいと手招きする。彼女だつてここから出たいはずだ。その思惑通り彼女はトコトコとこちらに戻つてきてくれた。

一方康一は、先程露伴が己にだけ聞こえる声で呟いた言葉の意図に気付いて「うげっ」と密かに青ざめていた。

（露伴先生、まさかぼくを共犯者にしようとしてるんじゃないかつ!?）

来宮美晴より杉本鈴美の方が（何がとは言わないが）少し大きい——無意識に頬を染めながらも露伴を睨みつけると、彼は康一をニマニマ笑いながら見て「ようこそ」と口を動かしていた。

絶対にこの事は墓場まで持つていこう。康一は美晴と鈴美を交互に見ながらそう誓つた。

「さて、”今起こつた事はすべて忘れる”……と」

仕切り直し。

「道案内、してあげようか？この辺、似たような路地多いから……迷う人結構いるのよ」

意識を取り戻した杉本鈴美は何事もなかったかのように先程と同じような事を言う。

この少女はスタンド使いじゃあない。それは露伴の能力で確かめた事だから事実だ。しかし、このまま彼女についていいいいのか、という疑問は未だ拭いきれたわけではない。もしかしたら敵のスタ

ンド使いとグルかも……なんて事も考えられる。

「さつきから、何度もあのポストのところに戻ってくるの」

「この辺、似たようなポスト何個もあるわよ」

道順だけ教えてもらえれば彼女との接触時間も減る。美晴が犬の糞のポストを指差して暗にそうしてもらえないか図ってみるが、鈴美はさも当たり前のように言っただけで退けた。

「行き方だけ教えてくれればいいんだけどな」

なかなか手強そうだ。その意図を汲み取ってか露伴が単刀直入に訊いてみると、彼女は首を横に振ってから踵を返し、ポストに背を向けて歩き始める。

「だめだめ！説明だけじゃあ分からないのよ。案内してあげるからついてきて！」

もはや有無を言わせない状態だ。強制的な道案内が始まった今、ついていけないのは逆にこちらが怪しまれかねない。

「何かあれば僕がまたヘブンズ・ドアーで対処してやる。ここで立ち止まってちゃ埒があかないのも事実だからな」

3人で顔を見合わせ、露伴がポソツと鈴美に聞こえない声で呟いてから他の2人よりも少し前が出る形で歩き始めれば、仕方なく鈴美の後をついていく。それを見た彼女は安心したように微笑み、ポソッキーの箱をポケットから出して自分も1本取りながら彼らにそれを差し向けた。

「食べる？」

しかしいくら人懐っこい笑みを見せようと、まだ疑いの晴れていない人間から物をもらうほど3人とも警戒心がないわけではない。一様に首を横に振って断るのを見て、鈴美は「あれ？」とでも言いそうな顔をして持っていた1本を露伴に向ける。

「いらないの？じゃあ〜試しにそっちの端を持って！」

露伴が疑問符を頭に浮かべながらも言われた通りにポソッキーのチョコ側の端を持つと、彼女はポキツと小気味のいい音を響かせながらそれを折った。

「あつあ〜♪あなた、女の子にフラれるわよっ」

どこか小馬鹿にしたような、悪戯つ子のような微笑みを見せる鈴美と、対照的に機嫌が悪そうに眉根を寄せる露伴。

「あつ、もしかして……フラれたばっかりだったりする?」

「……なんだ?この女……!」

鈴美はスイと美晴に視線を向けてクスクス笑っていたが、苦虫を潰したような表情の露伴が堪らず声を上げたので凶星である事を確信したようだった。

「うふふ、”ポツキー占い”よ。折れた感じで占うの。あなた、ワガママでしょう?それも結構人を引つ掻き回す性格ね。フラれた原因はそれよ」

その言葉に美晴と康一はギクツと肩を揺らす。だって、杉本鈴美は今初めて会ったばかりの少女だ。なのに、こんなに的確に露伴の性格を当ててしまった。もしかしたら自分達の事を既に把握済みなのかもしれない。

しかし、露伴はニヤつきながら両サイドの2人と肩を組んでその顔を交互に見遣る。

「おいおい!ポツキー占い”だつてよ!2人とも聞いたか?全然当たってないよなア?僕がワガママだつてきー!」

クツクツと喉奥で笑うその様子からしてどうやらこの男、自己分析能力がお釈迦らしい。美晴も康一も思わず引きつった笑みを浮かべてしまっていた。きつと考えている事も同じだっただろう。

「それに僕が”フラれた”?決めつけはよせよ。第一告白もしてないしそんな風に思っちゃいけないさ。大切ではあるがな」

ろくすっぽテキトーだ、なんて言いながら露伴は美晴の頭をポンポンと撫で叩いてみせ、その美晴が疑問符を浮かべているのを尻目に鈴美を指差す。

「しかし”占い”か。そんなんだつたら僕だつて知ってるよ。薄いピンクのマニキュアの女の子は”恋に臆病”。”肝心なところで本当の恋を逃す”」

——正確には鈴美の指先、爪を指差して。

「……ウソよ……!」

美晴も思わず自分の爪を見たが、鈴美の切なげな、動揺したような声が聞こえて業務上マニキュアを付けられない己の爪から再び彼女に視線を転じる。

「これは“占い”というより“心理テスト”さ。恋でなくても今……何かを恐れているだろうか？」

先程のポツキー占いの仕返しのもりなのだろうか。露伴が言っているだけあつて真実味がある心理テストだが、鈴美は3人から視線を逸らすと進行方向のすぐそこにあつた家を見上げる。先程までの陽気さとは一転、神妙なものになった鈴美の雰囲気にも3人も思わず疑問符を浮かべながらその家を見上げていた。

「……この家ね……15年ほど昔、”殺人事件”が起きたんですって……」

静かな空間に鈴美の声が響く。その言葉に弾かれたように彼女に視線を向けると、彼女はゆっくりとこちらを向いて再び口を開いた。「今は誰も住んでないわ。……これ、隣のおばあちゃんから聞いた話よ」

その事件は静かな真夜中に起きた。

この家に住む少女が寝室で寝ていると、両親の部屋の方から水の滴る音が聞こえたそうだ。”ピチャリ！ピチャリ！”と。その滴る音で少女は目が覚めた。

浴室や台所からこの部屋は遠いのに、なぜそんな音が聞こえるのだろうか。

「パー・ママー！」

少女は部屋から声を張り上げたが、両親からの返事はなかった。

しかし少女はそんなに怖くなかった。なぜなら少女のそばにはいつも番犬のように大きな愛犬がいたからだ。暗闇でもベッドの下に手をやると「ククーン」と甘えてペロペロと手を舐めてくれるのだ。

「アーノルドがいるから安心だわ……ありがとう」

少女にはこんなにも心強い味方がいる。

だが相変わらず外からは”ピチャリ！ピチャリ！”と滴る音が続い

ていた。一度気になったらずっと気になってしまふこの音、両親はなぜ気付かないのだろうか？そんなにも熟睡しているのだろうか？

「アーノルド……やっぱりあたし、ちよつと調べに行つてくるわ」

少女はついにその音の正体を調べにいく事にした。

なぜこんなにもこの音が恐ろしく感じるのだろうか。なぜこんなにも静かな夜が、今日は特別恐ろしく感じるのだろうか。

少女は部屋の扉を開け、廊下に出た。しかしその滴る音の正体は、予想したよりも早く少女の瞳に飛び込んできたのだ。

「壁のコート掛けには愛犬アーノルドが、首を切られてぶら下がって死んでたの……ピチャピチャって音はその血が滴っていた音なのよ……」

3人は目をギョツと見開いた。アーノルドは少女の部屋のベッドの下にいたはずだ。それがなぜコート掛けなんかには？それも死んでいる？

では、ベッドの下にいたのは一体――、

「女の子は慌てて部屋に戻ったわ。すると突然、ベッドの下から声が聞こえたのー!」

『お嬢ちゃんの手、スベスベしてて可愛いね。クツクツクーンツ！両親も既に殺したぞー!』

「そして！その女の子も殺されたのよオオツ!!」

「うわあああああツ!!」

迫真の鈴美の声に康一も美晴も思わず露伴にしがみついて恐怖を露わにし、その露伴もあまりの迫力に表情を強張らせながら身を引いていた。

「そ、それ、本当の話なんですか……ツ!?!」

よほど怖かったのか、康一は息を切らせ目にうつすらと涙を浮かべながら鈴美を見る。

だが、鈴美はそんな怯えた様子の3人を見て思わず表情を緩ませると朗らかな笑顔を見せた。

「アハハハッ！本当の話に聞こえた？マニキュアの仕返しよ、ウフ♡」

その表情と言葉に3人はしばしポカンと呆けていたが、ようやく状況を飲み込むと康一は緊張が解けたように深く息を吐く。

「し、心臓に悪いなあもう……冗談キツイよ……!」

それでようやく美晴も息を吐いて露伴から離れながら先程の家を再び仰ぎ見る。

「すごく臨場感のある怪談だったわ。私、ホラーの類は強い方だと思ってたけど……まるでその場にいたかのようなリアルさが……あつて……、……ん」

ピチャリ。ピチャリ。

視界を下げるたびに耳につく”何か”が滴る音。それは怪談に出てきた少女が聞いたものと似ているように思え、美晴は思わず表情を引きつらせた。

「ん? どうした、美晴」

これ以上視線を下げる事が恐ろしい事のように思える。無意識に露伴の腕を掴んでいて、彼も彼女の視線を辿るように家を再び視界に入れる。

「露伴先生……何か、聞こえませんか」

ピチャリ。ピチャリ。

確かに露伴の耳にも滴る音が聞こえる。先程の怪談を聞いた直後だからだろうか、怯えている様子の美晴の肩を抱いて引き寄せながら、彼女と一緒に視線を下げていく。

ピチャリ。ピチャリ。

そこにいたのは1匹の犬だった。大きな番犬のような犬で、2人に背を向けている。

しかしその特徴だけで十分だった。2人が息を呑むとその犬はゆっくりとこちらを振り返る。

そう。滴る音は、意外とすぐ近くから聞こえていたのだ。

「……ッ!!」

——少女の愛犬”アーノルド”は首を切り裂かれ、廊下の壁のコート掛けにぶら下がって死んでいた——

脳裏に過ぎたのはアーノルドの最期。それにシンクロするよう

に、ピチャリピチャリとその犬の首の傷からも血が大量に滴っていてヒュツと2人して息を呑む。

思わず鈴美を振り返ると、彼女は切なげな目で露伴と美晴を見ている。

「そう。その”女の子”ってあたしの事なのよ」

鈴美の言葉に康一もそちらを振り返り、首を切り裂かれている”アーノルド”を見て「ひっ！」と息を呑む。

「あ、あなた一体……ッ」

絞り出された声は上擦った情けない声で、美晴は自分が心底”怯えている”事を自覚した。

”幽霊”よ。あたしとアーノルドは……」

アーノルドは鈴美の姿を見つけるとタタタツと彼女に駆け寄り甘えるように脚にからみついていた。

「ゆ、”幽霊”……!?!」

杉本鈴美の正体は”幽霊”。それが分かった途端、この空間の空気が全体が薄ら寒く、気味の悪いものに変貌したように思えた。

(ヘブンズ・ドアで読んだのは生前の記憶……だから彼女が幽霊である事が分からなかったのか……!)

露伴もまだこの能力の全てを知っているわけではない。幽霊に能力を使うとこのようになるのか——しかし感心している場合ではない。

ピチャリ。ピチャリ。

滴る音はその間も頭の中に染み込むように響いていた。

「あんた達は15年前の”あたしが死んだ場所”に入り込んだのよ。あたしと”波長”が合ったのね……ここは”あの世”と”この世”の境目なの」

なぜこんな突拍子もない話を信じられるのか。それはこの空間の薄気味悪さと突然現れた”杉本鈴美”という少女の存在のせいだ。

「うわあああああッ!!!」

気付けば康一の絶叫に意識が覚醒されるように脚が自然に踵を返して逃げるように走り出していた。



「彼女」だったんだわ……！康一くんがエコーズで触れたのは、「彼女」だったのよ！」

康一の「触られた」という表現にずっと引つ掛かりがあったが、今ようやく理解した。「彼女」がエコーズを押し返していたのだ。

「康一くんッ！もう一度エコーズを飛ばせ！逃げるための道を調べるんだよッ！」

「そ、そんなあ……ッ！」

「いいから早くッ!!」

露伴の脇に抱えられた康一は情けない声を上げていたが腹を括つたらしい、もう一度エコーズを上空に飛ばす。

しかし――、

「なッ……!?!」

「うそ……ッ！」

突如、康一の体が露伴の体から離れ宙に飛び上がった。立ち止まってエコーズに視線を向けると、真っ直ぐに地面に戻ってきたと思いきやそこをさわさわと不思議そうに触っている。

「あ、あれ?!おかしいぞー！急に空に”壁”が現れたッ!!」

その不可思議な現象に康一だけが気付いていないようで、その気味の悪さに半開きになった唇が震える。美晴はそつとエコーズを指差し、康一を見上げた。

「康一くん……エコーズが触れているのは”地面”よ……！」

「飛び上がったのは康一くん、君の方だぞ……！気付いてないのか!?!」

美晴と露伴の声にエコーズは逆さの視界の中に2人を捉え、それを通して康一もようやく自分だけが逆転している事に気付いたらしい。

「あつ……あつ……！うわあああッ!!」

「康一くんッ!!」

落下し始める康一の体。一か八かで美晴はガーディアンを守護を彼に掛けようと手を伸ばし、地面に激突する寸前のところで間に合ったのかガンッ！と金属音を響かせながら康一の体が1度バウンドし、四つん這いの状態で地面に降り立つ。

「み、美晴さんのおかげで全然痛くなかったけど……どうしてほんと

エコーズは正反対の方向に!？」

「どうやら康一も状況が分かかっていないらしく、彼自身がふざけてやったわけではない事が窺える。元より、ふざけている余裕など康一が一番ないようにも思えるが。」

「ここから出るには” たったひとつの方法 ” しかないのよ! それはあたしが知っている……」

そこにいつの間にも追いついたのか、杉本鈴美が佇んでこちらをジッと見つめていた。

「こ、これは……ゆ、幽霊なんかどう戦えばいいんだ……!」

3人で再び身を寄せ合い、未知なる遭遇にその誰もが怯えていた。こんな芸当が出来るのは” スタンド使い ” だけ……そう思っていた頃が懐かしいように感じる。

「今までは相手も自分達と同じ” スタンド使い ” だから対等に戦っていた。しかし今日の前にいるのは” 幽霊 ” だ。それもこんな大規模な空間に閉じ込め、更に言えば道を探らせる事も許さず、そしてこの空間の流れを意のままに操れる。そんな強大すぎる存在に自分達が敵うとは到底思えなかった。」

だが、杉本鈴美は不思議そうに首を傾げながら3人を見つめていた。

「” 戦う”? なにか” 勘違い ” してない? あたし達、” 敵 ” なんかにやあないわよ」

彼女のすぐそばにいるアーノルドですら、不思議そうな顔をしているように思えて露伴は引きつった笑みを見せる。

「” 敵 ” じゃあない……? ははは、聞いたか2人とも。敵じゃあないってよ、この幽霊……」

「じ、冗談じゃあないわよ、ここまで周到にしておいて……!!」

「ぼくらに取り憑くのはやめてくださいッ!!」

それに呼応するように美晴と康一も声を上げたが、鈴美は心外そうに眉根を寄せながら3人に向かって一歩踏み出した。

「ちよつと待ってよッ! 冗談じゃあない” はこつちのセリフッ! 人を怨霊みたいに言わないでエ! あたし何もしてないし、あんた達が勝手

こいてビビってんじやあないのよッ！」

その言葉に3人でハツと息を呑む。

確かにその通りだ。言われてみれば彼女がこちらに危害を加えたという決定的な証拠は何もない。全て自分達の勝手な思い込みだ。加えて彼女は道案内をしてくれようとしただけで、よくよく冷静に振り返って考えてみれば親切な少女なのだ。無礼なのはよほどこちらの方ではないか。

「あたしが閉じ込めたんじやあないわよ。ここは”あの世”と”この世”の”境目”だつて言ったでしょう？あんだ達、妙な能力持つてるわね……”スタンド”っていうのかしら？そのせいで紛れ込んだのかも……」

鈴美は3人に近付き、じつくりと観察するように瞳を動かす。

”スタンド”——漢字では”幽波紋”と書くのだと、承太郎から聞いた事がある。姿が見えるかは分からないが、幽霊にも感じ取る事が出来るものなのかもしれない。

「境目って……私達、今”この世”……というか”人間の世界”には存在していないの……？」

「分からないわ。でも一時的に”そうなっている”可能性はあるわね」

その回答に美晴はゾクリと身を震わせる。本当にそうであれば早くここから出なければ3人とも存在が消滅してしまうかもしれない。「ね？それは嫌でしょ？だから道案内してあげるって言ってるのに……勝手に勘違いしてあたしを置いてけぼりにするんだもの。疑い深いのも考えものだわ」

う、と息を詰まらせる3人を鈴美は少々むくれながら見つめて溜息を吐く。鈴美の言う事はまったくもってその通りだし、いくら気が動転していたとはいえ、彼女に無礼な真似をしてしまったのは事実であった。

「ご、ごめんなさい、失礼な事をしてしまって……」

「気にしてないって言ったらウソだけど……当然の反応よ、無理ないわ。あっあく！でもちゃんと道案内はするから安心して。ただし、あ

たしの”話”が終わってからだけど……」

美晴が深く頭を下げると鈴美は首を横に振りながら「顔上げてちようだい」と彼女を宥めるが、次いで出た言葉に露伴は己の顎に手を添えながら緩く首を傾けた。

「？ ”話”とは……？」

その疑問符に反応するように再び自宅を仰ぎ見る鈴美に釣られて3人もそれを見る。いつの間にかまた先程の場所に戻ってきていたが、もう何回もやった事なので今更驚きはしなかった。

しかし次にその口から飛び出した言葉は、この不思議な空間に慣れきった3人の心臓を確かに1度、ドクリと震わせたのだった。

「さっきの”話”の続き。あたしを殺した”犯人”……ヤツは、まだ捕まってないのよ。この杜王町のどこかにいるわ」

## それぞれの決意

杉本鈴美は15年前、家に忍び込んだ何者かにナイフで背中を切り裂かれて死亡した。

15年間、この不思議な空間——あの世とこの世の境い目であるこの場所で、鈴美は地縛霊となりながらもこの事を誰かに伝えなければと思い、道行く人に訴えかけた。しかし誰も鈴美の存在にすら気がつかなかったのだ。

「あなた達が初めてよ、こんなにたくさん話が出来たのは……」

鈴美は終始寂しげだった。15年という長い年月を、彼女は愛犬のアーノルドと2人で待ち続けていたのだ。美晴はその途方もない時間をここで過ごしていた彼女の事を思うと、胸がズキリと痛む心地になり思わずそこを押さえる。

「犯人はこの町にとけこんでいるのよ。それをずっと知らせたくて……」

「おい、ちよつと待てよ。君の話つてのはまさか、”僕らにその犯人を捕まえる”とでも言うんじゃないだろうーな？」

鈴美は改めて3人と向き直るが、露伴は眉を潜め彼女の話を遮った。それに対して鈴美は首を横に振る。

「捕まえてくれとは言わないわ。でも誰かに教えてほしいのよ。警察とか、犯人を捕まえられる誰かに」

「おいおい！なぜ僕らがそんな事しなくちゃあいけないんだ？僕らが君に何か義理があるのかい？」

「ちよつと露伴先生ッ！」

「いくらなんでも酷すぎますッ！」

更に抗議の声を上げる露伴に堪らず美晴が食って掛かるように彼の腕を掴み、それに続くように康一も服の裾を掴むが、彼はそれらを振り払うように腕をグツと勢いよく引いた。

「2人はちよつと黙ってるよ。僕は冷静な意見を言いたいんだ。イジワルなんかじゃあない」

露伴がそう言っても2人は不満げに眉間にシワを寄せていたが、構わず彼は鈴美を指差しながら話を続けた。

「殺されちまった事はそりゃあ気の毒に思うよ。だからと言ってなぜ僕が君個人の恨みつらみのために犯人を見つけなきゃならないんだ？」

殺人事件の時効は”15年”とも云う。露伴が言いたいののはつまり、警察なんかにも言っても相手にしてもらえない可能性の方が高いという事であり、また見ず知らずの、しかも本物かどうかとも分からない幽霊のために自分達がリスクを背負う必要があるのか？という事でもある。

「この世”への未練は断ち切つて”あの世”へ行っちゃった方がいいってのが、正しい幽霊の在り方だと僕は思うぜ」

確かに露伴の言い分は見ようによつては正しい。だが、いくら正しくても彼のその言い方や態度には棘が多すぎるのだ。美晴と康一が彼を咎めたのは決して良い子ちゃんぶりたかつたからではなく、彼女の事を思えば思うほどそれが1番気掛かりだったからだ。

鈴美はやはりキツと露伴を一瞬睨んだかと思えばすぐに顔をフィと逸らす。

「あなた……この町の少年少女の行方不明者の数、知ってる？」

露伴に問い掛けられたその言葉。それに康一はハッと息を呑み、

「全国平均の8倍……」

彼よりも先に口から言葉が滑り落ちていた。

前に調べた事があった。それはつい最近、仗助と承太郎が片桐安十郎の事でごたごたしている頃、康一はどうしてもあの青色のスタンド——アクア・ネックレスの事が気に掛かって独自にこの町の歴史について調べた事があったのだ。図書館や書店の資料、新聞のバックナンバー等、使えるものを全て使って調べてみたら、そんな奇妙な数字が浮かび上がってきて血の気が引いたのを今も覚えている。

今年に入ってから、杜王町では行方不明者が81人も出ている。そしてそのうちの45人が康一や美晴と同じ年頃の少年少女なのだ。もしかすれば、そのうちの何人かは虹村形兆がああ弓矢で殺してし

まった人間達なのかもしれないが――。

興味本位で調べた事がまさか、今になって生きる事になるとは。

「そうよ。あたしもオーソンで新聞の”犯罪白書”を読んだわ。全員とは言わないけど、ひっそりと殺されているの。ヤツの仕業よ」

鈴美はそうはつきりと言い切ってみせた。

「ち、ちよつと待つてくださいいッ！この杜王町で殺人が行われているですってッ!?しかもそんなに大勢の犠牲者が出てるって!？」

最初に声を上げたのは康一だった。確かにあの数字は康一も調べてみて異常だと思った。しかしそれが一概に”殺人”によるものだとは言い切れない。

「おい！いい加減な事言うなよッ！君は犯人の顔も見えていないと言ったのになぜ杜王町に犯人がいるとかッ！殺人が未だに行われているとか分かるんだよッ！」

「決め付けが過ぎるわ……！あなた、地縛霊だつて言ったじゃあないの！見たわけでもないのにどうしてそう言い切れるの!？」

露伴と美晴も堪らず声を上げた。彼女はここから離れる事が出来ないはずなのに、あたかもそれを目撃したかのように言い切ってみせたのだ。いくらなんでも怪しい。そんな情報を鵜呑みにするほど露伴達はバカではない。

それに、自分達の住むこの杜王町でそんな凄惨な事件が秘密裏に起きているなんて考えたくもない。

だが、鈴美はその言葉を受けて――いや、それより前から、怯えるように小刻みに体を震わせていた。そして意を決するとぐるりと3人に背を向け、ワンピースの肩紐をずらしてその小さな背中を素肌を露わにさせ――そこに刻まれた”印”に誰もが息を呑んだ。

「この上空を、”殺された人”の”魂”がよく飛んでいくからよッ！これと同じ傷口を負ってッ!!」

目の前の儂い少女からは想像も出来ないほどに深く、長い、傷痕。その背に汗が滲むのと同じように、3人の体からも血の気が引くのとほぼ同時に汗が滲み出ていく。

「ひ、ひどい……ッ」

「ムゴすぎるッ……」

口元を手で覆い、それでも誰もその傷痕から目を逸らす事が出来ない。それほどに彼女の傷は今までに見たどんな物よりも惨いものだった。

「あの世へ飛んでいく魂達と話は出来ないけど、何度も見たわ……ヤツの”趣味”はよく分かるのよ……!」

鈴美は空を仰ぎ見ながら、震える声で何かを堪え、それでも言葉を紡いでいた。

「あたしが生まれ育った思い出の杜王町で15年に渡って殺人が行われている……とても怖いわ。そして誇りが傷付くわ。犯人が捕まった時、あたしの大好きな”杜王町”は”殺人者の町”として日本中に悪名を轟かせるのは事実だもの」

美晴は思わず息を呑んで胸を押さえた。だって、”同じ”だったから。私も鈴美と同じように、”杜王町”が大好きだから。露伴や康一、仗助達に会えたこの町が大好きだから、鈴美の気持ち痛みほど分かるのだ。

「それでも、1日も早く犯人を止めなきゃいけないのよッ!今も誰かが狙われてるわ!あたしには何もできない!今度殺されるのは一体誰なの!?!」

そう、だからといって野放しにしておくのはもつといけない事だ。だから鈴美はずっと待ち続けていた。

——この話を、あたしの話を聞いてくれる人を、ずっと待ち続けていた。そしてやっと伝える事が出来たのだ。

「あなた達生きている人間が町の”誇り”と”平和”を取り戻さなければ、一体誰が取り戻すって言うのよッ!!」

涙ながらに振り向いた彼女の声は、彼らに届いただろうか。

ずつと待ち望んでいた”彼ら”の心に響いただろうか。

静かすぎる空間に反響したように感じたその声は、やがてその静けさに溶け込んで消えてしまった。

「……伝わったかどうか分からないけど。あたしの話は終わったわ」  
静寂は意外と短い時間だったかもしれない。そんなふわふわとし



た時間感覚の中、鈴美はポツリと呟いて俯きながらもその視線を3人に向けていた。

「……っ、伝わりましたよ。とてもショックを受けましたけど……なんとか……なんとかしなくては……！」

康一は震えながらも拳を握って言葉を絞り出していた。行方不明者の数字を見た時からずつと気味が悪かったが、鈴美の話が本当なら放ってはおけない。次に狙われるのはもしかしたら自分や家族、友人達かもしれないのだから。

「そう……そうよね。とても信じきれない事だけど……私もこの町が大好きなもの。見て見ぬ振りには出来ないわ……」

美晴も俯き気味にひとつ頷いてみせた。鈴美と己は似ている。彼女の言葉をすべて受け入れて信じる事は今は難しいかもしれないが、やはり見過ごしてはおけない。美晴には守りたい大切なものがたくさんあるのだから。

「……君達ならそう言うだろうと思ったけどさア。正義感も大概にしろよ……今にしんどい目に遭うぞ」

一方で露伴は眉根を潜めたままだった。いくら考えたってこんな突拍子もない話、信じるという方が無理な話だ。己は探偵でもジャーナリストでもない。その正義感溢れる学生達は立派だと思うし好感が持てるが、それとこれとは話が別。一緒くたにして感情に引つ張られてしまうほど単純な思考はしていないつもりでいる。

彼らに背を向ける露伴の事を、誰も非難する事は出来なかった。彼の言い分は冷たいものではあるが、それは他人に流されない冷静なものであり見方を変えればそれが一番正しいとも言えるからだ。

「……でも犯人を追って」取材」するのもいいかもな！面白そうな漫画が描けるかもしれん」

だが岸辺露伴は”リアリテイを追い求める漫画家”だ。リアリテイのある新鮮なネタには目がない。たとえ危険を冒したとしても、露伴にとってはそんなのは些細な事なのだ。

だから”犯人を突き止めてみたい”と思った”。

「露伴先生！」

美晴は思わずそんな露伴に駆け寄ったが、フイと彼は顔ごと視線を逸らす。

「勘違いするなよ。別に幽霊なんかのためじゃあない。僕のためだ。それによろ、変質者に狙われてる君を手放しで危険な事に首突っ込ませるわけにいかないからな」

美晴の頭をグワツと掴むとうりうり左右に振る。堪らず「うわわーっ」と声を漏らす彼女を尻目に、露伴は鈴美を振り返った。

「で？出口はどっちだ？こっちはか？」

テキトーに指を差してみせると鈴美は表情を明るくさせながらポストの先を同じく指差す。

「あのポストの先を左に曲がるとすぐよ」

案外近くにあつたらしい出口。それがようやく示されると3人もようやく安堵したようにパツと表情を明るくさせた。

「やったー！ようやくこの境い目から外に出られるぞ！」

「待って康くん！ポストから先を通るには」ちよいとしたルール”があるのよ”

1番に駆け出そうとした康一を呼び止めるように鈴美は手を伸ばし、彼はその声に反応して疑問符を浮かべながら彼女を振り返る。

”ルール”？」

「あのポストを越えて曲がった後、20メートルぐらい先に出口が見えるわ。今はポストを越えてなかったから大丈夫だったけど……そこまで何が起ころーと」決して後ろを振り向かない”って約束して”

それはなんとも不思議な”ルール”だった。

”決して後ろを振り向いてはいけない”……まるでオカルト話にでもありそうな話だ。いや、幽霊なんている今、まさしくオカルトそのものな状況ではあるのだが。

「どうして……？」

美晴は恐る恐る訊いてみた。何が起ころるか分からないこの空間で突如示された”ルール”は、それだけでも不気味な響きを伴っていた。

「どーしてもこーしても、”あの世”と”この世”の”決まり”なの

よ。太陽が東から昇って西へ沈むっていうのと同じ”ルール”なの。振り向いて見ちゃあいけないの、決して……アーノルドだってもう分かっているのよ」

鈴美はアーノルドを撫でながら本当に、さも当たり前のようにそう言っただけ。そんな風にあつさりと言うものだから、余計に不気味さが増すのだというのに。

「振り向いたらどうなるんですか……？」

康一が震える声で訊ねた言葉。恐らくそれは3人とも知りたがっていて、最も恐れている事だった。

「あやし達の魂が”あの世”へ引つ張られてしまうわよ。……つまり”死ぬ”って事」

恐れていた事。薄々予想がついていた事だったが、改めて聞くとサツと顔から血の気が引く心地になる。

「あつあつ！怖がらないで！振り向かなければいいのよ、簡単でしょ？あたしは何度もここへ来てるのよ。振り向かなかったから”ずつと”あの世”へ連れて行かれないで幽霊でいられたの」

そんな3人の顔を見て鈴美はその緊張を解くようにふんわりと微笑みかけてくれた。確かに、この鈴美の言葉には説得力があった。尤もそれは、彼女の強い決意も一緒に感じ取れるものだったが。

「いい？ポストを越えるわよ」

そんな彼女に置いて行かれまいと、それに続いてポストを越えて道の向こうへと足を踏み入れていく。

——刹那。

ズルルツ！と何かが脚の隙間を前から後ろへ通り抜けていったように感じて思わず振り返って確認しようとして首が動きそうになった。

「振り向いちゃあだめよ！ゆっくりと落ち着いて歩いて！」

その声に美晴は意識をハッと戻して振り向きそうになった首を戻す。

（あ、危なかった……ちゃんと前を見て歩かないと……！）

改めて前を向いて鈴美や露伴達の後についていこうとするが、今度はヒタリヒタリと何かの足音が背後から聞こえてきて背筋がゾクツ

と震える。次いで耳元からは「お嬢ちゃん……」「お嬢ちゃんもこつちにおいで」と誰かから囁きかけられてぐらぐらと視界が恐怖で揺れ始めていた。

「美晴……ついてきてるか？」

前にいる露伴が振り向かない代わりに手をふわふわ動かしてこつちに来るように促している。美晴は小走りで彼の隣に立つとその腕を両手で捕まえてしがみつく。

「み、美晴さん……ぼくの後ろに何かいた!？」

隣にいる康一が横顔からでも分かるほど恐怖をその表情に滲ませて呼吸を乱しながらに尋ねる。

「ううん、何も見えなかった……」

彼らはきつと美晴と同じような事を”何か”にされていたのだろうが、しかし美晴は3人の後ろにいたにも関わらず何も見えなかった。

「大丈夫。振り向きさえしなければ姿も見えないし何もされないから。気をしっかり持ってね」

恐らくそう言う鈴美も現在進行形で”何か”されている。しかし彼女は15年もここにいたのだ。当然もう慣れっこだろう。その彼女がそう言うのなら、それは確かだ。

しかししたった20メートル歩くだけなのに、こうも賑やかだと集中出来ない。先程から美晴の背後ではパチパチと無数の拍手が聞こえてきたり、祭囃子が遠くから鳴ってきたりしていた。

「もう少しよ!あの光が出口!」

鈴美が指差す先に確かに眩しい光が見える。

「ううう〜ツ……もう我慢できない……ツ!もう走っていきますツ!」

康一が2、3度その場で地団駄を踏んでからその出口へと全力で走り始めた。

「慌てないでツ!転ばされるわよツ!」

そんな鈴美の声も無視して、康一は真っ直ぐに、一目散に走っていく。

「康一くんツ!」

「ま、待ってー！」

露伴と美晴も堪らずその背を追いかけた。

「美晴」

しかしそんな時、不意に己を呼ぶ声が出てドクリと心臓を1度波打たせながら立ち止まった。それに釣られて腕を掴まれている露伴も立ち止まる。

「美晴、こっちだよ」

その声は美晴にとっては聞き慣れた声で、思わずほろりと声が漏れ出す。

「……お母、さん……？」

守れなかつた両親。そこにいるのだろうか。

“ここが”あの世”と”この世”の境目であるなら、いてもおかしい事は何も無い。だってすぐそこに幽霊を名乗る少女だっているのだから。

「美晴ッ!!」

しかしすぐに前からグイツと引つ張られるような感覚があつて一気に意識がそちらに向いた。

「なにボサツとしてるんだ!!僕だけを見てろッ!!」

そこにあつたのは露伴の背中で、彼は振り向かないながらも美晴に向けて声を張り上げてから康一の後を追うように彼女を引つ張って再び駆け出す。

そうだった。ここは振り向いてはいけない道だ。危うく私は母親のような声に釣られて振り向きそうになっていた。きつとそこにいるのは母親ではない”何か”なのだ――。

(お母さんは絶対にこんな事しない……!騙すなんてッ!)

己の両親はスタンド使いではなかつたが、いつも美晴のすぐそばにいる”ガーディアン”の事を理解してくれていた。

「美晴にはとても素敵な守り神様がついてくれている」――いつもそう言うって肯定してくれていた。

そんな両親が、振り向くとあの世へ引つ張られてしまうこの道でわざと振り向かせようと仕向けてくるとは思えなかつた。

「露伴先生、私……！」

「僕にも聞こえたさ、その声……！君の言葉で分かったぞ！どんな手を使っても、”ヤツら”は僕らを振り向かせようと必死だ！」

露伴の言う通りだ。”彼ら”は生きた魂を引きずり下ろそうとと画策している。今この瞬間も、彼らは脚の間をすり抜けて転ばせようとしてくるのだ。

だから”その声”も、露伴達の耳に入ってきたのだ。

「もう大丈夫よ。乗り越えたわ。そこからは振り向いてもいいわよ」

出口の手前、後ろにいる”杉本鈴美”の声は3人の耳に、いや頭の中に直接響くような声でそう言った。

「あああ……安心したよオ、すつごく怖かったよ……！」

その声に反応したのは康一だった。

彼はそうやって安堵の息を吐いたかと思えば、なんて事ない動作で露伴達を振り返ったのだ。

「うそよッ！康一くん！今の声あたしのじゃあないわッ！」

一気に後ろにいた3人の表情が強張る。それに釣られて康一の表情も固まってしまった。

「えっ……!？」

完全に後ろを振り向いた状態で。

「まだよ……まだだめなの。あたし1人の時はこんな事されなかった……騙すなんて……!!」

なぜ美晴と康一が騙されたのか。それを考える暇なんて彼らは与えてくれなかった。

「うわあああッ!!」

康一の悲鳴がこだまする。振り向いてしまった彼の目に何が見えているのかは分からなかったが、その体が宙に突然浮かんだ事で何かまずい事が起こっている事は分かる。

「康一くんッ!!」

このままでは康一が”あの世”に引きずり込まれてしまう。だが露伴はフンッ！と鼻を鳴らしたかと思えば康一に向けて手を伸ばした。

「なんだか分からないが」見なければいい” んだろう？ 僕と一緒に良かったな、康くん」

そして鈴美にやったように空中に指を滑らせるとそこに絵が浮かび上がる。

”へブズ・ドア” ツ”君は何も見えなくなつて吹つ飛ぶ！”

目にも止まらない速さで康一の心の扉に書かれた命令に従つて康一の体がドンツ！と光の中へ吹き飛んでいってしまった。

「これでいいだろ？ さっさと僕らも抜けるぞ！」

露伴が駆け出すのに引つ張られて美晴も光の中へ無我夢中で飛び込んでいった。

「うわあああッ！ わああッ！」

そこを抜けて最初に視界に入ったのは、心の扉を開かれたまま狼狽る康一の姿だった。恐らくまだ視界が黒く潰れたままなのだろう。

「落ち着けよ、康くん。すぐ見えるように書き込んでやるから」

カリカリとそのように書き込むとハツと息を呑んで康一の視界が一元に戻つたらしい。彼がキョロキョロと辺りを見回すのに釣られて、露伴と美晴も周囲を見回す。

「……！」

そこに見えたのは先程も見た薬屋やオーソンであり、不思議な小道は忽然と姿を消してそれらは隣接した元の、地図と同じ状態になっていた。

「この間に道がないという事は……戻つてこれたのか」

露伴のその声によつと安堵したように康一も美晴も深く溜息を吐いた。

「あたし達、ずっとここにいるわ」

しかしそこに突如少女の声が聞こえそちらを振り向くと、そこには鈴美とアーノルドの姿があつて息を呑む。

「犯人が捕まるまで……あたしとアーノルドが”後ろを振り向いて”パパとママのところへ行くのは、この町に”平和”と”誇り”が戻つてきた時。それまではここを離れられない」

15年。待ち続けたのは話を聞いてもらうためだけじゃあない。

今も殺人を続けながらもこのうとうと生きている犯人が裁かれるまで、鈴美はここに、この町に留まると決めているのだ。

「何かあたしに聞きたい事がある時は、いつでもここに来てね」

彼女と愛犬の姿が徐々に半透明になっていく。それはなんだか不気味なはずなのに、名残惜しさすら感じてしまった。

「いつでも会えるわ……露伴ちゃん、美晴ちゃん、康一くん……」

彼らの名を呼んだかと思うと、その姿は背景に溶け込むように完全に消えてしまった。

夢だったのだろうか。しかし、それは夢と呼ぶにはリアルすぎて、まだあの空間の独特な空気が体に染み付いているかのように感じた。

「あの小娘……僕の事を”露伴ちゃん”だよ。馴れ馴れしいヤツだ」

露伴は小道のあった薬屋とオーソンの隙間を振り返りながら独りごちる。

「でもま、”杉本鈴美”か……あの幽霊の”生き方”には尊敬するものがある。生きてる人間のためにたったひとりです15年も闘っていたとはな。犯人の危機を知らせるために……」

3人で歩きながら鈴美の事を思う。

彼女は強い意思を持った人だ。普通ならそんな長い時間、あんな薄ら寂しい場所で待つていられない。何度も何度も、あそこの空を飛んでいく魂を見ながらどうする事も出来ずに、しかし希望を捨てずにひたすら待ち続ける事なんて。

そして犯人の存在の不気味さも際立つものだった。

この杜王町で、ひっそりと大量に殺人が行われている――。

「美晴。ちよいと図書館に寄ってみようぜ」

康一と別れた後、露伴は駅前に向かう道とは違う方向に足を向けると美晴を振り返ってそう提案してきた。

「当時の新聞……置いてあるかもしれない」

彼が考えている事。それはひとつしかなく、美晴も同意するように頷いてはその隣を歩いて行った。



## 残響と沈黙

翌日。昼休み。

「仗助くん、お待たせ」

美晴は空き教室の扉を開けるとその机にいた仗助に微笑みかける。手には2人分の巾着袋あり、それを見るや仗助はパツと表情を明るくさせた。

「美晴ちゃん！へへ、弁当サンキューな」

歩み寄ってくる美晴から巾着袋を受け取り、彼は早速それから弁当箱を取り出す。

今日は美晴と仗助は2人きりで昼ごはんを食べる約束をしていた。美晴の手作り弁当をまた食べたい、と彼が零したのがきっかけで、彼女は今朝早起きをして2人分の弁当をこしらえてきたのだ。

「うんまッ！グレートにうめえッ！」

「ふふ、そう？ありがとう」

いただきます、と挨拶をしてから笑顔で弁当のおかずを頬張る己の恋人の姿を見ていると自然と顔が綻ぶ。この時間がずっと続けばいいとすら思ってしまう。

だが、この町ではひっそりと殺人が行われている。もしかしたら次に狙われるのは目の前にいる恋人かもしれない。

そう思うと表情が暗く沈み、箸を持つ手が止まってしまう。

「……康一から今朝聞いたぜ。杉本鈴美……って幽霊に会ったんだろ。露伴も一緒に……」

美晴は思わず顔を上げた。俯き気味だった仗助の顔が僅かに上げられ、深刻そうな表情が覗く。

「……私、なんとか犯人を見つけられないかなって思うんだ。鈴美ちゃん……あのままじゃあ可哀想なもの」

「……だから？」

響いた声は美晴が想像したどれとも違うもので、驚きで目が僅かに見開かれる。

「え……？」

「俺よオ……もう美晴ちゃんがアブない目に遭うの嫌だぜ。なんで美晴ちゃんばっかりそういう目に遭うんだ？こないだ変質者騒ぎがあつたばっかじゃあねーか」

仗助は耳の裏辺りを掻きながら頭を抱えていた。いつもと違う、弱気な様子に美晴は戸惑うばかりだったが、ひとつ確かに分かるのは”彼を心配させてしまっている”事だった。

「俺、今ならあの時の露伴の気持ち分かるぜ。やりすぎだって思ったけどよー……美晴ちゃん守れるなら俺も閉じ込めちゃうかもしれない。だって今の美晴ちゃん、アブねー事に自分から向かってんだもんよ」

「仗助くん……」

美晴がしようとしている事は、どんな形であろうと殺人鬼に自ら近付いていく自殺行為に他ならない。いくら彼女のスタンドが身を守る事に關して絶対的な信用があるとしても、彼女が恐ろしい目に遭う事に変わりはないのだ。

「……それでも私は、犯人を突き止めたいと思うわ」

しかし美晴の意思は変わらなかった。

美晴には守りたいものがたくさんあるのだ。それは目の前にいる仗助もそうだし、いつも一緒にいる露伴も、友人である億泰や康一、由花子の事もそうだ。

たとえそれが危険な事であろうとも、美晴にとってはそれが止まる理由にはならなかった。

「ごめんなさい、困らせているわよね。仗助くんの気持ちだつてちゃんと分かつてるわ……でも、」

「もういい」

重苦しい空気の中、気圧されるように俯きかけたその時、不意に突き放すように言葉が遮られて反射的に顔が上がる。

「仗助く、」

「それ以上言うな」

ズキリと胸が痛む。拒絶するような仗助の声が空き教室に反響す

るように思えて途端に涙が溢れ出す。

「仗助に嫌われてしまっただろうか。面倒くさい意固地な女だと思われただろうか。」

そんな事が頭の中をぐるぐると回って、しかし仗助はそんな美晴の不安を断ち切るようにその小さな手をギユツと両手で力強く握り締めめた。

「正直俺は美晴ちゃんを危険な目に遭わせたくねえ。けど、どうしてもって言うならよオ……俺が必ず守ってやる。殺人鬼だろーが変質者だろーが、美晴ちゃんに近付くアブねー野郎は俺が全員ぶつ飛ばしてやる」

優しく大きな手。そのあたたかな体温が手を伝って全身に流れ、心の中にまで浸透するような心地になって涙が溢れ落ちる。その涙を、仗助の手は優しく拭ってくれた。

「驚かして悪りーな……言い訳なんてさせたくなかったんだ。美晴ちゃんはそういうの、ほっとけないタイプだろ？分かってるよ……ちゃんときさ」

そのまま頭を撫でられて、自然と目が細まっていくのが自分でも分かり思わず頬を染める。それを見た仗助も優しく目を細めてから席を立ち、美晴の隣まで来るとその体を両腕で包み込んだ。

「大丈夫。俺がついてるからよ」

じんわりと染み入る優しい声音。美晴は彼と向き合うと同じように己より立派なその体躯を抱き締めた。

「……私はね、そう言ってくれる仗助くんを、みんなを守りたいの。みんなを守る、盾になりたい」

仗助には分かる。美晴はいつだって自分の事より先に誰かのために鉄壁のスタンドを使う。それは優しい祈りであり、同時に最大の弱点にもなる皮肉なものであったが、彼女はそうする事を惜しまない。だから――、

「俺は、美晴ちゃんを守る拳になりてえんだ」

ギユツと一層彼女を抱き締める腕に力が籠った。

もうチリ・ペツパーの時のような思いはしたくないしさせたくない

い。あんな悪夢のような体験は、もう。

「仗助くんが守ってくれるなら……安心だわ」

美晴はそうやって彼の体に身を預けるように体重を少しだけ掛けて寄り掛かった。仗助の強さは何度も見てきている。世辞でもなんでもなく、美晴は心底安堵しながらその身に甘えるように頬をすり寄せて目を細め、それ以上の言葉を紡ぐ事はなかった。

予鈴が鳴るのも気に留めず、2人はそのまま互いの存在を噛み締めるかのように抱き締めあい、分け与えられるあたたかさを享受し目を伏せていた。

放課後。

仗助と美晴は亀友で用事を済ませてから帰ろうと話をしながら校門へと真っ直ぐ歩いて行った。互いに鞆に付けたお揃いのペンギンのキーホルダーが歩くたびに揺れて、2人も楽しそうに話に花を咲かせている。

「美晴」

しかし校門を潜った時、不意に美晴を呼ぶ声が聞こえてそちらを振り向くと露伴の姿があり、彼は校門の柱に寄り掛かっていた体をそこから離すと彼女に歩み寄る。

「露伴先生？」

「ちよいと一緒に来てほしいところがあるんだ。……ああ、悪いな仗助。美晴返してもらおうよ」

すかさず美晴の手を取って一方的に仗助から引き離そうとするが、対抗するかのように仗助は彼女の反対の手を掴んでそれを阻止した。

「もしかして……杉本鈴美関連の事っスか？」

「なんだ、もう聞いていたのか……まあいいけど。君には関係のない事だ。その手、離してもらえる？」

ぐい、と露伴が美晴を軽く引っ張るが、仗助も同じくらいの強さでグイと美晴を引く。

「無理っス」

「は？……あのなあ、お前には関係ないだろ」

「あります。俺、美晴ちゃんのカレシなんで」

その言葉に露伴の眉間にピクリとシワが寄る。

「美晴ちゃんの事守るって、前から決めてるんで」

それに臆する事なく、仗助は露伴を真っ直ぐに見つめていた。

暫くの間無言の睨み合いが続き、間に挟まれた美晴は2人にどう声を掛けたものか、おろおろと彼らを交互に見ていたが、やがて露伴の大きな溜息が聞こえるとそちらに視線を注ぐ。

「分かったよ……東方仗助。どうやら僕と君は、美晴に関してだけは意見が合うようだな」

露伴は美晴の手を取ったまま車まで彼らを誘導すると後部座席の扉を開ける。

「乗れよ。今から行くところはそんな危険な場所じゃあないが……気になるなら特別に同行を許可してやる」

美晴の手を離し運転席に乗り込む露伴をポカンと少しの間見つめていたが、すぐに窓から「早くしろよ」と声が聞こえて慌てて釣られるように美晴と仗助も後部座席に乗り込む。

「あ、ありがとうございます……」

シートベルトを締めながら仗助が軽く頭を下げるとフンと鼻を鳴らしながら露伴は後部座席をチラリと振り返る。

「別に。君に殺人鬼を追う覚悟があるなら、知っていて損はない事だからな」

来宮美晴を守るという事は、自ずと殺人鬼の正体を追うという事にもなる。それはきつと仗助も承知の上で言っているのだろう。

仗助がいつから美晴を守ると決めたのかは知らないが、露伴だって美晴を守りたいと思う気持ちは彼に負けていないつもりだ。

(……こんな事で張り合ってたって仕方ないのは分かっているが)

”美晴ちゃんのカレシなんで”

改めて仗助の口から聞いて、ほんの少しだけ胸が痛んだのが信じられなかった。

”もしかしてフラれたばっかりだったりする?”

鈴美のからかうような声が今更反響してきて、強引に振り払うように頭を数回横に振るとカーナビの地図を確認してからハンドルを握

る。

「そういえばどこに行くんですか？」

美晴が身を乗り出してカーナビを覗き込むのを、露伴は引っ込めるようにその頭をグワッと掴んでわしわし撫でてやってから押し戻した。

「うわわーっ」

「霊園だよ。もう出すからちゃんとして座ってな」

乱れた髪を慌てて直し始める美晴をバックミラー越しに見てからゆつくりと車を出す。

そうだ。己と美晴はこのくらいがちようどいい。恋人同士なんて風じゃあないし、もし仮にそうなったなら、——いや、そこまでは想像がつかない。

「霊園？何しに行くんすか？」

「杉本家の墓を探すんだよ。別に疑っているわけじゃあないが……杉本鈴美が幽霊だという証明ならそれが手っ取り早いだろう」

車を走らせる事数分、どこか物寂しい景色が続いた後に霊園の駐車場に車を停めてからそこへと足を踏み入れる。線路沿い、住宅街や駅前前の喧騒から外れたその場所はシンと静まり返っており、魂が眠る場所としては最適であった。

「あ……」

そんな中、美晴はある墓を見つけると不意に立ち止まってそこを眺める。

「どうした？」

釣られて露伴と仗助も立ち止まって振り返ると彼女の元へ歩み寄った。

「……虹村家の墓か」

そこに刻まれた文字を見て、仗助はポツリと呟きながらあの日を思い返す。

あの日、虹村形兆が死んだ日、自分達の日常はそれが引き金になったかのようにガラリと変わった。体が黒こげになるまでの電撃を受けた死体は今も仗助と美晴の脳裏に焼き付いて離れない。

” 兄貴は最期に俺を庇ってくれたよなア…!”  
億泰の震えた声も。

億泰はあれからぶどうヶ丘高校と一緒に通っているが、悲しむ素振りも涙も一切見せる事なく明るく振る舞っている。——本当は誰よりも悲しみを背負っているはずなのに。それを彼は決して周りに悟らせない。

「形兆さん……億泰くんは、強い人よ」

形兆とはあの時しか接点がなかったが、口ではああ言いつつも億泰が大切だったに違いない。そしてまた、億泰にとっても形兆は今も大切な存在だ。墓に供えられた、比較的新しめの花達がそれを物語っている。

気付けば3人で墓前に手を合わせていた。形兆が億泰の事を空から見守ってくれている事を祈りながら。

「さ、行こう。杉本家の墓を探さなくては」

今日ここに来た1番の目的はそれだ。3人は虹村家の墓から離れると墓をひとつひとつ確認していく。

「あ、あつたぞー！」

露伴の声にそちらを向くと、そこには確かに”杉本家之墓”と刻まれた墓石があり、墓誌にも”長女 鈴美 十六才”と彫られているのが確認出来た。

「彼女、本当に幽霊で……本当に殺されてしまったんですね」

鈴美が語った殺人事件。今から15年前の1983年、8月13日に起こったそれは当時から杜王町に住んでいる人間なら誰でも覚えているほどの凄惨な事件であった。殺人の動機や物的な証拠、何もかもが謎に満ちたその事件は今も”迷宮入り”の未解決事件とされている。

仗助は鈴美にまだ直接会ったわけではないが、美晴の暗く沈んだ表情だけでもどれほどの事が鈴美の身に降りかかったのかはある程度予想がついた。

「おおっ！君はもしかして……漫画家になったという岸边露伴君……かな？」

そこに突然背後から声が掛かり振り返ると、ここの管理者らしい住職が人の良い笑顔を浮かべてこちらを見ていた。

「そう、だが……」

「おおーっ！やっぱり！立派になったのオ〜！よく雑誌で君を見るよ……生まれ故郷のこの町に引越してきたそうじゃねッ！」

露伴が頷いてみせると彼はもっと表情を明るくさせていたが、妙な引掛かりを覚えて3人は疑問符を浮かべる。

「僕を知っているのか？」

自分を指しながら露伴が問い掛ける。

「んーんー、孫が君の漫画を集めとるよ。ワシも読んでるよ」

「そうじゃあなくて、僕の”子供の頃”を知っているのですか？」

そう、この住職は露伴を指して”立派になった”と言ったのだ。それが先程から引掛かっついて、同時に不思議に思う。

「うむ……よく覚えておるよ。杉本家の時は大変じゃった……”君の家”ものオ……」

だがその一言は3人の疑問符を吹き飛ばすほどの衝撃を纏っていた。

”僕の家”も……？妙な事を言うな。一体何の事だ？」

視線が一斉に露伴に集まる。

確かに岸边露伴は幼い頃、杜王町に住んでいた。それは仗助も美晴も知っている事だが、なぜ杉本家の事件に岸边家が出てくるのか。

「覚えてないかの？てつきりワシはそれで君が杉本家の墓を参っていたのかと思っていたんじゃが……」

「ちよつと待ってくれ。僕が杉本家の墓を参るだど？なぜ？僕は取材のためにこの墓を見にきただけなんだが」

ここまで狼狽える露伴は珍しいかもしれない。彼には本当に心当たりがないらしく、今度は住職の方が不思議そうに首を傾げる始末だった。

「露伴先生、これは一体……」

「なんなんスか……まさか杉本鈴美の事件に関わりがあるとか……」

美晴と仗助は杉本家の墓を振り返るが、それは佇むばかりで何も答



えてはくれなかった。

「し、知らないよ……僕は、なにも知らない……」

やはり首を横に振る露伴だったが、先程から這い上る妙な胸騒ぎに汗が噴き出る心地になる。その様子を見て住職は静かに唸り声を上げながら再度露伴を視界に入れる。

「君は当時4歳だったからのう……覚えていないのも無理はあるまい。しかしご両親は君に話されていなかったのか……」

その口ぶりはやはり何かを知っているようだった。

露伴はその時、ここに来て初めて恐怖を覚えた。知りたいはずなのに、それがなぜかとても恐ろしい事のように思えたのだ。

だが、どちらにせよ露伴はとことん調べなければ気が済まない性分だ。遅かれ早かれ、それが何であろうと知る事になる。

「……教えてくれ。僕が杉本家に何の関わりがあるっていうんだ」

震える唇で紡がれた言葉。露伴には知る権利があるだろう。

「……そうじゃのう。15年も過ぎた話じゃし、君ももう大人だ。話しても害はないかの……しかし何か”運命”じみたものを感じるのう……」

住職は少し考える素振りを見せた後、ようやく重々しい口を開いて話し始めた。

当時、岸边露伴は例の小道にあった家々のひとつに家族で住んでいた。その頃露伴はまだ4歳で、しかし絵を描くのが好きなのはその時から変わっていなかった。

ある日、露伴の両親は急用でどうしても家を留守にしなくてはならなかった。それも泊まりがけの用事で、幼い露伴を1人で置いておくわけにはいかない。

そこで、近所付き合いがあつて親しかった杉本家に、一晩だけ露伴を預ける事にしたのだった。

「露伴ちゃん、なにかいてるの?」

「——おねえちゃんだよ」

その家にいた少女は露伴にとって歳の離れた姉のような存在で――

」。

「露伴君……君はあの夜、杉本家に泊まっていたんじゃないよ」

あの日、あの夜。そう、鈴美の口から語られたあの殺人事件の日。

「僕が……居ただって……？」

当時4歳だった露伴は事件現場にいたのだ。そして、その露伴だけが生き残って今も生きている。

美晴は露伴が小脇に抱えていた新聞を引き抜き、折り目を付けていたその記事に視線を落とす。仗助もそれを覗き込むようにして指でなぞっていく。

「警察に保護された時の君は……たった一言だけを繰り返して泣いておったそうだ」

『鈴美おねえちゃんが窓から逃してくれた』

「犯人が君を見つける前に、鈴美さんが庇ってくれたのじゃな」

——現場付近の庭で発見された男の子(4)は警察に保護された後、軽い怪我で病院に搬送された。——

昨日も確認したその一文。

『彼が生きていれば僕と同じ年だな。いずれ突き止めて話を聞いてみるのもいいかもしれない』

露伴はそう言っていたが、それがまさか自分の事だったとは夢にも思わなかっただろう。

「そんな……」

「マジかよ……」

美晴と仗助の視線が再び露伴に注がれる。

「……あの小娘……どうりで馴れ馴れしいはずだ……」

よろりと後退りながら狼狽える露伴。

ポツキーを自分に向けてきたのも、からかったような笑みも、”露伴ちゃん”なんて幼い子供のような呼び方も、——杉本鈴美は己の事を最初から知っていたのだ。あの小道が見えたのも、ヘブンズ・ドアーを使えたのも、露伴の方が鈴美の波長に合ったからそうなったのだ。

鈴美が露伴を窓から逃した事を教えなかったのは、忘れたままでいてほしかったからなのだろうか。

鈴美の事を思えば思うほど何かが入み上げる気持ちになって、それを堪えるようにグツと歯を食い縛りながら顔を背ける。

(へブンス・ドアー……自分の遠い記憶と……運命は読めない……か)

鈴美の心の扉に己の事が書かれていなかったのはそういう事なのだろう。忘れていた事は読めないのだ。

「……帰るぞ」

「ろ、露伴先生……」

杉本家の墓に背を向けて歩き始める露伴の後を、住職に軽く頭を下げてから美晴と仗助は小走りで追い始める。

幼かった露伴はきつと、この記憶を自ら消してしまったのだろう。己を守るために。鈴美もきつとそれを望んでいただろう。

しかしそれは今になって露伴の胸をチリチリと焼いていた。彼の性分ならいざ知っていた事だが、受け止めるには時間が足りない。

車に乗り込んだ後も、3人の間には終始重い沈黙が続いていた。

## 2人の関係

岸辺露伴は杉本鈴美が殺された夜、現場にいた。ザワザワとした胸騒ぎは、まるで透明な水の中に絵具を溶かしたかのように元の感情に戻る事はなかった。

「……先生。露……先生」

ボケーツとしながら買い物カートを押して歩く。

「露伴先生ーってばーツ!!」

「うおおおッ!」

突如背中に衝撃が走りビクーツと肩を跳ねさせながら立ち止まって背後を見ると、美晴が抱きつくようにして露伴の身を押しさえており目をまんまるく見開く。

「み、美晴!?!なんだよ急に抱きついてッ!」

「急なんかじゃありません!さっきから呼んでるのに!」

ぶんすこ怒りながら美晴は露伴を引っ張って精肉コーナーへと戻る。

「お肉のところ通り過ぎてるんですってば!今日カレーにするって言ったじゃあないですかっ」

「あ、あれ……そうだったっけ」

「もうッ」

美晴が地団駄を踏みながらむくれていたが、カートの中にある買い物カゴの中にはニンジンやじゃがいもが入っていて「ああこれは確かにカレーの材料だ」とすぐに納得した。

「また鈴美ちゃんの事考えてたんですか?」

気を取り直した様子でパックに入った肉の値段を見比べながら美晴が問い掛けると露伴の頭がピクリと僅かに上がる。

「まあ……そんなところ。なんだ、嫉妬してるのか?」

カートの取手に腕を置いて寄り掛かり美晴を見つめるが、カゴの中にようやく肉のパックを入れた彼女は呆れたように溜息を吐いた。

「嫉妬なんてしてません……ただ、ここ最近の露伴先生、ずっと元気な

いですから……」

前へ進むよう促すように彼の背中を叩き、歩き出すのと同時に隣に並ぶ。

「心配……してくれていたのか」

「当たり前でしょう？ 露伴先生は私の……」

出しかけた言葉を不意に切り、隣の露伴を見上げる。

「な、なんですかその眼差しは……」

「ん？」

彼の見開かれた双眸。心なしか期待に満ちているようにも見えて思わず眉を潜めるが、本人は気付いていないらしい。

「……露伴先生は私の、大切な人ですから」

気を取り直すように咳払いしてから先程の続きを言い切ると更に瞳に輝きが増したように見えて、思わずプフツとおかしそうに吹き出した。

「もう、なんなんですか？ らしくくないですよ？」

まだクスクス笑っている美晴を見てやつと気付いたららしい、露伴はフイと顔を逸らす。

「だ、だつてさ……君の口からそう言ってもらえるのは、その……嬉し、かった……から」

彼女に見えないように、まるで子供のように拗ねた顔をしながら独り言のように漏らして俯く。

「君は、仗助が1番だと思っていたし……」

” 美晴ちゃんのカレシなんで ”

鈴美と己の関係も衝撃的だったのは確かだが、仗助の口から出たその言葉にもある種の衝撃を受け、それを思い出すたびに心の奥底が燻るような心地になっていた。当然精神状態はガラにもないがよろしくなく、休載を延長していて良かったと安堵している始末だ。

「1番……1番ですか。難しいですね……」

そんな事を考えていると美晴が「うーん」と難しい顔をしながら唸っていてキョトンとしながら彼女を見つめる。

「確かに仗助くんの事はとても大切なんですけど……私はみんなの事

が大切なので、1番とか考えた事なかったですね」

彼女はあっけらかんとしながらそう言い切ってしまったので露伴はまた驚いたように双眸を見開いてしまった。

「仗助が1番じゃあないって事なのか…!？」

「え？えーと……正確には1番じゃあないというより……順位の概念がないと言いますか……」

どう説明したらいいのかと美晴はおろおろしながらも言葉を組み立て始める。露伴に分かりやすいように、かつ露伴が傷付かないように伝えるにはどうしたらいいのか。

「その……露伴先生の事は、仗助くんとは別の意味で大切なんです。仗助くんが彼氏として大切であるなら……露伴先生は……」

考えながら言葉を紡いでみたが、そこでふとある疑問に至る。

(私と露伴先生って、どういう関係なんだ……?)

美晴は露伴を見上げながら疑問符を浮かべる。

平たく言えば2人の関係は”雇主と被用者”になるだろう。しかし本当にそれだけの関係だろうか？

2人は共に暮らし、嫌でも毎日顔を合わせ、互いになくってはならない存在と言っても過言ではない関係だ。それを一言で表すなら、どういった言葉が適切だろうか？

恋人とも違う。兄妹でもない。友達でもない。そんな私達の関係って？

「露伴先生は……どうしてそんなに私を大切にしてくれるんですか？私達、赤の他人じゃあないですか……」

何か明確な、はつきりとした関係がない状態なのに、露伴は己の事を目に見える形でいつも大切にしてくれる。今更だが考えてみれば奇妙なものである。

一方の露伴もキョトンとした顔を再度晒した後に顎に手を添えて考える素振りを見せた。

「確かにそうだな……僕らは一体どういう関係だろうか？」

周囲からの見立てでは”漫画家とアシスタント”、”従兄妹同士”、”露伴先生に気に入られている女子高生”、などと様々だ。しか

しそのどれもが的を射ているようで違う。恐らく1番近いのは3個目のものだが、美晴の方からも露伴に対しての好意がある。

いつものカレーのルーをカゴに放り込み、それでもまだ答えは出ずに会計に並ぶが、それを終えて袋に買ったものを詰めていても2人は珍しく互いに考え込んで言葉を交わす事はなかった。

「あれ？ 仗助くんだ」

しかし考えている最中、袋詰め台から離れると総合カウンターに見慣れた背中が見えて思わず声を上げる。

「げえーッ……今会いたくないんだよな。行こうぜ」

ただでさえ己と美晴の関係について悩んでいるのに。露伴は傍目から見ても嫌そうなしかめっ面を晒しながら美晴の手を引くが、次いで見えた光景に2人して目を大きく見張った。

「こちらキャッシュバック分の61, 500円でございます」

「お、おおッ……」

なんと仗助が震える手で総合カウンターの従業員から現金を受け取っていたのだ。しかも学生にしては大金を。

「おいおいおい！ 仗助エー！ ついに悪事に手を染めやがったなッ!？」

「げッ、露伴!？」

堪らず露伴が仗助に近付きビツシイと指差すと彼の肩がビクリと揺れる。

「なんだよオッッ、誰がいつ呼び捨てにしているって言ったッ!？」

「うえッ……ろ、露伴先生ッ……」

ぐいぐいと距離を詰めるように迫る露伴にさすがの仗助も萎縮するが、その背後に美晴の姿を見つけると更に表情を引きつらせる。

「み、美晴ちゃん……これは違うんだ！ 誤解なんだよオ！」

仗助の言葉を受け、また容赦も言い訳の余地もない露伴の迫り方を見かねて美晴が総合カウンターに小走りで駆け寄ると、すぐにあの大金の謎が解けて。パンツと手を合わせた。

「露伴先生……これ亀友の”ブルースタンプ”ですよ！」

従業員から拝借した、今しがた仗助が持ってきたらしいブルースタンプの貼られた台紙を持ってきて彼に見せる。

「ブルースタンプ?」あの100円ごとに1枚もらえるやつか?」

彼は羽交い締めにしていた仗助を解放してその台紙を覗き込む。

亀友では買い物100円ごとに1枚、”ブルースタンプ”というシールを配布している。これを何枚か集めると粗品がもらえるシステムだ。ラインナップは季節や月ごとに変わるものもあり、オリジナルデザインの食器や夏になるとアイスなどももらえる。

そしてこのポイントはキャッシュバックといって現金に変える事も可能なのだ。

「という事はこれは正当な取り引きなのか……」

フム、と納得した素振りを見せる露伴だったが、ジーツと仗助を上から下まで眺める訝しげなその目は疑念も含まれ——いや、疑念しかないのかもしれない。

「仗助がそんなに几帳面に貯めるようなヤツには見えないけどなアア  
くくツ……」

その言葉にまたギクツと肩を揺らす仗助だったが、台紙を従業員に返却した美晴が呆れたように溜息を吐く。

「だめですよ、いくら仗助くんが苦手だからって……にしても朋子さんってやっぱりしっかりしてる人ね」

ふと美晴は仗助に微笑み掛ける。どうやら彼女は彼の母親である朋子からのお使いか何かだと思っているらしい。結局2人とも”仗助が貯めたブルースタンプ”とは思っていないが、そんな事は今の仗助にとってはどうでもいい事だった。

「そ……そうなんだよオ、お袋に頼まれてんだよこれ。家計の足しになりやあいいなアツ」

「なるわよ、6万もあれば食費かなり浮くし。私も集めてるけどここまではいかないわ……さすが朋子さんね」

引きつった笑みを浮かべる仗助にどこか引つ掛かりを覚えるが、なんとなく並々ならない事情を感じ取ってそのまま美晴はフォローの体制を取る。だが実際、美晴はまだ数回しか仗助の母親に会った事がないが快活で気立ての良い女性だと記憶している。美晴が目指した女性のお手本のような人だ。



「なんだ、美晴もこんなチマチマケケチした事やってんのか……」  
「露伴先生は景気良くお金を使いすぎなんですよ……もう少し節約も覚えてください」

ケツ、と面白くなさそうな露伴とその態度を見て更に溜息を吐く美晴。上手く話題を逸らす事に成功したのを感じて仗助は彼女に心の中で礼を言うが、彼らの様子を見て自然と頬が緩むのを感じ、フツと笑い声を漏らす。

「なんかよー、美晴ちゃんと露伴先生って親子みてえっつーか……家族みたいになんか仲良いよな」

どっちが親か分かんねーけど、と零しながら仗助は2人に微笑み掛け、その言葉に彼らはピンときたように顔を上げる。

「そうやってじゃれてんの、フツの関係じゃあ出来ねー事だから……ちよつぴりうらやましいぜ」

仗助だって美晴とは恋人同士という関係で親しい仲だと思ってるが、ああやっていつも一緒にいるような関係ではない。赤の他人であるにも関わらずひとつ屋根の下で暮らし、おはようからおやすみまでを美晴と過ごす露伴の事を言葉通り羨ましく思う事もあった。そう、今のうちに。

「……ふふん、そうだろうそうだろう!? うらやましーだろ!? 僕は今朝の美晴の寝癖の位置だって記憶しているんだ。晩飯も今日は一緒に作るんだぜ?」

仗助の”うらやましい”という単語に気分を良くしたらしい、露伴はガバツと美晴の肩を抱くとニマニマと彼に向けて得意げに笑みを向けていた。

「ちよ、露伴先生……そんなの聞いてません」

「今決めたんだから当然だ。今日の晩飯は一緒に作ろうじゃあないか」

わしわしと露伴に頭を撫でられながら美晴は本日何度目かの溜息を吐く。まったくとんでもない人に懐かれてしまったものだ。

我儘で強引で人を振り回しがちで、このように年下相手にも平気でマウントを取りに行く。プライドも高い。こんな風に肩を抱かれ

たつてちつともときめかない。

それでも一緒にいてなぜか落ち着くとも思えるのは、ただひたすらに守りたいと大切に思えるのは仗助が言ったように家族のような関係だからなのだろうか。

それは露伴も同じなのだろうか。

「もう……勝手に急に決めちゃうんだから」

気付けば美晴の顔に自然と笑みが溢れていて、仗助と露伴もパチリと目を瞬いて見張ってから柔らかな微笑みを見せる。

「うらやましーっスよ。でもすぐに逆転しますから」

「ほーう？ やれるもんならやってみろよ。負けない自信ならたつぷりあるからな」

2人はとことん馬が合わないが、来宮美晴の事に関してだけは意見が合う。今も美晴の笑顔が見れた、ただそれだけで口ではそう言いつつも穏やかな笑みが浮かんだのだ。

「んじゃ、俺もう行きますわ。美晴ちゃん、また明日学校でな」

「うん。また明日ね、仗助くん」

仗助はひらひらと手を振って出口へ向かい始め、その背中に美晴も緩やかに手を振って見送っていた。

その後も本屋や画材屋を覗いてから帰宅し、先程決めたように2人でカレーや他のおかず作りに取り掛かった。こうして2人並んで料理をしていると本当に家族のようで頬が緩む。

「私達、家族だったらどんな間柄になるんでしょうね」

カレーを煮込みながらふと零すとレタスをちぎっていた露伴が美晴に視線を向ける。

「仗助の見立てでは“親子”とか言っていたけど……僕ら4つしか離れてないんだから”兄妹”が妥当だろ」

なにを当たり前の事を、と独りごちながら透明のボウルにちぎったレタスを入れ、切っておいたトマトを並べていく。

「兄妹ですか……じゃあ”露伴お兄ちゃん”ですね」

しかし次いで出た彼女の一言に思わず噎せそうになりながら口許を手の甲で押さえた。

「お……っ！おま、お前よオ……ッ、急に変な呼び方するなよなア……ッ！」

「えっ？じゃあ”露伴兄さん”ですか？」

「あのなア……ッ！」

彼女がクスクス笑っていたのですぐにからかわれていると気付き、堪らず肘でガスガスと彼女の二の腕を軽くどついてやる。それを彼女は「きやあくっ」とふざけたような悲鳴を上げながら一步横にズレて逃げていた。

「フフッ、そんな怒んないでくださいよ。でも露伴先生が私の兄さんだったら、とびきりみんなに自慢しちゃいますね〜」

岸边露伴は人気漫画家だ。そんな兄がいたら鼻が高いだろうし、ここぞとばかりに自慢しまくりたい。そうやって目を輝かせる美晴を見て露伴はニヤリと口の端を片方吊り上げる。

「そうかい。じゃあく僕もこんなに可愛くて家事が出来る妹がいるって担当編集に自慢しまくろうかなア」

サラダチキンを適当に放り込みながら露伴もその様を想像する。

「毎日ご飯を作ってくれて下着も畳んでくれる可愛い妹なんだぜ、つてな」

「や、やめてください、恥ずかしい！」

ほんのり頬を赤く染めて声を上げる美晴を見て、今度は露伴の方が喉奥で笑い声を漏らした。

「恥ずかしがるなよ、事実だろ？まつ、別に妹じゃあなくたって、可愛い僕の給仕係だけだな」

今日の岸边露伴はどうやら機嫌が良いらしい。手を洗ってから美晴の頭をポンポン優しく撫で、サラダのボウルをテーブルに持っていないき席につく。

「別にどうでもいいんじゃないの、僕らがどんな関係かなんてさ。誰がどう思っていようが、僕らは互いに互いを大切に思っている。それでいいんじゃないの」

腕枕に頭を預けながらコンロの前に立つ美晴を目を細めながら見つめる。その言葉に美晴はハッと息を呑んでから同じように微笑ん

だ。

「……そうですね。私達の関係に名前なんていらないうすよね」

コンロの火を止め、炊き立ての白米をカレー皿に盛る美晴の姿は己と同じく上機嫌なもので、思わず頬が緩む。

ここは岸辺露伴の特等席だ。毎朝毎晩、ここから見る美晴の料理や配膳をする姿は今のところ己の目だけに映るものだ。これは特別なもので、普遍的な言葉で表す事は出来ないだろう。なぜなら彼らは夫婦でも恋人でも家族でもないからだ。

しかし不思議と調和の取れたこの関係は2人にとって心地の良いもので、それは互いだけが知っていればいい事だった。

「いただきます」

こうして食卓を囲むのは何回目の事だろうか。数える事すら無粋に思える。そんな日々を、これまでもこれからもずっと続けていくのだ。そう信じて疑わないほどに、これは2人にとっての日常そのものだった。

「サラダ、美味しいだろ?」

「ちぎっただけですけどね」

昔は有り得なかった日常。世間の”普通”とは程遠い日常。

しかしこの広すぎる家の一角に密かに響く笑い声は、ささやかだが楽しげなものだった。

## 奪われる誰かの”日常”

ある日の昼休み。

「美晴ちゃん、お待たせーっ」

教室でぼんやりとしていた美晴に不意に声が掛かるとパツと振り向く。

「仗助くん、億泰くん！今日はごはん何にしたの？」

「2人して幕の内弁当だぜーっ」

億泰が掲げるビニール袋に入った2つの弁当。今日は3人で昼食を食べる約束をしていて、美晴は2人が戻ってくるのを待っていたのだ。

「それで食べる場所なんだがよー、いいところ見つけたからそっち行かねーか？」

「いいところ？」

仗助がくいくいと親指でどこかを指してから美晴の手を引いて歩き始め、億泰も疑問符を浮かべたままの彼女の両肩に手を置いて押すように歩く。

「まーまー！お茶も出るからよオ、美晴もそっち行こうぜエ！紹介してエ奴もいんのよー！」

「し、紹介…？」

あれよあれよと進んでいく話についていけなくなりそうになりながらも、その人物について考えてみる。

2人の友人である事はまず間違いないが、”紹介”という事はその人もスタンド使いなのだろうか。2人の様子を見るに、とても頼れるスタンド使いである事は予想がつく。

そうこうしているうちに昇降口で靴を外履きに履き替えさせられ、また手を引かれ背を押されながら歩く。いつの間にかぶどうヶ丘の中等部の区域に入り「あの、」と声を上げるが仗助達は「しーっ」とまるでイタズラっ子のような笑みを浮かべながら人差し指を唇の前で立てるばかりで止まってはくれなかった。

「しかしよオ康一の奴、由花子と付き合い始めてからそっちに行っちゃうから寂しいぜエ」

「だなア〜」

2人は今頃康一と由花子が仲良くランチタイムをしているであろう実験室の窓を見上げる。

そう、実は最近ちよつとした”事件”が起こったのだ。なんと先程聞いた通り、康一と由花子はいじめでたくゴールイン、男女の付き合いをする事になったのである。

『やったじゃない！おめでとう由花子ちゃん！』

そうやって祝ったのも記憶に新しい。なんでもきっかけは”愛と出逢えるメイク、いただきます。”のキャッチコピーが売りのエステ、”シンデレラ”という駅前にある店らしい。

そのオーナーである”辻 彩”先生は”肉体のイメージを交換する”能力を持つスタンド使いで——と、話せば長くなるが、そのスタンドによって（9割は由花子の不注意だったが）ピンチに陥ったところを康一が助けてくれた、それが決め手だったようだ。

「ここだぜ」

そんな事を思い出しながら歩き続けようやく止まったその場所は中等部の体育館の入口前で、その横にある体育準備室の窓を億泰が覗き込む。

「ほーっ！結構広いじゃあねえの」

もしかしてここが2人の言う”いいところ”なのだろうか。美晴も一緒になって中を覗くが、億泰は躊躇いなく窓を開けて美晴を持ち上げる。

「よし、美晴から入れよ」

「えっ、私？」

ぐいぐいと窓枠の向こうに押し込めるようにその身を乗り出さんとされ、思わず声を上げる。

「俺らが先入ったらよォー、パンツ見えちまうだろ」

「ちよつとやだ、もう……！」

窓枠に手を掛ける美晴だったが、億泰の言葉に頬を染めると咄嗟に

片手でスカートを押さえて振り返る。と、同じように若干頬を染めている仗助とカチリと目が合い、彼が咄嗟に視線を逸らすのを見て更に紅潮した。

「っもう、しょうがないわね……!」

美晴は前を向き直すと億泰に押されるままに窓枠に再び手を掛けてグツと中に身を乗り出す。しかし――、

「きゃああっ!」

「えっ!うおおああっ!?!」

突如美晴が悲鳴を上げたと思いきや勢いよく体を引いてしまい億泰もバランスを崩して後ろにズテーンツと倒れ込んでしまった。

「なっ……おい大丈夫かよ億泰、美晴ちゃん!」

すぐさま仗助が膝を折ってしゃがみ込み様子を見るとまずは美晴が起き上がる。

「びっくりした……億泰くんごめんね、大丈夫?」

「いてエッ……」

続いて億泰も尻をさすりながら起き上がり、まずは2人とも大した怪我がない事に安堵した。

「美晴よオ……急に悲鳴なんてあげてどうしたよ?」

億泰は美晴の体に腕を回したまま問い掛ける。

「それが……人がいたのよ。ちょうどあの窓の下あたりに、座り込んで……」

驚きすぎて一瞬しか見えなかったが、確かにあれは人間だった。男で、スーツを着ていたので教師を連想したが、どこか見覚えのあるような姿をしていた事を思い出せば記憶を掘り起こし始める。

「人?重ちー!」じゃあねーか?中等部のちっこくて頭がトゲトゲしてる……」

「ううん、違う……大人の、男の人だったわ」

恐らく2人が紹介したかったのがその”重ちー”だったのだろうが、挙げられた特徴は美晴が見たものとは全く違うものだった。

「しよーがねーなア、俺やっぱ先入るわ。仗助エ、オメーが持ち上げてやれよオ」

「えっ、ちょよ、億泰！」

気を取り直したように億泰はポンと美晴の頭に手を置いてから立ち上がり、よっこいせと窓枠を越え始める。

(なんだア……なんもいねえじゃあねーの)

しかし億泰が美晴が先程言っていた場所を見ても誰も居らず、首を傾げるばかりだった。

(なんとという事だ……姿を見られてしまったか?)

体育準備室の跳び箱の中。美晴が目撃した男は息を潜めながら外の会話を聞く。幸い彼女はすぐには中に入って来なかったためこのように身を隠す事が出来たが、ここに来た目的を果たす事が更に難しくなってしまった。

この男。名前は“吉良吉影”。

”重ちー”が取り違えてしまったサンジェルマンの袋を取り返すべく彼の後を追ってここに来た。

しかしたつたそれだけの事でここまでする必要があるだろうか？

「なんだッ！ 仗助さんに億泰さんじゃあないかど……と、アレ？ この人誰だど？」

トゲトゲ頭の中等部が上げる声にギクツと肩を揺らす。まさか跳び箱の中にいるこの姿が見えたのだろうか。

「ああ、紹介するぜ。この子は来宮美晴ちゃん。俺らと同一年だぜ」

「あなたが重ちーくん？ よろしくね」

「エッ、あ……お、おらは矢安宮重清っていうんだど！ よろしくだど、美晴さん」

会話を聞くに、どうやら違ったらしい。跳び箱の隙間から様子を見ていると、先程の彼女―美晴とトゲトゲ頭―重清が互いに頭を軽く下げている、吉良は思わずホツと胸を撫で下ろした。

しかし彼女、来宮美晴。どこかで見覚えがあつて思考を巡らせる。

「今お茶淹れるど……美晴さんは何がいいど？」

「え、いいのかしら……」

「勿論だど！ おら、こう見えてお茶淹れるの上手いんだどオ！」



「おいおい！美晴ちゃんが出来たら急に態度変わったな！」

跳び箱の外では楽しい笑い声が聞こえる。

「だめだかなア、美晴は仗助のカノジョなんだからよオ！」

「エエッ！じ、仗助さんにはもったいないど……！」

「コラ、どういう意味だよ重ち……！」

まったく、こちらの気も知らないで学生達は暢気なものである。吉良はそう思いながらも美晴から目を離さないでいた。

彼女は吉良の目的であるサンジェルマンの袋のすぐそばのマットの上に腰掛けると、重清が淹れてくれる緑茶を待ちながら弁当の蓋を開けている。

（そうだ、思い出したぞ……）

その”手”を間近で見ると記憶が蘇った。ポケットを弄り、先日拾ったハンカチを広げて眺める。

そう、これはあの少女が落としていった品だ。

あの日、己とぶつかった拍子に手放してしまった自転車や鞆を捨てあげた少女。顔は思い出せなくてもその”手”の感触はずっと忘れられなかった。あたたかくて柔らかい、小さめの可愛い手。その感触を思い出してうっとり目と目を細める。

（袋の中の”彼女”を救い出す事が最優先だが……、来宮美晴。そうか、彼女は来宮美晴……ずっと探していた。手を見れば分かるよ。このハンカチを返す時が来たようだ）

今は難しくても、名前とその姿を目に焼き付けておけばいずれチャンスは来る。あの”手”は是非とも我が手中にしたい——吉良はそう願って止まなかった。

吉良吉影。彼は平穏な日常を過ごす事を目標にしている。

だが、彼にはどうしても抗えない衝動があった。

それが、”手の綺麗な女性を殺す事”だった。そしてその”手”を愛でる事で幸せな日常が完成する。

そこにあるサンジェルマンの袋には、パンではなく先日殺した女性の”手”が入っている。”彼女”と楽しいランチタイムを過ごそうと思っていたのに、あの重清が袋を取り違えてここまで持ってきてし

まったのだ。

だから吉良はここまで彼を追ってきた。

(だが1人ならまだしも、4人の対処は厳しい……!どうする……!何かあの袋だけをこちらに持つてくる方法を考えなくては!)

厄介なのは跳び箱の上に乗っている男子生徒―仗助と袋のそばに座っている美晴だ。なんとか2人の目を掻い潜って、まずは袋の回収をしなければ。あの中身を見られたら己の人生は終わりだ。

「彼女」は先日私が買ってあげた指輪をしている……あの指輪の購入元から身元が割れてしまう可能性がある。それはなんとしても避けなければ……!)

このままでは15年間続けてきた平穏で幸福な日常が終わってしまう。

タイムリミットは重清が4人分のお茶を用意してここに戻って来た時。吉良は跳び箱の中に落ちていたハンガーを見つけると、それを分解して長い針金の状態に戻し、それを跳び箱の隙間から差し入れようとした。

「そういえば重ちーくん、これサンジェルマンの袋よね。今日のお昼ご飯は何にしたの?」

しかしそこでなぜか美晴が袋を手にとってガサガサと揺らし始めたのだ。

(な、なんだとオーツ!?来宮美晴、今すぐやめろ!!)

これには吉良も驚いた。もし重清が答える前に中を見たら大変な事になってしまう。大人しそうな見た目をしてなんて気ままな少女なんだ!

「それはテリヤキチキンサンドだどー!おらの大好物なんだどー!」

「サンジェルマンのサンドイッチっていつも人気ですぐ売り切れんだぜ」

「へえー!すごいじゃあないの、重ちーくん!今日はツイてるわね」

私は全くツイてない!!吉良は学生達の会話に混じるように心の中で声を上げた。まったくなんて日だ!

美晴が早く元の場所に袋を置いてくれないかそわそわしながら様

子を窺うが、ついに袋のシールを剥がそうと美晴の指が動く。そのフニフニした可愛らしい指が、吉良の命運を左右しようとしている――

「あつーぜーったい開けちゃあだめだど！いくら美晴さんでも分けてあげないんだどー！」

「ふふ、分かってるわよ。大好物なものね」

しかし美晴は重清の声を受けてなんとも素直にポスツと元の位置に袋を置いて給湯室に向けて声を掛けていた。

（フウー……き、来宮美晴……見た目に反してちよつと不躰な女の子だ。連む相手は選んだ方がいいぞ……）

そういえば先程チラツツと聞いたが美晴は仗助のカノジョらしい。あんな時代遅れな髪型の不良のどこがいいのか知らないが、少なからず影響を受けているのかもしれない。そうでなくとも体育準備室で教師のお茶をくすねる連中と絡んでいるなんて、人は見かけによらないものだ。まあ、そんな事はどうだっていいが。

吉良は静かに安堵の息を吐きながら今度こそ針金を跳び箱の隙間から差し入れる。袋の折り目の輪の中にこれを潜らせれば、こちらに持つてくる事が出来る。

美晴が弁当を食べている隙に素早くその輪の中に針金を通すと、そつと持ち上げてこちらに手繰り寄せ始める。ほんの数センチ。ほんの数センチの距離だ。あとはこの跳び箱の隙間から引っ張り込む。しかし――今日の吉良は本当にツイていなかった。

（な、なにツ……シールの粘着が……！）

あとほんの少しの距離なのに、シールがだんだん剥がれかけていてもう限界を迎えそうになっていたのだ。

ここに来る前、2度ほど開け閉めを繰り返していたからだ。

なんとという事だ！ここからではシールなんてどうする事も出来ない！

吉良は慌てて手繰り寄せる速度を速めたが、それが逆に仇になりドサアツ！と無情にもマットの上に派手な音を立てながら落ちてしまいいシュツと素早く針金を引いて手元に戻す。

「ん？」

「え？」

仗助と美晴が同時に声を上げる。まずい。

「美晴ちゃん、それまた触った？」

「ううん……」

美晴が首を横に振るのが見える。次いで跳び箱から仗助が降りる音が聞こえ、吉良の視界にもその姿が映る。

「どした？」

「いや、今この袋がよオ……ちつと動いた？変な音したからよオ」

億泰の姿もそこに現れ、3人は訝しげにサンジェルマンの袋を見つめている。

まずい。まずい。まずいぞ。

(シールが剥がれて完全に袋の口が開いてしまっている……！それにちよこつと”彼女”の指がはみ出しているようにも見えるぞ……!!)

彼らの視界には”彼女”は入っていないらしい。3人は顔を見合わせ、仗助がそつと袋に手を伸ばし始める。

「あぁーッ!!仗助さん!やっぱりおらのサンドイッチを盗もうとして  
いるどッ!!」

そこに重清が給湯室から顔を出したかと思いきや、すぐさま素っ頓狂な声を上げながら仗助に詰め寄っていた。

「なっ!?!ちげーよ誤解だ重ちー!今この袋から変な音が聞こえたから調べようとしただけだぜ!」

「そんな事言つてッ!そのサンドイッチ、俺の大好物だから一口かじらしてくれよッ」つて強請る魂胆だどッ!!」

重清がシッシッ!と仗助や億泰を袋から遠ざけようとドタドタ地団駄を踏み鳴らす。

「お、落ち着いて重ちーくん……!私も聞いたのよ、その音!」

「み、美晴さんの事まで使つて言い逃れなんてヒキヨーだどーッ!」

「あのなア重ちーッ!ホントだつて、信じてくれよーッ!」

何やら一気に騒がしくなったが、視界から3人の姿が消えてすかさず吉良は針金を伸ばして上手く袋を引っ掛け、一気に跳び箱まで手繰

り寄せる。そして僅かに隙間を開け、スツとやつと袋を手中に収める事に成功した。

(やったぞッ！)

だがパタツと僅かに跳び箱の隙間を閉めた音が響き、美晴がそちらを振り返る。吉良はその事に気付いていなかった。

(何かしら、今の音……跳び箱の方から聞こえたわ)

美晴はまだ言い争っている仗助達を尻目に、跳び箱の方へ歩み寄る。

そして、恐る恐るその隙間から中を覗いた。——刹那。

「ツッ!」

カチリと。互いの目と目が合ってしまったのだ。

「きゃああっ!」

本日2度目の悲鳴と共に美晴が尻餅をつく。一方の吉良も悲鳴を上げまいと口を手で押さえつつも驚きで双眸がカツと見開かれていた。

「美晴ちゃん!」

「どーした!」

すぐさま仗助と億泰が振り返って美晴に駆け寄る。美晴の体は吉良から見てもカタカタ震えていて、しかもこちらから目を離さない。

「い、今……跳び箱の中ツ!目が合ったわ!誰がいるツ!」

震える指が跳び箱を、——正確には中にいる吉良を指す。

(ま、まずいッ……このままじゃあバレてしまうツ!!)

釣られて跳び箱を振り返り、そしてこちらに歩んでくるのは仗助。もうおしまいだ——吉良は初めてそのピンチに恐怖し、固唾を飲み込んだ。の、だが。

「あぁーッ!!おらのサンドイッチがないどツ!!なんでなんでツ!」

重清の声が準備室に響き渡って反射的に3人の目が彼に向く。次いで先程まで袋が置いてあったマットの上に視線を注げば「あっ」と一様に声を上げた。

「確かになくなつてらア!」

「どーなつてんだ!」

キヨロキヨロと4人が辺りを見回す。まずい。本当にまずい事になった。このままでは”重清の袋を隠したのは跳び箱の中にいる奴”と紐付けられるのも時間の問題だ。

「ゆ、……許さねーど。おらのサンドイッチ!! 仗助さんも億泰さんも美晴さんも! この部屋も全部”ハーヴェスト”で調べれば誰が盗んだか分かるんだどツ!!」

重清がこの部屋と3人を調べるべく何かをしようとしている。しかし吉良にはそれが何なのか分からず、神経を尖らせながらも疑問符を浮かべ跳び箱の隙間を覗き込んでいた。

だがやはり、運命はこの”吉良吉影”に味方してくれるのだ。

「コラーツ! 誰か準備室に忍び込んでいるなツ!」

ガチャガチャとドアノブを捻る音と共に給湯室の方から声が聞こえる。それは今までいた4人の誰とも違う男の声で、彼らはビクリと肩を跳ねさせていた。

「げツ!? この声は体育の先生だどツ!」

「なにイ!? ブラかるぞ!!」

吉良の視界から4人が慌ただしく消えていく。

「きやあつ! 押さないでよ! 落ちるでしょ!」

「仗助エ! 受け止めてやれよオ!!」

「えっ!? うおおおツ!!」

「おらのサンドイッチイ…ツ!!」

ドタバタと騒がしい音と共に4人は次々と窓枠を越え、外に足音を響かせて去って行ってしまった。

(まったく……冷や汗をかかせられた)

嵐が去ったかのようにシンと静まり返った体育準備室の中。安堵の息を吐き、彼は袋の中を覗く。

袋を回収し、無事に”彼女”を取り戻せた。

吉良はそれで満足だった。

「重ちーくん、大丈夫?」

逃げる途中で転んでしまった重清に美晴は手を伸ばす。彼は涙目

になりながら彼女の手を取ってムクリと起き上がった。

「うう、おらのサンドイッチ…!」

「うん、分かるわ…:せつかく買えたのにね。明日またサンジェルマンに行ってみましょ。私も付き合おうし奢るわ」

美晴は重清と同じ目線になるようにしやがみ込むと柔らかく微笑みかける。重清は制服の袖で涙を拭い、美晴を見つめる。まるで捨てられた仔犬のようなその眼差しに思わずクスリと静かに笑い声が漏れた。

「ほんとう？ほんとうに、ほんとうだど？」

「ええ。ほんとうに、ほんとうよ」

ポンポンとそのトゲトゲ頭を撫でてやり、まだ溢れてくる涙をハンカチで拭う。

しかし重清はスンと鼻を鳴らしたかと思えば、鋭く目を細めた。

「でも…:今おらのサンドイッチを盗んだ犯人は誰か分かったど…!」

立ち上がり、彼は何処かへと歩き始める。美晴は疑問符を一瞬浮かべたが、すぐに心配になり彼の後を追うように立ち上がって歩き始めた。

「分かった、つて…:どうして？」

「おらの”ハーヴェスト”で調べたんだど!そしたらすぐに見つかったど!」

だんだんと小走りになる彼の目は確信に満ちていた。その口ぶりからして”ハーヴェスト”というのは彼のスタンド能力なのだど悟ったが、美晴にはその姿も能力も分からない。

「見つけたぞッ!」

その声にハッと意識がこちらに戻ってきて慌てて視線を上げる。ちやうど校門前、人も疎らなその場所。そこにいたのは――

「あつ…:」

その姿。背格好。スーツの色。

「おらのサンドイッチの袋…:美晴さんが見たのもきつとあいつだど!!」

重清が指差す先。美晴は今度こそその人物に関する記憶を掘り起こし、そしてゾツと鳥肌が立つ心地になった。

「……ひよつとして私に話し掛けているのかね、お2人さん。これは私の袋だし……君は私を見た事があるのかな？」

男は立ち止まり、ゆっくり振り返ると極めて冷静に声を上げ、スイとその視線を小刻みに震えている美晴に向ける。

思い出した。この男は、この一見エリートそうな見た目のこの男は――、

「いいや！その袋はおらのだど！問答無用だど！取り上げろ、”ハーヴェスト” ツ!!」

ドクドクとうるさく早鐘を鳴らす美晴の心臓の音と共鳴するように重清がそう叫んだかと思いきや、急に男の持っている袋がグイッと尋常ではない力で引つ張られた。

(あ、あれが”ハーヴェスト”……!?たくさんいるわ!)

美晴は震えながらも目を凝らす。よく見ると袋に数体の小さな黄色い虫のようなものがくっついていて、それらが力を合わせて袋を引つ張っているようだった。恐らく男にはそれらは見えず、勝手に袋が重清の方に戻ろうとしているように見えるだろう。

「な、なんだ!?袋が勝手にツ!!」

案の定ハーヴェスト達が見えていないらしい男はその力に抵抗しようとしてグイッと引つ張り返す。

だが、たかがパン屋の紙袋に、その力に耐えられるほどの耐久力はなかった。

「ツ!!」

バリツ!と紙袋が真っ二つに裂ける。まあ、もしそうだったとしても大抵サンドイッチにはラップ等の包装がしてあるはずだ。地面に落ちれば多少形は歪むだろうが、食べるのに支障はない。

——なんて、暢気な事を。

「は……ツ!?!」

その場にいた3人は血の気が引く心地になった。

その様子を気に留める事もなく、紙袋の中身は重力に従ってポトリ



と地面に落ちる。

だって、普通は誰だって”重ちーのサンドイッチが落ちた!”って思うだろう。

でも違ったのだから、誰だって”それ”から目を離せない。

「ど、どうなってるの…!?!」

「は、え…ツ!?なんで、えツ…!?!」

重清と美晴は同じような掠れ声を上げながら”それ”を見ていた。

「なんとという事だ…見てしまったか」

男——吉良吉影は露わになってしまった”それ”——”彼女”、もとい”殺した女性の左手”から再び2人に視線を転じる。

目撃者は殺さなくてはならない。たとえ子供でも容赦はしない。

15年間、ずっとそうしてきたように。

陽は沈み、影は溶け込む

サンジェルマンの袋から姿を現した”女性の手”。

美晴と重清がそれを見て動揺する中、男——吉良吉影だけは妙に冷静だった。

「見てしまったか……そして君は、私と同じような能力を持っているようだな……！」

吉良はハーヴェスト達を一瞥してから重清を鋭く睨む。

しかし美晴はそんな吉良よりも、”女性の手”に釘付けになったように視線を注ぎ続けていた。

（あの男の人……前に会ったわ！思い出した！あの人……私の”手”を舐めるような手つきで触ってきた……！）

露伴が入院していた頃、お見舞いの帰りに会った彼。彼とぶつかってしまった時に手放した自転車や鞆を拾ってもらったが、その直後にそういった事をされた。その行動と3人の間に転がっている女性の手。それらを紐付けて考えてみれば、彼の”趣味”が浮き彫りになっていく。

（私の事もきつとこうするつもりだったんだわ……!!）

あの時自分はすぐに逃げたから追われる事もあなる事もなかった。

頭の中が真っ白になり、ガクリと膝をつく。見つめる己の手から恐怖で血の気が引いていく。

「み……美晴さんの事もこの”手”の人と同じ目に遭わすつもりかど!?そうはさせないど!!」

そんな美晴を振り返った重清はザツと彼女の前に立ち守りの態勢に入る。

「し、重ちーくん……」

「う、動くなど……！」

己の声はひどく情けなく震えていたが、同じように重清の脚も震えていて心拍数と呼吸が上がっていく。

それを吉良はただ静かに見下ろしていた。彼にとっては少女の恐怖も、少年の勇気も、無感動でどうでもいい事だった。

「……………」

唯一感じるのは己の”日常”を壊されてたまるかという、正常だが異常な、矛盾した気持ちだけだった。

「…………私の名前は吉良吉影。年齢は33歳」

だが吉良には勝利の確信がある。

「自宅は杜王町北東部の別荘地にあり、結婚はしていない…………」

突然始まった吉良の自己紹介に、重清は疑問符を浮かべる。

「仕事は”カメユーチェーン店”の会社員で、毎日遅くとも8時までには帰宅する」

美晴も同じように疑問符を浮かべていたが、なぜ今ここで彼の淡々とした自己紹介が始まるのかと、逆に恐怖を煽られる心地になり鳥肌が立った。

「タバコは吸わない。酒は嗜む程度。夜11時には床につき、必ず8時間は睡眠をとるようにしている…………寝る前にあたたかいミルクを飲み、20分ほどストレッチをして体をほぐしてから床につくとほとんど朝まで熟睡さ」

見た目は普通の会社員で、その自己紹介の内容も至って普通。寧ろとても健康で健全な暮らしをしている。なのに、そこに落ちている”女性の手”を見れば分かるのだ。

「赤ん坊のように疲労やストレスを残さずに朝、目を覚ませるんだ…………健康診断でも”異常なし”と言われたよ」

この男、どう考えても”異常”だ。

「な、なにを話してるんだと、お前…………」

堪らず重清が声を上げると吉良はフウ、と短く息を吐く。

「私は常に”心の平穩”を願って生きてる人間だという事を説明しているのだよ。”勝ち負け”にこだわったり、頭を抱えるような”トラブル”とか、夜も眠れないといった”敵”をつくらない…………というのが、私の社会に対する姿勢であり、それが自分の”幸福”だということを知っている」

そして彼は背後に——重清のハーヴェストが見える、その理由と正体を、ついに現した。

「重ちーくんに美晴さん……君達は私の睡眠を妨げる”トラブル”であり”敵”なのだよ。誰かに喋られる前に、1人ずつ、確実に始末させてもらおう」

ピンク色をした、筋肉質でまるでボクサーを連想させるその出で立ち。猫のような耳と目を持つ彼の”スタンド”——。

”キラークイーン”と、私はこいつを名付けて呼んでいる」

獲物を狩るような鋭いその目つきに、2人は一瞬怯んだ。

「う……”動くな”と警告したはずだ!!」

最初に動いたのは重清だった。彼はハーヴェストを大量に出現させると吉良とキラークイーンに群がらせる。美晴は群体型のスタンドを見るのは初めてで、その数の多さに度肝を抜かれ息を呑んだ。

「しばッ！」

キラークイーンはボクサーのように構え素早いラツシュでハーヴェストを1体ずつ潰すが、本体である重清の体に傷が付く事はなく、圧倒的な物量で彼らを取り囲むとあつという間にその体にびっしりと張り付く。

（あれが群体型スタンド……形兆さんのスタンドもそうだったと聞くけど、2、3体潰されてもダメージが本体に入らない！）

これならば吉良に勝てるかもしれない。ハーヴェスト達は吉良の首元に針のように腕を差し込み、すぐにでも動脈を切断出来る位置にいた。

「それ以上動くと言の……なんだっけ、頸動脈をブチ切ると!!おらのハーヴェストは無敵なんだどッ!!」

確かにこの数、そしてその応用性。矢安宮重清の”ハーヴェスト”は間違いなく今まで出会ったどのスタンドよりも強い。仗助達が”紹介したい”と言うのも頷ける。

「お前のそのスタンド！パワーはあるが遠くまで行けないタイプのスタンドと見たど！射程距離は1〜2メートルぐらいが限度だどッ！死にたいのなら試しに動いてみるがいいど！」

美晴の見立てでもキラークイーンは恐らく近接パワー型と予想していた。重清、少しバカっぽいかも思っていたが、洞察力もある。ハーヴェストを使いこなすスタンド使いとしては十分だと思われる。「なるほど……個人によっていろんなタイプの能力があるという事か?」スタンド”……ふーん、”スタンド”ねエ……」

しかし吉良はここまでされても冷静さを保っていた。彼は”スタンド”という言葉を初めて聞いたらしく、反芻するように繰り返してからキラークイーンの拳をチラつかせる。

「ところで私のキラークイーンにも、ちよつとした特殊な能力があつてねエ……」

その拳からキラリと何かが反射して光り、目敏くそれを察知した重清がすかさずハーヴェストを飛ばす。

「何か持つてるな！取り上げろ、ハーヴェストツ！」

しかしそのハーヴェストが目の前まで持ってきた物に、重清と美晴は目を丸く見張った。

「た、ただの1000円玉……?」

「こ、こんな物でなにをする気だど……?」

てつきり何か危険な物を仕込んでいたのかと思っていたが、本当にどこにでもある1000円硬貨だけがハーヴェストの手にあり、疑問符が浮かぶ。

「いやね……私のキラークイーンの特特殊能力を教えようかと思つてね。どうせ君達は既に始末されてしまつているのだからね」

吉良はそんな2人を見て、勝利を確信したように薄らと顔に笑みを張り付けていた。

スタンドは単純な攻撃手段ではなく、特殊な能力を持つている。東方仗助のクレイジー・ダイヤモンドは”壊れた物や傷を治す”能力。虹村億泰のザ・ハンドは”右手で触れた物をなんでも削り取る”能力。そういった本体の性格や性質に合わせた特殊能力がある。

「キラークイーンの特特殊能力。それは、”触れた物を何でも爆弾に変える”能力……そう、たとえ1000円玉だろうと、何であろうと……」

だから吉良吉影のキラークイーンも例外ではない。

その言葉にハッと息を呑んで”キラークイーンに触れていた”、今ハーヴェストの1体が持つている100円硬貨を視界に入れる。

「重ちーくん危ないッ!!」

「100円玉を捨てろ、ハーヴェストッ!!」

美晴と重清の声が綺麗に重なり、美晴はガーディアンの守護を掛けようと重清に手を伸ばす。

まるでその動作がスローモーションのように流れ、そこで美晴の視界と音が消えてしまった。

次に意識を取り戻した時、ただひたすらに広がっていたのは”暗闇”だった。

「——ッい、う……ッ!」

慌てて数度瞬きするも視界に光は届かず、それどころか目の奥底から激痛が走り目を手で覆う。横たえている体は痛みで動かす事も叶わず、耳には遠くの方からの喧騒しか聞こえない。

『マモルゾッ』

そんな時、すぐ近くで声が聞こえた。

『マモルゾッ!』

『マモルゾッ!』

『ミハル、マモルゾッ!』

「ひゃ……っ!?!」

それは複数体いるようで、何度か体を這いずり回られて思わず声が小さく漏れ出る。

「あ、……ハーヴェスト……達、なの……?」

どこか重清の声にも似ている無数の声。美晴は見えない視界の中でも直感で彼らがハーヴェスト達である事を悟った。

「重ちー、くん……どこ……?」

重清の声も、吉良の声も聞こえない。

ハーヴェスト達がいるという事は重清は生きているという事だ。

では吉良はどうなったのか？

あの時なにかが起こった。ハーヴェスト達が吉良の頸動脈を切つて殺したのだろうか。では己の満身創痍とでも言わんばかりのこの状況は？

「マモルゾ」って……私の事を今、ハーヴェスト達は守ってくれているのよね……？それって今……もしかして私、ハーヴェスト達に体を覆われて……”見えなくされてる”って事？」

恐らくハーヴェスト達は木の葉でも集めて隠れ蓑のように美晴の身を隠しているのだろう。このスタンド、至れり尽くせりだ。なのになぜ今危機に陥っているのか？

（分からない……分からないわ。でも、この状況がどうしようもなく悪いって事は……それだけは分かるわ……）

目が見えないのはハーヴェスト達に覆われているからじゃあない。文字通り”見えない”から”見えない”のだろう。

最悪だ。きつと体もボロ雑巾みたいになっているに違いない。今までこんな怪我は負った事がないし、普通に生きていたら滅多に負わないものだろう。

（重ちーくん……仗助くん達を呼びに行っているんだわ。そうしたら……目も見えるようになるし、傷も治る……少しの辛抱よ、頑張るのよ……）

このまま息を潜めていれば、吉良に見つかるとはまずないと見ていだろう。今いる場所は分からないが、喧騒の距離からして先程の校門前から少し離れた辺りにいると思われる。寧ろ擬態しているのならば場所はどこだっていい。今は吉良に見つかからない事、それだけが大事な事だった。

なのに、運命はいつだって”吉良吉影”の味方なのだ。

「……！！」

脚にあったハーヴェストの感触が突如消えた。それに連鎖するように脚から腰、背中、胸、それらに張り付いていたハーヴェスト達の感触がどんどん消えていく。

「まって……ひとりじゃないで……！」

美晴は痛む腕でハーヴェスト達をかき集めるように腕がくが、何も掴む事が出来ないままそれらの気配は完全に消えてしまった。

「重ちゃん……」

スタンドの死は本体の死。承太郎からそう教わった事を思い出して血の気が引く心地になる。

ついさっきまで矢安宮重清は生きていた。一緒に体育準備室に忍び込んで、お茶を淹れてくれた。そして、吉良吉影と対峙した。たつたそれだけの関係でも、”彼がそこにいた”という事実を空気で、肌で感じていた。

「吉良吉影……」

重清を殺したのは間違いなく吉良吉影だ。

吉良の犯行はどこか手慣れているようにも感じ、美晴の頭にはある仮説が浮かび上がっていた。

美晴は震える手でスカートのポケットから携帯電話を取り出すと、ボタンの感触を頼りに操作して電話を掛ける。

「みいつけた……」

しかしそこで聞き覚えのある低い声にビクリと体が揺れた。

「来宮美晴さん。ここにいたのか……あーあー、満身創痍で可哀相に……さっきの爆発の衝撃で眼球も潰れてしまったのかな？」

私が見えるかい？と、その声は主が屈んだらしくすぐそばで降りかかり、次いで主は美晴の手から携帯電話を取り上げる。

「どこに掛けているのかな？……ふーむ、” 岸边露伴”……？」

呼び出しの一步手前の画面に浮かぶ名前を不思議そうに見るが、彼の視界の隅に蠢く指が見えてそちらに視線を向けた。

「ああ、すまないね。今返すからね」

彼は美晴が伸ばす手の少し先に携帯電話を置くと立ち上がって距離を取る。

「君の伸ばしている右手の、ほんの数センチ先に置いておいたからね。人の携帯を覗くなんて不躰な事をしてすまない」

美晴が震える手を携帯電話に伸ばすのを見て、彼はほくそ笑む。だって、己のスタンドは既にそれに”触っている”のだから――。



「尤も、不躰なのは人と話しているのに携帯電話をいじくっている君の方がね」

影のように現れる”キラークイーン”。そう、その声の主は”吉良吉影”。

”触れた物をなんでも爆弾に変える”——それは携帯電話だって同じ事。

目の前にいる来宮美晴は前からずっと目星を付けていた女の子だ。その”手”を手中に出来たらどんなに幸せな事だろうか。吉良は”彼女”とどう過ごすか、今から想像してしまうほど楽しみだった。

美晴の手が携帯電話に触れた瞬間、いつものようにドンツ！と大きな爆発が起きた。彼女の”手”だけを残すように爆破範囲を設定しておいたから、この爆煙が晴れた頃には携帯電話と手だけが残っているはずなのだ。

今までずっとそうだった。

だが、その”今まで”とは違う事が今、起こってしまった。

「な、……なにっ!?!」

爆煙が晴れた、そこにあつたのは携帯電話と手だけではなかったのだ。

「……ごめんなさいね。私の能力って……」そういう能力”なのよ……!」

来宮美晴。彼女も”スタンド使い”である事を、吉良吉影は知らなかった。犯行に失敗した事をすぐに悟ると、吉良は携帯電話を見る。その手は通話ボタンを押していて、”岸边露伴”を呼び出すコール音が微かに流れているのが聞こえていた。

『もしもし?美晴どうした、こんな真つ昼間に』

「露伴……先生……ッ!」

露伴が電話に出るのが予想以上に早く、吉良は慌てて携帯電話を蹴って美晴の手から離すとそれを踏み付けて破壊する。しかしその破壊音を聞いて美晴は絶望するでもなく、目と体の痛みを堪えながらも不敵に笑ってみせた。

「露伴先生……すぐに来るわよ。仗助くん達も探してる……みんなあ

あなたの事探してるわ。あなたの正体を知る私の事を……あなたは殺せないのよ……」

美晴の鉄壁のスタンドがようやく吉良の前に姿を現す。その姿は本体と同じく鎧の所々に損傷があったが、能力自体は健在で本体を爆破から守ったのだ。そしてその守護は今も続いている。

「杉本家の殺人事件……あなたが」犯人「よね？この町に行方不明者が多いのも……あなたがこうやって殺した人間を爆破処理していたから……そうでしょう？」

杉本家の時は恐らくまだスタンドが発現していなかったのだろう。だがある時キラークイーンがなんらかの拍子に発現した。きっとその時から足がつかない犯行が可能になったのだ。殺人鬼にはお誂え向きのスタンド能力だが、その能力も美晴のスタンドの前では無力である。

「……そうだね。私のキラークイーンを見た者なら誰でも想像のつく事だ、そんなのは」

しかし吉良はジャケットを脱ぐとそんな美晴を抱え上げ、彼女を覆うようにジャケットをその身に被せる。

「美晴さん。少しだけ肝が冷えたよ。けど……異例だけど」君を殺せなくてもいい”って事に見ようと思っただ」

「……ッ？」

コツコツとアスファルトに響く足音と共に己の身が揺れるように感じる。美晴は疑問符を浮かべたが、すぐにどこかに連れて行かれようとしている事に気付くと抵抗しようとした。

「君は今日を潰されて何も見えないし、満身創痍で体をまともに動かす事も叶わない。だからね、”君は君のまま愛でる”事にしようかな、と思っただよ」

だが吉良の言葉通り、体は全く言う事を聞いてくれなかった。

「可哀相に……あのまま余計な能力なんて使わずに死んでいけば、痛みなんて感じなくて済んだのに。私は痛いのが嫌なんだ。君の痛みを想像すると……死んだ方がマシ、って思うよ」

吉良はタクシーを呼び止めると乗り込み、これから言う道順通りに

進むように運転手に指示する。この運転手も用が済んだらタクシーごと爆破するつもりなのだろう。美晴はそう思うと手慣れすぎていてゾツとする心地になった。

「大丈夫だよ……手当てもするし、ご飯も食べさせてあげよう。着替えも用意してあげるよ。君の”手”の魅力は……」あたたかい”というところにもあるんだ。ほら、死ぬとどうしても冷たくなるだろう？それでは”君”の魅力も半減してしまう」

美晴の手をジャケットの隙間から覗かせ、スリスリと頬擦りしていると幸せな気分になる。あたたかくて柔らかい、その感触はタクシー内であるにも関わらず己を昂らせる。

「これからは……私とずっと一緒にいようね。大丈夫、今は逃げ出したいかもしれないが……すぐに”今のままでいい”と思うようになるよ。目が見えない君の世話を……ずっと私がしてあげるのだからね」

囁くような優しい声音。優しく背を規則的なリズムで叩かれる感触。なのに美晴は恐怖で浅く呼吸を繰り返しながらも平静を保とうとしていた。そうでもしなければ、この暗闇の中、今から始まるうとしているその”生活”を想像して体が震えてしまうから。

そのタクシーと入れ違うように露伴の車が校門前に到着すると、彼は車を降りて躊躇いもなくその門を潜った。

「美晴！どこにいるんだ!」

美晴からの着信があった画面のままの携帯電話を握り締めながら、露伴は学校の敷地内を駆け回る。体育祭の時にここを訪れたおかげで、どこに何があるのかは記憶出来ている。しかしどこを探しても美晴の姿はなく、体から血の気が引くのと同時に呼吸も浅くなる。

「えっ、露伴!」

「なんで露伴先生がここにいんだよオ!」

そこに聞き慣れた声が掛かり振り向くと、そこにあったのはやはり仗助と億泰の姿で彼らに駆け寄る。

「美晴は!?なぜ一緒にあないんだ!」

しかし露伴は彼らの質問に答える事はなく、いつも彼らと一緒にい

るその姿が見えなくてサツと青ざめながら仗助の肩を揺さぶった。

「み、美晴ちゃん!？」

「そうだよ!!なぜ一緒じゃあないんだ!!」

露伴のその言葉と様子に、仗助と億泰は顔を見合わせて伝染するように血の気が引く心地になる。

「美晴のヤツ：ツ、まさか重ちーと一緒だったんじゃあねえか!？」

教師から逃げる時にはぐれた2人。重清は中等部の教室に戻ったのだと思っただし、美晴は由花子と康一のところに行ったのだと2人は思っていた。

だが実際は重清はなんらかの事件に巻き込まれていて、恐らく既に手遅れな状態になってしまっている。そこに美晴も一緒にいたとしたら――。

仗助はハーヴェストの1体が命からがら持ってきたジャケットのボタンを見る。これは重清からのなんらかのメッセージなのだ。

「さ……探すぞ。美晴を探すぞ!もしかしたら学校から出ているのかもしれないッ!」

美晴のスタンド、ガーディアンはちよつとやさつとじゃあやられるような代物ではない。

露伴は学校の外を、仗助達はまた校内を改めて探す事にした。

しかし見つかる事のない搜索は、ただ時間を喰い潰すだけだった。

## 来宮美晴は諦めない

「間違いない……この子、重清くんは死んでるわ」

オーソンの前に集まったスタンド使い達。そしてその中心にいる杉本鈴美。彼らは引かれ合うようにここに集まっていた。

鈴美は矢安宮重清の写真を悲しそうに見つめていた。

重清の魂は鈴美のいる小道の上空を飛んで行ったのだ。鈴美を殺した犯人に殺された魂は全員、あの場所を通っていく。

「美晴は!?美晴はどうなんだ!?会った事あるんだから一発で分かるよなア!?!」

「お、落ち着いて、露伴ちゃん……!」

露伴が掴みかかる勢いで迫ってくるのを鈴美は宥めるように手を胸の前に出しながら一歩後ずさる。

「美晴ちゃんはいっくに殺されてないわ!それだけは分かるの!この町のどこかにいるわ……!」

犯人は仗助と億泰が2人とはぐれてしまったほんの5分足らずのうちに重清を殺して死体を隠し、更に美晴を連れ去った。重清と美晴の教科書や筆記用具はそのまま学校に残され、重清の両親は搜索願いを警察に届けている。

美晴の方は露伴が保健室の教師や担任にスタンドで彼女は早退した事を書き込み、なんとか事なきを得ている状態だ。敵がスタンド使いだと確定した今、重清の両親には悪いが警察はアテにならない。

「みんなは重ちーの事、あんまり知らねーだろーがよオ……重ちーのハーヴェストに勝てる奴ってのは考えらんねーぜ。美晴ちゃんも……殺せねーから犯人が連れ去ったとしか、」

そこで鈍い音と共に仗助の言葉が不意に途切れた。誰もが彼に視線を向けると、そこには切れた口の端から血を滴らせる仗助と、拳を握ったままの露伴がいて息を呑む。

「どうして君がいながらこんな事になるんだ……ッ!!美晴を守るんじやあなかつたのかッ!?!ええッ!?!」

「落ち着いてください、露伴先生ッ……！」

今にも仗助に掴みかからんとする露伴を康一と承太郎がその身を押しえて阻止する。その間も露伴は歯を食いしばって込み上げる物を必死で抑えていた。

「こんなところで喧嘩をおつ始めても何も解決しねエ……敵は町に溶け込んでいる。最初から正体を知っていたらこんな状況にはなつてねえはずだ」

美晴のスタンド、ガーディアンは承太郎お墨付きの鉄壁の防御力を誇る。簡単にしてやられるような代物じゃあない。重清の事も真つ向からならちゃんと守れたはずだ。

つまりこの事態、完全なるイレギュラーと見ていいだろう。

「そんな事ぐらい分かっている……！分かってるさ……！けど美晴は僕の……！」

露伴が目元を片手で覆うのを、誰もが直視出来なかった。

岸边露伴は気難しい男だ。簡単に懐柔される事のない、我が道をひた走るような男なのだ。その露伴が漫画や自分と同じくらい大切に想う人物、それが来宮美晴だった。

「どうしてまた美晴なんだ……！」

以前も死にかけて、それでもまだ足りないというのか。

康一はそんな露伴の背を撫で、承太郎は帽子のツバを摘んで目を伏せる。

億泰は己の右手を見て、目を伏せながら右手の甲を額に当てがう。

”この力強い右手が守ってくれるって信じてるわ”

ジョセフ護衛作戦の時、美晴が己の右手を優しく包みながらそう微笑んだのを思い出す。隣では彼の父親がそつと何を言うでもなく寄り添っていた。

「……………」

仗助はようやく口の端から流れ続ける血を指で拭い、露伴を見る。

己は彼に殴られて当然の事をしてしまった。美晴を守ると、ついでに彼の前で宣言したばかりにも関わらず、美晴は殺人鬼に攫われてしまった。

たった5分。そもそもはぐれたりしなければ、こんな事にはならなかったはずなのに。

「……仗助、ボタンを拾ったらしいな。SPW財団で調査してみる。預からしてもらえないか」

重々しい沈黙を破ったのは承太郎の声で、彼は仗助に手を伸ばす。

「重ちーからの”遺言”……犯人の服から引きちぎってきたものだとしたら、服のブランドやメーカーは調べられるかもしれん」

地道な作業になるだろうが、購入者を洗いざらいにすれば犯人に辿り着けるかもしれない。仗助は承太郎にハーヴェストが持ってきたボタンを渡し、その過程で露伴とも距離が自然と近くなるとチラと視線を向ける。

「……すみません。美晴ちゃん……俺……」

言葉が上手く出てこなかったが、なんとか続く言葉を見つけようと口を僅かに動かす。

また殴られるかもしれない。だが、それだけの事をしてしまった。何度殴られたって構わないし文句を言うつもりもない。

しかしそんな思いとは裏腹に、露伴は仗助の学ランを縫るようにギョツと握り締めた。

「謝るくらいなら探すの……協力、しろよな。あいつは……お前が助けに来るのを待つてるはずだろ……!」

握り締める拳も、声も震わせながら露伴は仗助を見る。その目は相変わらず反抗的なものだったが、真っ直ぐに彼を捉えて離さなかった。その目を見て、仗助は本当に彼が美晴を大切に想っている事を改めて悟った。

「……あんたの事も、美晴ちゃんは待つてると思うんすけど」

「うるさい……!言われなくなつて当然だ。美晴は僕がいないと泣くんだからなッ」

いつぞやの入院していた頃の出来事を思い出しながら露伴はフィと顔を逸らす。

必ず犯人を突き止めて美晴を助ける。東方仗助と岸边露伴はやはり、来宮美晴の事だけは意見が合う。それは気に障るようでそうでな

いような、曖昧で複雑な気持ちではあったが、今この状況で闇雲に動いても仕方がない。

美晴を連れ去った犯人を見つける事は、重清を殺しこの町で大量の殺人を行なってきた殺人鬼を追い詰める事にも繋がる。

杜王町のスタンド使い達はそれぞれの思いを胸に、オーソン前を後にして行った。

どれくらい時間が経っただろうか。

来宮美晴は杜王町郊外にある吉良吉影の自宅で目を覚ました。

体の傷には包帯が巻かれ、仮とは言え吉良の替えのシャツに身を包んだ美晴は布団の上に横たわっていた。

「……………」

嗅ぎ慣れない吉良家の匂い。横たわる布団のすぐ近くで香るのは畳の匂い。スンとシャツの袖の匂いを嗅ぐと、洗剤の匂いがする。吉良のシャツは美晴には当然大きめで、奇しくも傷を圧迫しない、今の彼女には快適なものだった。

目は相変わらず見えず、目元に巻かれている包帯をペタペタ触ってみるが光は届いていない。

「…………ガーディアン、いる？」

美晴が掠れた声で呼ぶとすぐ近くにその気配が現れ、それだけでも今は安堵出来た。彼は何も言わないが、いつだってそばにいてくれる。

「本体が傷を負うと…………スタンドも同じところに傷が付く。あなたも…………今日が見えないのかしら」

スタンドの視界を共有出来たらと思ったが、スタンドは本体の生命エネルギーそのものだ。本体が奪われた五感はスタンドでも補えないだろう。

「吉良吉影…………夜8時にはいつも帰宅するって言っていたわ。私が連れ去られたのはお昼休み…………あいつの気配がないって事は、少なくとも



も夜8時前って事よ」

吉良吉影。規則正しく健康的な、静かな暮らしをしている殺人鬼。鈴美の話を聞いた時はどんなイカれた男かと思ったが、それどころかゾツとするほど普通の男だった。

美晴が痛む体を起こすとそつと背中中に手が添えられる。

「ガーディアン……あなたは守るスタンド。目が見えなくても……私の事を守ってくれるのね」

まるでもう1人、そこにいるかのようだ。けれどもそれは確実に吉良ではない。なぜなら波長が己と全く同じだからだ。

スタンドとは、己の本質そのものなのだ。

「私を守るスタンド……今、あなただけが信用出来る存在だわ。……吉良に見つからないように逃げるには、どうしたらいいかしら」

寡黙な己のスタンドは言葉を話してはくれない。今この瞬間でさえそうだ。それでも、その存在の安心感は大きい。

「……ふふ。いいのよ、お喋りしてくれなくても。私が勝手にお喋りするわ。……私が潰されたのは目だけ。耳は今、遠くの波の音が聞こえるくらいにはなってるわ。匂いも……畳のいい匂いがする。この布団は誰かが使ってたものじゃあなかった。押入れの匂いがしたわ……長くしまわれていた物ね」

布団や畳を撫でながら、ガーディアンに話し掛けるように今の状況を整理し始める。

ここが吉良の自宅である事は間違いない。杜王町の別荘地帯は海沿いに位置する。波の音はその証明だ。

この家のほとんどは恐らく、畳が敷いてある和室だ。先程から畳の匂いに囲まれている。掃除も行き届いていて埃っぽい空気ではない。そして吉良はこの家にほとんど客人を招かない。彼の年齢からして実家であるなら年老いた父や母が住んでいてもおかしくないが、人の気配がない事から彼はここに1人で暮らしている。布団は押入れの匂いが染みついていて、客人用か亡くなった両親の物だったかのどちらかだ。

「風は感じないから……窓は開いてない。この家は……平家かしら。」

これは完全に勘だけど……」

首を左右に振り、四つん這いになると布団の上を歩き始める。

「1、2、3……」

己の歩幅でカウントしながら歩き、布団の大きさを調べる。その端まで来ると次は襖を目指して再び歩く。

「1、2、3、4……ひやつ」

しかし歩いていく途中で何かに脇腹を押しさえられ思わず声が上がった。

「びつくりした……ガーディアン、あなたなの？もしかしてこの先は……」

前に手を出すとペタリと壁に手が付く。さわさわ撫でると砂壁のようでザラザラしていた。

「そうね……あなただってそういうスタンドよね。」守る……危険から守る……ありがとうね」

今己の身を押しえているガーディアンを振り向き、そうしてから砂壁を再びペタペタ触る。

「だいぶ今歩いたわ……この部屋広いわね。布団から起き上がった、そのままの方向に進むと……壁。襖はどこかしら……」

そのまま壁伝いに膝立ちで歩いていく。角に差し掛かるとすかさず手を横にかざし、恐る恐る指を伸ばした。

「あ……障子？」

薄い紙のような感触。指を上に出わせると木で出来た格子に当たる。

「やだ……これ破つたりしたら動いたのがバレてしまうわ。ガーディアン、障子を守る事は出来るかしら？」

少なくとも通常なら視界にさえ入っていれば守護を掛ける事が出来る。しかし今、目が潰れている状態で対象を見る事が出来ない。そんな状態でも能力を使う事は可能だろうか？

「……！！」

そんな事を考えているうちに触れている障子がふわりと一瞬だけあたたかくなり、また恐る恐る指先に力を入れていく。

「……すごいわ。ちゃんと物を認識出来ていれば守護を掛けられるのね。触ってるのも条件かしら……初めて知った」

何度叩いても破れる感触のない障子に感心しながらまたそれを伝って進む。

ガーディアンには美晴自身も知らない力がある。それは承太郎からも聞いていた事で、それがどんなものなのか一番ワクワクしているのは他でもない美晴自身だった。きっとこれも新しい知識として役に立つだろう。

障子と障子の間にある隙間に指を入れて押し開くと、今度は床が畳から板張りに変わった。

「縁側ね。雨戸……ひゃあっ」

手を前に突き出しながらまた立て膝で歩いていたが、数歩のところでもまたガーディアンに押さえられスルスルと身を引かれる。

「もしかして雨戸……どころか、ガラス戸も開いてた。今日は風のない、気持ちいい天気なんだわ」

見えるわけでもないのに、自然と上を向いて空に顔を向けていた。

「空……見たいな」

今、空は何色だろうか。美晴は見える事のない空から顔を下げると、縁側の床に手を付いて終点を辿る。

「……!!」

しかしそこで車が敷地内に入ってくる音が聞こえてあたふたと手を右往左往させた。

「おや？美晴さん。どうして縁側にいるのかな？」

車の扉が開く音と共に、あの低い声が聞こえてビクリと体が震える。

「き、吉良吉影……っ」

「ああそうか、夜風に当たりたかったんだね」

吉良は美晴に歩み寄るとその手を取り、スリと頬擦りした。

「美晴さん……また怪我でもしたら大変だ。布団に横になつていようね」

彼は美晴の身を抱え上げ、布団に寝かせる。そうしてからまた美晴

の手を握って頬擦りし、手のひらに舌を這わせた。

「ひ……っ！」

そのザラリとした生温かい感触。何が己の手に触れたのかすぐに分かり息を呑むと同時に鳥肌が立つ。

「さて……まずは着替えをしようか。体を拭いて、包帯も取り替えてあげよう。今お湯を汲んでくるよ」

吉良の足音と鼻歌がだんだん遠くなっていく。

彼がいると分かった瞬間、体が言う事を聞かなくなった。美晴は知らずのうちに吉良を恐怖の対象として見て、意識しなくても恐怖を感じる体になってしまっていた。

(ガーディアンの事も無意識に引つ込めてしまったわ……私、ここから逃げられるのかしら)

程なくして吉良が鼻歌交じりにこの部屋に戻ってきて襖が開く。どうやら襖は障子のちようど反対側にあるらしい。

とにかく吉良がこの家にいる間は大人しくしていなければ。そんな事を考えていると徐にシャツのボタンが外されていき思わずその手を掴む。

「な、なにを……！」

「ん……？ 脱がさないと体を拭けないだろう？ 包帯も着替えも用意してある。心配いらないよ」

「そういう問題じゃあないわ！」

声が掛かった方向に睨むように顔を向ける。この男、殺人ばかりしてきたから異性の扱いが分かっていないのだろうか。そもそも断りもなく着ているものを脱がすなんて。

「ああ……そういえば君、彼氏がいるんだったかな。」 仗助 …… 彼以外の男にこうされたくない、その気持ちは分かる」

吉良は彼女の押さえる手から片手を引き抜くと小さなその手を撫でる。己の手を握ってくれる——今まではなかった事に”生きている女の子の手もいいかも”と少しだけ考えてしまっていた。

「私は君の”手” 以外興味ないんだ、いや本当に。胸だろうと局部だろうとね。寧ろ君がこうして私の手を握っている……そちらの方が

興奮してしまう」

「声音ひとつ変えず淡々と言い切ってみせると美晴の口元が引きつり、震えながら手の力が抜けていく。それを少し名残惜しく感じながらもボタンを外していき、シャツを脱がせた。

「自分で拭くから……あなたは触らないで。見えなくても自分の体の事だから分かるわ。あなたが触っていいのは背中だけよ」

「ショーツだけを纏うその身を起こし、美晴はタオルを絞る音が聞こえる方向へ手を伸ばす。きっとその目が包帯で覆われていなければ、彼女はケダモノを見るような目で吉良を見たに違いない。

「疑い深いなア……そんなんでよく、」 岸辺露伴「なんて姓も生まれも違う男と暮らしていられるねエ」

吉良はおかしそうに喉奥で笑いながら絞ったタオルを彼女に渡し、ハツと息を呑んだのを見てその頬に手を添えて顔をこちらに向けさせたまま固定する。

「彼と私、どう違うんだ？ン？」

声の近さ、顔に掛かる吐息。吉良と美晴は至近距離で見つめ合い、しかし美晴は何事もなかったかのようにそのまま自身の体を受け取ったタオルで拭い始める。

「露伴先生はこんな事しない」

その一言に全てが集約されていた。

岸辺露伴と過ごしてきた4ヶ月間、彼は来宮美晴に対して大切な

同居人”という関係性を崩さなかった。始めこそは能力を使って記憶を読もうと奮闘していたが、”もう訊かない”と言った事に関しては追求してこなかった。彼なりに美晴のプライバシーを守ろうとはしていたし、ぶっきらぼうではあるが雨の日に迎えに来てくれたり調子の悪い日に家事を代わってくれたり、美晴への同居人としての気遣いがあった。

一方の吉良は美晴を”同居人”とすら思っていない。美晴の身はあくまで”好みの手”の付属品であり、彼は私欲のためだけに美晴をこの家に仕方なく招き入れているのだ。だから知らない男に裸体を見られる美晴の気持ちなんてどうでもいい。今まさにそうだ。

「……やはり静かな手」の方がいいな。実に惜しいよ、君の手……とても好きな手なのにね。けど、私の正体を知っている以上、こうせざるを得ない」

吉良は心底面白くなさそうに固定していた彼女の顔を弾くように離す。

彼女の目が潰れてしまっているのは偶然とはいえラッキーだと思っただ。先程縁側に出ていたのはここから逃げたかったからだろうが、ここは町の郊外だ。目が見えない彼女を助ける者は別荘地帯とはいえオフシーズンなため誰もいない。それは彼女とて分かっている事だろう。

普段なら絶対にこんな事はしないが、彼女を殺せない以上ここに監禁しておく他あるまい。

「そんな事より、露伴先生や仗助くんの事を知ってるのね。調べたのかしら?」

美晴は体を拭き、彼に背を向けると掛け布団を羽織る。

「スタンド使い」……重ちーくんが教えてくれた言葉だ。彼らもそうなのかなと思っただ。まずは君の周りから洗ってみる事にしたんだ。仗助、億泰、露伴……彼らも重ちーくんや君と同じく、スタンド使いなんだろう?」

吉良は彼女の耳元で囁き、袋をその手に握らせてすぐに離れる。

「スタンドはスタンド使いにしか見えないものなのよ。知りたかったらその、キラークイーン……だったかしら?それを彼らに見せてみたら?」

「ほう……なかなか酷な事を言うね」

吉良は肩を竦め、美晴は袋に入っていたものを出してその感触と形をなぞってから彼に背を向けたままゴソゴソと身動きした。

「背中、拭いてくれる?」

程なくしてスリと布団を外すと吉良のいる背後にタオルを差し出す。すぐに聞こえた溜息に美晴は顔を下に向け、グツと歯を食いしばった。

今はこの生活に順応しつつ強気に出て、彼に対する恐怖を克服する

しかない。

露伴達ならすぐに吉良を追い詰めるはずだ。美晴はこの家の外に出られない今、彼らがそうしてくれる事を信じて待つ事しか出来なかったが、この生活を終わらせて1日でも早く元の場所に帰る事を決して諦めないと心に誓っていた。

## 2人を繋ぐ1本の線

お父さんとお母さんから聞いた話だ。

赤ん坊の頃、寝返り癖がついた頃の話。

ベビーベッドではなく寝室にある大きなベッドでお父さんと昼寝をしていた時、私はころころと寝返りを繰り返してベッドの上を転がったらしい。

私の身はベッドの端まで転がり、今にも落ちそうな時、お母さんが寝室に偶然入ってきて「危ない！」と駆け寄ったそう。

でも私の身は何か押し戻されるかのように布団の上に戻った。

お母さんは当然、さっきの声で飛び起きたお父さんも驚いた。

それが私のスタンド、”ガーディアン”の初仕事だった。

吉良邸に美晴が来てから3日が経った。

朝6時。美晴はつい癖でいつもこの時間に目が覚めるが、吉良はまだ眠っている時間だ。吉良は美晴の身をがっしりと後ろから抱き、彼女の手を握っている。最悪の寝覚めだ。

ゴソゴソと身動きしてみるが、熟睡しているらしくちつとも抱き締める力は緩まらない。

（嫌いだわ……私の手を握る手も、抱き締める力加減も、耳元で聞こえる寝息も……全部嫌いだわ、吉良吉影）

仗助や露伴にもされた事がないのに。

これから1時間後、朝7時に吉良は目覚めるだろう。まず朝一番に美晴の手に頬擦りして「おはよう」と言う。手作りの朝食を食べさせてもらい（美味しいのが腹立つ）、美晴の手に「行ってきます」のキスをする。全てが鳥肌が立つくらい嫌いだ。

吉良吉影の生活ルーティンが固定されているおかげで、彼の行動で今が何時なのかを大体把握出来る。それだけが今彼の存在がある事で助かっている唯一の事柄だった。



(眠いわ……ここに来てからあまりよく眠れてない。何度も目が覚めるわ)

美晴は改めて自分がストレスにめっぽう弱い事を悟る。吉良がない時がよく眠れる時間帯なのだが、吉良がいない時にしか行動出来ないため睡眠で潰すのは勿体無い。だから夜に寝ようとは思うのだが、吉良が近くにいるせいで寝付きがあまり良くない。吉良にとっては平穏な暮らしでも、美晴にとってはストレスの塊だった。

「では行つてきます、美晴さん」

ちゅ、とリップ音が静かな部屋に響き、吉良は今日も出勤していた。美晴はキスされた手を雑に掛け布団で拭い、今日も行動を開始する。

「トイレの場所は教えてもらったのよね……部屋も大体周れたけど、把握出来てないところもあるわ……」

障子を開け、赤ん坊のように四つん這いで歩く。縁側の廊下を突き当たりまで進むと、ドアノブに手を伸ばしてその扉を開けた。吉良がトイレだけは教えたのは、単純に生理現象だからである。

美晴は中に入ると洋式便器の蓋を開け、カバーが敷いてある便座に乗って先日見つけた窓を開ける。しかし思ったより窓枠は狭く、ここから外へは出られそうになかった。

「だめね……というか出たところでどうしようもないんだけど」

仕方なく窓を閉め、気を付けながら便座から降りてそこに座る。

外に出たところで、美晴は別荘地帯の地理を知らない。逃げる算段など立てられないし、吉良の家にいた方が安全なのは確かだ。——とても皮肉な事ではあったが。

「電話があれば露伴先生に助けてもらえるんだけど……確か固定電話の番号をカーナビに入れると住所が分かるって話、聞いた事あるわ」

トイレを済ませ、そこから出ると独りごちながらまた歩き回るが、今のところ固定電話を見つけられた事はない。もしかしたら柵の上に置かれているのかもしれないが、目が見えない状態で立ち上がるのはガーディアン守護があるとはいえ危ないし、あまり物色すると吉

良に何を言われるか分からない。

「……露伴先生達、大丈夫かな」

ぽつりと零れた言葉。

露伴達ならすぐに見つけてくれると思ったが、正直なところ重清と一緒に吉良と対面するまでの搜索は難航していた。正体を知っている重清が殺され己もこうして軟禁されているので、搜索状況はあまり変わっていないというのが現実だろう。それでも彼らを待ち続けるが、現時点で既に3日が経過している。

もしかしたらもう、諦められているのかも――。

「そんなはず……ないわ……」

そう思いたいが、度重なるストレスが美晴の心を蝕んでいく。

美晴は畳の部屋に寝転がるとあたたかい陽射しを浴びながら、うとうとと微睡んでいった。

私は中学の頃まで静岡に住んでいた。

私の地元にはスタンド使いはいなかったけど、それなりに友達はいたし普通の中学生だった。――怪我をしない事以外は。

「来宮さん大丈夫？」

「うん、全然平気」

その日も私は体育の時間、リレーをしている時に派手に転んだんだけど、かすり傷ひとつしなかった。走り始める前にガーディアンの手を掛けていたから当然だった。

「さすが美晴！今日もツイてるわー」

「ホント怪我とか全然しないよねー」

友達はそう言って笑っていた。だから、私は学校でも上手くやれていると思っていた。

でも、友達と放課後の教室でお喋りしてて、私がたまたまトイレに行っただけでも、その帰りに教室の前を歩いていた時に聞いてしまった。

「美晴ってさー、正直あそこまで怪我しないとかキモくない？」

「わかるー、ありえないよね。なんかあの子ヤバイよ」

「ちよつと怖いよね……」

——分かつていた事だけど、この能力が万人に受け入れられるものかと言えばそういうものじゃあない。1、2回ならまだしも、私はいつもこの能力を使っていたから怪我が付き物な事柄でも絶対に体を傷付けなかった。

かと言つて、怪しまれないように能力を解いて怪我を負うなんて事は、幼い頃から痛みを知らなかった私に出来るはずがなかった。

(でも今はすごく……痛いわ。胸の辺りが、ズキズキ痛いわ……)

受け入れられるはずがない。心の片隅で分かっていた事。

私が”普通”ではない事。皆が知る”痛み”を私は知らない。

だけど私はこの時、初めて”痛み”を感じた。

家に帰ってから私はお父さんとお母さんに継るように泣いた。赤ん坊の時以来の号泣に両親はとても驚いていたけど、2人は何よりもあたたかい体で私を包んでくれた。

「美晴にはいつも素敵な守り神様がいてくれるのよ。大丈夫。あなたは”選ばれた子”なんだから、普通じゃあなくて当たり前なのよ」

「そうだよ。父さん達はそんな”選ばれた美晴”を誇りに思っている」

両親はいつもそうだ。2人はスタンド使いじゃあなかったけど、いつもそうやって私を、ガーディアン存在を肯定してくれていた。そりゃあ、2人だって甘々な教育をしている風じゃあなかったけど、それでもその事だけはいつも肯定してくれた。

私の1番の味方だった。ガーディアンだって、きつと嬉しかったに違いない。

でも私は、そんな両親ではなく自分自身のためだけに能力を使ってしまった。

中学の卒業旅行に行く車の中、私達家族は大規模な交通事故に巻き込まれてしまったのだ。新聞やテレビでも大々的に取り上げられるようなその事故で、周りの生存者達も怪我を負う中、やはり私だけが

無傷で助かった。

両親は即死だった。

葬式の時、親戚間で誰が来宮美晴を引き取るかで結構揉めたりしい。詳しい事は聞かせてもらえなかったけど、両親の遺品を整理している間、誰もあの家に訪れる事がなかった。

私は独りになってしまった。

なんとか渋々了承したらしい親戚がいるM県S市にある”杜王町”に引っ越す運びになったが、その先で私は――、

私は――、

ハッと息を呑みながら意識が目覚めた。

美晴はガバツと勢いよく身を起こすと周囲の気配を探り始める。

「……誰もいないわ」

昼間に寝転んだままの姿勢だったので、吉良もまだ帰ってきていない。吉良は帰ってくるなり美晴を探して、「ただいま」のキスを手に施すのだ。そうしてから美晴を元の布団に寝かせる。

いつもならそうなのだが、縁側まで出てくると夜に鳴くような虫の声が微かに聞こえてきて首を傾げた。

「……おかしいわね。いつもならもう帰ってきてるはずだわ」

吉良は遅くとも夜8時には帰宅してくる。彼の生活ルーティンは規則的で、それを破るのは彼自身が1番嫌う事でもある。

勿論、美晴は吉良を心配する気なんて更々ないが、あの彼が帰宅してこないのはなんとなく不気味に感じた。

仕方なく布団のある部屋に戻ってくるが、ふとピタリと動きを止めると襖の方に顔を向ける。

「電話……私が電話すれば、こここの住所が分かる……」

今なら吉良もないしチャンスだ。しかしもし途中で吉良が帰ってきたら？

「……………」

露伴に電話をした事がバレたらどうなるか。殺されるなんてへまはしないつもりだが、相手は私の事なんてどうでもいい男なのだ。ゾツと鳥肌が立つ心地になるが、今行動を起こさずにいつやるというのか。

それに、ここから電話を掛けるという行為は、吉良を確実に追い詰める事になる。

「電話を……電話を探すのよ。引っ掻き回してでも……探すのよ!」  
美晴は覚悟を決めて襖を開けた。ガーディアンを傍に出しながら、畳のへりやささくれで覚えた家具の配置を頭に思い浮かべる。

「この部屋は吉良の書斎……あるとしたらここよ。あいつはほとんど携帯か子機で会社と連絡を取っていたけど、あいつが頻繁に使う部屋はここのはずだわ……」

美晴は動き回りながら電話をしていた吉良の声を思い出す。彼は親機はあまり使わないタイプだろう。

吉良の家は恐らく縁側の廊下でほとんどの部屋が繋がっている。固定電話は親機を廊下に置く家庭も多いが、この家の親機は廊下にはないだろう。

だとしたらよく使う部屋に置いている可能性が高い。実際露伴も仕事場にFAX付きの親機を置き、子機の方をリビングに置いている。理由は簡単、露伴は原稿を送る際にFAXを使う時もあるし、美晴は家事のほとんどをリビングを始め1階でこなすからだ。しかし実は給仕係の仕事で家の中を右往左往する美晴よりも、仕事場にいる時間が長い露伴の方が自宅の電話に出るのが早い。——これは蛇足的な話だが。

「ここにはなさそうね……ん?」

机の上をあまり物を動かさないように物色していたが、本や電灯の他に変わった形の物がある事に気付いてそれを撫でる。

「……インスタントカメラ……?」

真ん中にあるレンズのような感触にピンと来る物があったが、なぜ机の上にインスタントカメラがあるのだろうか。写真が趣味なのかと思ったが、それならもっと良いカメラを使っても良い気がするもの

だが。

「今気にする事じゃあないわ。それより電話よ」

しばらく手に取っていたがそれを戻すと探索を再開する。机とは対面にあるタンスまで這つてくるとそれをペタペタ触り、支えにするようにゆっくり立ち上がるとすぐに体を支えられる感覚があつて思わず安堵した。

「ガーディアン……あなたきつと、単純に”守る”だけじゃあないわ。あなたは……”危険な事から対象を守る” スタンド……”痛み”だけじゃあない……」

己のスタンドは承太郎が言ったように成長しているのだろうか。今は勘でしか感じる事が出来ないが、吉良邸に来てからのガーディアンの行動は全て”美晴を危険な事から守る”ものだ。進行方向に壁があればぶつかる前に押さえ止めさせるような、そんな”危険を予測した動き”が多くなっているのだ。

「何か変な置物がたくさんあるわね……」

美晴は己のスタンドの助けを借りながら立ち上がるとタンスの上を探り、置物をさわさわと触る。――後にそれは吉良が学生時代に獲得したトロフィーや盾である事が判明するが、今視界を遮られている美晴にはどれもピンと来ない物だった。

「!!」

しかしタンスの隅に指を這わせた時、ツンと”それ”が触れた。”それ”はトロフィーや盾とは違う形状をしていて平べったく、ボタンが数個付いている。そしてその隣には取り外しが出来る縦長の物が付属しているのだ。

「電話 だわ……やっと見つけた!」

パツと表情が明るくなる。ここ最近では形を潜めていた感情が奥底から湧いてくるのを感じる。

やっと助けを呼べる。やっと露伴の声を聞ける。やっとここから出られる。

色々な感情が渦巻く中、美晴は受話器を取るとボタンの感触を頼りに岸边家の番号をゆっくりと確認するようにプッシュしていく。程

なくして呼び出し音が聞こえ、その音にドキドキと心臓が高鳴って緊張で体が熱くなっていく。

早く露伴の声を聞きたい。

早くあの声で「美晴」と、名を呼んでほしい。

『はい、岸边です』

「露伴先生!!」

電話口で聞こえた眠そうな声を押し除けるようにその名を呼んだ。今は一体何時だったのだろうか。けど今はそんな事どうでもいい。

「露伴先生!私…!!」

途端に嗚咽で声が詰まる。ずっと聞きたかった声が、たった一言言葉をついだだけなのにキュウつと己の胸を締め付ける。

『……………美晴…?美晴、君なのかッ!?今どこだッ!!』

電話の向こうでガタツと椅子から立ち上がるような音が聞こえる。それだけ露伴も待ち望んでいたのかと自惚れる程に、美晴はその一挙一動を頭に浮かべて涙が出ないながらも嗚咽を漏らしていた。

「露伴先生ッ…!今、」

しかしそこで不意にグワツと体を勢いよく引かれる感覚があり、受話器は美晴の手から離れてコードの先でユラユラと揺れていた。

その数分前。

露伴はリビングのテーブルに腕を枕代わりに突っ伏した状態で目を覚ました。

美晴の搜索を始めて既に3日目。殺人鬼が彼女を連れ去ったのは確かだが、確定的な証拠や手掛かりは何もなく、搜索は難航していた。せめて名前さえ分かれば、自宅を突き止めて突撃する事も可能なのだが。

「あの服に付いていたボタン……アレの解析はまだ終わらないのか?」

仗助が見つつけ、今は承太郎が預かっているボタン。SPW財団で調査すると言っていたが、こども遅いものなのか。

露伴は突っ伏した状態のまま頭を台所の方へ向ける。美晴が料理

する姿をこうして眺めるのは己の特権だった。だが、それをもう見る事も出来ないのだろうか。

「露伴先生」と、彼女が己の名を呼ぶ事は、もうないのだろうか。

そんな事ばかりが頭を過ってしまふから、こうして何もしない時間が苦手になってしまった。

「……もう日付も変わる時間なのか。どうりで」

窓の外は暗く、静かだ。露伴は身を起こすと軽く伸びをして寝室へ向かおうと立ち上がろうとした。しかし不意にテーブルに置いた電話の子機がけたたましく呼び出し音を鳴らし、そちらに顔を向ける。

「……？誰だ、こんな時間に」

椅子に座り直し、小型のディスプレイを確認すると知らない番号からだったが、なんとなく通話ボタンを押すと受話器に耳を当てる。

「はい、岸边です」

『露伴先生!!』

電話口の声は女の物で、己の声を押し除けるかのように鼓膜に響いた声に思わず眉を顰める。

なんだこの女。こんな非常識な時間に電話を掛けてきて。

しかしその声は妙に聞き覚えがあつて、そしてそれはついこないだまで毎日聞いていたような気がして、寝ぼけた頭でも「もう一度何か言ってくれ」と願わずにはいられなかった。

『露伴先生！私…!!』

詰まるように嗚咽を漏らす声。露伴はハッと息を呑んで目を見張り、思わずガタツと音を立てて椅子から立ち上がる。

「……！美晴……？美晴、君なのかッ!?今どこだッ!!」

間違いない。毎日聞いていたんだから分かつて当然だ。逆に1発でピンと来なかつた自分が情けなさ過ぎる。

来宮美晴だ。この電話の向こうにいるのは来宮美晴だ。

僕の大切な来宮美晴だ!!

『露伴先生ッ……！今、』

しかしその声は不意に途切れ、ガタガタツと受話器が落ちるような音がしたかと思えば声が聞こえなくなった。



「美晴ッ!?おい、美晴ッ!!」

露伴は思わず声を荒げるも受話器からもう声が聞こえる事はなく、電話が切れた事を意味するあの”ツ”という音が聞こえるばかりだった。

「……………くそッ!!美晴……………!!」

子機をテーブルに叩きつけるように置き、項垂れながら目元を押さえる。

彼女は危険を押して己に電話を掛けてきてくれた。そして殺人鬼に見つかって阻止されてしまったのか、電話は故意に切られてしまった。3日前、美晴が携帯から己に掛けてきた時と同じような状況にまた陥って小刻みに震えながら込み上げるものを抑える。

しかし露伴とて諦めるわけにはいかない。美晴は他でもない己に助けを求めてきたのだ。それも2度も。美晴がそこにいるなら、今度こそ助けなければ。

露伴は急いで仕事場に入ると親機の着信履歴を表示させる。そこに書かれた電話番号をメモするとまたすぐに階段を駆け下り、外に出て車のエンジンを掛けながらカーナビに先程メモした電話番号を入力する。

「別荘地帯か……………また遠いところに家を構えたモンだな」

シートベルトを締め、ハンドルを握る。今の時間なら車の通りも少ない。すぐに辿り着ける。

「待ってる美晴……………すぐに助けてやるからな!!」

勢いのまま車を発車させて道をひた走る。全ては己の大切な人のために。今度こそ彼女を見つつけるために。

露伴が家を出発したのとほぼ同時刻。

美晴はガーディアンに導かれるまま押入れの中で息を潜めていた。外では何かの気配が蠢いている。

（ガーディアンが引っ張ってくれなかったら……………”何か”に攻撃を仕掛けられていたわ）

声も足音も聞こえないので、外にいるのが吉良ではない事は確かだ

が、一体何がいるというのだろう。遠距離型のスタンド、と考えるのが妥当だろうが、吉良が誰かと手を組んでいるとは思えない。キラークイーンの射程距離もここまで一人歩き出来るものではないはずだ。(ここに何かいるって事……吉良は知っていたのかしら。でもなぜ私は今攻撃を仕掛けられているの?)

先程も考えた通り、何であろうと吉良が誰かと手を組んでいるとは思えない。この状況は一体何を意味するのだろうか?

(吉良も知らない何かが……吉良を守ろうとしているの?)

少なくとも美晴がここで吉良と過ごしている間はこの様な気配が現れる事はなかった。1人である時も、2人である時も、眠っている時も。今助けを呼ぼうと電話を使って初めて現れたのだ。

そこまで考えた時、敷地内に車が入ってくる音が聞こえて思わず身構えた。まさかこの外にいる”何か”が、吉良を呼び戻したのだろうか。車から人が降り立ち、急ぎ足でこちらに来るような足音は靴を脱いで縁側から中へ侵入してきた。そして一部屋ずつ襖を開けて、だんだんと美晴が隠れている部屋に近付いていく。

(お願い、ガーディアン…ッ!!)

美晴は手を合わせながら祈った。”どうか吉良がこの押入れを開けませんかように”、”私の事を守って”、と。

しかしその祈りも虚しく、美晴が隠れている押入れが開く音がすぐそばで聞こえた。

「美晴!!」

だが、聞こえた声は吉良のものではなかった。

「美晴…ッ!!」

次いでこの身が引つ張り出されたかと思うと、ふわりとあたたかい体温に包まれ、懐かしい匂いが鼻腔に触れる。

「あ……あ……い……ああ……露伴先生…ッ!!」

気付けば己もその名を呼び、ぎゅつと背中に手を回していた。

岸边露伴だ。今私の体を包み込んでいるのは、この声は、この匂いも、全て。

私の大切な岸边露伴だ!!

「露伴先生ッ……この家何かいるわ！」

美晴が顔を上げると露伴は彼女の目に巻かれている包帯に手を掛けた。

「分かってる。まずはこの包帯を解いてやるよ」

しかし美晴はその手を咄嗟に掴んで首を横に振った。

「だめ！私今、目が見えないの。爆発でだめになったの。解いたらきつと……びつくりしちゃうわ」

そんなところ、露伴に見られたくない。

露伴はハッと息を呑むと包帯に触れた手を下ろし、ぎゅつと今一度美晴を強く抱き締めてから彼女を抱き上げて周囲を見回す。

「……頼るのはシヤクだが……仗助のところか。今はこの家から脱出する方が先だな」

露伴は足早に縁側まで出ると車まで走り、美晴を後部座席に乗せてシートベルトを締めてやってから今度は東方家への道を辿り始めた。

## 夜明け前、光る明け星

露伴は車から降りると美晴を背負って東方家の呼び鈴を何度も鳴らした。2階にある仗助の部屋は灯りがついていて、外からでもそこにいる事は確認出来る。

「はいはいはい〜と。誰っスか?こんな時間、に……」

ようやく玄関の扉が開いて目的の人物——仗助が顔を覗かせたかと思えば、彼はそこにいた人物に目を見張った。

「ろ、露伴、先生:!?それに……美晴ちゃんツ!」

露伴の背後を見ればその背に背負われて、なぜか目元を包帯で覆われている美晴の姿もあつて息を呑む。

「話は後だ、家へ上げろ!」

「うわっ、ちょ!相変わらずゴーインっスねエ……!お袋いたらどやされてるトコっスよオ!」

ぐいぐいと己を押し除けて言葉通り家の中に押し入ろうとする露伴を一瞬押さえ込もうとしたが、何か並々ならぬ事情がある事は手に取るように分かり早足で露伴の前を歩くと己の自室への階段を上がっていった。

仗助の自室に入ると3人で床に座り、美晴の向かいに仗助が移動する。

「まずは”目”からだな……」

仗助が美晴の目元に巻かれた包帯に右手を当てると、クレイジー・ダイヤモンドの能力で彼女の体があたたかい光で包まれた。次いで体の方にも手を回して他の怪我も治していく。

「これで大丈夫……に、なつたはずだぜ」

手を離し、露伴が恐る恐る彼女の包帯を解いていくのを仗助は居た堪れ無さそうに見守っていた。

美晴は己になんて言うだろうか。そもそも己が美晴や重清とはぐれたりしなければ、重清は死ななかつたかもしれないし美晴も恐ろしい目に遭わずに済んだのだ。——仗助はこの3日間、美晴を捜索しな

がらも恐れていた。今この瞬間も、美晴の目に己はどう映るのか、どうしようもなく不安に苛まれていた。

「目を開けてごらん、美晴」

露伴は美晴の頬に手を添えながらその目が開くのをジツと待つ。その瞼がふるりと震え、美晴の深い青みを帯びた双眸が徐々に開かれていく。

「美晴……！僕が分かるか!？」

声を詰まらせる露伴の姿が、一瞬見えてはぼやけていく。しかし美晴は瞬きのたびにその雫が頬を滴る感覚と光の明るさを感じて堪らず目の前にいる露伴に抱きついた。

「露伴先生……ッ!! やつと見えた……!!」

3日間、ずっと姿を見る事が出来なかった互いの姿。暗闇という恐怖に囚われた時間からようやく解放されたのだと実感し、安心からか涙が止まらないままに互いの体を抱き締めていた。

そんな2人を見て、微笑ましく思いながら仗助まで涙腺が緩んで思わずぐすりと鼻を鳴らすと、美晴がそちらに視線を向けて手を伸ばす。

「仗助くん……!」

濡れた深い青が仗助を捉える。その姿にどうしたものかと戸惑ったが、その様子を見た露伴は彼女の身を一旦離して彼の懐へと押しやった。

「仗助くん!」

「み、美晴ちゃん……!」

ぎゅうつと彼女の細い腕が仗助の体を包み込む。その感触が、その体温が、全てが愛おしいものなのに、それでも仗助の不安は拭いきれないままだった。

「……なんだよ。まさかまだ”自分のせい”とか思ってたんじゃないだろうな?」

見かねた露伴が口を開くと、凶星をつかれた仗助が反射的に顔を上げる。その様子に露伴は”やっぱりか”と首を横に振りながら溜息を吐いていた。

「承太郎さんも言ってたろ、これは誰のせいでもない。」殺人鬼のせいだ。たとえそれが”運命”だったとしても、”僕らが美晴を助ける”のも含めて”運命”にすりやあい話だ。違うか？」

”俺があいつを助けるのも含めて、あいつの運命にしてやるぜ”

チリ・ペツパー戦の時に己が言った言葉をハツと思いつく。

運命は変えられる。己にその力と強い希望さえあれば、乗り越えられる。今回は露伴が彼女を救い出し、己は彼女の失われたものを取り戻してやれた。その力と希望があったから。

「仗助くんは……あなたにしかない力で私を助けてくれたわ。ずっとそうよ、あなたは必ず私を助けてくれる……とつても頼もしい恋人よ」

美晴は涙を溢れさせながらも微笑んで仗助を見上げ、また彼の胸元に顔を埋める。

「ありがとう……仗助くん」

「美晴ちゃん……」

美晴の感謝の言葉に、仗助はようやく己を締め付けていた鎖を解き放った。恐る恐る彼女の体に腕を回せば、あたたかな体温が己の体に染み込むようで無意識に涙が溢れては滴り落ちていく。

戻ってきたんだ。来宮美晴は無事に戻ってきたんだ。

その事実を噛みしめながらその髪に頬をすり寄せるともつと彼女を近くに感じられて頬が緩む。

「露伴先生」

腕の中の彼女が僅かに身動きするのを感じて視線を転じる。彼女の片腕が露伴の方に伸びて、その先にいる露伴は驚いたように目を見張っていた。

「なんだよ……」

露伴は溜息混じりに彼女と向き合い、伸ばされた手に手を重ねて指を絡めて握る。

「露伴先生も……ありがとうございます。露伴先生は私を救い出してくれる人です。初めて会った時からずっとそうです」

「おい、よせよ……前も言ったが、別にそんなつもりじゃあ、」

そこまで紡いだところで仗助が美晴を露伴の懷に押し込んだかと思えば、彼もその勢いで2人に被さるようになどめて抱き締める。

「きゃあつー！」

「おいッ！なにするんだ仗助ッ!!」

「まーまー、美晴ちゃんがそう言ってるんすから、そこは素直に”ありがとー”じゃあねエの？露伴先生よオー」

気を緩めれば床に倒れそうな姿勢のまま、露伴は片腕で体重を支えつつももう片腕で仗助をグイグイ押ししながら睨む。

「お前が言えた立場か!?とにかく離せよッ、気色悪いッ！」

「ええーッ、ちとシヨックっすねエく……俺、美晴ちゃんのカレシなんぞで保護者の露伴先生とも仲良くしときたいんすけどオ」

仗助が口を尖らせながら離れ、ようやくあのガタイのいい体の重さがなくなるのと露伴は息を深く吐きながら体勢を整えて美晴を抱き直した。

「やかましいッ！調子に乗るなッ！」

「乗ってねーっすよーッ」

その後も2人は美晴を挟みながら（主に露伴が難癖を付けて）ギャンギャン言い合いを続けていた。

そんな賑やかな日常が戻ってきた。

露伴と仗助が助けてくれたから。

美晴はその事実を噛みしめながら、次第に微睡みの中に落ちていった。

「じゃあー帰るよ。世話になったな」

「いえ、とんでもねーっすよ」

そんな言い合いをしているうちに美晴が眠ってしまった事に気が付き、仗助は美晴を抱えた露伴を外まで見送りに出ていた。

「そーいア、あの殺人鬼の家、ナニか怪しいぜ」

こんな事の直後だ。美晴が恐がるかと思えば彼女の前では話さなかったが、殺人鬼の家には何か秘密があるように思えた。それを伝えようとしたが、仗助はゆっくりと首を横に振る。

「それなんスけど……俺ら、今日その殺人鬼と会ったんスよ。名前は  
”吉良吉影”……」

「なんだって……!」

露伴は目を見張る。確か自分が潜った門の表札も”吉良”と書かれていた。これで美晴が監禁されていた家は殺人鬼のものだと確信を得る事が出来たが、仗助の歯切れの悪そうな様子からその吉良をとり逃したであろう事は手に取るように分かる。

「ヤツは土壇場で名前も顔も指紋も別人に成り代わって逃げやがった……!また振り出しに戻っちまった……!」

このままではまた美晴が狙われてしまうかもしれない。仗助は俯きながら目元を片手で覆うが、露伴は己の顎に手を添えて考え込む。

「おい……ならこの話、悪いモンじゃあないかもしれないぜ」

どうしたものかと首裏を搔いていた仗助だが、そんな露伴の言葉に顔を上げる。

「僕はてつきり殺人鬼の事かと思っていたんだが……美晴のヤツ、”この家何かいる”って言っていたんだ。美晴は怯えるように押入れに入っていて、ガーディアンはその入り口を守っていた……僕だから扉を開けられたんだ」

美晴を抱え直しながらつい先程の状況を思い返す。露伴が彼女を見つけられたのはガーディアンが押入れの前に立っていたからだ。ガーディアンは守るスタンド。つまり彼は”何か”から美晴を守っていたのだ。

「殺人鬼が別人に成り代わって逃走したなら、元の自宅に帰ってくるとは思えない……慎重なヤツなら尚更だ。もし手掛かりが何もなあってんなら、あの家は調べる価値がありそうだぜ」

己は美晴を助ける事に夢中で逃げるようにあそこから出てしまったが、仗助から承太郎達に言ってもらえればすぐにでも彼らは殺人鬼の自宅を調べ始めるはずだ。

「……分かりました。承太郎さんに朝イチで言つとききます。露伴先生は美晴ちゃんの事……よろしくお願いします」

「別に。言われなくても面倒見るさ。とりあえず明日の学校は休ませ



ようと思う」

「その方がイイっスよ。大変だったろうし……」

2人でぐっすりと露伴の腕の中で眠っている美晴を見る。3日間、彼女は目が見えない状態で殺人鬼と過ごしていたのだ。その想像を絶する体験は彼女にとつて大きな負荷だっただろう。

殺人鬼——吉良吉影。人や物を爆弾に変えるスタンドを持つ男。彼を追う事が先決だが、美晴なら必ず”自分も殺人鬼を追う”と言うだろう。

「美晴ちゃんはもう……吉良吉影の件に関わらせるわけにはいかねエ」

来宮美晴は吉良吉影に1番近付いた人間だ。そんな人物を放っておくはずがない。

「同感だな。今後は一層警戒を強化しないと」

露伴は車の後部座席に美晴を寝かせると運転席の方へ回る。

「もう行くよ。じゃあな」

「ああ、氣い付けてな」

挨拶もそこそこに、露伴の車が東方家から遠ざかっていく。

「……吉良吉影。ぜってー追い詰めてぶっ飛ばしてやる……」

美晴の事もそうだが、奴は重清を殺したのだ。エステ”シンデレラ”の辻 彩先生の事も、そして杉本鈴美の事も。

無関係な人間を殺す事を躊躇わない悪魔のような男。

丈助は拳を固く握り締めながら、露伴の車を見えなくなるまで見送っていた。

露伴は車を降りると美晴を部屋まで抱えて連れて行き、ベッドに寝かせてやった。久しぶりの自分のベッドは寝心地が良いだろう。

「美晴……おかえり」

美晴がようやく家に帰ってきてくれた。殺人鬼の事も気にしなければならぬが、今はその事実が大きすぎて涙腺が緩む。ベッドの前に膝をついて、その髪を指先で掬ってみると懐かしい気分になって更に涙が溢れた。

「露伴先生……」

ぐす、と鼻を鳴らしていると不意に己を呼ぶ声が聞こえてその出所に視線を向ける。

「露伴先生……ただいま」

そこには目を細めつつも眠りから覚めた美晴の姿があり、露伴の方に手を伸ばしていた。

「起きてたのかよ……」

「今起きたところですよ……」

伸ばされた手に触れると、指を絡めてキュツと握ってくる。それに応えるように握り返してやれば、美晴は幸せそうに微睡んだ瞳で笑った。

「露伴先生……今日だけでいいので一緒に寝てください」

「うん……えっ?」

よく意味を理解しないまま頷いてしまったが、露伴が疑問符を飛ばした頃には美晴がゆっくりと起き上がっていてその緑色の瞳を覗いていた。

下着を付けていない胸元が襟首からチラリと見えて思わず唾を飲み、しかしすぐに我に帰ると首をブンブンと横に振る。

「いやいやいやッ! バカな事言ってるじゃあないッ!」

「え!? だ、だめなんですか!?!」

「だめだろうッ! お前は彼氏いるんだからッ!」

ワシワシと頭を掴んで髪を乱すように撫で回してやると「うわわッ!」と彼女はマヌケな声を上げながらも露伴を見ていた。

「なっ、なに言ってるんですか!?! 寝るって……違いますよ! 本当に添い寝してもらいたいだけなんです!」

縋るように頭から下げられる手を取ると「うっ」と露伴の呻き声が聞こえ、それでも美晴は彼を見つめる。

「私、あの殺人鬼とずっと一緒に寝ていたんです! 1人で寝てると思ひ出しちやいそうで……だからもし目が覚めた時、そこにいるのが露伴先生だったら……ちゃんと安心出来る気がして……」

それでもだめですか? と美晴の目が訴えてくる。きゆうつと握ら

れた手に力が籠り、彼女がどれだけ怖い思いをしたのかがそこから伝わるように感じて胸が痛んだ。

彼女は暗闇の中、吉良に従うしかなかった。吉良の思うまま、世話をされるしかなかったのだ。それが彼女にとってどれほどつらいものだったか。

それを少しでも拭ってやれるなら、添い寝の1回や2回、どうって事はない。

「……仕方ねーなア。分かったよ。けどその前にシャワー浴びて来い。お前、あの殺人鬼の匂いがするぞ」

実際そんな事はないのだが。しかし今着ている美晴の服は吉良が用意したものだろうし、石鹸やシャンプーだってそうだろう。それがとても、凄く嫌だった。

「ん……そうですね、浴びてきます」

美晴も初めて己が今着ている服を見たが、やはり吉良が用意したのは早く脱いでしまいたかった。

「ン、よろしい。寝室で待ってる」

露伴はポンと美晴の頭に優しく手を置いてから部屋を出て行き、美晴もタンスから久しぶりに見るように感じる部屋着と下着とバスタオルを手に浴室へと向かっていった。

「とは言ったものの……」

露伴は寝室のベッドに座りヘアバンドを外した髪をワシワシと乱しながら後ろに倒れて寝転ぶ。

仕方がないとはいえ、美晴と添い寝する日が来るとは想像すらしていなかった。そもそも僕には元々その気はなく、美晴を恋愛対象として見る事もないと思っていたし、大衆の半分くらいが想像しそうな性処理に使おうとも思っていなかった。

「どうしてやれば変な風にならずに済むんだ？年頃の女の子は難易度高いぜ……」

はあー、と深い溜息が漏れ出る。何かの弾みで変な風になってしまわないか、それが原因で眠れなくなったりしないか、——美晴にはすっかり休んでもらいたい。だから悩んでしまう。かと言って今更

添い寝を断るだなんて、1人で寝てやはり怖くて眠れなかったなんて思いはしてほしくない。

「……くそツ。前はこんな事気にしなくたって良かったのになア……」

色々な巡り合わせがなければ、2人は今も”雇主と被用者”という枠を外れない、干渉しすぎないただ共に暮らすだけの2人だったはずだ。それが何かの引力のように様々なものが引き合い、今の形になっていった。そしていつの間にか、岸边露伴と来宮美晴は恋人同士でもないのに簡単に離れられない間柄になっていた。

「……もう1人じゃあ、いられないのか」

ぼつ、と。寝返りと共に言葉が零れ落ちる。

3日前、まるで来宮美晴が忽然とこの世から消えてしまったかのよう。それでも来宮美晴がいた痕跡はそこかしこに残っていて。

それはかつて、来宮美晴も感じていた事のような気がして。

来宮美晴が岸边露伴の元へ駆け抜けていったのと同じように、今度は岸边露伴が来宮美晴の声を辿って駆けたのだ。

「露伴先生」

コンコンと扉をノックする音と同時に聞こえた声にハッと意識がこちらに戻ってきて思わず体を起こす。

「あ、すみません……やっぱりお疲れですよね」

視界に映る美晴の姿はそうやって閉じかけた扉の向こうに消えそうになっていて、露伴はベッドから降りると早足でそこに迫り扉を押しさえた。

「誰が帰っていいと言った。来い」

「わあっ！」

グイッと力任せに扉を引くとドアノブを掴んだままだった美晴の身がこちらに引き寄せられて懐に収まる。

「まったく……君から言っておいて”やっぱやめる”とかナシだからな」

待ってた身にもなれよ。露伴は溜息を吐きながら美晴の頭を撫で叩き、扉を閉めてからさっさとベッドに戻っていくと布団に潜り込ん

だ。

「ほら、来いよ。どういづのがいい？」

掛け布団を捲って手招きしてやるとトコトコと小動物のように美晴が小走りで作ってきて、そこに潜り込んでくる。

「意外と乗り気なのは、これも漫画のネタにしようとか……」

恐らくシャワーを浴びている途中でそんなところに思い至ったのだろう。ジトツとした目で見てくる美晴に対して、露伴は苦笑いを浮かべながら静かに首を横に振った。

「しないよ。参考にはするけど」

「同じのような気が……」

まだ文句を言うつもり彼女の身を強引に引っ張り、肩に顔を埋めさせる。

「こうか？」

そうしてからトントンと赤子をあやすように背中を叩いてやれば、彼女はもぞもぞと身動きしてから僅かに離れた。

「それもいいですけど……でも、手を繋いでくれるだけでいいんです」  
こうやって、と美晴はまた露伴の手の指に己の指を絡めて握る。それが余程気に入っているらしく、幸せそうに目を細めていた。

「こうしていると、あつたかいんですよ」

ふふ、と彼女の笑い声がすぐそこで聞こえる。いつもと違う、同じ高さの目線で真っ直ぐに捉えたその笑顔は新鮮に思える。

「……そうかい。好きにしな。君が安心出来るのが1番だ」

ふあ、と欠伸が漏れ出て、露伴の瞳がうとうとと微睡み始める。

この1時間ほどで色々あった。けれども目の前にいる美晴も釣られるように微睡む姿を見て、安堵が心の中に広がっていく。

「美晴……おやすみ」

「はい……おやすみなさい、露伴先生」

何も心配なんてなかった。

2人ともこんなにも早く、幸せそうに眠ってしまったから。

## 空条承太郎の訪問

来宮美晴が無事に帰ってきた翌日。

岸边家の呼び鈴が鳴り響き、露伴は書斎から出てくると玄関の覗き窓を見る。そこには予想外の人物が立っており、ハッと息を呑みながら玄関を開けた。

「先生。昼間から訪ねてきてすまねえな」

「承太郎さん！ここに何の用なんです？」

空条承太郎。海洋冒険家であり、無敵のスタープラチナを持つスタンド使い。

彼が岸边家を訪ねてくるのは初めての事で、間近で捉えるその体格の良さに思わず萎縮しそうになる。

「美晴から例の殺人鬼の話聞きたくて来たんだが……彼女は今日学校を休むと聞いてな。様子はどうだ」

やはりか。その言葉に露伴は自然と浮かない表情を浮かべていた。仗助が承太郎に朝イチで昨晚の出来事を伝えると言った時から薄々予想はしていたが、彼ならすぐにでも殺人鬼に1番近付いたであろう美晴の話を知ってきたがるだろう。

「美晴なら……今朝は元気に朝食を食べていましたよ。案外元気そうで僕も安心したところですよ」

「そうか。なら問題なさそうだな。話を聞かせてもらいたい」

承太郎にとっては一刻も争う事だろう。しかし美晴にとっては忘れたい事かもしれない。——露伴がかつて、その記憶を丸ごと封印したのと同じように。

「あ、承太郎さん！こんなところまでどうしたんですか？」

そこで美晴がちょうど何か下に用事だったらしい、階段を降りてくる最中にその大きな体軀を見つけて軒先までやって来た。

「美晴。久しぶりだな……」

「はい、お久しぶりです」

美晴がぺこりと頭を下げると承太郎はその肩にポンと手を置く。2人が知り合いである事は以前へブンス・ドアで読んだ時に知ったが、こうしてこのアンバランスな2人が親しげにしているのを見るのは奇妙な心地になる。

「美晴。承太郎さんが殺人鬼の事について訊きたいそうさ。大丈夫そうか？」

露伴が確認するように彼女に尋ねると、やはり浮かない表情を浮かべていた。どうするか迷っているのか、少しの間口をパクパクと開けては閉じてを繰り返していたが、やがて承太郎を見上げるとこくりと頷いてみせた。

「私の話で、お力になれるなら……」

その返答を聞き承太郎もひとつ頷き、それを見た露伴は軒先では何だからと彼を客間に通し、お茶の準備をと台所の方へ向かおうとしたが、承太郎は彼を引き止める。

「心配ならお前も揃ってから話す」

承太郎なりに気を遣っているのだろう。彼は露伴と美晴がこうして揃っている姿を初めて見るのだが、この前——重清が殺され美晴が拉致された日の剣幕を目の当たりにして、どれだけ露伴が彼女を大切に想っているかは手に取るように理解出来ていた。

「……ありがとうございます」

露伴は軽く頭を下げてから客間を出て行く。そんな一部始終を見届け、美晴は向かいに座る承太郎をおずおずと見て落ち着かなそうに身動きしていた。

「……広い家だな」

承太郎は改めてぐるりと客間を見回しながら岸边邸の外観を思い返す。その声を受けて美晴も肩を揺らしながらこくこく頷く。

「そ、そうですよね。私も初めて来た時はびっくりしました」

彼女は承太郎と初めて会った時からそうさ。承太郎の体格はこの辺ではガタイのいい部類に入る仗助や億泰よりも立派で大きい。だからか、その辺を歩いていても二度見される事は少なくない。例に漏

れず彼女も未だに慣れないらしく、小動物のようにほんの少しだけ緊張しているようにも見えた。

「先生は美晴が来るまで、この広い家に1人で住んでいたらしいな。2月に越してきて……1ヶ月ほどか？」

「そ、そうみたい、ですな」

なので少しでも緊張を和らげてやろうと、露伴を待つ間に彼の話をしてみる事にした。

承太郎は岸边露伴の事を漫画家である事以外はあまりよく知らない。日常的に共に過ごしている者の話なら難なく話せるだろうし、そうしている間に緊張もいくらか解れるだろう。

「先生はなかなか気難しそうな男だが……君の事は大切にしているようだ。何かきっかけがあつたのか？」

岸边露伴は気難しくわがままかつエゴイストな男。対する来宮美晴は優しく正義感に溢れた少女。一見してこの2人の相性はお世辞にもあまり良いとは思えない。

岸边露伴と来宮美晴。彼らはなぜこんなにも互いを大切に想い合えるのか。空条承太郎は純粹に疑問を抱いていた。

「きっかけ……きっかけですか……」

美晴は「うーん」と唸りながら考えるが、それらしいきっかけというものが複数思い当たるものの、決定的なものがないのか、それをどう説明したらいいのか、そもそもそんな事を考える機会もなかったためにしばらく沈黙が流れる。

「……………」

その間、承太郎はジツと彼女の返答を待つがまさかここまで悩ませてしまうとは思わず、どう話を切り替えようか考えてみるがなかなかいい案は浮かばない。そもそも己もあまり口達者な方ではなく、美晴が勝手に色々話してくれるものだと思っていたのでこれは予想外の展開だった。

「その……いろいろあるとは思うんですけど」

そうやって彼女が口を開いたのは何分後の事だったろうか。露伴が戻ってきていないという事はまだそこまでの時間は経っていない



のかもしれない。

「私、露伴先生のスタンドで記憶を読まれてしまうのが嫌だったんですけど……1回だけ読まれてしまった事があるんです。露伴先生の事を巻き込みたくなくて、チリ・ペツパーの事とかいろいろ秘密にしていたんですけど……その時に全部バレてしまつて……」

「岸边露伴のスタンド、”ヘブンズ・ドア”で本にされた記憶は嘘を吐かない。秘密にしていた事も全て暴かれてしまう。」

露伴はその時、美晴がチリ・ペツパーに殺されかけた事を知つてしまったのだらう。承太郎も目撃したあの惨状は彼女の能力の弱点を見事に突かれた結果であり、そしてその場にいた誰もが心を痛めた酷いものであつた。

「露伴先生はそれ以前から、愛想は悪いけど私の事を大切にしてくれてるんだつて思える感じだったんです。でも、その時はすごく怒らせてしまつて……私をこの家に閉じ込めようとしたんです。もう、”怖い目に遭わないように”、つて……」

露伴は露伴なりに、大切に想う美晴の事を守ろうとしたのだらう。露伴の仕事は在宅で出来るもので、休みの日を除けば大体家においてやれる。

「……そうか。……まあ、そうだらうな」

承太郎は帽子のツバを摘んで目を伏せる。

きっと彼はその時と同じ事を今、思っているだらう。今やこの町は殺人鬼まで闊歩する町なのだ。敵意を持つスタンド使いがまだ潜んでいるかもしれない状況で、その時以上に美晴を大切に想っている露伴がそう思わないはずがない。

そこでコンコンと客間の扉がノックされ、そこから盆を持った露伴が入つてくると床にそれが置かれ、緑茶の入った湯呑みが承太郎と美晴、そして彼女の隣——露伴が座る場所にも置かれる。

「——さて、本題に入るか」

露伴が椅子に座り、承太郎もひとつ咳払いをして気を取り直すと資料らしき紙をテーブルに置く。

「美晴。君が見たのはこの男で間違いないな？」

紙を覗き込むと”吉良吉影”と書かれていて、その横には彼のものと思しき写真も貼り付けられていた。その下には詳細な彼のデータが載っていて、年齢や住所は勿論、勤務先まで細かく載っている。

「……はい、間違いないです。吉良吉影……彼、私と重ちーくんにごく細かく自己紹介してきました。……多分、勝利を確信していたから」

吉良吉影はいつもそうしているように、2人の事を始末して証拠を隠滅するつもりだった。だから素性を知られても恐れる事は何もなかったのだ。そしてその通り、吉良は重清を殺す事に成功し、能力が効かない美晴を拉致監禁する事で証拠隠滅に成功した。

承太郎はようやくその時の状況に納得したように数度頷いてから、紙をトントンと指で叩く。

「彼と3日ほど過ごして……なんでもいい、何か気になった事や気付いた事を話してほしい。思い出すのは恐ろしい事かもしれないが……君が忘れても、そうしてくれれば俺達が覚えていられる」

仗助から伝え聞いた話では、美晴は監禁されている間目を潰されていたらしい。そんな中での事を話させるのは正直酷だとは思ったが、今頼りに出来るのは彼女しかない。

まだこのタイミングなら、吉良は成り代わった他人の生活を把握し切れていないはず。必ずどこかに吉良本人の痕跡がある。それが分かるのは美晴しかない。

「……吉良吉影は、」

少しの沈黙の後、美晴が意を決したように口を開いて承太郎と露伴の視線が彼女に向く。

「吉良吉影は、”己の平穩”を乱されるのを嫌う殺人鬼です。そのためなら関係ない人を殺す事も躊躇わない……そして彼は、”女性の手に”に異様な執着がある人です」

美晴は己の右手を左手で握り、彼の事について嫌でも記憶にこびり付いた数々の正常にして異常な生活を思い出す。

「”女性の手に”に執着？」

「はい。彼はパン屋の袋に殺した女性の手を入れて持ち歩いています」

た。それを重ちーくんと私が見たから……重ちーくんは殺され、私も吉良の家に連れて行かれたんです」

あらゆるものを爆弾に変える能力を持つ彼のスタンド、キラークイーン。殺人鬼にとってはこの上なく便利なスタンドだろう。現に彼は誰にも勘付かれる事なく、15年に渡って殺人を犯し続けたのだから。

「なるほど……なら次に狙われるのもまた女性……という事か。これでだいぶ絞れるかもしれん」

承太郎は手帳にメモを取り、一通り終わるとパタリとそれを閉じてから出してもらった緑茶を啜る。

「生活態度から絞れそうなのはそんなところか……有力な情報提供、感謝する。よく話してくれたな」

珍しく口許に笑みを浮かべる承太郎を見て、美晴は慌てつつも自然とペコリと頭を下げていた。

己が監禁されていた事実は、少なからず今後の手掛かりになり得るものだったのだ。それだけでも無事に帰ってこれた事に意味があるように感じる。

「しかし、女の手が好きだから殺して奪うとか……これはもう異常性癖だな。なのに自分の生活を乱されるのが嫌だなんて……とんでもないエゴだ」

露伴は深い溜息を吐きながらソファに寄り掛かり緑茶を啜る。その姿を見て美晴は思わずクスリと苦笑いを漏らした。

「露伴先生だって、人の記憶を無理矢理盗んで漫画のネタにしようとしてたじゃあないですか」

「ム……なんだよ。君は僕がその殺人鬼と同じだって言いたいのか？僕はもうそんな事はしない」

ムス、とむくれながら露伴は彼女から顔ごと視線を逸らす。

「君が悲しむような事は……もう出来そうにないからな」

そんな彼のか細い声で紡がれた言葉。シンとした室内で妙に響いたように聞こえたその言葉に、美晴と承太郎は目をきよとんと目を丸めた後にクス、と小さな笑い声を漏らした。

「なつ、なんだよッ！そんなにおかしな事言ったかッ!?」

そう抗議する彼の振り向いた顔は茹で上がったタコのように真っ赤になっていて更に笑いが込み上げてしまう。

「フツ……いや、先生は本当に美晴を大切にしているようで微笑ましくてな」

「じ、承太郎さんまでッ!」

まるで頭から蒸気まで出ているようにも見えて承太郎は口角を上げながら目を伏せた。

先程美晴から聞いた話と繋がった。彼はここに彼女を閉じ込める事ではなく、彼女とその周囲のスタンド使い達を信じて自由にしてやる事を選んだのだ。

そして今もきつと。承太郎はそう考えを改めつつあった。

「それで、美晴はいつから学校に通い始めるつもりなんだ?」

だから自然な流れでそう切り出した。

今日の午後、仗助達が学校から帰ってきたら吉良邸と一緒に調査する事になっている。しかし承太郎はそれ以降の調査をロヤジョセフ、SPW財団のみで行おうと計画していた。

吉良吉影は別人に成り代わって逃走している。変に仗助達が嗅ぎ回れば顔を知られている分、相手も警戒も強めるはずだ。だから仗助達には普通の学生生活を送ってもらおうと思っていた。それは美晴も例外ではない。

「そうですね……吉良に制服を処分してしまったので、まず採寸とかし直さないと……」

しかし美晴の制服は吉良に拉致された時点で既にボロボロだったし、彼がそれを取っておくような人物だとは思えない。直接処分しているところを見たわけではないが、そうなっているであろう事は容易に想像がつく。

「そうか。なら復帰はもう少し先という事だな……先生はどうなんだ。美晴を学校に行かせる事に反対はしねエのか」

承太郎はその事も手帳にメモしながらチラリと露伴を見る。そこに捉えた表情はやはり浮かない顔をしていて、しかし小さな溜息を吐

くと美晴に視線を向けた。

「本当は出したくないですけどね……こいつが行きたいってんなら止める事はしない。周りも強い奴らばかりだしな」

来宮美晴の友人達。恋人の東方仗助を始め、虹村億泰や広瀬康一達は承太郎も認めるほどの實力を持つスタンド使い達だ。そんな彼らに頼むのだから、次こそは大丈夫。露伴は美晴が信じる彼らの事を、性格は相容れないものの實力だけは認めていた。

その様子に承太郎はホツとしたように肩の力を抜く。

(この気難しい男を変えたのは……君なんだろうな、美晴)

仗助から露伴の事を聞いた時はどんなイカレ野郎かと思ったが、こうして美晴と一緒にいる彼はまるで彼女の兄のように感じる。心配性が過ぎる場面もあるが、恐らく彼女の事だけは自分の事のように考えているのだろう。

そんな2人の絆は固く結ばれている。目の前で制服の採寸や携帯電話の再契約の事を話す彼らを見てみると腰を上げるのを忘れてしまいそうだが、この不思議と居心地のいい空間から退出するために密かに名残惜しみながらもソファから立ち上がった。

「話は以上だ。協力感謝する。まだ疲れているだろう……復帰までゆっくり休んでくれ」

「はい。お気遣いありがとうございます、承太郎さん」

そんな承太郎を2人で軒先まで見送ろうとしたが、先に美晴が客間の扉を開けようと背を向けた隙に承太郎は露伴の肩を叩いて引き止め、声を潜めながら1枚の封筒を差し出す。

「吉良吉影の資料のコピーだ。テメーはどんなに言っただって殺人鬼の動向を探るだろう。ただし、何か分かったらすぐに報告しろ」

岸辺露伴。彼が吉良吉影を捜索するのは美晴を拉致した犯人である他にも理由がある。

彼は吉良吉影が犯人である、15年前に起きた杉本家殺人事件の関係者なのだ。他の誰よりも吉良に対する執念は深いはずだ。その彼に捜索をやめて普通の生活をしろだなんて言っても聞くとは思えない。

「……ありがとうございます」

案の定、彼は同じく声を潜ませながら封筒を受け取った。殺人鬼が姿を変えた今、どんな些細な情報でも互いに欲しい。

密やかに結ばれた協力関係は美晴が扉を開けて振り向くと同時に形を潜め、露伴は美晴が承太郎を玄関まで案内している隙に途中にある書齋に資料を置いてすぐに見送りに合流した。

吉良吉影の搜索は振り出しに戻ったが、美晴が無事に戻ってきた事で僅かに進展はあった。まだ尻尾を掴むチャンスはある。杜王町のスタンド使い達の結末も深まっている。

必ず見つけ出してみせる――。承太郎は岸边邸を改めて見上げてから、拠点である杜王ブランドホテルへの道を辿り始めた。

## 知らずに交わる彼らの日常

杜王駅前にある商店街にはさまざまな店がある。昔ながらの八百屋や精肉店など、亀友が出来た後でも活気を失う事はない。

その一角にある”村雨書店”も例外ではない。

村雨 焰。ぶどうヶ丘高校に通う2年生。彼はその書店の1人息子である。

「こないだの”靴のムカデ屋”のガス爆発、すごかったなあ。ウチも気を付けないとな」

カウンターの奥から店主である父親が顔を出す。店番をしていた焰はそちらを振り返るとわざとらしく溜息を吐いてみせた。

「で？だから？暇ならレジ代わってよ。俺まだ宿題あるんだけど」

「ん、父さんも用事あるから……」

いそいそと店の奥に引つ込む己の父親を見てまた溜息を吐く。

「つたく、マジで腹立つ……」

そんな悪態をつきながら、焰はカウンターの狭いスペースに腕を置いて頭を乗せる。店内はそこまで人も居らず、先程からただただ暇な時間が流れていた。

「ガス爆発、ねえ……」

フウと短く溜息を吐きながら、先程父親が言っていた事故の話に思いを馳せる。

焰は知っている。世間では”ガス爆発”と報じられているその事故の正体を。

矢安宮重清が殺され、来宮美晴が行方不明になったあの日。村雨焰もまた導かれるようにスタンド使い達の元に集まっていた。岸辺露伴の激昂する姿、そして来宮美晴が殺人鬼に拉致された事実は、体育祭の時に彼らと対峙した焰にとっても衝撃的な出来事であった。

件の”ガス爆発”が起きたのはその3日後の事である。広瀬康一と空条承太郎が”靴のムカデ屋”で例の殺人鬼——吉良吉影と対峙したのだ。吉良吉影のスタンド、キラークイーンは人や物を爆弾に変

えるという能力を持っており、ムカデ屋で起きたガス爆発はその能力が引き起こしたものだっただ。

勿論ながらムカデ屋の店主は吉良によって殺され、店も継ぐ者がいないので近々取り壊しになるらしい。突然すぎる痛ましい”事件”に、商店街の者達は皆心を痛めたばかりである。

焔は身を起こして椅子の背もたれに寄り掛かり、軽く伸びをする。

来宮美晴は先日、吉良吉影の元から無事に生還してきた。今は彼女の精神状態の安定や新しい制服が届くまでの期間、休学しているとの事だが本人は元気らしい。

しかし、吉良吉影は姿を変えて未だ逃走中であり、吉良の自宅に居着いていたらしい彼の父親の幽霊もスタンド使いを増やす弓矢を持って逃げおおせたという。結局捜索は振り出しに戻ったというわけだ。

(しかしまあ、来宮が戻ってきた事は大きいか……空条さんもアイツから話を聞いて目星を絞るとか言ってたしな……)

来宮美晴。吉良吉影と1番接触した時間が長かった人物。彼女は拉致監禁されている間、吉良に目を潰されていたらしいが思いの外冷静だったようで空条承太郎にその時の事を全て話していた。それがついこないだの事であり、彼から配られた1枚の写真を制服のポケットから取り出す。

(けど吉良吉影……ぶったまげたぜ。コイツはこの常連だ。俺も親父もよく知ってる顔だ)

そこに映る吉良吉影の逃亡する前の姿。彼はなんと村雨書店によく足を運んでいたのだ。本は勿論、ノートや日記帳、文具も買っていた。常連だったのでカウンターで言葉を交わす事も少なくなかった。

ああ、なんという事だ。やはり”スタンド使いはスタンド使いと引かれ合う”ものなのだろうか。

彼の正体を知らずに接していた自分が、まるで恐ろしい存在のようにも思えてゾツと鳥肌が立つ。

そこまで思い返した時、入口の扉が音を立てた。反射的に背もたれから身を起こし、そちらを窺うと岸边露伴の姿が視界に入る。



「おや、岸边先生じゃあないですか」

「ム！村雨 焰……」

彼は焰を見るなり顔をしかめる。

村雨 焰。スタンド名は“キャプター”。空洞のあるものに人や物を閉じ込める能力を持つ。彼は体育祭の時に美晴の事をその能力を使ってダンボール箱に閉じ込めた事があったのだ。——多少恨まれているも仕方はないと思うが。

「やだなあ、そんな怖い顔しないでくださいよ。もう来宮には手を出さないんで」

眼鏡の位置を直しながら焰がジツと露伴を見つめる。焰はもう美晴に付き纏う事はしないと決めていた。だって彼女の周りには岸边露伴を始め、東方仗助や虹村億泰等、彼女に手を出そうものならその圧倒的な力をもってねじ伏せてくるだろう者達ばかりでそういう気になれない。一般男子ならまず、彼女にはおいそれと近づく事すら出来ないだろう。

そんな意味も込めて視線を注いでいると、露伴はようやくカウンターまで歩み寄ってきてくれた。

「これ、来宮に渡しといてください。アイツが取り寄せ注文してた本です。お代は前払いでもらってるんで」

しかし小説と漫画が4冊ほど入った紙袋を渡しながらそんなちよつとしたお使いを頼めば、あからさまに眉間のシワを濃くする。「なんだ、美晴のヤツ……お前とまだ交流があったのか。憎いとか言ってなかったか、美晴の事」

「昔の話ですよ。それにこれは客と店員のやり取りの範疇です」

違いますか？と緩く首を傾けてみせる。仕事に私情は挟めない。仮にまだ彼女の事を憎いと思っけていても、それが本を売れない理由にはならない。それにこうして美晴がこの店で本を取り寄せるといいう事は、焰の事をもうそこまで咎めていないという事でもある。

露伴もそれで渋々納得したようで紙袋を受け取ってくれた。

「今、妙なガキに付き纏われててさ……ここには来てないよな？」

彼は用心深くぐるりと周囲を窺い、焰もそれに釣られて椅子から腰

を上げると身を乗り出して辺りを見回す。彼が言うからには明らかに拳動のおかしい子供だろう。亀友でよく見るような。しかしここは昔からの所謂常連客の方が多い。その中にそんな子供は居らず、また今この場にもいなかった。

「来ていないならいいんだ。これでやっとゆつくり出来る」

露伴はそう言うとかウンターから離れ、凶鑑が置いてある棚へと移動を始める。それを見届けてから焰も椅子に座って背もたれに体を預けた。

（ホント、変な組み合わせだよな……：岸辺先生と来宮って）

岸辺露伴と来宮美晴。外から見ればかなりちぐはぐなコンビだ。しかしあの日の露伴の激昂の仕方を見るに彼はかなり美晴を大切にしているように思えるし、それは恐らくあの場にいた人間なら誰しもそう思った事だろう。だからこそ、不思議で奇妙な関係に映るのだが。

（けどま、詮索するほどあの2人と仲良いわけじゃあないし、気になりはするがどーしても知りたいわけじゃあなし……）

暇だから考えてしまうのだろうが、焰にとつてそれはどうでもいい事だった。あの2人にはあの2人の事情があるのだろうし、誰だつてそういうのはある。焰にとつてはその事よりも、欠伸すら漏れ出るこの物凄く暇な店番をどう切り抜けるかの方が重要だった。

「すいませ〜ん〜この本くださ〜い!」

しかしそこで唐突に子供の声が聞こえ、そちらに視線を向ける。先程露伴が向かっていった凶鑑が置いてある棚の通路から頬に穴の空いた子供がひよつこりと顔を出していて、それを追うように露伴の顔が再び通路から覗いた。

「待て、きさまアアツ!! さっきからなんなんだよツ!!」

もしかして彼が言っていた“妙なガキ”とは、この今顔を出している子供の事だろうか。その子供はイラスト凶鑑を大事そうに抱えていて、だがしかし露伴もそのイラスト凶鑑が目当てだったらしい。

「ジャンケンで……決める?」

子供は露伴に向かって不敵に笑いながら握った拳をチラつかせる。

対する露伴は付き纏われて怒り心頭のようにだったが、やがて一歩踏み出すとジャンケンの構えを取った。

「いいだろう……後出しは負け、あいこは決着がつくまでだったな……」

おいおい。まさかここでおつ始めるつもりかよ。焰は他の客がいないかカウンターから周囲を見渡したが、幸か不幸か今のところ店内にこの2人以外の客は見当たらない。

くそ、追い出す口実を作れないじゃあないか！焰は嫌な予感を背筋に走らせながら再度2人を視界に入れる。

「いくよ！ジャアアン〜ケン！」

そんな焰の心境なんて露知らず、子供の方が大きな声で掛け声を発した。――が。

「グーーツツ!!だツ!!」

ボグウツツ!と鈍い音と共に子供の体が後方に吹っ飛んだ。次いで露伴に視線を転じると、言葉通り”グー”の形で握った拳を前に突き出した姿が見えて思わず顔を顰める。

「うわ……今、俺の中で岸边先生の株が大暴落しました」

あの人気漫画家、岸边露伴が頭に来たとはいえ子供を殴るなんて。しかし露伴はそれを意に介する様子を見せずに声を張り上げた。

「うるさいツ!!さつきから付き纏われて事あるごとにジャンケンを挑まれてツ！ウザったいんだよツ!!クソガキがアツ!!」

ビシツと音がつく勢いで子供を指差す露伴。

分からない。来宮美晴、こんな奴とどうして一緒に暮らしているんだ。一度危害を加えた身で言うのも何だが、乱暴されたりしていいだろうか。焰は柄にもなくそんな心配すらしてしまっていた。

「焰ー？何か揉めてるのか？騒がしいぞー！」

そこで父親の声が店の裏から聞こえてハッと息を飲むとカウンターから裏の方へ声を掛ける。

「なんでもなーいッ！」

「そうかー！あ、悪いけど今来た本の整理手伝ってくんないー？」

父親の声はそう言葉を連ねる。

しめた。いつもなら面倒くさいと思うところだが、今となつてはこの場を離れる口実になる。この2人とは今はもう関わりたくない。

「今行くーッ！」

焔はまだ床を転がっている子供とそれを見下ろす露伴を尻目にサツと離れると、一旦その場を後にして店の裏へと引つ込んでいった。

数十分後。

焔がカウンターに戻つてくるとさすがに露伴と子供はいなかった。ホツと安堵しながらカウンターの椅子に座ると、客の男がノートを持って会計するためにここにゆつくりと歩み寄ってくるのが見えた。

「いらつしやいませー」

椅子から立ち上がりノートを受け取りながらチラリとその男を見遣る。仕事帰りらしい、スーツに身を包んだ黒髪の男は何を言うでもなく会計の前に立っている。常連ではなく、焔も初めて見るその男が持ってきたノートには表紙に“かんじれんしゅうちよう”と書かれていた。

「お客さん、ここ初めて来る人ですよ？お子さんのノートですか、これ？」

焔が会計しながら何となしに、常連にもいつもそうしているように男に話し掛けてみると僅かに彼の肩が跳ねる。

「ん、あ、ああ……そう、なんだ」

加えてぎこちない返答。焔は“そんなに動揺するような事言ったか？”と一瞬訝しんだが、もしかしたら極度の人見知りなのかもと強引に片付ける事にした。——そんなんでよく社会人やつてられるな、とは思ったが。

「なつかしいな、俺もこれで漢字の練習しましたよ。小学校までですけどね」

ノートを紙袋に包み、代金を受け取ってお釣りを渡してからそれを男に差し出す。

「ありがとうございます。是非ご贖員にしてください」

「あ、ああ……ありがとうございます、そうするよ」

男は終始挙動不審だったが、杜王町の商店街で店を構える人達は皆一様にフレンドリーで馴れ馴れしい態度を取る事もあるので、男も驚いただけだろう。亀友にも書店があるが、あちらは格式ばったマニュアル接客なのでこちらとは大違いだから余計だ。

（俺も吉良吉影とあーやってフツーに会話してたな……今となってはゾツとするけどな）

椅子に座り、フウーツと長い溜息を吐く。

今しがた相手をした男。

その男の正体を村雨 焔が知るのには、もう少し先の話になる。

## 04. 守るべきもの サマーシーズン到来!

ノストラダムスの大予言をご存知だろうか。

1999年7月、人類が滅亡する——という“アレ”である。

しかし、ほとんどの人にとってこの夏は、いつもと変わらないものとして過ぎ去っていくのだろう。

杜王町では7月1日に海開きと川開きが行われ、首都圏やS市内からの観光客で人の出入りはいつももの2倍以上にも膨れ上がる。

これからの2ヶ月、サマーシーズンの杜王町はお楽しみがいっぱいである。

来宮美晴と岸边露伴が出会って実に5ヶ月。  
はじめての夏がやってきた。

「それにしても、美晴ちゃんが無事にアイツのところから帰ってきてくれて……本当に良かったわ」

オーソンの隅で鈴美は美晴を見て微笑みながらも薄らと目に涙を滲ませていた。

来宮美晴と岸边露伴の2人は今日、美晴の新しい制服を受け取りにわざわざ商店街まで出向いたのだが、連絡の行き違いで明日店に届く事になっていたらしく無駄足を踏んでしまっていた。そこで、ついでは何だが鈴美に美晴の無事を伝えに行く事にしたのである。

「まっ、美晴は殺しても死ななそうなのだから」

「ちよつと露伴先生！それどういう事ですか！」

褒められてるのか貶されてるのか分からない、露伴のその絶妙な言い回しに美晴はプンスコとむくれる。その様子を見た鈴美は微笑ましそうにクスクスと笑みを零していた。

まだ油断は出来ないが、美晴が戻ってきた事で杜王町のスタンド使い達に希望が戻ってきている。それを実感して鈴美の心の内もひとまず安堵していた。

「ウフフ！でも露伴ちゃん、あなたがいない間毎日あたしのところに来ては”美晴がどこにいるか幽霊の力とかで分からないのか！”なんて言っただのよ？」

「あつ、コラーそれは言わない約束だろうツ！」

「さあして、どうだったかしら！」

露伴をからかう鈴美は楽しそうに笑っている。それもそのはず、鈴美は彼と15年ぶりの再会を果たしたのだ。彼が自分の事を覚えていなくても、その嬉しさは変わらない。

あの時自分が助けた岸辺露伴が生きている事、彼に美晴のような心を通わせる事が出来る人間がいる事、そして彼の周りにたくさん頼もしい仲間がいる事。鈴美にとってはどれを取っても喜ばしい事だった。

「美晴ちゃん。露伴ちゃんの事、これからもよろしくね」

自分はこの周辺からは動けない。けれども、美晴や仲間達がいくれるから、安心して露伴を任せられる。自分が知っていた頃よりも随分ひねくれてしまったが、美晴なら彼を優しく包み込んでくれる。

「はい、勿論です」

そうやって彼女が穏やかに笑うから、信じられる。

「おい！そこは僕が美晴をよろしくしてやるところだろ！」

「はいはい！分かってるわよ、露伴ちゃん？」

「分かってないだろ！ツ！もう帰るツ！」

今度は露伴の方がプンスコしながら車の後部座席の扉を開けて美晴を誘導し始める。

「またね、鈴美ちゃん！」

「ええ。また遊びに来てね！」

お互い露伴の機嫌の悪い顔は慣れっこだ。そんな事を2人して思いながら手を振り、車はオーソンを離れていった。

その日の午後。

美晴が一階の掃除をしていると呼び鈴が鳴り響いた。覗き窓を確認してから玄関を開けると、そこに見た姿にパツと表情を明るくさせる。

「仗助くん！」

「美晴ちゃん！よっす、元気？」

訪問した仗助の方も表情を明るめながらピースサインをぴよこぴよこ動かしてはニツと彼女に笑いかけた。

「元気よ。でも今日、制服お店に届いてなくって。明日なんですって」「マジかよ。じゃあ学校で会えんのはもうちつと先かア〜……」

しかし一転、ハアと2人して残念そうに溜息を吐く。美晴だって早く学校に行きたい。億泰や康一、由花子とまた学校で会いたいのだ。

そこで仗助が「あつ」と声を上げながら何かを思い出したらしい、鞆をゴソゴソ漁ると数冊のノートを彼女に差し出す。

「そだ。これ、ここ最近の授業のノート。康一と手分けして写したんだぜ」

そうやってまたニツと笑いかけてくれた。

なんでも美晴が吉良に拉致された日から、美晴が帰ってくると信じてノートを取ってくれていたらしい。

「えっ……あ、ありがとう……！」

「ん。あと……これ。開いてみて」

大切そうにノートを胸に抱く美晴に、仗助は折り畳んだ紙を渡した。美晴がそれを受け取って開くとピンク色の可愛らしい便箋に個性的な文字達が並んでいて、それはしっかりと視界に入れると同時にぼやけていく。

” 美晴ー！元気か？また一緒にガッコー行こーぜ！ 虹村億泰

”

” 美晴さんへ ノート役に立つかな？字が汚くてごめんだけど、また学校で会おうね！ 広瀬康一”

” 美晴さんが無事に帰ってきてくれて安心だわ。今度はみんなでお弁当食べましょうね。 山岸由花子”



「みんな待つてるからよー、早く復帰出来るといいな」

便箋に書かれた友人達からのメッセージを読んで瞳に涙を溢れさせては指でそれを拭う美晴の頭を、仗助はその優しくて大きな手で優しく撫でる。

皆すぐにも美晴の見舞いに行きたかったが、精神状態がまだ不安定である事を考えるといつ、何人で行くのがいいのか考えあぐねてしまっていた。あまり大人数で押し掛けるのも美晴は勿論、露伴にとっても迷惑になるだろう。そこで彼女の恋人である仗助が適任だと彼らは考えたのだ。

「いつまで軒先で話してるんだよ、……って美晴!?なに泣いてるんだ!?」

そこに書斎から顔を出した露伴が玄関に顔を向けたかと思えば、涙を流している美晴をギョツとしながら視界に入れ、次いでその彼女の目の前にいる仗助に視線を転じる。

「仗助エ……きさま、ついに美晴を泣かせやがったのか…!!」

その目は睨むように細められ、眉間にシワまで寄せながらツカツカと軒先まで歩んで美晴を守るように彼らの間に立ち塞ぐ。

「うえッ!?ち、違うつすよ、誤解だ誤解ッ!」

「そ、そうですよ露伴先生ッ!私、今嬉しくて…!」

露伴がグス、と鼻を鳴らしながら己の服の裾を引っ張る美晴に釣られて彼女の手にある便箋に視線を落とすと個性的な文字達が見えて、内容までは読まなかったものの事情を察っして一瞬バツが悪そうに空に視線を向けてから咳払いをした。

「ンンッ……そういう事か。まったく、誤解を招くような事しやがって」

「露伴先生が勝手に勘違いしたんじゃあないですか……」

涙も引つ込む露伴の雑な誤魔化し方に美晴はむくれながら彼の陰から仗助を覗く。

「ありがとうね、仗助くん」

その柔らかい微笑みと覗き込んでくる仕草に、仗助は思わずキュツと胸が射抜かれる感覚に陥った。少し久しぶりに見る彼女の微笑み

は、自然と己の頬に熱が籠る。

「ん……別に、大した事じゃあねーよ。俺、届けただけだし……」

なぜかドキドキと胸が高鳴って、視線が下を向く。それを露伴は面白くなさそうに視界に入れていた。

「用事終わったならさっさと帰れよ。ガクセーは宿題でもやってろ」

フーン！と鼻を鳴らし美晴を連れて家の中へ戻ろうとするが、それを視界の隅に入れた仗助は慌てて顔を上げて彼らを引き止めるように腕を伸ばした。

「あぁッ！ちよつと待って！実は俺、露伴先生にも用事がッ……！」

その言葉を受け、露伴の足がピタリと止まる。次いで背後からバタバタと音が聞こえ思わず振り返ると、なんと仗助が土下座をしていて目を見張った。

「お願いですッ！この仗助と”チンチロリン”してやってくださいッ！」

その足元にはサイコロが3つ転がっていてわざわざ準備までしてきたのかと、しかし彼の意図が掴めず露伴の眉間にシワが寄る。

「じ、仗助くん……なんでチンチロリン？」

その彼の代わりに美晴が仗助と同じ目線になるようにしゃがんでその顔を覗き込むと、仗助は顔を上げて財布を取り出す。

「実を言うと……俺、今深刻な小遣い不足ですよ……いや、3万はあるんだ。けどよオ……3万じゃあこのサマーシーズンは満喫出来ねエ。美晴ちゃんともデートに行けねーかも……」

財布の中身にある3枚の万札。それを見せながら彼は項垂れるが、それとチンチロリンがどう結びつくのか美晴には分からなかった。

「ふーん……つまり、その3万とサイコロで僕と賭けをしたって事かい？」

すると上から露伴の声が降り掛かり、視線を上げると依然眉間にシワを寄せたまま腕を組む彼の姿があった。

「美晴はチンチロリン、知ってる？聞いた事はあるかい？」

「ええと……聞いた事はあるんですけど、詳しくは……」

美晴が首を横に振るのを見て、露伴は暫し唸りながら考え込む素振

りを見せる。その間、仗助の中には緊張が絶え間なく流れていた。「フムウ……まつ、いいだろう。ゲームは嫌いじゃあないし面白そうだ。美晴もチンチロリンを知るいい機会になるだろう。天気もいいし庭でやろうか」

ようやく露伴が顔を上げたかと思えば、彼は一人で勝手に決めて庭のテーブルがある方に足を向け始めた。

「美晴、麦茶でも出してやりなよ。昨日作ってたろ」

「へっ、あ、はい……！」

まさかあの露伴が仗助とゲームで遊ぶなんて。

「ありがとうございます、露伴先生ッ！」

仗助はそんな露伴の後ろ姿に深々とお辞儀をしていた。

「仗助くんもなんで急に……」

しかし美晴がコソコソと彼に近付いて問い掛けてみるとほんの少しだけ彼の肩が揺れて「あ、あ……」と声を詰まらせていて疑問符が浮かぶ。

「し、親睦を！親睦を深めよーかなって思ってたさ……そうしたら、一緒に遊ぶのが一番いいかなアー！なんて思ってた……」

確かに仗助は、自分は美晴の恋人なので、保護者の露伴とも仲良くしたい”と以前に言っていた気がする。

「そうだったのね。露伴先生、まだ休載中だから仕事の邪魔ってわけでもないし、いいと思うわ」

美晴もそれで納得したように頷き、麦茶の用意をと台所の方へ歩んでいった。

（これで2人が仲良くなってくれるなら、私もすごく嬉しい……チンチロリンも見るのは初めてだからなんだか楽しみだわ）

昨日作った麦茶の入ったピッチャーを冷蔵庫から出して、氷の入った2つのグラスに注いでいく。

岸边露伴と東方仗助の不仲は美晴も頭を悩ませているところだった。とは言っても露伴が一方的に噛み付いているようなものだが、対する仗助もたまに煽りが過剰な事もあり、2人が顔を合わせるたびに内心ハラハラしていたのだ。

それが仗助の方から歩み寄ってくられるなんて。美晴は先程の2人を思い出しながら自然と笑みを零す。

「お待たせしてすみません。麦茶持ってきましたよ」

にこやかな笑顔を見せながら庭のテーブルまでグラスを持っていくと露伴と仗助は既にサイコロやチップを用意して並べていて、露伴がルールを紙に書いているところだった。

「ああ、ありがとう。ちょうど取り決めも書き終えたところだ」

それぞれにグラスを渡すと仗助も「ありがとう」と美晴に微笑み掛ける。

「さて。仗助は知ってるだろうが、美晴にも分かるように”チンチロリン”のルールを説明しよう。……と言っても、そんな難しいモンじゃあないからすぐ覚えられるよ」

美晴が2人の間に立つのを合図に、露伴はルールを書いた紙をテーブルの中央のお椀のそばに置いた。

「”チンチロリン”はこのお椀の中にサイコロを3つ転がした出目で勝負する、所謂ギャンブルだ。もし振った時にお椀の外にサイコロが飛び出した場合は即失格、賭けた分を相手に払う事になる」

テーブル中央に置いてあるお椀。そう言われるとなぜか自分の方が緊張してきてしまいゴクリと唾を飲み込む。

「出目がバラバラの”役無し”も賭け金を相手に払う。2つの目が揃った時は残り1つの出目で勝負だ。大きい方が勝ち。これはなんとなく分かるだろう?」

紙の下の方に図解されたサイコロをトントンとペンで指すのを見て領くと、ペンは上の図へと移動する。

「もし123と連番が出たらこれは”役”だ。だがこれは”ヒフミ”といって物凄く弱くて役無しよりもザコ。賭け金の2倍を相手に払う事になる。しかし456の連番、”シゴロ”と呼ばれる役は強い。賭け金2倍を相手からもらう事が出来る」

ペンのインクがそれぞれの図を丸く囲う。

「”ゾロ目”は”シゴロ”よりも強くて賭け金3倍をもらえる。中でも滅多に出ない111の”ピンゾロ”と666の”オーメン”は最

強だ。賭け金5倍をもらう事が出来る」

最後にペンが1番下のピンズロとオーメンの図を指して、その説明にも頷くと露伴はその紙を美晴に渡した。

「これが今日の取り決め。君が持つててくれる？その方が分かりやすいだろうし……」

露伴が彼女に向けた微笑みが、仗助の方に顔を向けると同時に形を潜めて訝しげなものに変わる。

「……知ってるかい？サイコロ」というのは人類の歴史と共にある道具だ。最初は動物や人間の骨で作ったそうだ」

お椀のそばにあるサイコロをおもむろに指先で弄び、しかし視線は仗助の方に向いていて彼は気まずそうに視線を逸らす。

「サイコロを3個使うゲームの起源はフランスの”ハザード”で、それが東洋に渡ってマカオ・ホンコンで”大小”というゲームになり、第二次大戦後、日本で”チンチロリン”になったという……」

「へ、へえっつ、そんなんスね……あ、チップは30枚キチツとありますよーつと……」

露伴が何を言いたいのかわからず、それでも彼がこんなうんちくを語る時は大体何かを探る時だと仗助も美晴もよく知っている。仗助は気を紛らわそうとしたのかチップの枚数を数えていたが、露伴はサイコロを2つ、指で摘むと己の目元にそれを持っていった。

「関西のヤクザの間ではもし、この”チンチロリン”で”イカサマ”をした者を見つけたら……そいつの”目玉の中”にサイコロ2つを埋め込んで川に流したという」

ゴク、と2人の喉が鳴る。

「残りの1個はどうしたか？そう！そいつを死体にする前に全身に”

21”の風穴をあけたのさ……サイコロは1から6まで足すと合計21だからね。残りの1個つてわけさ」

つまり露伴は仗助に、——この岸边露伴を相手に”イカサマ”をするつもりなら覚悟をしろ——そう言いたいのだ。

（露伴先生……仗助くんこの誘いには何か裏があるんじゃないかって、そう考えているんだわ……でも、あの仗助くんがそんな嘘を

吐くなんて……考えたくないわね)

露伴なら考えそうな事だ。なにせ露伴は仗助の事が嫌いだから。しかし美晴にとってはどちらも大切な存在だ。露伴の考えた通り仗助がイカサマをして彼から金を巻き上げるつもりならそれは許せない事だし、もし仗助が先程言った通りただ彼と親睦を深めたいがためにゲームに誘っただけならば彼は疑い過ぎである。

(でもチンチロリンって、ルールを聞いた限りでは完全に運ゲーみたいな。ポーカーでイカサマをする話は聞いた事あるけど……これ、イカサマをする隙なんてあるのかしら？サイコロに細工をするくらいしか思い当たらないけど……)

美晴がジツとサイコロを見ながら考えていると露伴がその視線に気付いたらしい。3つのサイコロを美晴に差し出してきた。

「ちようどいい。これはうちにあつたサイコロだからまずないとは思うが……細工がないか確認してくれるかい？僕の方がイカサマをしただなんて言われちゃあ堪らないからな」

サイコロが3つ、美晴の手の中に収まる。彼女はそれをひとつひとつ摘んでその目を確認し、どこにも不審な点がない事が分かると露伴に返す。

「どこにも変なところはなかつたです。大丈夫だと思いますよ」

「シーよろしい。じゃあ、先攻後攻を決めようか」

露伴と仗助がサイコロをひとつずつ振り、それぞれ露伴は4、仗助は6が出て露伴はフツと笑みを零す。

「幸先いいな、東方仗助。君からだ、振りたまえ」

頬杖をつきながらピンツとサイコロを弾く。しかし――、  
「イテッ」

どこからかそんな短い悲鳴が聞こえてきてキョロキョロと露伴と美晴は辺りを見回した。

「今……」

「誰でしょうか、確かに今『イテッ』って……」

互いに耳に入ったその声に眉間にシワを寄せていると、ガンツ！とテーブルを叩く音が聞こえてそちらに視線を向ける。

「わーっ！イテーツ！先攻が決まったんでつい興奮してぶつけちまいましたーッ！」

見ると仗助が手を押さえながら強がるようにへらりと笑っている。「……はあ。まあいい。早く賭けて振れよ。チップ1枚千円だ。さつき決めたの、忘れたとは言わせない」

「わ、分かっているっすよー！じ、じゃあー……始めだから2枚くらいでいこつかなア……2千円！」

呆れたように溜息を吐く露伴とへらへら笑っている仗助。その間に立つのは心配そうに見守る美晴。

チップ2枚がそれぞれ場に出され、仗助はサイコロを握ると腕を上下に振る。

「ふいっ……123のヒフミは出るとまずいんだよなア……ヒフミはだめなんだよなア……」

そんな事を呟きながら。露伴が突き刺すような視線を仗助に向け、何やらただならぬ剣幕が漂い始めているのを感じて美晴もハラハラと心臓を高鳴らせる。

「じ、仗助くん……大丈夫？」

思わずそんな風に声を掛けると、仗助の動きがピタリと止まった。

「ん、へへ……心配いらねーよ、美晴ちゃん。ちよちよいつとデートのお金稼ぐだけだぜっ」

その微笑みは引きつっているようにも見えて、嫌でも疑心が芽生えてしまうのが心地悪く感じた。

「最初だから軽々しくね、肩慣らしのつもりでね。行きますよ……」

サイコロが仗助の手から離れ、チリリンと音を鳴らしながらお椀の中を駆け巡る。やがてそれはお椀の中央に3つ固まるように集まって回転をやめ、目が出揃う。

——が。

「……ッあ!？」

「なんだと……!？」

「え、うそ……ッ！」

3人の視界に映ったのは6のゾロ目——滅多に出ないと先程説明

された5倍付の役、”オーメン”だった。

「ば、バカッ！いきなり出るヤツがッ、」

しかし次いで出た仗助の誰かを咎めるような声に反射的に露伴がガタツと椅子から立ち上がって睨み、美晴も思わず戸惑ったような目を彼に向ける。

それにハッと息を呑んだ仗助は両手を右往左往させると手をパントツと合わせ愛想笑いを浮かべた。

「い、いきなりバカツキだーッ！って言いたかったんスよオッ！いきなり5倍付のオーメンが出るとか！まるでまるでッ！イカサマみたいっスねえッ！！アツハツハツ！！」

ベシーンツと勢いよく己の額を叩きながら大笑いする仗助。その様子を見てみると嫌でも疑心が胸の中に渦巻いてしまう。美晴が露伴に視線を向けると、彼もまた美晴を見ていて視線がかち合う。

「ろ、露伴先生……」

「……君がサイコロを調べてくれたんだから信用するよ。まだ1回目だ。それに出る可能性もなくはない」

露伴のその言葉を聞いて美晴は背筋がゾツとした。

もし仗助がイカサマをしていた場合、サイコロを調べた己にも疑いが掛かる可能性がある——と、気付いてしまったからだ。美晴は仗助の恋人だし、現に彼が露伴とチンチロリンをしたと言いつつ、2人で話をしていたのでそういった作戦を話し合う事も可能ではある。

だが美晴はこのゲームに一切関与していない。潔白を証明するにはどうしたらいいか。まだ彼がイカサマをしたと決まったわけではないのに、美晴は視界をぐらぐらと揺らしていた。

「フフ……早くも小遣い1万円稼いだってわけか」

「いやあ〜っ、俺も信じらんないなあ〜！今年の運使い切ったかもしんねーっ」

ザラザラと露伴のチップが仗助の方に流れていく。まだケラケラ笑っている仗助を尻目に、今度は露伴がサイコロを握った。

「次は僕の番だな。さっきのを取り返したいから——10枚でいよ。1万だ」



「えっ、10枚!？」

スツとチップ10枚の束が差し出され、仗助が驚いたように声を上げるや否や露伴の手の中からサイコロが離れてお椀の中を駆け巡る。チリリン、とまた涼しげな音が響き、誰もがお椀の中を覗いて息を潜める。

そして――、

「ああーっ!!」

「ゲッ!？」

「そんな!!」

お椀の中央で止まった3つのサイコロ。

それが示すのは123の連番——2倍払いの”ヒフミ”。

重い沈黙が辺りに流れる。

仗助のオーメン。露伴のヒフミ。どれも狙ったかのようにピンポイントで出た。

(こ、これは一体……!!)

偶然にしては出来過ぎている。美晴が仗助に視線を転じるが、彼はそれにすら気付かない様子でお椀の中にあるサイコロを見つめている。その顔には汗も滲んでいるように見えて、やはり何か企んでいたのかと疑心が沸いてしまう。

「露伴先生……」

「……………」

気付けば美晴の身は自然と露伴の方へ寄っていた。

露伴はそこらの人間に比べれば確かに金銭的には余裕がある。しかしそれはギャンブルでイカサマをしてまで金を巻き上げていい理由にはならない。

なにより、来宮美晴は曲がった事は嫌いである。それはいくら相手が恋人だろうと変わる事はない。寧ろ恋人なら尚更である。

(それにこれは……相手が悪かったわね、仗助くん。露伴先生はこういうのしつこいわよ……隠し通せるわけないわ)

7月の下旬、汗もじつとり滲む蒸し暑さ。

そんな中、疑惑渦巻くチンチロリンは更に激化していく事になる。

## 疑惑のチンチロリン

「そのサイコロに触るなッ!! 東方仗助ーッ!!」

次は仗助がサイコロを振る番だったが、露伴はお腕に手を伸ばした彼に向かって声を荒げた。彼と美晴の肩がビクツと跳ね、しかしそれに構う事なく露伴は椅子から立ち上がる。

「触んなくて……つ、次は俺の番なんスけど……」

「動くなッ!そこを動くんじゃあないぞッ!美晴は見張つてろ!」

「えっ!?あ、はい……っ!」

露伴はそう言い残して家の中に入っていく。完全に露伴の姿が庭に通じる扉の向こうに消えたのを見計らって、美晴はそつと仗助に近付いた。

「仗助くん……一体どんな細工をしたの?」

「うえッ!?え、えーと、それは……!」

声を潜ませながら仗助に問い掛けてみるが、彼は異様なほどに汗をかきながら明後日の方向を見つめている。美晴だって恋人の彼の事を疑うような真似はしたくない。だが、その彼は完全に”何かをした”反応を見せていて、更に眉を顰める。

「なに?否定しないって事は”細工してる”って事なの?」

「えっ!?そそ、そんな、美晴ちゃんまで何言つてんだよオ……!」

「私にも言えない事なの?悪いけど露伴先生、こういうのしつこいわよ。ちゃんと言つて謝った方が……!」

「な、なにもしてねえよオ……!偶然だって!偶然ッ!イカサマみたいだけだよオ……、偶然なんだよ!」

仗助はアハハハ!と乾いた笑いを零してしまっていた。目の前には訝しげな目を己に向ける美晴がいる。まさか己が彼女にこんな風に見られてしまう日が来るとは思ってもみなかった。

何言つてんだ俺。美晴ちゃんに嘘ついてまでやる事なのかこれエ!?——仗助は考える。今ここに露伴はいない。そもそも美晴はこのゲームに全く関係ない存在だ。

「仗助くん……」

美晴の目は“あなたを疑いたくない”と言っているようにも見え、仗助はゴクリと唾を飲む。

言ってしまうおう。言って楽になろう。言ってからどうするか決めるよう。

「美晴ちゃん……実は俺——！」

仗助は意を決して口を開く——が。

「待たせたね。意外と探し物ってのは手こずるモンだ」

庭の扉が開いたかと思えば露伴が虫メガネを手ここに戻ってきて、お腕からサイコロを出すとそれらを虫メガネでじっくりと観察し始めた。

「……露伴先生、私も見ていいですか？」

「いいよ。一緒に見ようか」

露伴が持つ虫メガネを、美晴も隣に並んで覗き込む。完全にイカサマを打ち明けるタイミングを失ってしまった。美晴は仗助を疑ったままで、仗助は再びゴクリと唾を飲み込むと同時に冷や汗が浮かぶ心地になる。

「み、美晴ちゃんまでよオー……それは露伴先生んちのサイコロじゃあねえかよオー……」

ドクドクとうるさく心臓の音が響くように聞こえてくる。露伴が器用に指先でくるくるとサイコロの目をひとつずつ確認していき、美晴もジツと虫メガネに映るサイコロを凝視している。

「だからこそ調べてみたいのさ。僕が持ってきたサイコロだからこそ、納得しておきたいって事もあるのさ」

「それにこれは私がさつき確かに”何もおかしなところはな”って思ったサイコロなのよ？私だって納得いかないわ」

露伴は勿論だが、美晴の事も相当に怒らせてしまっている。やはり先程彼女が問い掛けてきた時、誤魔化してないでさつきと打ち明けてしまえば良かった。彼女ならもしかしたら秘密にしておいてくれたかもしれないし、味方についてくれたかもしれない。

だが、時既に遅しとはこの事である。来宮美晴は岸边露伴の味方を

すると決めてしまった。東方仗助の側に来てくれる事はこの場においてもうないだろう。

「うーん……なんか、”見られてる”というか……私達がサイコロを見ているのと同じように、”サイコロにも見られている” ような……」

「ああ、”深淵を覗く時、深淵もまた我々を覗いている”……みたいなヤツ？」

まじまじとサイコロを見つめ、しかし美晴はふと残りのサイコロにも視線を転じる。そのうちのひとつがなんとなく水で濡れているようにも見えて、思わず首を傾げた。

(なんだかあのサイコロ……グラスの水滴が掛かったのかしら)

そんな疑問からテーブルに乗ったサイコロを指先で摘もうと手を伸ばすが、ガタンツ！と妙な音がすぐ近くで聞こえて視線はそちらに移った。

「やつべくく!!美晴ちゃんが淹れてくれた麦茶なのによオく!!」

テーブルに横倒しになったグラス。そこから流れる麦茶がジワジワと広がってサイコロが浸かり始める。

「うわッ、気を付けるよなあッ!!」

「た、大変ッ!すぐに拭きますね!!」

露伴が声を荒げながらお椀やサイコロを持ち上げ、美晴が慌てて家の中へと引つ込むと布巾を持ってきてササッと手際良くテーブルを拭いていく。

「新しいの淹れる……?」

「ああいや!ほら、暢気に飲んでる状況じゃあねえしよオく、俺はいいや……!」

その状況に仕立て上げたのはどこのどいつだよ東方仗助。露伴は真っ先にそう思いながら2人の会話を聞いていたが、やがて溜息を吐くと布巾で綺麗に拭かれたサイコロ3つを確認のためにお椀の中に振った。涼しげな音と共に転がり、出た目は165と平凡な役無し。異常なし。

「いいだろう、ゲームを続けようか」

露伴はチップの乗った台車に虫メガネを置き、足りなくなった分のチップを追加する。

「次は君の番だ、東方仗助……君はもう6万も稼いでいるのか、すごいすごい」

口ではそう言うが、表情は全く笑ってもない。その様子は美晴でも思わず緊張してしまうほどだった。

（仗助くん……ここまでする理由はなんなの……？ 露伴先生、相当怒ってるわよ）

先程もらったチンチロリンの取り決めが書かれた紙が手汗で湿り気を帯びていく。

「そ、それじゃ俺は手堅く……2枚でいきます」

スツと互いのチップ2枚が差し出され、仗助は先程と同じようにお椀の中にサイコロを転がした。

陶器の中を3つのサイコロが音を立てて駆け巡る。そしてそれはさも当たり前のように、偶然を装いながら、

「……………ツ!!」

666——滅多に出ない5倍付の”オーメン”を3人の前に叩きつけた。

仗助の身が一瞬目眩のようにクラリと傾く。それは偶然にしては出来すぎているからか、それとも”誰かに頼んだ事が上手くいかなかったから”なのか。

露伴はなんて事ない動作で麦茶の入ったグラスをおもむろに手にしてその中身を一口飲む。重苦しい沈黙の中ではそんな動作すら過敏に反応してしまう。

「2度ある事は3度ある、か。……フッフ、確かに連続で出るかもなあ」

気でもおかしくなったのだろうか。滅多に笑わない露伴がそうやって笑うものだから、暑さのせいだけじゃあない汗まで浮かんでくる。

「フッフ、アハハハハ……オーメンは5倍付かあ。払うよ。出たものはしょうがない、払うよ……」

ザラザラとチップが露伴の笑い声と共に移動していく。

「ア、アハハ……そ、そーっスねえ……2度ある事は3度あるかもっスねえー……」

釣られて仗助も首裏を搔きながら乾いた笑い声と引きつった笑顔を貼り付け、いよいよ空気が異様なものへと変貌していく。美晴は才口オロと彼らを交互に見ながら戸惑う事しか出来ず、

「ハハハハハハッ」

「エへへへ、ハハハハハハッ」

狂ったような穏やかな笑い声が場を支配する。もう恐ろしくて逃げ出してしまいたくなっていた。

刹那。

バンツ！とテーブルを叩く大きな音が聞こえたと思えば、次にはドスツ！とまた勢いよく別の何かを叩きつけるような音が聞こえて頭が真っ白になった。

チップが宙を舞い、麦茶の入ったグラスがテーブルに倒れて転がり、床にガシヤリと音を立てて崩れる。

何が起きたのか。状況を把握するまでの時間は短いものだったかもしれないが、時が止まったかのような沈黙はそれをスローモーシヨンのように長く感じさせる。

「いやああああッ!!ろ、露伴先生ッ!!」

その沈黙を破ったのは来宮美晴だった。彼女は血の気の引いた顔で口許を両手で覆いながら見開いた瞳でテーブルの上に広がる”赤”を見つめている。

その”赤”はテーブルに叩きつけた露伴の左手、小指から流れて血溜まりを作り続けていた。その小指は大きく抉られていて、そこに突き立てられたペンにも血飛沫が飛んでいる。

そう、岸辺露伴はテーブルに叩きつけた己の左手の小指を、ペンで突き刺して自ら抉ったのだ。

「何してんだよオオーッオメエーッ!!」

時間差で仗助も顔を真っ青にして席を立ちながら露伴に向かって叫んだ。対する露伴はブルブルと痙攣したように体を震わせ痛みを

堪えながら彼を見据えている。

「て、手当てをツ……救急箱持つてきますツ!!」

美晴は突然の事に目に涙を溜めながら家の中に駆け込んでいく。露伴はゼエゼエと息を切らしながらもそれを横目にしていた。

「東方仗助……きさまは何か”イカサマ”をしている……方法は分からんがなんらかの”イカサマ”をしている……許せん、その方法が分からないところが許せんツ!!」

おそらく美晴も彼が”イカサマ”をしている事については勘付いているだろう。だからこそ一緒にサイコロを見たいと言ったのだ。だが何も分からなかった。イカサマをしているのは確実なのに。

「ムカつくぜ……今までは”美晴”や”ジョースターさん”、”康一くん”に免じてお前に対する怒りを抑えていたが……きさまは今、この露伴をコケにしようとしている……ツ!きさまが心の中でほくそ笑んでいるのかと思うと我慢ならんツ……!!」

ずっと我慢していたのだ。ジョセフの息子だから、康一の友達だから、そして美晴の恋人だから。美晴が仗助の隣にいる時、とても幸せそうに笑うから。己も大人だから、一步引いて我慢していた。

このチンチロリンだってそうだ。何か企んでいるだろうとは思ったが、敢えて付き合ってた。——なのにこのザマである。

「手を出せよーッ!俺のクレイジー・ダイヤモンドで治してやつからよオオーツ!!」

それなのに仗助はまるでイカサマの事なんてすつとぼけたようにその声を張り上げるのだ。その言葉、その声、全てが露伴の神経を逆撫でしていく。

「うるさいッ!なんのためにこの露伴が自分の小指をこうしたのかッ!きさまを”ゲーム”からおろさせないためだぜ、東方仗助!!」

——きさまのそういうところが大嫌いだ。東方仗助。

「きさま程度のスカタンに、この露伴がなめられてたまるかアアーツ!!」

露伴も鬼気迫る表情で負けじと声を張り上げる。その時視界の隅でビクツと何かが跳ねるように動き視線を合わせると、救急箱を手に

小刻みに震える美晴がそこにいた。

「せ、先生ッ……小指見せてください、手当てしますから……!!」

トコトコと己の方へ小走りで寄っていく美晴を見て、露伴は己より小さいその身に寄り掛かるようによろめく。

「先生ッ！」

「だ、大丈夫だ。それより仗助のイカサマの方だッ……!」

美晴は彼の体を支えながら救急箱を開いて小指の止血を始める。その間も彼は仗助を鋭く睨んでいた。

「あと1回ずつだけ勝負だ……!その間に必ずきさまのイカサマを見破ってやる……!!もしどんなイカサマか、僕が見破れなければ……ッ」

ポケットの中に手をつ突っ込んだかと思えば、口の空いた分厚い封筒をテーブルに叩きつけるように投げる。その口からは札束が顔を覗かせ、仗助は息をヒュツと呑む。

「ここに200万ある……!これできさまのクレイジー・ダイヤモンドに小指の治療を頼んでやる……!しかしイカサマの正体を見破った場合ッ!必ず見破つてみせるが……ッ」

止血を終えたばかりの左手がゆっくりと挙げられ、その指が仗助を、正しくは彼の手元を差す。

「きさまの”小指”をもちろ……!東方仗助ッ……!」

こんな時、岸辺露伴は絶対に冗談を言わない。夕子の悪いものなら尚更に。

彼は本気だ。本気でそう言っているのだ。その気迫に仗助も、美晴までゾツと血の気が引く。

「お前イカれてるぞ……!た、たかがサイコロで何考えてんだッ!そんな勝負できつかよ!!手を治させろッ!!」

「そ、そうですよ露伴先生ッ!私だって気にはなりますよ!でもここまでする必要はありませんッ!!」

仗助だけではなく美晴も抗議の声を上げるが、彼はそれを左手を引っ込めて右手で美晴の腰をグツと引き寄せる事で黙らせた。

「もう引く事は出来んぞ……!それになあ仗助。”小指”つてのはなにも”手の指”の事だけじゃあない……!!」



その言葉に仗助は思わず己の小指を見るが、すぐにハッと意味に気付くと顔を上げて再び露伴に視線を向ける。視界に真つ直ぐ捉える彼は美晴の腰を抱いたまま頬に手を添え、彼女の目に浮かぶ涙を指で拭っていた。

「美晴ちゃん…!!」

小指。立てると”恋人”を意味する。

きさまの”小指”をもらう——”美晴を返してもらおう”。露伴は仗助から美晴を引き剥がそうとしているのだ。

「勘違いするなよ……僕はイジワルで言っただけじゃあない。”きさまにはもう預けられない”……”美晴の恋人としてふさわしくない”……美晴の保護者としてそう判断したまでだ」

仗助が継るように美晴に視線を転じたが、彼女は仗助をジッと見つめて心底残念そうに眉根を下げ、やがて露伴の肩に顔を埋めてしまった。

「み、美晴ちゃん……」

「分かったろ。お前の行動はこの僕を侮辱しただけでなく、お前の恋人を失望させた！今更後悔したって遅いッ！」

いよいよ仗助の顔から血の気が引き始める。ほんの少しだけ露伴からお小遣いをもらえれば、なんて考えていた己が甘かった。まさかこんな事に発展するなんて。

「よおっツ、盛り上がってますね？お2人さん」

そこに1台のスクーターが庭に入ってきたかと思えば、どこか見覚えのある風貌の男がこちらに歩み寄ってきた。

「こ、”小林玉美”？なんでオメーがここに来るんだよ」

その姿を視界に入れ、仗助が思わず声を上げる。

”小林玉美”。広瀬康一がエコーズを発現させた直後に戦った相手であり、”サーフィス”の”間田敏和”の情報をくれた男である。

「僕がきつき雇った”取り立て人”さ……」

「と、”取り立て人”……？」

そう、彼は露伴が雇った”取り立て人”。しかし美晴は玉美の事は話だけ聞いたのみで、実際に会うのは初めてだった。

「改めて”小林玉美”です。契約した”約束”をキツチリと！迅速に……この心に掛かる”錠前”で”取り立て”させていただきやす」

玉美がそう言うて取り出したのはズツシリと重たそうな、文字通り”錠前”だった。その纏うオーラはスタンドのものと同じで、彼もスタンド使いなのだとその時によく分かった。

彼はそういう”取り立て人”だ。人の罪悪感を利用して借金を取り立てるのだ。

「どちらが勝とうと誰だろうと”公平”に仕事いたしやす。手数料は20%、または40万以上です。あと1回ずつ勝負して”イカサマ”を見つけるか見つけられないか、ですね？」

「ああ、そうだよ」

露伴がひとつ頷きながら美晴を一旦解放し、椅子に座り直す。

「ただし仗助……お前が”イカサマをしない”という逃げ道もある。だからそれを封じさせてもらう。もし”イカサマ”をしないで振った場合、玉美の”錠前”が自動的にお前を襲うというルールにさせてもらうよ」

今のこのゲームの目的は”イカサマ”を見破る事。仗助が”イカサマ”をしてくれなければ意味がなくなってしまう。そして逃げた場合、仗助の負けが確定し”小指”を——美晴を持っていかれてしまう。

尤も、その美晴も今は露伴の側についているわけだが。

「露伴先生……私も協力します」

「いいや、これは僕と仗助の勝負だ。君がもし分かっても言わない事。……大丈夫、必ず見つけてみせるさ」

露伴は美晴の申し出を断るとその頭を優しく撫でてやっていた。その様子を仗助はグラつく視界の中に収める。

まるで己の方が悪党のようだ。いや、こんな”イカサマゲーム”を持ちかけて一儲けしよう、そんな事を思った時から己は悪党だった。

そしてそれは美晴を失望させてしまった原因でもある。当然だ。美晴は普段から恩人である露伴を兄のように慕っているのだ。そんな人物を目の前でコケにされて怒らないはずがない。彼女のような

正義感の強い人間なら尚更に。

そして露伴からすれば、こんな汚い手を使う野郎が妹のように可愛がっている人間の恋人だなんて信じたくもないだろう。引き剥がしたくなって当たり前だ。

しかし仗助はもう”イカサマ”をやりきるしかない。逃げ道を潰された今、やりきって200万もらって露伴の小指を手当てをする道を選ぶしかないのだ。

「さて、中断したところだから……僕からだつたね」

露伴がお腕からサイコロを取り出し、確認するように手のひらの上で軽く転がす。

やりきるか、見破るか。

やけに暑く感じるヒリつくような熱気の中、イカサマを見破るためのチンチロリンは激化の一途を辿っていた。